
囚われの王子と・・・

帆摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚われの王子と・・・

【Nコード】

N0670H

【作者名】

帆摘

【あらすじ】

長い間、塔に閉じ込められていたのは深窓の姫ならぬ王子様。己の人生にあきらめかけたその時、奇跡は起きる。「君はあの時の・・・？」運命の王子様と一癖以上ある王子様達との恋の行方は？自信、行動力に溢れるお姫様と深窓の王子様の逆転劇は思わぬ方向へと進んで行く。

人物設定

囚われの王子と：人物設定（ネタバレ的要素も少しありますので
気をつけてお読み下さい）

■リディアーナ（リディア）16歳：緑黒髪に黒い瞳、真珠の様な
肌を持つ美貌の主人公、アステール帝国の王位継承者であり、国王
夫妻の唯一の娘。性格は素直で活発。恋愛方面についてはまだまだ
子供

■ジェラルド王子 18歳：隣国エストラダの第二王子。リディ
アの幼馴染み。剣の腕は諸国に知れ渡っている。茶色の髪に青い瞳。
エストラダの時期国王、パトリックの弟

■囚われの王子 18歳：ある理由により、長年、ユフテスの森の
中に建つ塔に閉じ込められている少年

■カイル王子 18歳：古国ユフテスの第一王位継承者。どうやら
双子の弟がいるらしいが詳細は不明。何を考えているのか謎の多い
人物でもある。3人の異母兄妹がいる

■オースティン 15歳：カイル王子の異母兄弟。第一側妃の息子

■クルト（10歳）&ルーシエル（7歳）：カイル王子の異母兄妹。
第二側妃の子供達

■ベルガリーゼ 37歳：ユフテスの第一側妃、オースティンの母親

■キルケ 年齢不詳：ギルドに所属する魔術師。色々と秘密を抱え

ていそうだが・・・？

■ マリアベル 30歳：アステール帝国筆頭メイド長兼、リディアの養育係

■ ルーク 12歳：ジェラルドの従者。エストラダのキュレット公爵の次男。自由奔放なご主人様にいつも振り回されている可哀想な少年。でも誰よりも主人を敬愛し、慕っている

■ ナタリー 17歳：アステール王宮で働く新米メイド。リディアのお気に入り

■ ギルロイ・ロムド・イルアディア・アステール王 42歳：リディアの父親であり、現アステール帝国の国王。娘には激甘だが、その政治と治世には諸国からも定評がある。娘の幸せを心から願っている

■ ロザリア王妃 49歳：リディアの母親。傾国の美女と呼ばれていた。昔は理由があつて大の男嫌いだっただけだが、ギルロイに見初められ、猛アタックされた末に結婚、一児を設ける

■ ジークフォロン 年齢不詳：いつも奇抜なスタイルで出歩くオカマさん。キルケを文字通り猫可愛がりする。アステールで手広く商売をしているらしいが、謎の多い人物

■ オズベルト 7歳：大国グランデイスの皇帝

■ イルディアス 28歳：大国グランデイスの將軍

■ ジルベスター 年齢不詳：グランデイスの抱える魔術師

■ オーセ（カルナ）21歳：褐色、茶色の髪、不思議な文様の入れ墨をもつ謎の男

■ イネスタ王妃 38歳：蜂蜜色の髪をもつカイルと囚われの王子の生母

■ 伝説の竜の一族：トレムの山の頂きに住むと言われる竜の一族

――ミルセディ・リンドルン／オリバー爺

■ 始祖ユフティア：ユフテス王家の祖となった少女。竜と関わりがあるらしい

■ アルファス：白の王と呼ばれた竜

地理：おおまかには大きく3つの大陸が存在し、他にもまだ未開とよばれるいくつもの島が存在する。もともと大陸自体はひとつだったらしいが、いつの時代かに3つに分け隔てられた。

▼ リムド大陸：なだらかな平原と豊かな水流、3つの大陸の中で一番資源も豊富で住みやすい土地。アステールやエストラードはこの大陸内にある。また、学園都市のリザルもこの大陸に位置する。

▼ ウリムナ大陸：4000mを越える山脈が連なり、森も多い。ウリムナ奥地にある山脈は6000m級の山脈でほとんど動植物が存在しない。だが伝説の竜が住むと言われるトレム山はこの険しい山

の中に位置するユフテスや、グランデイスはウリムナ大陸の国。

▼ドーラ大陸：3大陸の中で一番規模が大きいが、大陸の半分は砂漠で覆われ、各地に点々とあるオアシスを中心に王国が存在する。大きなところでは、パンディッタや、リディアの母、ロザリア王妃の祖国、スミルナなどがある。

プロローグ

（プロローグ）

いつの頃からか・・僕はすべてに期待する事を諦めた。

痛み、苦しみ、苛立、恐怖、喪失感、ありとあらゆる負の感情に疲れ果て、操り糸の切れた人形の様になってしまうのに、どれほどの時が必要だと言っのだろうか・・

そう、でもここでの暮らしも今日で最後だ。僕は今日、生け贄となるのだから・・青年と呼ぶには、まだ少し幼さの残る少年はこれまで、自分が過^こして来た石造りの質素な部屋の中を見回した。18年もの間、彼に与えられたのは堅固な錠の掛かった森の中の塔のみ。

物心のついた時から、彼はこの塔に居た。日に3回食事を届けにくる召使いや、塔を警護する兵士達の話や聞くにつれ、僕はより深い絶望と言う名の牢獄に囚われていった。「何故・・？」理由さえも死を待つしかない僕にとっては無意味だった。何度死のうと思つた事かわからない。だが、実際に死のうと思つたとき、僕の脳裏にある一つの約束が幻のように甦^{よみがえ}ってくるのだ。それは僕がこの18年の間、たった一つ宝物だと言える思い出。そうだ、僕はその約束のためだけに生きて来たと言つてもいい。これだけは全てを諦めた僕の唯一の「夢」なのだから・・そう、実際に起る事が無いと分かっ^わていても・・

1話：記憶の序章

「姫様、姫様……まったく……いったいどこへ行かれたのかしら。あんなに国を出る前に他の国ではお行儀良くと言っておいた筈なのに……」

アステール帝国筆頭召使いで、リディアーナ王女の教育係でもあるマリアベルは小さくため息をつく、他の召使いに指示を出す。

「とりあえず、かたっぱしから気がついた所をしらみつぶしに探してちょうだい！分かっていとは思うけど、手を抜いてはだめよ？隙を見せたら見つかったも逃げられてしまうわ。」

「はい、では私たちも探して参ります。」

そう言うのと10名ほどの召使いは、小走りにばらばらに散っていった。アステール帝国の王が、友好の為に訪れた東の大陸の古王国、ユフテスに到着して3日目、やはり危惧していた通り、おてんば姫の忍耐の緒は切れ飛んでいったらしい。

長旅だった事もあってさすがに疲れたのか、初日と二日目の歓迎会では大人しくしていたが、今年8つになる幼姫はともかく元気がよく、好奇心旺盛で目を離すとあつという間に姿をくらませてしまうのだ。

国であるならばまだしも（大体姫の隠れそうな所は予測してある）、知らない土地で姫に何かあれば取り返しがつかない。ともかく一刻も早く姫を見つけるのが先決だ。マリアベルはもう一度、小さくため息をつくと、先ほど通った道と反対方向に向かって走り出した。

「はゝ、やばかった。マリアベルったら、本当にしつこいんだから・・・」

ぶちぶちと文句を言いながらマリアベルが立っていた場所からさほど離れていない茂みの中から、小さな少女が顔を出した。幼いといっても、その黒曜石の様な黒い瞳は力強く生命に満ちあふれ、理知的な様子が伺える。緑黒の髪は太陽の光を受けてラピスラズリの様な深く神秘的な色に輝いている。人形の様に整った顔も、くるくると表情の変わるその表情と仕草で、親しみの持てる雰囲気に含まれている。あと数年も経てば、各国から求婚が殺到するに違いないと誰もが思うだろう。

「もう、ちゃんと言われた通り、御挨拶だつてしたし・・・せっかくこんな遠い国まで来たんだもの。もっと息抜きしたいよ。それに攻城から見えたあの塔の事、とっても気になるんだもの。きっと明日からまたお勉強だのなんだの言われるのは分かってるんだから、ちよつとぐらい良いよね。」少女は慎重に回りを見回し、誰もいないのを確認すると、小走りに目的地と走りさった。

どれくらい走っただろうか・・・さすがに疲れて来た。城のメイド達が探す中、その目をすり抜けてここまでやって来たのだ。目的の塔はもう目前にあった。

「高い・・・」石を積み上げて出来たらしいその塔は、離れたユフテスの王城からもよく見えた。父王に、何故あんな所に高い塔が建っているのか訪ねてみたが、言葉を濁されて、その後歓迎会やなんやらで聞けずじまいだったのだ。

正面には見張りだろうか、剣をもった兵士が立っている。少女はゆっくりと音を立てない様に森の木々の間を抜け、塔の裏側へと歩いていった。

「どこから、入れる所無いかな・・・」小さくつぶやきながら石を触っていると、一カ所、石の隙間が開いて、中に階段があるのが見えた。「ここからなら入れるかもしれない・・・」そこは一見どうみても人がくぐれる様な隙間には見えないのだが、王女は脱走の際、自分の頭さえ入れば、体も抜け出せる事を身を持って知っていた。特に体が柔らかく、小柄な王女は迷う事無く、隙間に頭を突っ込んで少しずつその体を塔の中へと侵入させていった。

2話：塔の中の出会い

塔の中は思ったよりもひんやりと冷たく王女はぶるつと身震いした。ずつと走り続けていた為か、汗をかいた体が急激に冷えていく。リディアーナは急ぎまた、階段を上り始めた。人一人通れるかどうかの細く狭い階段を一步ずつ登って行く。

「本当になんて高い塔なの・・・？」塔の階段の所どころに、鉄格子の嵌まった小さな窓が取り付けられている。その隣には小さな燭台がある所を見ると夜には蠟燭の明かりがとるのである。城から見たのと同じく、この塔からは森を隔てて古いが、豪華な城が見えた。

少しずつ休みながら登って行くと、少し開けた空間にたどり着いた。そこには鋼鉄のドアがひっそりと佇んでいる。

「ドア・・・誰か中に居るの・・・？」小さくつぶやいた声に返事が帰って来た。

「そこに居るのは誰・・・？」大人の声ではない・・・自分と同じぐらいの幼い声を聞いた王女はびくつと体をふるわせたが、おそろおそろそのドアに近づいていき声を掛けた。

「私・・・？私はリディアーナ、リディアよ。貴方は誰？何故こんな所にいるの？」

暫くすると中からまた声が返ってくる。「リディア・・・？女の子？君こそ何故こんな所にいるんだい？」

「あ・・・私は城の中からこの塔をみてどうしても気になってここまで来たの。貴方は・・・ここに住んでいるの？」

「住んでいる？」少年はふつと年に似合わない自嘲的な笑いを浮かべると言葉を綴った。「いや・・・そうだね、僕はずつとここに閉じ込

められているんだ。そう、僕の18の誕生日を迎えるまでね・・・」

リディアは少し驚いて、そして言った。「何か悪い事でもしたの？
お外に出る事はできないの？」

と、中からカタンと音がして、リディアーナが下を見ると、そこに
小さな窓が開き中から少年の手が出てきて王女の足首を掴んだ。

「きゃっ！」悲鳴を上げて王女は尻餅をついた。丁度目の前の長細
い窓から見た少年の目に彼女は射すくめられた。それは彼女が今
まで見て来た中で一番印象的な目だった。濃いグリーンはまるで木
々のざわめきの様に時として色を変える。暫くの間ほうけてリディ
アは彼の視線に釘付けになっていた。

「ごめん・・・驚かすつもりはなかったんだけど、女の子なんて久
しぶりに見たから・・・」そういうと彼は手を引つ込めすまなさそう
に謝った。リディアはおそろおそろ窓に近づくと、もう一度彼の容
貌をじっくりと見る。

薄い金髪に寂しげだが意思の強そうな瞳、通った鼻筋と少し荒れて
いるが形の良い唇。そこでリディアは思い出した。

「貴方・・・昨日あったユフテスの王子様にそっくり・・・」

3話：叶わぬ願い

「……君は、ユフテスの貴族かい……？」

リディアはゆつくりと頭を振った。「私はアステールの第一王女よ。あなたは、ユフテスのカイル王子……？うん、違う、カイル王子はもう少しはしばみ色の瞳だった……貴方はいったい誰？」

少年は少し驚いた様子で目を見開いた。「僕は……ユフテスの王族から名前を消された者、君の言うカイル王子は僕の血を分けた双子の兄だよ。」そういうと少年はギリツと唇を噛み締めた。

「名前を消された……？どういうこと……貴方はカイル王子の兄弟なのでしょう？それなのにどうしてこんな塔の中に閉じ込められているの？」

いくら幼いとは言え、この塔の住人が何らかの理由でここに閉じ込められているのだという事は頑丈な作りの扉や外の見張りの様子から分かった。きっと彼が手を出したこの窓でさえ、食事を差し入れる為の物なのだろう。扉の上の方には、鉄格子の嵌まった少し大きな窓があるが、リディアの背丈ではとても届かないが届かなかった。

「双子が生まれる事は珍しい事じゃないけど、僕は、特殊な魂をもつて生まれたそうだ。ユフテスには昔から不思議な伝説があつてね……王家には稀に王家を守る守護に捧げる魂をもった者が生まれるらしい……生け贄は1000年に一度、その守りが弱まった時に捧げられるそうだ。王家の古い文献にはもっと詳しい事が書かれているみたいだが僕にはそこまで知らされていない。」そういつてその少年は自嘲気味に笑った。

「そんな？！生け贄って・・・殺されちゃうってことなの？死んでしまうの？そんなのダメだよ！」リディアは必死になって彼に問いかけた。後になって思えば、リディアはこの時、初めて一目惚れというものを体験したのだろう。まだ自分の気持ちがよくわかっていなかったが、ともかく、扉のドアに隔たれたその少年が死んでしまうと思うと、とてつもなく悲しく苦しい気持ちになってしまったのだ。

「ーじゃ、じゃあ、私、お父様に言ってなんとかしてもらおうよ。お父様ならきつと私のお願いを聞いて下さるわ。だから死ぬなんて言わないで！」

少年は驚いた顔をして・・・そして静かに微笑んだ。「ありがとう。でもこれはきつと君のお父上にもどうする事もできない事なんだよ・・・」そういつて彼はリディアの頬に伝った涙を拭うと言った。

「さあ、そろそろ行った方がいい。あまり暗くなると、この森は危ないから。どうやってこの塔に入ってこられたのかは分からないけど、守衛に見つかる前に帰るんだ。」

「・・・私、また来るから！絶対どうにかして、貴方を助けてあげる。だから待ってて？絶対に約束よ？私が貴方を助けにくるまで死んだりしてはだめよ？」必死になってそう言くと、彼はもういちど「ありがとう」といって微笑んだ。

その後、無事に城にたどり着いた姫はマリアベルに説教され、暫くの間部屋から出してもらえなかった。2週間の滞在中、なんとかしてリディアはもう一度彼に会いに塔に行きたかったのだが、ユフテルを去る日は無情にも早かった。彼女の護衛の数は以前よりも増やされてしまい、結局リディアはそれからもう2度と塔に行く事は叶

わなかった。

滞在中、父王に塔の中の少年に会った事を告げ、助けて欲しいと何度も願ったが、あの少年の言う通りそこには、『踏み入れる事の出来ない何か』があったのか、父王は首を横に振るばかりで、リディアの願いは聞き届けられなかった。

「助けてあげるって約束したのに……」帰りの馬車に揺られながら幼い姫は止まらない涙を流しながらアステールへと帰郷した。

4話：そして運命は動き始める

くアステール帝国 1561年 春く

「姫様、リディアーナ様！こちらにいらっしやったのですか？本当に姫様は相変わらず目を離すとすぐに雲隠れなさるのですから・・・」
「マリABELは王宮第一図書室の窓際の背もたれに腰掛けているリディアに小走りに詰め寄った。

「王が御呼びになっています。すぐにお支度しますから姫も急いで下さい。」

「父様が・・・？やっぱりあれの事・・・かしらね。気が重いわ。マリABEL、貴方私の代わりに聞いてきてくれる・・・なんてこと無いわね。」目尻をキツとつり上げたマリABELを横目で見つ、リディアは小さくため息をつくと立ち上がった。

「わかったわよ、行けば良いのでしょうか？どうせあれよ、またどこぞの王子との婚約だの結婚だのってやつでしょ？本当に懲りないわね、父様も・・・。前回のお見合いだってあれだけ強引にすすめておいて、会ったのがあの馬鹿王子・・・ほんっとーにあればバカとしか言いようが無かったわ。断って清々したわよ。」

「姫様、王は姫様のことをとても心配していらっしやるのですよ・・・。お分かりになっっているでしょうに・・・。」

リディアはふと目を細めてマリABELを凝視した。わかっているのだ。彼女が何を言いたいのかは・・・でも自分は一度決めたことを覆すつもりは毛頭ない。そうだ、あの時に私は決めたのだから。

目前を歩く王女の姿を見ながらマリABELは思案していた。リディアーナ王女はこのアステール帝国の第一王女にて、国王夫妻の唯一の子であった。大国の王としては珍しく、王は迎えた妃唯一を深く愛し、長年子供のできなかった王妃がやっと成した子がリディア姫だった。普通ならば、いくら正妃とはいえ子供が一人、しかも女であつたならば、側室を迎えるなりして、世継ぎになる王子をと宰相を始め側近たちが何度も進めたが、王は頑として妃以外の側室、愛人を娶ることはなかった。

そう言う意味においては、リディアーナ姫はこのアステールを継ぐ唯一の血筋であり、また16歳になった王女の輝くばかりの美しさは近隣諸国だけでなく、遠く大陸全土に広まっていた。

姫が15歳を迎える頃から、婚姻を望む諸国からの書状、王子や有力な貴族達の姿絵などが多く持ち込まれ、このところまた特に多くなったそれらの話にリディアはうんざりしているのだ。だがリディアの心を苛んでいるものがそれだけでない事をマリABELは知っていた。

手早く部屋に戻りドレスに着替えた姫は、王宮の中心にある謁見の間へと向つた。大きな扉が開かれると、中央にある玉座に座っている父王と目があった。アステール第26代目にあたるギルロイ・ロムド・イルアディア・アステール王は賢王との誉れも高い。

――父様は21歳の時に、当時べた惚れした7歳年上の母様に昼夜問わず猛アタックを繰り返し、やっと結婚してもらったのだと、幼い頃から何度聞かされた事か・・・玉座の隣に座る母様は今も若々しく、とても父様とそんなに年が離れている様には見えない。

黒緑の艶のある豊かな髪を纏め上げ、柔和な微笑をたたえて王の隣に佇んでいる王妃は身内の鼻眞目に見てもかなりの美貌だ。傾国の

美姫と呼ばれた母は父様に出会うまで、かなりの男嫌いだったらしく、母様が結婚を承諾してくれたときは、それこそ舞い上がりすぎて大変だったらしい。リディアの美貌はその母譲りである事は周知の事実であるが、リディアは自分の容貌には無頓着だった。――

「父様、御呼びたてと聞いていますが、いったいどのようなご用件でしょう？」

5 話：決意と想い

玉座に座った王は愛しげに愛娘を眺めつつ静かに口を開いた。

「来月、ユフテス王国カイル王子の18歳の式典が行われるそうだ・。
・。あいにく、私はこのところ政務が多忙で出席することができない。リディアーナ、そなたが余の代わりに出席して欲しいと思っているのだが・・。」そこで王は一旦言葉を切ってリディアーの様子を伺った。

「・・。お父様、それは・・。いえ、わかりました。このお話、慎んで御請いたします。」
リディアーは王と王妃に向かって小さく礼をすると足早に玉座の間から出て行った。

「ー」「のう、ロザリアよ、これで良かったと思うか・・。？余の判断は・・。」

「いいえ、貴方、あの子は私達の娘ですもの、大丈夫ですわ。しかもこうと決めた事に関して挺でも動かない頑固さは、本当に貴方譲り・・。貴方が私を射止めた様に、あの子もきつと・。」そういつて王妃はにこりと王に微笑んだ。

「そうか・。寂しいものだな。娘が離れていくのは・。いや、まだ余はあれを嫁になどと思つてはおらん。そうだ、あれはこのアステールの世継ぎなのだから・。婿をとつてこのアステールを繁栄させてもらわねばならん・。その為にも良い婿を・。」

「貴方、あの子を信頼しましょう・・・？あの子がこの8年もの間どんな気持ちで頑張ってきたのかご存知でしょう？私も、心配がないと言えは嘘になりますが、私はあの子を応援したいのですわ。たった一人の大切な娘ですもの。あの子の悲しげな顔を見るのは・・・」

「そうだな・・・あれも本当に難儀な道を選んだものだ。神よ、どうか愛しい我が娘に祝福を・・・」

「マリABEL！来たわ！この日が・・・ああ、でもうまく行くかしら・・・？うん、この時のために頑張ってきたのも、きつと・・・」

部屋に飛び込んできた姫をなだめつつ、マリABELは口を開いた。

「姫様・・・それでは、とうとう行かれるんですね？」

「ええ、出発は1週間後よ。ユフテルまでは、海路と山を超えて行かなければ行けないのですもの。本当に長かったわ。でも私もいつまでも、何もできないままの子供ではないわ。きつと、きつと大丈夫。」そう言っリディアはその長い睫毛をふるわして手元にある一冊の古い本を固く握った。

「ーそう、もう何もできなかった小さな頃の私ではないのだから・・・8年前、ユフテスから帰った私は初めて自分が心から願った事かなえられなかったことにショックを受けた。今思えば、子供だったのだ。大国の王の一人娘として生まれ、望む、望まないに関わらず、自分の周りにはありとあらゆるものが用意されていた。仲睦ま

じい国王夫妻を初め、城内の者達からも一身の愛情を受けて育った自分……。自分が恵まれているという事すら意識せず、すべてが当たり前だと勘違いしていた。そう、あの時までには……。

初めて塔の中で出会った名前の無い少年、短い出会いだったが、それは本当に運命とは思えないほど、幼い自分を掻き乱した。

父王が、なぜあの時あれほど絶望的な瞳で私の小さな体を抱きしめ、すまない。どうする事もできないと私に語ったのか。私の止まらない涙を拭いながら、少しでも私の気が晴れる様に、逸れる様にと父様が用意してくださったご好意は、その時の私にとっては自分の願いをかなえてくれない父への怒りと腹立ちまぎれの中で余計に自分のコントロールできない感情を募らせるばかりであった。珍しいお菓子、綺麗な人形、希少な金星鳥の鳴き声も何もかも……。どうして……。？どうして私の願いは聞いてくれないの？他の物なんていらない。。ただもう一度あの子に会いたい……。一緒にいたい……。それだけなのに。

年を得るにつれ、私は様々な事を貪欲に吸収していった。王国の王女としてのたしなみ、政治的な背景、歴史、帝王学に魔術、そういった知識を得ていくにつれ、私自身もまたかの少年が味わったであろう絶望をかいま見ていた。そして私は自分の無力さを思い知った。私がつっているのは全て、父と母、そしてアステールの国民からの善意。私自身が持っているものなど無いに等しいと。父様の権力をもつてしても、他国の政治的、また宗教的背景の根底に深く関わるものに簡単に口出しはできない。そんな事をすれば、長年友好を築いてきたユフテルとの絆に溝を作る事になる。

ユフテスは大陸の中でも4千年を超える古代王国、例えユフテスの王族といえども簡単にその禁忌を侵す事はできない。どうすれば……。どうすれば彼を助けられる？私に何が出来るのだろうか……。――

6話：迷惑な来訪者

「とにかく、考えていても仕方ないわ……。マリアベル、色々と準備を手伝ってちょうだい。カイル王子へのプレゼントも用意しなければならぬわね。」

リディアが召使い達に指示をしようと立ち上がると同時に、部屋のドアがノックされた。

「姫様、あの・・・お客様がいらしてますが・・・」そういつておずおずと声を掛けて来たのは新米メイドのナタリーだ。多少ドジな面もあるが年も近く、誠実な働きをする彼女をリディアは気に入っていた。

「客・・・？　いつたい誰なの？」

がやがやと賑やかな声が聞こえてきた。「お待ち下さい！王子、こちらは姫様の・・・」「困ります、お戻り下さい、ジェラルド王子、お願いです！」悲痛なメイド達の声を振り切ってこちらに歩いてきた「客」を見た途端リディアの顔が引きつった。

「・・・あんの馬鹿王子！」

リディアの姿をみると、王子は颯爽と手を振って近づいてきた。「ストップ！それ以上近づかないでちょうだい。あなた、いったい何しにきたの？」

そう、それは先月「どうしても」との父の頼みで見合いをした、エストラーダの王子、ジェラルドだった。エストラーダの国王は、アストール王の長年の親友で、先方から是非に・・・と薦められた第二王子との見合いをしぶしぶ受けて見合いしたのだが・・・

姿、形は悪くないのだ、この王子・・・ただ性格が破綻的に壊滅して

いる以外は……。ジェラルドはにこにこ笑いながらリディアの手を取ってキスをした。

「ちよつと何するのよ！」リディアは反射的に手を引っ込めた。鳥肌が立っている。

「御挨拶だなあ……。そんなに嫌がらなくなつていいじゃないか。久しぶりだね、リディア。そんなに怒ると皺が固定するよ？」ふふっと笑ってジェラルドはリディアの顔を覗き込んだ。

「余計なお世話よ！まだ皺が固定するほどの年齢ではなくてよ。それよりも何しにっ」

ずっとジェラルドはリディアの細い腰に手を回すと強引に歩き出す。

「さつき、国王に聞いたんだけど、君、ユフテスに行くんだって？」腰にまわされた手を振りほどきつつ、リディアは注意深く相手の顔を見据えた。父様ったら余計な事を！

「……ええ、父の代名として参加する予定だけれどそれが何か……？」しぶしぶ彼を部屋の中に招き入れたリディアはソファにゆつくりと腰掛けた。

「ふうん、そうなんだ……。丁度いいや、僕もユフテスに行くから一緒にどうかと思つて。」

何を考えているのだろう……。ジェラルドの表情からは何も読み取れない……。それでも幼い頃は、今と大違いで国も近い為よく遊んだ仲だったのだが、いつからこんな破壊的な性格になつたのだろうか……。そうだ……。あれは彼が王家の子女達の集う学問の都、リザルに留学してからだったか……。学校が休みになると、ちよくちよく、このアステールにも遊びにきていたのだが、だんだんと、昔みたい

に彼が何を考えているのか分からなくなっていた。

ここ数年は、顔を合わせると、リディアが不快になるほどちょっといをかけてくる。性格はともかく見た目の良いジェラルドはリザルでも浮き名を轟かせ、何もリディアでなくても、彼が女に困る事はないだろう。まあ、違った意味合いでの問題はちらほら起っているようだ。見合いだって、私が彼と結婚する意思が無い事を一番知っている筈なのに強引に話を進めて、断ったにも関わらず彼の態度は一向に変化する様子がない。本当に何を考えているのか・

「貴方もユフテスへ・・・？」

「そう、何と言っても僕はカイルの唯一無二の親友だからね。特にユフテスでは王族の１８歳の儀式は特に盛大だというし、お祝いに行かないとね。」

そうか・ジェラルドはあのカイル王子の同級生であり、この二人は今年同じく１８歳になるのだ。

「貴方とカイル王子が親友だなんて初耳ね・・・というか、それは良いとして、何故わざわざ一緒に行く必要が？」

ジェラルドはにやつと笑うと、「それでも君の父上には信頼されているんだよ。不肖の娘を宜しく頼むってね・・・。まあ、僕の剣の腕があれば、何かあったとしても、君の事を守ってあげられるしね？」確かにむかつく事に、ジェラルドは女遊びの浮き名以外でも、剣の道にかけてはエストラードだけでなく諸国にもその腕は認められている。

これ以上言い合いをしても、どうせのらりくらりとかわされて時間の無駄だと踏んだりディアは仕方なく承諾した。

「わかったわ。とりあえず出発は1週間後よ。それまであまり私の目の届かない所で大人しくしておいてちょうだい？」そしてまた波乱の種が一粒増えようとしていた。

7話：古本の謎

寝覚めの悪い朝だった。何か夢を見ていたのだろうか・・固く握りしめた手に汗をかいていた。リディアは起き上がるとベットサイドに置いてあった水を一気に飲み干した。今何時ぐらいだろうか・・？ベットから降りると、窓のカーテンをそつと開ける。空は白々しく明けていた。

昨日は本当に様々な事のあった1日だった。父様との謁見、馬鹿王子の来訪、そしてユフテスへの訪問・・そうだ、やっと思行く事ができるのだ。

数年前よりリディアは、内密にユフテス王家の秘密について密かに探りを入れていた。どうしてあのカイル王子と一緒に生まれた彼が一人、名前を消されなければならなかったのか、そして生け贄とは・・？だが何と言っても他国の、それも超一級秘密事項だ。そんなに簡単に分かる筈もなく、八方手を尽くしたがあの時に、少年が言っていた事柄以上の収穫は無かった。

そんな時、彼女はある一冊の古本を手に入れた。方々を旅して回る流浪の商人から偶然手に入れたその本はユフテス王家にまつわる伝説、または歴史書と言っても差し支えないだろう。どういう経緯であの商人がこの本を手に入れたのかは知らないが、これはユフテスに関わる秘密を解く鍵となりそうだった。その本には、これまでにユフテスが生け贄として捧げた4人の人物の事、そしてユフテス創世に関わるある一人の少女と竜の話が書かれていた。本は長い年月の中で損傷が激しく所々裂けて、半分ぐらいのページが損なわれていた。だが、リディアはこの本によって希望を見いだした。そう、あの少年を救えるかもしれないきっかけを。

その本に書かれていた4人の生け贄、だが実際に生け贄となったのはそのうちの3名のみで、残りの一人は何らかの理由で生け贄にならなかったのだ。確かあの時少年は、生け贄となる魂をもつ者が生まれるのは国の守護が弱まった時・・・と言っていた。確かに今までの記録を見ると、生け贄が捧げられた時代背景には、国の存亡に関わる様な事件がいくつか起っていた。戦争や日照りによる飢餓など・・・だが今のユフテスには今までに生け贄が捧げられた時の様な問題が起っているわけではない。

塔に閉じ込められているあの人も、まだ生きている。だけど最近カイル王子の誕生日に合わせて、塔の見張りが増えたとの連絡が入っていた。それはここ数年、ユフテルに滞在している諜報部員からの信頼の置ける情報だった。何かが・・・起るうとしているのだろうか？

彼と同じ生け贄の魂をもって生まれた遙か昔の人物、その中の1人だけが何故生け贄になる事を免れたのか、リディアはそこに鍵があるのではないかと考えていた。しかし、肝心のその部分はごっそりと抜け落ちている。それにその本にはまだ不可解な点がいくつか残されていた。国の創世に関わるという、少女と一匹の竜・・・竜は最後にその姿を目撃されたのは500年程昔だという。竜がどれほどの長生きかは知らないが、ユフテスの創世に関わったというその竜はこの生け贄という儀式と関わりがあるのだろうか？分からない事だらけだった。

そういえば、ジェラルドはカイル王子の親友・・・？だとか言っていた。もしそうならあの馬鹿王子を通じて何か聞き出せるかもしれない。私がカイル王子とあったのは、8年前に滞在していた短い間だけ・・・他国の舞踏会で何度か形式上の挨拶は交わしたものの、カイル王子は姫君達に人気が高く、まともな話が出来た試しがない。

リディアは去年の暮れのパーティーで見かけたカイル王子の容貌を
思い出していた。毎回女たらしのジェラルドだけでなく、カイル王
子も数知れない姫君や貴族の子女達に囲まれていたのは知っている。
そついうリディアも負けず劣らず多くの男達に囲まれていた訳だが・

カイル王子・・・一体どういう人なんだろう？あのジェラルドの友達
ってことは・・・微妙だわ。

でもあの馬鹿王子、使えるかもしれない・・・。リディアはにんまり
と笑った。

8 話：殿下の事情 1

――所変わって――

南向きの客室の1室では従者のルークが主人のジェラルドに外套を着せていた。

「全くもう……昨日は何も言わずにいきなりこちらの城に押し掛けるわ……今日もこんなに朝早くからいったいどこへ出かけるおつもりなんです？」

「まあ、まあ、そんなぶつちよう顔すんなって。別にお前が思ってるようなとこじゃねーよ。」

ぎろりとルークは主人を睨みつけていった。

「一時期、朝からいかがわしい所に入り浸っていた貴方のお言葉は信用なりませんか……？」

「お前もリディアに負けず劣らずだな……。今回はそういうんじゃない。個人的な所用だ。お前はついてくるなよ？」

ルークはしぶしぶ頷いた。「分かりました……。で・す・が！くれつぐれも問題は起こさないで下さいよ?!この間だつて……。う、もごっ」

止まりそつにない従者の口を塞ぐとジェラルドは苦笑して艶っぽい目を向けると言った。「わかったよ。そんなに俺がいなくて寂しいんなら、今夜添い寝でもしてやるつか……？」

ルークは真つ赤になって叫んだ。「ぼ、僕はそんな子供じゃありません！」

「はははは、じゃあまた後でな。」とジェラルドが部屋をでようとすると、ノック音がした。

「ジェラルド王子、いらつしやられますでしょうか？」

あれは、たしかリディア付きの侍女だったか・・・？

「ああ、なんだい？可愛い子猫ちゃん、僕に何の用かな？」後ろでルークがかっぱーんと口を開けて固まっている・・・ああ、なんだってあの方はあんな臭い台詞をはけるのか・・・

新米メイドのナタリーは少し引き気味に身を固くすると言った。

「は、はい・・・あの、リディアーナ様が今晚のお夕食を一緒にどうかと誘われておりますが・・・」

「リディアが？」予想もしていなかった台詞に今度は少しジェラルドの方が固まった。

「ーふん・・・あのお姫様もいったい何を企んでいるのかな・・・？」少し小首をかしげてナタリーをドアの壁にゆっくりと押しつけ耳元で囁く。

ナタリーは泣きそうになっている。生まれてこのかたこのように男性に詰め寄られた事がないのだ。後ろでルークの非難があった声上がる。「ジェラルド様！」

ゆっくりと手を離すと軽くため息をつく。「冗談だよ。そんなに熱くなるなんて。そうだな・・・わかった、夕食の時間には間に合う様に帰ってこよう。出席するとリディアに伝えておいてくれ。」

ナタリーはほつとため息をつくとそろそろとドアの方まで移動し、おおげさにお辞儀すると慌てて去って行った。

「ジェラルド様、あんな風に女人をからかうなんて趣味が悪いです！」

「別にからかつてなんかないさ、あのリディアが僕と一緒に夕食

だなんて、何か企みがあつての事としか考えられないじゃないか。」
「・・・嫌われているという自覚はあるんですね・・・。」ルー
クは深々とため息をつく。

「おっと、もう時間だ、遅れると何言われるかわかんねーからな、
あいつは・・・ともかく行ってくる！」そういうとジェラルドは足早
に出て行った。

9 話：殿下の事情 2

春先とは言え、朝方はまだまだ肌寒く、はく息はにわかに白くなっていた。ふと庭園に咲き誇る紅色の薔薇の前でジェラルドは立ち止まった。朝露を浴びて匂う様に咲き誇る薔薇園。ジェラルドは昔の事を思い出していた。

「――ねえ、まってよ、まってたら」 「リディアは足が遅いんだもん、そんなに待ってられないよ！」庭先を走る幼いリディアと僕、リディアはよく僕の後について回っていた。少し我が侘だけでも可愛い僕のお姫様・父上に連れられて良く遊びにきていたアステールの庭は、僕の庭も同然で、女兄弟のいない僕はリディアがそれはそれは可愛くて仕方が無かった。

誰でも無条件に自分を愛し信頼してくれる者が近くに居れば、自然と慈しむ様になるだろう・だが、ある時からリディアに小さな変化が起きたのを僕は見逃さなかった。

あれは、そうだ、アステール王がユフテスへ友好訪問して帰ってきてから数日後だっただろうか・いつもの様に、リディアを訪ねて父上と一緒に城へ上がった日、リディアの様子がおかしかった。

何日間か泣きはらしたであろう目はウサギの様に真っ赤でその白いほっぺたに涙の筋ができるのではないかと思うほどだった。どうしたんだろう・誰が僕の可愛いリディアをこんなに泣かしたの？リディアに問いかけてみても彼女の話はあまり要領を得ない。

「あのね・男の子がね・（ひつく）塔の中にいて、私助けてあげたかったのに何も出来なくて・」しゃくり上げながら必死に言葉を紡ぐ。

男の子・・・？そいつが僕のリディアをこんなに泣かせているのか・
・？なんだか、あった事もないその少年の事を聞きたびに、ある種
の苛立が僕の中に沸き起こった。なんで、そんな1度しかあったこ
とのない男の事でそんなに泣く？どうしてそんな辛そうな顔で塞ぎ
込むんだ？

正体のわからない不安を抱えたまま、リディアを不憫に思う気持ち
と、自分の募る苛立を持て余していた。それから、僕がその苛立の
正体に気付いたのはそう遠い事ではなかった。15歳になって、リ
ザルの高等学校に入学した頃から、僕はリディアを少しずつ遠ざけ
ていった。自分の中にある狂気を押さえ込むのに必死で、大切なリ
ディアを傷つけたくはなかった。そう、僕は彼女に嫌われたくは無
かったから・・・そんな僕の気も知らずにリディアは何度も僕の心を
揺らし続けた。無邪気で残酷な僕のお姫様・・・頼むから・・・
お願いだから僕に君を傷つけさせないで欲しい。

リザルの高等学校に入学してすぐ、僕はユフテスの王子と出会う事
になった。何の因果か彼は僕と同室のルームメイトだったのだ。王
族といえども、貴族の子女らとまったく変わらず、よっぽどの理由
が無い限り、個室ではなく、平等に二人一部屋のさして広くもない
部屋があてがわれた。教育は、才能があれば学年に関係なく、いく
らでも最高の教育が受けられる。王族として最低取らなければなら
ない教科はほとんどユフテスの王子も同時に取っており、望む、望
まないに関わらず、僕はカイルとほとんどの時間を一緒に過ごす事
になった。

ーこいつがリディアの話していたユフテスの双子の片割れ・・・？
日に当たると黄金のようにキラキラと輝く蜂蜜色の髪とはしばみ色
の瞳。嫌みな程整った顔立ちにイラツとした。こいつじゃない、こ

「いつが僕のリディアを泣かした訳じゃない・・・だが、こいつと同じ顔をした奴にリディアは・・・」

「あの・・・こんにちは、初めまして。僕はユフテルのカイルと言います。今日から宜しくお願いします。」と同室になった奴は僕に手を差し出した。

「ああ、エストラダのジェラルドだ。宜しくな。」相手に気取られない様に、慎重に手を握り返す。華奢な体と思っていたが、ごついとまでは行かなくとも彼の手はそれなりの訓練を施された手だった。

「・・・何か訓練を受けているのか？」

「いや、君と同じ程度のものだと思うよ？基礎訓練に剣や弓・・・」
そういつて奴は僕の目を見てにっこりと笑った。

「・・・こいつ・・・見た目と中身のギャップがありそうだな・・・。それが俺とカイルとの出会いでありファーストインプレッションだった。」

10話：殿下の事情3

――眉目秀麗、冷静沈着、運動神経も申し分ない。人当たりも良いがそれだけではなさそうだ・・・カイルと同室になってから1ヶ月、ジェラルドはほとんど毎日の日程を彼と一緒に過ごしていた。個人的な事で敵意を置くには申し訳無い程、カイルはいい奴だった。そう、僕の苛立の元凶は彼ではない。だが、彼もそれに深く関わっている事は違いないのだが・・・。

「ジェラルド！今からジノリ教授の所かい？僕も一緒にいくよ。」
2階の部屋の窓からカイルが手を振っているのが見えた。

「ほんとくに、嫌になるぐらいいい奴なんだよな・・・」こちらに向かつて急いで駆けてくるカイルを見てつぶやく。だが、彼に聞きたいことは山ほどある。マリアベルからユフテスであった事を詳細に聞いた僕は自分でも部下を使って、ユフテス王家と塔の少年の事を調べていた。確かにカイルには、公には隠されているが、同じ王妃を母とする双子の兄弟がいる。出産に立ち会った乳母から直接聞いたのだから間違いないだろう。そして王の側室達との間に2男1女の弟妹が居るらしい。だが、塔に閉じ込められているというカイルの兄弟についての詳細はエストラードが誇る諜報部員でも調べるのに苦心しているようだった。

「お待たせ、ジェラルド」

「おう・・・魔術の構造論についての論文は書き終わったのか？」
「ああ、もう少しかな・・・？風系統の新しい構造論を組み立ててみたんだけど、」歩きながら魔法と魔術の講義になってきた。カイルは魔術を専門に取ってるみたいだった。剣技のクラスでも優秀なカイルだったが、魔術に関しては教授達が競って教えたがるぐらい

の才能を発揮していた。確かにユフテスには昔から、魔法に特化した能力が高い魔術師を沢山排出している土地だ。王族の中にも幾人か有名な魔術師が存在する。

「お前、俺と違って王位継承権第1位なんだろう？別に魔術なんてそんな必要ないんじゃないのか？ユフテルには沢山の優秀な魔術師がいるんだろう？」少し茶化したように言うとかイルの目にふといつもと違った光が宿った様な気がした。気のせいだっただろうか？

カイルはにこつと邪気の無い笑顔を向けると言った。

「王位・・・ね。まあ、魔術は半分は趣味みたいなもんだよ・・・」その後、何故かそれ以上突っ込んで聞くのを拒否するように話をそらされてしまい、結局その日は突っ込んだ話は出来ずじまいだった。

僕たちが17歳になった時、丁度リディアの社交界お披露目の舞踏会がアステールで行われる事になり、僕とカイルは共に出席する事になった。リディアには学院が休みに入った時にたまに会っていたが、距離を置く様になってからは、すれ違いも多く、最近は顔を合わせても嫌みを言われる事が多くなってきた。でも、今はまだそれでいい・・・そう、今は。

「ジェラルドはリディアーナ姫の事をよく知ってるのかい？」舞踏会の前日珍しくカイルが僕に問いかけてきた。カイルはジェラルドと同じく女にもてるが、お決まりの笑顔で優しく撃退していたので、あまり女に興味が無いのだと思っていたのだが・・・

「ああ、僕とリディアは幼なじみだよ。親達が親友同士という事も

あつて、昔から行き来してるんだ・・・どうしたんだい？君が女の事を聞いてくるなんて珍しいね。」

「そうなのか。いや、別に僕は女嫌いという訳ではないよ。ーリディアーナ姫には、僕も幼い頃にお会いた事があるんだ・・・幼いながらにびつくりしたよ。こんな綺麗な姫君がいるのかってね。8歳であれだけの存在感だったのだから、今はどんなに美しくなっているのか楽しみだよ。」そういつて懐かしむ様に微笑んだ。

まさか、カイルもリディアを・・・？

ジェラルドはゆつくりと口を開く。「いや・・・相変わらずのおてんばに加えて最近は大分口も立つ様になつてきたからね、会うとがっかりするかもしれないよ？」

「はは、それは益々楽しみだね。」

本当に・・・会うのが楽しみだよ、リディアーナ姫・・・小さく呟かれた言葉はジェラルドの耳には届かなかった。

10話：殿下の事情3（後書き）

いやあ・・・なんか草食系というよか、一癖も二癖もある様な男の子に育ってきてしまった・・・汗）

さて、この二人の王子の思惑はどういう方向に向かって行くのか・・・？

11話：殿下の事情4

良家の子女は15歳を迎えるのと同時に社交界入りするのが一般である。そして社交界はいわば、値踏みと駆け引きの場、つまり満十五歳をもつて、社会の1員と見なされ、早いものは15歳二となると同時に縁談が舞い込み、女子の場合は16歳をもつて嫁入りが可能となる。男子が成人と認められるのは18歳になってからだ。

一国の王女、しかも王位継承権をもつリディアーナの社交界入りは他国の王族、貴族の間で噂の的だった。というのも、彼女の父であるアステールの国王は、娘を溺愛している上、昔から、「うちは可愛い娘が一人の上、リディアーナはまぎれも無くアステールの世継ぎだ。・・となると、やっぱりうちの娘を嫁に出すつもりは毛頭ないが・・婿をもらうと言う手はあるなあ？」と賢王（たぬき親父ともいう）が公言しているからだ。もちろんそれだけでなくリディアーナの美しさも噂を呼び、かの王女を一目みたい、そしてあわよくば・・と考えているであろう男達で会場は賑わっていた。またそれに目をつけた女達も溢れている。

ジェラルドとカイルは会場に入るなり早速女達に囲まれた。

「まあ、ジェラルド王子、今宵もとても麗しい事・・・」「ジェラルド様～！」「そちらの殿方は、御紹介して頂けませんのかしら・・？」「カイル王子・・なんて素敵」などと、蟻の群れのように寄ってくる女達をうまくあしらいながら二人は中央サロンへと向かう。

「すごい人だね・・・」カイルが呟く。

「まあな、あの狸親父があれだけ公言してるんだ、リディアと結婚すれば、この国の王座が転がり込んでくる。一応はリディアが王

ということになるんだろうが、この国は昔から夫婦で政務に関わっているからな。野心のあるやつにはうまい話だろう・・・。」と苦々しくジェラルドが答える。

「ーふん、で、君もその国王の座つてのを狙ってるのかい？王位第二継承者のジェラルド君？」カイルが俺の目を覗きこみながらにやつと笑った。

こいつ・・・どこまで・・・？自分の気持ちを見透かされた様な気がした。

「いや・・・俺は確かにエストラダを継ぐ訳ではないし、別にアステールの国王の座に興味がある訳でもない・・・が。」俺が個人的に譲れないと思っているやつがたまたまアステールの王女という座についているだけだな・・・言葉にはしないが自嘲気味に笑う。

その時、ホールの中央でリディアーナの来訪がラツパの音と共に告げられた。一気に会場は静かになっていく。軽やかな衣擦れの音と共にアステール王にエスコートされたリディアーナが姿を現した。会場のあちこちで息を飲む声が聞こえる。

王家の正装であるローブデコルテに身を包み、母親譲りの美しい黒緑の髪にはティアラと共に数知れずの真珠が編み込まれ光を受けて輝いている。長い睫毛に彩られた黒曜石の瞳は物怖じすることなくまっすぐと向いている。真珠の肌、形の良い鼻、薔薇のような唇、リディアを見慣れている自分さえも、一時言葉を失って見惚れていた。

隣で息を飲む音にはつと我に振り返り手を握りしめる・・・この一瞬だけでもリディアに心を奪われた男どもが何十人居るんだか・・・つち、厄介ごとが増えそうだ。周りを見回しながら考える。お前らごときが俺のリディアに近づけるとでも思うなよ・・・？

12話：姫君の憂鬱

リディアは、次々と祝いの口上を述べてくる貴族達や、自分に向けられる好奇の視線にうんざりしながらも、表面的にはにこやかにこの上なく優美な仕草でそれらの人々をやりこなしていた。

父様も父様で周りからの明らかな娘への賛辞を受け流しつつにこやかに対応している。

ふと中央サロンへ目を向けると見知った顔がこちらを見ていた。深い青地に銀の縫い取りが施されているエストラダの正装を纏ったジェラルド王子。ここ数年、顔を合わせても不可解な行動をとるジェラルドにリディアは不満と謂われない恐怖心を抱く事が多くなった。幼い頃から自分を妹の様に可愛がっていてくれていたジェラルドの明らかな態度の豹変にどう接して良いかわからないのだ。

エストラダの礼服を来たジェラルドはとても美しかった。彼の吸い込まれる様な青い瞳に見つめられ、自然と頬が赤く染まるのが分かった。いつもと違う彼の視線にどぎまぎする。

（な、何考えてるのよ、私。あれはいつもおちゃらけて私を馬鹿にする奴よ。そりゃあ昔はお兄様の様に慕っていたけど、最近のジェラルドは何だか怖い・・・）

人ごみを縫ってジェラルドがこちらにやってくる。もう一人彼の後をついてやってくる青年がいる。誰だろう・・・？どこかで見た事があるような気がする。

「やあ、リディア、今日は社交界デビューおめでとう。いつものお転婆姿と違って、着飾るとそれなりに見られるもんだね？孫にも衣装ってやつかな。」にやっと笑ってジェラルドが軽口をたたく。

「・・・貴方って人は他にもうちよつとましな事が言えないの?!」
まったくこんな奴にどきまぎした私が馬鹿だったわ・・・! リディア
はちよつとむくれてジェラルドを睨んだ。

「はは、冗談だつて。気にするなよ。そうそう、こいつ、知ってい
るだろう? ユフテスの第一王子のカイルだよ。」

その言葉にはつとして彼の後ろに立っている青年をまじまじと見つ
める。ユフテスの王子・・・そうか、そうだ。確かに幼い頃に出会
ったカイル王子の面影が残っている。まだ少年ともいえなくもない
金色の髪とはしばみ色の瞳に映る自分を見ながらリディアはゆっく
りと口を開いた。

「ユフテスのカイル王子・・・お久しぶりでございます。一度父
上と一緒に御国を訪問した際にお会い致しましたわね?」

「ええ、本当に、憶えていて下さつてうれしい限りです、リディア
ーナ姫。そうですね、約7年ぶりでしょうか・・・? 本当に輝くばか
りにお美しくなれましたね。」数々の賛辞を聞き慣れているリデ
ィアだったが、あの少年と同じ・・・いや、双子の兄弟の見惚れる
様な美貌を持つ青年にそう言われ、手に口づけを受けると、また引
いたと思つた頬に赤みがさした。

周りから先ほどとは違った刺のある視線を受ける。ジェラルドとカ
イル王子を慕う貴族の姫君達の視線が痛い・・・。当たり障りの無
い社交辞令と会話を済ませると彼らはあつという間に取り巻きの女
性達に囲まれて行つた。

リディアの脳裏に先ほど見たカイル王子と少年の面影が重なる。双
子というからには、彼も17歳になっているはずだ。心臓が痛くな
るほど、ドキドキと胸の奥が鳴り響いた。

そんなリディアを遠くから意味ありげに見つめる二つの視線に彼女は気付いていなかった。

13話：密会1

どれくらい時間が経ったのだろうか。考えながら歩いているうちにいつの間にか目指す場所についていた。アステール帝国の城下町サングルウッド。その外れにある幾分小汚い茶屋の中すでに目的の人物は座って目前に置かれた茶をすすっていた。

「ー遅い。」いかにも魔術師といった黒いローブを頭からすっぽりと被り、不思議な金色とも見える色合いの、まるで猫の様な瞳を持った男はすつと視線だけをジェラルドに合わせ低く呟いた。

「わりーな、待たせちまつて。おやつさん、俺にも一杯レント茶をくれ。それと、なんかうまいもんでもあつたら二人分見繕ってくれるか？」

「はいよ！まかしときな！」と店の奥から威勢の良い声が返ってくる。この店の親父は元熟練した傭兵で、怪我が元で引退した後は何を思ったのか町外れであまり儲からない茶屋を始めた。ジェラルドとは街の飲み屋で出会い意気投合したのだが、彼が傭兵を止めてこの店をやる様になってからは、ちよくちよく顔を出してはあまりうまくいとも言えない食事を頼んでいる。だが、彼の店は客が少ないといった意味でも、あまり人に聞かれたくない類いの話をするのにはうってつけで、店の親父もその所はよく心得て、度々奥の個室をジェラルドに提供していた。

「お前な、、さして明るくもない部屋の中でその不気味なローブ被るの止めとけよな？なんか見てるこつちが暗くなるっての・・」
ちよっと呆れたように目の前の男に促す。

「うるさい・・・これが一番落ち着くんだ。」そう言つて男は下を向く。

「まあ、いいけどさあ。で、例の件、どうだった？何か収穫はあったのか？」ジェラルドの声に真剣味が帯びる。

「んー、そうだね、収穫つていうか、色々分かつてきたよ。厄介な事も含めてね。」

ジェラルドは厳しい目を男に向ける。目の前にいる男の名はキルケと言つた。だが実際の所それが本名なのかは分らない。ユフテスの内情を調べるために雇つたこの男は優秀な魔術師兼情報屋として裏の世界では名のしれた男だ。フードからちりと見えるその顔は意外にも少年と言つて差し支えの無い様な幼い顔立ちをしている。だが、魔術師を外見だけで判断する事はできない。彼らは年齢、容姿を変える事ぐらい朝飯前なのだ。

「厄介な事ね、まあなんでも一筋縄じゃー行かないってことか・・・で、詳細は？」

キルケはにやりとジェラルドの方に黙つて手を差し出す。

「ちつ、抜け目ねーな。幾らだ？」

「そうだな・・・あと5千つてとこか？」

「ーえらく吹っかけるな・・・？それはかなり信用できる情報なんだろうな？」

運ばれてきた食事を目の端でちろつと眺めてキルケは舌なめずりすると、おもむろに手を伸ばし蒸かした芋をほおばつた。

「もぐつ、まあ、こいつを手に入れるのはかなり苦労したかな・・・それでも随分と安い方だ。」そうつてキルケは懐から重々しい装飾の中に紋章のついた本を取り出した。

「なんだ、それは？」ジェラルドがいぶかしげに尋ねる。

「ユフテル王城の地下に何十もの魔法陣で封印をなされた部屋があ

る。そこから取ってきたんだ。」キルケは事も無げに言うと、ジェラルドに本を手渡した。

「だが、その本にもややこしい封印が掛けられている。解読するのに、まだ数日は必要だな。ざっと調べたが、無理矢理開けようとすると消滅するような仕掛けになっている。」

ジェラルドはその本を手にとって見る。表紙には線密に描かれた魔法陣の様な物と4つの石が埋め込んであり、その中心には白竜が翼を広げたユフテル王家の紋章があった。

「その本は、おいおい調べるとしても、他にもちよつと気になる事があったな。」そういつてキルケは一度話を切る様に茶をすすったのだった。

14話：密会2

「気になる事とは・・・？」

「一つ目は、第一王位継承者のカイル王子だが、最近国に帰ってから、色々と不振な動きを見せている。表立ってではないがな。いたい何をしようとしているのか、少し気になるふしもあってなあ。――俺が不振に思ったのは、城に潜入した時だが、やけに城の見張りが薄かった。以前別の件であの城に入った事があってな、その時には幾重にも魔術の仕掛けが施されていて、さすがに大陸で有名な魔術師を排出している国だと感心したものだ。」

今は王子の成人の儀式に関わる事で通常よりも人の出入りが激しいからそれもあるての事かと最初は思ったが、どうも、こう・・・いやな感じが拭えなかった。見られている・・・というか誰かの手の上で踊らされているようなそんな感じだ・・・いや、実際わざとその本を盗ませる為に監視の手を薄めた様な・・・俺の考え過ぎかもしれないがそんな気がした。」

「ふむ・・・これをわざと盗らせる為にか・・・？しかし何故？」ジエラルドはリザルで3年の間共に過ごした友の事を思い浮かべていた。実際に最後彼と別れたのはほんの一月程前だ。やつは、この1ヶ月間の間に何を考え、成そうとしているのか・・・？

カイルは確かに見た目通りの優男ではない。時折カイルが見せる影のある表情、そして強烈な意思を放つ鋭い目つきを何度か見た事がある。奴がそんな表情を見せるのはやはり、塔の中に閉じ込められている双子の兄弟が関係あるのか・・・？と何度か考えた。

「さあな、俺だつて確かな事は言えん。だがもう一つ城の地下に続く扉はかなりヤバイ匂いがした。さすがの俺も身が竦むぐらいの・・。その本はできるだけ早く術を解説する。何か手がかりがありそうだしな。あの城、いやあの国にはとてつもなく重大な秘密が隠されているのかもしれない。俺も乗りかかった船だ、ここまで来ると是が非でも知りたくなってきた・」

そうだ、それともう一つ、例の塔の事だが、国王の命令で警備の数が増やされた様だぞ。ご苦労な事だな・・そんなに塔の中の男に逃げられたら困る事でもあるのか・・。」

「何か・・が始まるのかもしれない。いや、もう始まっているのか・・？」リディアが塔の中の住人と出会ってから全ては始まった。今では俺もユフテスの謎を巡る大きな波に飲み込まれている。そしてその波はキルケやまた多くの人物を巻き込んで行くのだろうか？いったい何が隠されて、そして始まるうとしているのか。ジェラルドはいい知れぬ不安をぬぐい去るように一気に茶を飲み干した。

「とりあえず、その本は三日あれば解説できるんだな？ユフテスには6日後の出発だ、それまでにある程度の事が分かればいいが・・ともかく、3日後に、もう一度ここで落ち合おう。時間は今日と同じで良い。」

「分かった・・。今度は遅れるな？」とキルケそう言つて薄く笑う。ジェラルドは苦笑して言った。「時間に関してはお前も大概うるさい奴だな・・。努力するよ。もしその本が、何らかの意図があつて俺たちの手に渡ったものなら、きっと理由があるはずだ。カイルの方については俺の部下にも探らせよう。じゃあ、3日後にー」

15話：始まりの1日目

「ナタリーはリディアーナの部屋の前に立つと、一呼吸おいて扉をノックする。「リディアーナ様、只今戻りました。」

扉を開くと丁度リアベルがリディアの着替えを手伝っている所だった。リディアはにこやかに振り向きながら労いの言葉を掛けた。

「お帰りなさい、ナタリー。朝早くからご苦労様。あの馬鹿王子から返事は聞いてきてもらえたかしら？」

「は、はい！ ジェラルド王子は姫様の夕食会にご出席なさると・・・」

「そう、ありがとう。あら・・？、ナタリー、あなた顔が赤いわよ？風邪でも引いたのではなくて？」ナタリーの顔を横目で見つくりディアが問いかけた。

先ほどのジェラルド王子とのやり取りを思い出して、ナタリーは一瞬でトマトのように赤くなる。「いえ、あの、大丈夫です。姫様にご心配かけまして申し訳ありません。」真つ赤な顔でうつむくナタリーを多少不思議に思ったが、肩をすくめるとそれ以上は追求しなかった。

「よろしいですわ、リディアーナ様。」リアベルがリディアの支度を終えて言った。今日のリディアは朝摘みのピンクのローズを編み込まれた髪に挿し、同じく薄いピンクのレースが重なりあったドレスを清楚に着こなしていた。

「ありがとう、リアベル。ところで今日の予定はどうなっていたかしら？」

「今日は午前中は、政務についてのお勉強の為、宰相のレオル様がいらっしやいます。昼食後は、2時からオディフィノール家のアデ

イール様主催のお茶会に招かれておられましたわね・・・それから、その後はリュート（楽器）のお稽古。そうそう、あと、細工師の者がユフテスのカイル王子に献上する品の事で姫様とお話したいと申ししておりましたが、どう致しましょう？」

「そうね、もうあまり日にちが無いものね。いくら熟練の手練といえどもあれだけの品を作るのは時間が掛かる筈、いいわ、夕食の前に会つと伝えておいて頂戴？」

「承知致しました。」短く礼をすると、マリABELはナタリーを引き連れて部屋をでていった。

とかく、王女の身であつてもアステールを継ぐ唯一の後継者、リディアの毎日は忙しいの一言につきる。生まれ落ちた頃より一流の教育を受け、幾ら同世代の子供達より大人びているといつても、まだリディアはまだ16歳の少女だ。

「――現在でも、たまに目を離すとふらつと雲隠れするお転婆で、心優しい、お人好しの可愛いリディアーナ様・・・」

恐れ多い事だがマリABELにとっては、幼い頃より我が子のように慈しんできた姫、そして誰よりも幸せになつて欲しいと願っている。

到底普通なら16歳の少女が経験することのない重責をリディアは背負っている。民の上に立つ者として周りから普通である事を許されない、普通以上の物を期待され続ける彼女を、支えてくれる誰が必要だとマリABELは常々考えていた。

彼女が幼い頃であつた塔の君にかける思いは痛い程分かっているが、大切な姫を他国の曰く付きの名前を失つた王子になど関わらせたくはなかつた。そう、大切な姫だからこそ、。

王がしてきたように、マリアベルも何度もリディアに言い聞かせようとした。「姫様、リディアーナ様、お願いですから聞き分け下さい。あの者の事はお忘れ下さい・・・。」と。だが、リディアーナ姫は決して彼を諦める事をしなかった。大人になって行く過程の中で様々な知識や教養を見に付け、自分の願いがどれほど困難かを理解した上でも・・・。

そしていつしかマリアベル自身も彼女の強い意思に折れた。それが、リディアーナ様の望みであれば、それほどまでに強く求めになるのであれば、私は貴方のために尽くしましょう。――

16話：夕食前

「それでは、リディアーナ様、こちらの細工は金と銀を土台に緑柱石をちらばめる、という事で宜しいですか？」老年の細工師長が訪ねる。

「ええ、御願いますわ。」リディアがカイル王子への祝いにと作らせているのは一振りの剣であった。だが、それは実用というよりは工芸品としての価値がより大きい物だ。アステールには、金や銀を使った緻密で美しい工芸品を作る熟練の細工師達を多く抱えていた。

打ち合わせの後、時間を確認する。――まだ夕食までには一刻ほどの時間があつた。

リディアは窓の外へ眼をやると、立ち上がって、ゆっくりと外へ出て行つた。庭師が精魂込めて作り出した色とりどりの花と薔薇が咲き乱れている。沢山のハナミズキの木々は花を咲かせ、ツツジや梨の花も咲いている。

リディアは、明け方ジェラルドが立ち止まったのと同じ薔薇園の一角まで足を伸ばしていた。

――そう、昔はよくここでジェラルドと遊んでいた……。ジェラルドには9つ年の離れた王位継承者の兄と、5つ下の妹がいる。リディアと一番年の近いジェラルドを連れてよく、隣国のレオナード王は我が国へ遊びにきていた。

幼い頃リディアは心底ジェラルドを慕っており、いつもいつも彼の後について遊んでいたあの頃。今でこそ馬鹿王子とののしつてはいるが、実際の心の奥底では昔のように彼を信頼している自分がある事も自覚していた。ふと昔の呼び名で彼の名を呼ぶ。「ジェラルド兄様……」

胸に軽い疼きと痛みを憶える。15歳になって社交界へのデビューを果たした後から、リディアの元には数えきれないほどの縁談が来ていた。その中で、父がもっとも強く押し願ったのが、ジェラルドとの話だった。もしかしたら隣国のレオナード王が幾度もジェラルドを連れて訪れていたのはそういう思惑があつたのだろうか・・・？

そう、リディアは決してジェラルドの事を心から憎んでいる訳ではない。ただ怖いのだ。こんな事を人に言っても笑われるだけだろう。だが、いつの頃からか、ジェラルドのリディアを見る眼が以前と変わったことに気がついていた。彼に熱っぽく見つめられる度、声変わりして少し低くかすれた声で呼ばれる度、そしてリディア・・・と彼に触られる度、言いようも無い不安と恐怖がリディアを襲った。そのうち、ジェラルドの方からも、目に見えてリディアに一線置く様になり、見えない壁の様な物が二人の間に出来てしまった。

最初に彼を拒んだのはリディアの方なのだ・・・だがジェラルドは、それでもたまにリディアの様子を伺う様に城に来ていた。

そして先月の見合いの日。いつもの王子らしからぬラフな格好と違い、いつかあの舞踏会で見た様な礼服を来てやってきたジェラルド。膝をつき、リディアの手を取って仰々しく口上を述べ、そして・・・
「リディアーナ、僕と結婚してくれませんか？」と囁いた。

リディアの頭の中がぐちゃぐちゃになる。違う、そうじゃない・・・私の兄様はこんな風に私を見ては居なかった。怖い・・・彼が、なんて言えばいいの？

絞り出す様な声でリディアは呟く・・・「違う・・・ううん、私は、」
「私はどうしたい？ジェラルドの事が好きかと聞かれれば、以前であれば即頷いていた。だけどこんな風に・・・私はジェラルドの事が好きなの・・・？好き・・・？」

急速に顔色が悪くなって行く、そして「ごめんなさい。私は、私はジェラルドの事をー」

突然目前から笑い声がする。ジェラルドが声を立てて笑っているのだ。「ジェラルド兄様？」いぶかしげについ昔の愛称で彼を呼ぶ。笑いを止めるとジェラルドはにやつと笑ってリディアに言った。「ごめんね、冗談を間に受けた?」「じょ、冗談?」青白かったリディアの頬が赤く染まる。

「そう、冗談・・・だよ。僕はお子様を相手にするほど暇じゃ無いからね。何もリディアじゃなくても僕のお相手をしてくれる美しい姫君は沢山居る事だし・・・?」

かっーと頭に血が上る。「っ最低!この馬鹿王子!」冗談だと言われてほっとした気持ちを奥底に押さえ込んでリディアは走ってその場を去った。

後に残された王子が一人・・・「まだ・・・早い・・・か。」彼の本心を彼女はまだ知らない・・・

17話：晚餐

キルケと別れた後、カイルの様子を探らせる為に連絡用の鳥を使って部下に指示を出し、しばらく城下町をぶらぶらする。夕食までにはまだ時間がある。

ーリディアからの突然の夕食の誘い、それは何を意図しての事かジェラルドは薄々感づいていた。ユフテスに関する謎はさすがにジェラルドの手にも余る程深く複雑な様相を見せている。ジェラルド自身、最初は好奇心も手伝って調べ始めた泥沼にとつぷりと浸かってしまつて居る自身に薄ら笑いを禁じ得ない。

やはり、カイルと、例の塔の事だろうな……。リディアは昔から善くも悪くもこうと決めた事に一途で一直線だ。汚れを知らない綺麗なままのお姫様……。その白く真珠の様に美しい肌も、心も自分自身の色に染めなくなる。今なら何色にでも染まるであろう僕のリディア……

あのお姫様は影でこそそこそこき回ったり策略を練つたりという事柄にはあまり向いていない。きつと直球で問いかけてくるであろう。そう言つた面ではまだまだ彼女は子供だ。まだ自分の本当の気持ちさえ気付く事の出来ない、塔で出会つたというカイルの双子の兄妹に、淡い想いを描いている夢見がちな子供。

「一目惚れ……。？そんなものは幻想なんだよ……。リディア。子供がお伽噺に出てくる王子様に憧れる気持ちとさして変わらない。君の執着も何もかも全て僕が取り払ってあげる……。ジェラルドは自分に言い聞かせる様に呟いた。

――
食卓の上には様々な料理が所狭しと並べられている。

「リディアーナ様、夕食の用意が整った様です。ジェラルド様も既にお着きになっておられます。」マリアベルがリディアを呼びに庭へやってきた。

小さくうずくまって薔薇の花に手を差し伸べていたリディアは、はっとしてまだ咲ききっていない薔薇のつばみをむしりとる。

「姫様・・・？」

リディアは立ち上がり何も無かったかの様に振り向く。「そう、すぐに行くわ。」

さあーっと突風がリディアの足下を吹き抜けていく。手に握りしめたままの薔薇のつばみを落とすと顔を上げまっすぐに歩きだした。

食卓に着くとリディアはジェラルドの顔をまっすぐに見つめ言った。
「こちらから御招待したのに、待たせてしまって申し訳ありません・・。」

「いや、こちらも先ほど着いたばかりだ。気にしなくて良い。まずはこの素晴らしい夕餉に乾杯といこうじゃないか。」そういつてジェラルドはクリスタル製のグラスを少し持ち上げる。

「ええ、では、今日の良き日に・・・」そういつてリディアも杯を掲げた。

互いの入り乱れる想いを胸に夕餉の時は幕を開けた。

18話：晚餐の終焉

暫くの間、沈黙の空気が流れる中で二人は黙々と出される食事を口にしていたが、最初に口火を切ったのはジェラルドだった。「僕に何か聞きたい事があるんじゃないのかい、リディア・・・？」

湯気のたったミディアムレアの子牛のフィレ肉を切りながらリディアが答える。

「そうですわね・・・、率直に申し上げると、ユフテスの王子の事ですわ。確か、御学友でいらっしゃられるのでしたわね、カイル王子と。」

「そうだね。君もご存知の通り・・・？」にやつと笑う。

「もつとはつきり言ったらどうだい？君らしくないね、リディア。本当に知りたいのはカイルの事・・・いや、塔に囚われの王子様の事かな？」

肉を切っていたリディアの手が止まる。眼を上げたそこには挑む様な青い光があつた。肩を軽くすくめるとジェラルドが続ける。

「知らない訳ないだろう？君が幼い頃からあれだけ執着している王子の事だ。」

リディアはジェラルドの青い瞳を見据えながら言った。「ジェラルド・・・兄様は、どこまでお知りになつているのですか？」

「・・・久しぶりだね、そう呼ばれるのも。リディア・・・そろそろお互いのカードを見せ合つても良いのではないかい？君は、こういった事には向いていないよ、僕と違つてね。」

リディアはゆっくりと息を吐き出すとクスリと笑つて言った。

「昔から兄様に隠し事はできませんでしたものね。兄様は、私の味方・・・だと思つても良いのかしら？」

「さあ、どうだろうね……。だが僕は昔と変わらず君の事を第一に考えている事は事実だよ。それが味方かどうかと聞かれれば分からないが。僕を信用するかどうかは、君の判断しただよ、リディア。」ジェラルドは答えていった。

リディアは意を決意した様に少しずつ、自分がユフテス王家の内情について調べた事や手に入れた謎の本の事についてジェラルドに話した。

「ーなるほど、その本については興味があるな。ふむ。では僕の方も手を明かそう。君が調べた一通りの事柄については、大体こちらでも承知している。それとは別に僕個人で調べていた内容だが、

・
ジェラルドは淡々と今日仕入れたばかりの情報をリディアに分かち合った。

「では、そのキルケという者がその本の解説をしているのですね？」ユフテスに関わる2冊の本、それにはいったいどんな秘密が隠されているのか、リディアは逸る心を押さえつつ言った。「兄様、3日後に私も連れて行ってもらえますか？私も知りたい……。その本に一体何が書かれているのか。もし少しでも手がかりがあるのなら、

・
」

ジェラルドは黙って頷いた。ここまでの流れは予想範囲内だ。掴めないのはやはり、最近のカイルの動向か。奴はいったい何をしようとしているんだ？

「わかった、一緒に連れて行こう……。キルケは……。時間にはうるさい奴だから遅れるなよ？」自分の事は棚に上げてリディアに釘を刺す。

3日後・・・ユフテスに行くまで新たな手がかりが見つかるのだろうか・・・、そして晩餐の夜は深く静かに更けていった。

18話：晚餐の終焉（後書き）

とりあえず、一旦リディアとジェラルドの腹の探り合いは終了です。
次回からは一路ユフテスの動きと内情の方に話は移って行きます。

カイル王子の狙いは何なんでしょうね・・・

19話：ユフテス王城

――ユフテス王城――

時は遡って1ヶ月前カイルは王族18歳の成人の儀式の為、国へと帰ってきていた。

「お兄ちゃま、お帰りなしゃい！」最初に出迎えたのは、母の違う年の離れた異母姉妹だった。

腕に飛び込んできた妹を優しく抱きとめる。「やあ、ルーシエル、しばらく見ないうちに大きくなったね。」ルーシエルはユフテス王の第二則妃が生んだ末の妹姫で、カイルもこの年の離れた異母姉妹を可愛がっていた。

「おにいちゃま、あのね、ルーシエル、最近ちゃんと読み書き出来る様になったんだよ！おにいちゃまも今度見に来て？！」ルーシエルはカイルに抱きついたまま離れずにこの半年の“ご報告”をしてくれる。カイルは苦笑しながらもルーシエルの柔らかい髪をなぜていた。

「ルーシエル様、カイル様は遠路はるばる帰ってこられたばかりでお疲れですよ。さあ、このばあやと一緒に部屋へ戻りましょう？カイル様には日を改めてゆつくりとお会いなされませ。」ルーシエルつきの乳母が言い聞かせる様に彼女の小さな手を引っ張った。名残惜しそうに何度も手を振りながら幼い異母姉妹が乳母やに連れられて部屋に戻って行くと、王の側近であるジュダがやってきた。「お帰りなさいませ、カイル殿下。早速で申し訳無いですが、王がお待ちしています。どうぞこちらへ・・・。」カイルはすつと顔を強ばらせると、小さく頷いてジュダについて王の間へと向かった。

「カイル、戻ったか。さあ、こちらに来て顔を見せてくれ・・・。
「玉座に座る年老いた顔のユフテス王がカイルを手招く。その横には、カイルの生母であるイネスタ妃が王に寄り添う様に座っている。王妃の目には薄く涙が浮かんでいた。

「父上、母上、只今戻りました。」そういつて、カイルは臣下の礼を取り、王の足下に跪く。

「形式的な礼は良い・・・リザルでの其方の高評価、こちらまで届いておる。優秀な跡継ぎをもって僕は鼻が高い、のうアンドレアよ？」王妃もカイルを見ながら頷く。

「もつたいないお言葉にございます。」そこでカイルは目を上げて王と王妃に顔を向けた。

「本当に大きくなったものだ・・・。お前もあと1ヶ月後には成人の儀を迎え、僕の跡継ぎとして広めがなされる。それから・・・だが・・・。」そして王はそこでちょっと間を置いて深くうめくと続けて言った。

「お前の誕生日と合わせて、竜の儀式を行う事と相成った・・・。」びくつとカイルはその体をふるわせた。

「父上・・・それは生け贄の儀式の事にございますか？ですが今はまだっ・・・！」カイルの悲痛な叫びを切る様に王が告げる。「予言の花が咲いたのだ・・・。もうすぐあれが、伝説の竜が目覚める時が近い。塔の周辺には警護を増やしておいた。カイルよ、お前も覚悟を決めてくれ・・・。」王妃は袖で自分の目元を覆い隠し嗚咽している。

「私に・・・もう一度、血を分けた弟を見殺しにせよと仰るのです・・・か・・・？」小さく自身を呪うかのようにカイルは呟く。ぎりつと噛み締めた唇から一滴の血が滴り落ちた。

20話：眠れない夜

重い足取りで自分の部屋へと戻ったカイルは、室内を見回す。半年間、帰っていなかった割には埃ひとつ無く、綺麗に整頓なされている。カイルが帰ってくるのに合わせて、メイド達が掃除をしたのだろうか。中に入るとカイルは口元を引き締めたまま、室内から続く隣の部屋の鍵を開けた。そこは、小さな小部屋だったが、中央には立派なマホガニーの書斎机が置いてあり、部屋の中には所狭しと本が積み上げられていた。

書斎机の一番上の鍵のかかっている引き出しを、また小さな鍵で開く。そこには、“ユフテス創世記”と書かれた一冊の古い本が入っていた。

本を取り出し、暫くの間表紙をじっと見つめる。窓から穏やかな月の光がカイルの姿を照らしていた。「満月・あと一ヶ月か・・・」その顔が苦悩に歪む。窓の外を見やると同じく月の光に照らされた塔がひっそりと佇んでいるのが見えた。あの塔は・・・僕たちの罪の象徴だ。

カイルはどんっと、拳を机に叩き付けた。「神は僕に罰を与えようとしているのか・・・？あの時、弟を見捨てた僕にもう一度同じ、いやそれ以上の苦しみを得よ・・・否、何のために今まで僕は・・・くそっ、まだだ、まだ時間はある。この一月以内にきつと・・・」

不意にカイルの脳裏に親友のジェラルドと、もう一人、幼い頃に出会ったアステールの姫の顔が浮かんだ。そうだ、彼らが居る。あの二人が以前からこのユフテスに密偵を送り込んできているのは知っていた。8年前、この国を訪れ、僕の魂の片割れと出会ったりデИАーナ王女、そしてジェラルドも・・・彼が何の目的でユフテスの

内情を調べているのか定かではないが、きっとあの王女に関係しての事だろう・・・。

彼らは使える・・・だがこの事は内密に慎重に進めなくてはならない。カイルは頭の中で考えられる得策のうち様々な事柄や条件を推察、整理していく。彼らは自分の18歳の儀式に正式に招待されている。式典の1週間前には、諸国からの使者や諸侯達が続々と集まってくるだろう。その頃になると自分も動きが取りにくくなる。

「もう少し、情報が必要だな・・・」そう言つと羽ペンを暫くインクに浸し、何やらしたため始めた。そして一息ついて、自分の書いた物をもう一度注意深く読み返すと、鍵のかかる上段の引き出しにそれをしまい込む。

そして、机に出したままの1冊の本を手に取り、ゆつくりと開いた。――ユフテス創世記――全てはここから始まったのだ。

21話：ユフテス創世記

――――ユフテス 創世紀――――

大地は悪意と混沌に満ちていた。

人は己の欲望の赴くままに大地を穢し、殺戮と暴虐の限りを尽くしていた。

その地に住まう一人の娘があつた。太陽の恵みを受けた金の髪に森の翠をその瞳に映し出した少女はその混沌の地にあつて尚、稀に見る直ぐで純粋な魂をもつ乙女だった。早くに両親を無くし、その地に生きる力なき者すべての未来を憂いた娘は、この地に静寂と安定を願い、伝説の竜が住まうという聖地トレムの山に己の身一つで旅立った。

長い旅路の中で靴はすり切れぼろ着を纏った娘は345日の放浪の末、トレムの頂きに立った。

娘は頂きの上から力の限りを尽くし、声を張り上げて呼ばわった。

暫くの静寂の後、地を轟かす様な轟音と共に空が隠された。娘はおびえる事なく、目前に降り立った一匹の竜と対峙した。

――人の娘よ。ここは竜の住まう聖地。人間ごときが立ち入れる場所ではない。いったいどのような用件にてこの地を穢しに来た・・・？返答しだいではお前をこのまま頭から食らおうぞ――

頭の中に直接鳴り響く様な声が聞こえて来る。娘は竜の金色に光る瞳を見つめると静かに答えた。

「伝説の竜よ・・・私はここから東の地に住まう者です。貴方の仰せの通り、私たち人間は、欲望の限りを尽くし大地を穢しています。私たち人は、弱く、また善悪を知りません。どうか私たち人間に貴方の英知と知識を教えてくださいただけないでしょうか？そうすれば、私たちは争いをせず、地に平和と安寧をもたらす事ができるのでは無いでしょうか・・・」

竜は答えて言った。

「我を見てもおびえる事もなく、またたじろぎもしない其方の心は清く美しい。だが、地上に居る者立ちはどうだ？意味のない殺戮を繰り返し、持たないものから奪い、我が愛したこの世界を混沌の闇へと変えて行く。一度失ったものはもう二度とは戻らないというのに――」

娘は竜に問うた。

「では、貴方が王となり、地上に秩序をもたらせては貰えませぬか・・・？貴方様はそれがお出来になるのではありませんか？」

白き竜はその金の瞳を細め娘の目前に近づいて言った。

「人の娘よ、我にこの聖地を離れ、あの粗暴な者達の王となれと申すか・・・？面白い事を言う・・・。よしんば我がその願いを叶えた所でいったい我に何の得があるう？人は己の欲望のままに滅びて行くのが自然の摂理であろう？それに私たち竜の一族は地上で長らえるのに適した種では無い。聖地に住まう竜ならば、1万年、2万年の時を生きよう、だがあのように数千、数万もの血で汚れた地では私の命も塵に等しい。」

まあ、其方の様な美しい魂を持つ者を食らえば多少は長らえるであろうがな・・・。――

娘は目に涙を浮かべながら竜に願った。

「私の命で済むなら、貴方にお捧げ致します。どうか、私と共に来ては貰えませんか？」

竜は娘に言った。

「――我は其方が気に入った。出来れば食らいたくはない。それに我が其方を食らえば我は血の契約により、二度と聖地に帰る事はできない。――」

娘は絶句した。自分の命など幾らでも捧げる事はできる、だがそれによってこの気高い竜は聖地へと戻る事が出来なくなるのだ。娘の顔から血の気が引いて行く。

しばらく竜はそんな娘をじっと見つめて居たが言った。

「――分かった、娘よ。其方と契約しよう。我は其方と共に行き血と殺戮に満ちた地に秩序をとるもどそう――」

そして竜は娘との契約通りに、地へ降り立ち、人々に善悪の基準と秩序を教え、何年かの時を得てその土地には平和が訪れた。しかし、汚れた土地の気を何年も浴び続け、竜は次第にその力を衰えさせていった。ユフテスの初代女王にして祖となった娘は結婚し子を儲けた。

日に日に衰えて行く竜を目に娘は言った。

「どうか私を食べて下さい。日に日に、弱っていく貴方を見るのは堪えられません。私には貴方をこの地に連れてきてしまった責任があります。どうか、私をお喰らい下さいませ……」

だが、竜は決して娘を食べようとはしなかった。何日もこのやり取りが成された後、娘は剣を取り、自分の胸を突き刺して果てた。

「あなた・・・一人を、行かせる訳には参りません。どうか私の・・・この軀を食べて一日でも長らえて下さいます様・・・」

竜は冷たくなった娘の軀を喰らい、3日3晩咆哮を続けた。――

22話：ユフテス創世記2

娘を喰らった竜はその後王宮に残り、娘の生んだ子供達の幾世代かが王になる毎に民を導いて行くための知恵と知識を授けた。またその偉大な魔力を使い少しずつ地を浄化し、またその地で豊かな実りができるよう尽くした。その竜の噂は諸国の噂となっていた。

国は繁栄して行くがそれと反比例して竜の心は病んで行く。千年ほどの時が立った頃だろうか。竜の体はまた弱り始めていた。偶然なのか・・・その時期と比例して、王家には始祖の娘が持っていたのと同じ美しい魂をもった者が生まれていた。竜の力が弱まると同時にその国に危機が起った。未曾有の大飢饉だった。

竜の持つ力と知識を失う訳にはいかないと、王は大切な生け贄を高い塔の上に幽閉し、何も知らされないその子供が成人になる前に、竜に生け贄としてその身を喰らわせた。それから、王家には何代か事に、生け贄の魂をもつ者が生まれ、竜にそれらの子を喰わせ竜を長らえさせてきたのだ。贄の者はある者は恐怖故に発狂し、ある者は生きた屍のようになっていた。

そしてまた何百年かの時が流れ、4代目の美しい魂を持った子供が生まれた。

その子は幼い頃から聡明で美しく賢い子供だった。またその子は生まれながらにして大きな魔力と魔術の才能を持ち、その才能を開花させていった。

その頃弱った竜は人前に姿を見せる事もなく、長い間城の地下にてうずくまっていた。竜は生け贄の魂をもつものを喰らう事で延命こそはしてきたが、その心は徐々に荒み歪んでいった。

その時代の王であったモルデバインは、聡明な王子を塔に幽閉する

ことなく、だが、王家と竜が築いてきた国の事を幼い王子に言い聞かせた。

王子は言った。

「では、その竜は今も城の地下で眠っているのですか？なんだか可哀想です・・・。」幼い王子の瞳から涙が溢れていた。

王子は成人し、王家の宝と秘密が眠る地下へ行く事を許可され、白き竜と対面した。

竜はうずくまっただまま薄く目を開くとその王子を見た。

「お前の魂はあの娘と同じ色をしている・・・お前が今度の生け贄か・・・？我は、もう人を喰らってこの浅ましい体を長らさせたくはない。娘との契約故、王家に生まれる者を我は守護してきたが、我は・・・」王子の脳裏に竜の声が響いた。

王子はゆっくりと口を開き、竜に向かって言った。

「伝説の白き竜よ・・・あなたの御身は私たち人の宝です。私たちの勝手な願いだと分かっていると思いますが、貴方を失うという事はこの世にあるどんな宝を失うより大きな事です。あなたの為なら私のこの命は惜しくはありません。ですが、貴方の心は私たちの身勝手な願いに苦しみ、荒んでいる。もし私を喰らったとて、そのお心はもっと深い闇に閉ざされるのでしょうか・・・。」

優しき竜よ、ならばあなたを一時の眠りにつかせましょう。私の魔力を持って貴方の心が少しでも癒される様・・・永き良き眠りを・・・。

王子はその魔力を使い竜を永い眠りへと誘った。

「この魔法が切れるのは千年の後、この花のつぼみが花開くまで・・・。」

23話：夜明け

「次にその花が花開くまで・・・か」カイルは呟いた。いつの間にか、夜が白々と明けていた。

夜が明けるまで、カイルは自分が幼かった頃の事を思い出していた。僕と彼は同じ母の胎内で時を過ごし生まれてきた。生け贄の魂を持つて生まれてくるといっても、他の子供となんら変わりはない。ただその証である背に刻まれた文様を除いて。

母は、生まれたばかりの弟の背を見て狂わんばかりに泣き叫んだそう。死ぬ事を初めから予期されて生まれた我が子。ユフテスに嫁ぐ者たちはすべて、その婚姻の前に誓いと共にユフテスの国を支える守護の竜の事を学ぶのだ。何千年に及ぶ歴史と共に・・・。

血を分けた弟に名が与えられなかったのは両親の弱さにもあった。いずれ生け贄として死んでしまう子供なら、最初から居なかった者と思えばいい・・・そう、生まれた子供は一人だったのだと。そして彼は王家からその名前ごと存在を抹殺された。彼は、その生け贄となるその日まで、塔の住人となり、幼い赤子を育てる為に年老いた老夫婦が雇われた。

初代女王である娘、名をユフティアと言ったか、彼女は、こんな現実を望んでいたのだろうか・・・昔はどうであれ、今の人々は宗教の象徴としてぐらいにしか竜を知らない。確かに数千年に及ぶ間、この国が竜の加護を受けてきたのは疑い用もない。様々な災厄やもめ事から竜はその身を削りながら守ってきたのだ。

だが、神殿の祭祀長や、国の重臣達が言う通り、永き眠りから目覚める竜をまた何百年もの間生きながらせる為に生け贄を捧げるのは

間違っている。竜をないがしろにしている訳ではない、だがどうしてもこの決定はカイルに取って受け入れられるものでは無かった。

――――
そう、あれは僕が7つの時、世話をしていた乳母がすっかりと隠されていた秘密を漏らした事がきっかけだった。それまで僕は自分に兄弟がいるとは知らずに育ってきた。父が箝口令をしいていたからだ。慌てて取り繕おうとした乳母から無理矢理その兄弟の事を聞き出した僕は城を抜け出して塔へと向かった。

その頃、僕たちが子供だった事もあるが、塔の警備はそれほど厳しくはなく、彼も一日に何度かは見張りの中で外へ出る事が可能だった。初めてであった僕の片割れ・・・僕と同じ顔をしたその男の子は僕をその深い翠の目で不思議そうに眺めた。

僕は嬉しくて、監視の目をすり抜けて彼を連れて城に帰ったのだ。その後、僕の取った浅はかな行動がどんな結末を生むのか考えもせず・・・

24話：後悔と傷

「カイル様！どこへ行っていていらしたのです！」居なくなったカイルをずっと探していたのであろう乳母と幾人かの従者達が駆け寄ってきた。

「カイル様！」乳母が息を飲む音がやけに大きく響いた。僕は連れ帰ってきた少年を前方に押しやり自慢げに言った。

「ほら見て！本当にばあやの言ってた通りだったよ。見て、この子、僕にそっくりなんだよ！僕の兄弟ってこの子の事なんでしょう？！」

彼はいきなり城に連れて来られ、沢山の人の前に出された事に戸惑いを憶えているようだった。その場の雰囲気を感じたのだろうが、少年が言った。「あの、僕・・・何かの間違いです。ごめんなさい。帰ります。」そう言って彼は繋いでいた手を振りほどき踵を返した。

「あ、まって！」僕はあわてて彼の服の袖を引っ張った。ぴりっと音を立てて破ける。それは王家の者が着るような服では到底なかった。

「ご、ごめん・・・でも代わりに幾らでも僕のお洋服をあげるから帰らないで！」

その時だった。僕の背から父の咎める様な声が耳に入ったのは・・・何をしている、何の騒ぎだ！」父上の声に僕はびくつと体を震わせた。少年も驚いたように目を見張って父上を見ていた。

「お前は・・・」父上は少年を見て明らかに驚いた様子で、そしてきつい目で僕を睨んだ。「カイル・・・お前が連れてきたのか・・・？」
「は、はい。あの、でも、父上、彼は僕の・・・」父様は一瞬悲しげな顔をしたが、すぐに僕を引き離し、兵に連れて行くように命じた。

「まっつて、まっつて父上、その子は悪くないんです。僕が！」兵に連れられて離れて行く時に見た彼の脅えた顔を今でも忘れられない。

父は僕に何も言わなかった。何度か彼の事を聞こうとしたが、父はそれをお許しにはならなかった。また僕に、彼の事を告げた乳母は解雇され、二度と合う事は叶わなかった。僕は間違った事をしたのだろうか？風の噂で塔の事を耳にした。警護が増やされ、外に出る事すら叶わなくなった弟の事を……。自分に何の力も無い事がこれほど悔しかった事はない。

どんな事情であれ、弟を見捨てた両親と何も出来ない自分自身が許せなかった。

――――

明け方、カイルは暫くの仮眠を取ると、起きて窓の外を見やる。そうだ、僕にはやらなくては行けない事がある。カイルは呼び鈴をならすとメイドを呼んで朝食を運ばせた。眠気が冷める濃いコカの茶を飲み、パンを飲み込むように詰め込むと、城の魔術師長であるグレインを呼ぶように命じた。まずは一つずつ布石を張って行かなければならない。優秀な駒はいくつあっても足りないという事は無いのだ……。カイルは不敵な笑みを浮かべた。

ユフテスに変革が訪れようとしていた。

24話：後悔と傷（後書き）

いやあ・・・ほんとに癖のある王子ばかりになってきてしまった
様な気がします・・・まあ皆さんそれぞれ理由を抱えてるんです。
。さて、次回からは、またアステールのほうに戻ります。行ったり
来たりと忙しいですが・・・。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記1

「ルーク少年のご主人様観察日記1」

僕のお使いするご主人様は彼の大帝国アステールと肩を並べる隣国エストラーダの第二王子ジェラルド様だ。

僕は元々エストラーダの上級貴族の次男坊で、同じく次男でいらっしやられる王子の身の回りのお世話、兼従者としてのお話を頂き城へ上がる事となった。

文武両道、特に剣の腕では勝る者無しと誉れ高いジェラルド殿下の従者になれるなんて僕はなんて運が良いんだ！期待に胸を膨らませ逸る心を押さえつつ用意をする僕を横目に兄が言った。

「ルーク、お前さ・あのジェラルド殿下の従者になったんだっただよな・・・？」

「うわっ！兄さん、いつからそこに居たんですか？！」部屋の扉に身を預けてこちらを見ている兄がいた。ヤバイ・・・鼻歌を歌っていたのも聞かれたんだろうか・・・汗）

「は、はい。そうです。明日からジェラルド殿下について城の務めになります！」とニコニコした顔を尊敬する兄へ向ける。兄は、ジェラルド殿下の上の兄上でこの国の王位継承者であられるパトリック殿下の近衛を務められている。パトリック殿下は御年24歳になられ、最近大陸西方の国、パンディッタからお美しい姫君を妃として迎えられた。殿下は温厚で人望厚く、この国も益々安泰だ。

「そ、そうか・・・まあ、ルーク、これは兄としての忠告だが・・・あまり過度な期待はするな？後で凹む事になるぞ？」

ルークはきよとした顔で兄を見つめる。「ああ、そうか！僕が舞い上がりすぎているから、ジェラルド殿下の前で何か失態を犯さないか心配してくれてるんですね、兄さん、大丈夫です。僕はもう12歳です。しっかりとお務めを果たすので心配なさらないで下さい！」

そういうと、兄は暫くの間頭を抱えていたが、ほうつとため息をつくと、「そういう意味ではなく・・・」と何か小さくぶつぶつと呟いていたが、その大きな手で僕の頭をくしゃりと撫でると、何かあれば、僕を頼つてきなさいといって出かけられた。同僚達と一緒に飲みに行かれるそうだ。

でも何か・・・ってなんだろう？兄の仰られる事はたまに理解ができない。ともかく明日から僕はジェラルド殿下の従者になるのだ。明日は早起きして頑張るぞ！と僕は早々にベットに入った。明日から輝ける従者生活の第一歩だ！

次の日の朝、朝食を住ませると父が僕を城に連れて行った。幾人かの方々に御挨拶をして、父と別れ、僕はメイド長の後についてジェラルド様のお部屋に向かった。

どうしよう・・・胸がどきどきする。大理石の長い廊下を右へ左へと歩き回り、ようやく殿下の部屋の前にたどり着く。もう自分が通ってきた道さえ憶えていない。これは、迷子になるかもしれない。

メイド長が扉をノックする。「ジェラルド殿下、新しい従者を連れて参りました。」うわあ！いいいよだ、どうしよう。内側から扉が開かれた。アレ・・・？殿下ともう一人？

中から勢いよく誰かが飛び出してきた。なんだか真っ赤な顔をしている。何かあったんだろうか？「失礼しますっ・・・」そういつて

彼女は乱れた襟元を直しつつ去って行った。

メイド長が呆れた様子で殿下を睨まれた。「またですか・・・？あれほど城内の者に手を出さないで下さいと再三申し上げた筈ですが・・・」声が絶対零度の氷のように冷やかだ。

奥にある大きなベットからくすくす笑いが聞こえた。「そんな怖い顔しないでくれ、別に取って食おうとした訳じゃない。」ベットの
上には蜂蜜色の髪をすくいあげ、こちらを凝視する二つの青い宝石の様な双眸があった。この方がジェラルド殿下・・・？

上質の絹で出来た部屋着を身にまとって殿下はこちらに歩いて来られる。「その子が僕の新しい従者？」その美しい瞳に少しの間見惚れていた僕ははっとして身を固くする。

「は、はい、そうです。僕はキュレット公爵家の二男、ルークと申します。今年１２歳になります。今日からよろしくお願い致します。」ぺこりと頭を下げる。

「ふん・・・キュレットって、もしかなくても、ロバートの弟・・・？」兄を知っていらっしやるのだろうか？うれしくなって僕は答える。「はい、ロバートは僕の兄です。」と殿下はその顔をゆっくりと僕に近づけてにやっと口の端を上げて言った。

「そうか・・・宜しくね・・・？ルーク」背中にゾワッと悪寒が走ったのは気のせいに違いない。

25話：キルケの災難1

ジェラルドと別れた次の日、キルケは例の本を持って魔術師ギルドを訪れていた。ここは世界各地から訪れた魔術師達が、魔法具、薬や希少な魔法石、薬草などを取引したり情報をやり取りするアステール国内最大の会堂だ。その為毎日沢山の魔術師、商人などが出入りしている。

「あらあ。キルケちゃん、お久しぶり〜」会堂に入ろうとすると後ろからやたらと声の高い声が響いた。振り向くとおかつぱ頭にピンクのベレー帽をかぶり、やたらと派手な薔薇の刺繍を施した上着を纏う筋肉隆々の男が嬉々としてキルケに近寄ってきた。キルケはその猫のような目を細めるとおもいきり顔をしかめて呟いた。「ゲツ・・ジークフォルン！」

ジークフォルンはキルケと同じくある意味に置いて裏社会では知る人ぞ知る人物だった。幅広い商いをしており、普通では手に入らない禁忌とされる魔道具や稀少生物などを扱っているオカマだ。遭いたくない奴にあってしまった・・。何故かキルケはこの筋肉質のオカマに“私の子猫ちゃん”と呼ばれ猫可愛がりされているのだ。

「うっん、もう！キルケちゃんったら相変わらず可愛いのね〜ん。ほらっ、そのいけてないフード取ってアタシにそのぷりち〜なお顔を見せて頂戴？あ〜ん、もうこのぷりっぷり！」

すぐに逃げようと思ったが小柄なキルケはすぐにジークフォルンの胸に抱きしめられ身動きが取れなくなってしまった。「は、離せ！」真っ赤になつてキルケはもがくが、もがけばもがく程、ジークフォルンの分厚い胸の中にすっぽりと収まって行く。

「だ、大体お前、こんなところで何してるんだ！」キルケが怒った

ようにむくれる。

「なんでって・・・そりゃあ商売だわよ。素敵な殿方をメロツメ口にさせる秘薬を売って欲しいって常連のお客さんに頼まれて、今届けてきた所なの。キルケちゃんこそ、魔術師ギルドに何の御用？珍しいじゃない？こんな所まで出かけてくるなんて。」

キルケはうざそうに答える。「私的な用事だ・・・。ともかく離せ！ジークフォルン」

「ああん、もう、つれないんだから。でもそう言う所もス・テ・キ！」ぶちゅつとキルケの額にキスを落とすとしぶしぶジークフォルンはキルケを抱きおろした。「何するんだ、お前は！」キルケの額には真っ赤な口紅がついている。ローブの端でごしごしとこすると、キルケはさっさと逃げ出す事に決めた。「ともかく、今はお前に付き合ってる暇はないんだ、それじゃあ・・・な・・・。」というときルケは足早に会堂の中に入って行った。

「あ、待つてよーキルケちゃん！」追いかけようとしたジークフォルンだったが、彼の胸から何かが、がさつと音を立てて落ちた。

「あら・・・何かしらこれ・・・？なんだか古い本ね？魔石が何個かついてる所を見ると魔道書かしら。さっき抱っこした時に落っこちたのね。フフ・・・なんか強い力を感じるわ、この本。これってずっとキルケちゃんが持っていたものよね？あーん、だとしたらきつとキルケちゃん、この本を取りにもどって来るわね・・・うふふ。」不気味な笑いを残して、ジークフォルンは本を大事そうに包み込むとその場を去って行った。

26話：キルケの災難2

キルケは会堂の中でいくつかの魔道具を買いそろえると、目当てのブースに向かって歩いて行く。昨日ジェラルドと別れた後、鳥を使つて連絡しておいたのだが、もう来ているはずだ。ユフテス王城から手に入れてきた本は幾つかの魔法が複雑に組み合わさっており、それを解くには、キルケといえども、そう簡単に行く訳ではなかった。それで、彼は解呪に詳しい友人の助けを借りる事にしたのだ。

「よう、キルケ、ここだ。」解呪専門の呪術師であるゾーグがキルケを待っていた。ゾーグとは長い付き合いだが信頼の置ける良い男だった。

「悪いな、急に頼んでしまつて。」

「いいつてことよ。俺も丁度良い腕試しになるしな。それで、例の本は？」

「ああ、ここに・・・」キルケは懷をまさぐる。おかしい・・・確かにここに入れていた筈だ。何故無いんだ？！キルケの顔が真っ青になる。落とした？まさかそんな筈は・・・

「おい・・・どうしたんだ、キルケ、大丈夫か？」

「無い・・・、本が無いんだ。」失態もいい所だ。キルケの表情は暗い。

「はあ？？忘れたのか、それとも落としたのか・・・？」

「いや、家を出た時はちゃんと・・・あつ、まさかあの時か？！」

さつきジークフオルンにあつて抱き上げられた時に落とした・・・？

キルケは急いで会堂の外に出た。居ない。辺りを見回したが、本も落ちてはいない。が、その時オウムが木の上からばさつと音を立ててキルケの肩に舞い降りた。このオウムは！

「キルケ・・・マッテル・・・ホン アズカッタ・・・ジーク マッテ

ル・・・オカノ イエ」

「やっぱりあいつか・・・」チツとキルケは舌打ちする。くそ、時間があまりないのに厄介な事になったな。

ゾーグがやってきた。「アレ・・・そのオウムもしかしてジークフォルンとこのか？」

「そうだ」短く答える。

「あいつ、お前んことマジで気に入ってるからな・・・ん？なんだ、本はジークフォルンが持ってるのか？」

「持ってる・・・というよりさっきあった時に落としたのを持って帰りやがった。」フードをかぶってうつむくキルケの顔はよく見えないが、機嫌は最悪に悪そうだ。声に殺気がこもっている。「で、どうするんだ？」ジークは問う。

「行つて取り返してくる。悪いな、ジーク、本を取り戻し次第連絡する。」そういうとキルケは不機嫌そうに言いながら地面に魔法陣を描き出した。魔術師たるものどこでも魔法が使えるように、万全の用意はしておく物だ。

「おい！場所は知ってるのか？」

「・・・以前クスリを盛られて拉致られた事がある・・・。」そう低く呟くと、キルケは呪文を詠唱しだした。うむ・・・なんというか、可哀想な事を聞いてしまった・・・。ジークフォルンの趣味はいやという程している。きつとあーんな事やこーんな事をされたのだろう・・・。キルケはジークフォルンの趣味をいたく満足させる素材らしい。

移転の術を使うのか・・・どうやら本当に焦ってるみたいだな。そうこうしている間にキルケの姿はその場所から消え去った。やれやれ・・・なんととも無けりゃいいが・・・。

27話：キルケの災難3

突如、魔法陣が光だし中からキルケが飛び出すと同時に消える。アステール城下街郊外の小高い丘の上に趣味の悪い屋敷が建っている。いつ見ても趣味が悪いとキルケは思う。つんと空に向けて尖る円錐状の屋根はピンク色に塗られ、まるで子供のオモチャの城を実物化したようなシロモノだ。金があるなら、もう少しマシなものを建てれば良いと思うがジークフォルンにそんな事を言っても話にならない。

屋敷の中ではジークフォルンが水晶玉を見ながらワイン片手に悦に入っていた。「ウフフフフ・来たわね・私の可愛い子猫ちゃん。いつも屋敷に遊びに来てって言うてるのに、いやもとい・一緒に住んで欲しいくらいだけど・いつもつれないんだもの・。やっぱり一度クスリを盛ったのが行けなかったかしらね？あれからやけに用心するようになったちゃうんだもの・。

でもせっかく可愛いキルケちゃんの為にいっぱい新作のお洋服を用意してるんですもの。あれも、これも着てもらわないと・。」「ジークフォルンの頭の中は着ぐるみを着た可愛いキルケの姿でいっぱいだ。やっぱり猫耳は絶対外せないわよね・。ああ、でもリボンも捨てがたい・。不毛な妄想で頭を一杯にしてると突如ドッカーンとすごい音が響き、部屋が揺れた。

「あら、いやだ、キルケちゃんったら、そんな物騒な魔法つかわなかつたって、貴方の為に私の心はいつでもオープン・ハートなのに。」
「水晶玉を見つため息をつく。」

「これ以上屋敷を破壊される前に出て行った方がよさそうね。」
「語尾にいくつものハートマークを付けながらランランとしてジークフ

オルンはキルケを迎えに行く。

「くっそ、あいつどこに居やがる・・・」キルケはそこらにある物に当たりながら破壊行動を繰り返している。

「キッルケちゃん。あたくしはここよ。あなたのジークフォオルンはここにいるわ。」そういつて階段の上からジークフォオルンがキルケ目指して飛び降りてくる。ドスンと音を立てて着地するとジークフォオルンはキルケをあつという間に引き寄せ、頬ずりして来た。ヒゲの跡が痛い・・・。

キルケはジークフォオルンを睨みつけると言った。「お前が本を持って帰ったんだろう、返せ！」ジークフォオルンはにやつと笑って答える。「いやだわ、キルケちゃん、あたしは“親切に”落とし物を拾っただけよ。」せつかくキルケちゃんに連絡してあげたんだもの、拾い主には、何かご褒美があつたっていい筈よねえ・・・？」

キルケの瞳に殺気が籠る。「何が望みだ・・・」

「いやだわ、キルケちゃん、そんな怖い顔をしちゃ、せつかくの可愛い顔が台無しよ。そんな難しい事じゃないのよ？今日一日、新作のお洋服を着て、あたくしの目を楽しませてくれたら良いだけ。簡単なコトでしょう？キルケちゃんの大好きなお料理だっていっぱい用意してあるのよ。うふふふ。」

キルケは忌々しそうに言う。「分かった・・・ただし今日1日だけだ。もう金輪際お前の趣味に付き合うつもりはないからな！」

まあ、先の事はまた、キルケを籠絡する手はいくつも考えてある。ジークフォオルンにはやけた笑いを噛み締めながら言った。「もちろんですよ、キルケちゃん。本は大切に保管してあるわ。さあ、こつちに来て！もう、キルケちゃんの為に特別に用意してあるんだから！」そういつてジークフォオルンは、あらがうのも疲れた様子のキル

ケを引っ張っていった。

28話：母の教え

キルケがジークフォールの屋敷で強制的にコスプレをさせられている頃、リディアは自室で考え事をしていた。

明後日にジェラルドと共にキルケという者に会う。新しい手がかりに期待が湧く一方、小さな不安の種がリディアの心の奥底に刺さっていた。まさか、こういう形でジェラルドが自分に手を貸してくれるなどとは数日前は露にも思っては居なかった。だが、ジェラルドの行動にはリディアと違った意思がある。リディアは薄々と感じ取っていた。彼が決して塔の中の住人に良い感情を持っている訳ではないと・・・。

だから昨晚、ジェラルドと話し合った時、リディアは全てをジェラルドに打ち明けた訳ではなかった。実はもう一つ、大切な話を話さないでいたのだ。彼女が最近手に入れた情報の中で気になる話の一つであった。ユフテス近郊に位置する大国グランデイス。この国は元は小さな独立国だったのが、ここ数十年で勢力を伸ばし幾つかの国々を併合し大国へとの上がってきた国だった。グランデイスは騎馬民族が祖となっており、その国の国教はイドリス教、つまり聖獣であり、強さの象徴でもある竜を祀っている国だ。

その国で、最近不穏な動きがあった。リディア達と同じく幾人かの優秀な間者を雇い入れ、ユフテスの内情を調べている様なのだ。その国は以前から知恵と知識の恩恵、強護な国の守りを得られるという竜を探しているという噂があったのだが、それが真かどうかは定かではない。

実際に竜を目撃したとの確かな記録が残っているのは500年も昔の話だ。太古の昔、竜は幾度か人の前に姿を表し、気まぐれに人に

知恵を授け、また交流したとされるがそれらの竜が地上に長く留まる事はなく、暫くの時の後、その巨大な翼をはためかせて聖地へと帰って行ったという。

人々の記憶からも忘れ去られて等しい竜の存在・ユフテスには確かにその竜と深い関わりがあり存在を意識させる要素が多くある。グランデイスの狙いは何だろう・・・？彼らはユフテスの抱える秘密に足を踏み入れようとしている。彼らもまた何かを知っているのだろうか・・・？

アステールを出るまで後4日、リディアは立ち上がって大きく息を吸い込んだ。何がどうあれ、今は自分に出来る事を精一杯やるだけだ。私の望みはただ一つ、囚われの王子を救出すること。あの少年がユフテスの秘密に深く関わっている事はまぎれもない事実だ。彼を助ける事によって発生するであろう幾つもの問題は用意な事ではない。

でも、私は諦めたくはない。私の一方的な我が侘に過ぎないという事は分かっている。父様や母様にも迷惑をかけてしまうだろうし、きっと彼は昔に出会った私の事なんて忘れているだろう。

それでも良い。彼が・・・あの翠の瞳を持つ少年がどこかで笑って幸せに暮らしてくれるなら、私は満足だ。そうやって今まで幾度となく考えてきた。

いつだったか、母様が私に言ってくれた事があった。「リディア、私たちの大切な子、貴方を生んで私はどんなに幸せな事か・・・私も父様もいつも貴方の事を考えてますよ。貴方がいつも幸せであらな事を願っています。貴方が考えて成そうとしている事は間違いでは無いかもしれませんが、それにはまた多くの犠牲と困難を引き起こすかもしれません。」

ですが、私は貴方の事を信じています。貴方は神々に愛された子、

きつと数多の困難をも乗り越えるでしょう。お父様がなさったように……。自分の道を信じて進みなさい。きつとその先には真実が待っています。私たちに出来る事は多くありませんが、それでも私は貴方への協力を惜しみません。父様は、貴方を愛するあまり、焦ってエストラーダの王子との婚姻を勧めたがっている様ですが・・（ここで母様はクスリと笑っていらした）あなたはじっくりとその目で見極めなさい。自分の将来を・・・。

母様も父様に出会うまで色々大変だったらしい。父様も男性不審の男嫌いだった母様を射止める為にさんざん苦労なさったと聞く。でも父様は苦難を乗り越えて母様をその手に勝ち取ったのだ。私も母様の言った通り、自分の未来は自分で切り開いて行く！

29話：不穏な影

「その情報は間違いないんだろうな？」

「はい、確かなことと存じます。間違いなく、ユフテスの王城には伝説の竜が眠っていると・・・」

「ふふ、そうか。それはそれは、きっと陛下もお喜びになることだろう、なあジルベスター。」

「さようでございますとも・・・、圧倒的な魔力を持ち、国を守護するという伝説の竜を必ずや手に入れましょうぞ・・・。」

「手はずは整っているのか？」

「優秀な魔術師と、兵の精鋭を取り揃えております。ユフテスの王子の成人の儀にまぎれて、竜を我が国に移転させ、魔術結界の中に閉じ込めます。」

「なるほど・・・面白い、楽しみになってきたな。早く・・・会いたいものだ、その伝説の白い竜とやらに・・・。」

約束の3日後、ジェラルドとリディアは連れ立って、キルケが待つという郊外の茶屋に出向いた。中にはいるとおやじが声をかけてくる。

「おう、ジェラルド、キルケならまだ来てねーぞ。ん？誰だ、その美人さんは？お前のコレか？」おやじはゲハゲハと笑いながら小指を立てる。

リディアは親しげな茶屋の主人とジェラルドの様子を驚いたように見ていたが、からかわれて、ほんのりと赤くなったジェラルドの頬を不思議なものを見るように見つめる。

（こんなジェラルドの様子、初めて見たわ。いつもはおちゃらけて人の事をからかってばかりなのに、あのジェラルドが他の人にかかわれているなんて・・・）

ジェラルドはごまかすように声を荒げて言う。

「うるせーな、おやじ、なんでもねーよ。それよりキルケが遅刻するなんて珍しいな・・・。あられでも降るんじゃないか？」

と、その時勢い良くドアが開かれた。驚いたように3人が目をやる。そこには、

『キルケ?!』 おやじとジェラルドの声が仲良くはもる。リディアは啞然として店の入り口に立っている子供に目をやる。子供・・・そう、どう見ても小さな子供だ。

年は9つか10歳ぐらいに見える。長い睫毛に縁取られた大きな目は金色だ。ちよつと癖のある薄い茶色の巻き毛は所々くるくるとおでこやほっぺにかかっている。小さな鼻と愛らしい赤い唇。そしてその子はピンクのリボンに蔓柄のフリフリのドレスを身にまとっている。

この女の子が・・・キルケ？

キルケは顔を真っ赤にしながら店内にずかずかと入ってくるとむくれた顔で、面々を睨みつけ、低い声で言った。「何だよ・・・。なんか文句あんのか？」

ジェラルドとおやじは明らかに動揺しているように見える。「キ、キルケ・・・お前・・・女?!」ジェラルドが言い終わるかどうかと同時にキルケがジェラルドのすねを蹴り上げた。

「いつてっ、っーか、お前どうしたんだよ。お前がいつも来てる口ーブ、厭、それよりも、その格好・・・。」どうやらジェラルドは混乱している様子だ。キルケは優秀な魔術師だと聞いていたが、こんな小さな女の子だとは思っていなかった。いや、魔術師は幾らでも

外見を変える事が可能だと聞くから実際はもつと年をくつっているのかも知れないが・・・。

キルケは下を向いて小さな声で呟く。「あいつにやられたんだ・・・。くそっ、ジークフォールの奴、今度あつたらぶつ殺す・・・」異様な殺気が漂っている。

望んでこの格好をしている訳では無いという事か・・・？似合っているのにもつたいたいとリディアは思う。ふわふわの巻き毛に美しい金の瞳。リディアは言葉も無くこの金色の子供を見つめていた。むくむくと欲が湧いてくる・・・欲しい！こんな妹・・・

キルケはふつと上を向き、照れくさそうに「遅れて・・・すまなかった。色々・・・とあつてくるのが遅れた。」と言った。

「あ、ああ・・・構わないが。」とジェラルド。

「ところで、そちらのお嬢さんは？」とキルケが下から上目使いでリディアを見つめる。ああ、どうしよう、すっごい可愛いんだけど。リディアもまだ16歳になったばかりで、可愛い物には目がない。そういう意味ではジークフォールと良い勝負だろう。

「可愛い！」そういうとリディアはキルケを抱きしめた。

30話：未来に託された日誌

「な、離せ！お前もジークフォールの仲間か？！」いきなりリディアに抱きつかれたキルケは声を荒げる。

「いや、リディアは俺の連れだ、細かい話は後ですが・・・、キルケ、お前・・・本当に女だったのか？」まだ興奮冷めやらぬ状態のジェラルドがおずおずと尋ねる。

「・・・一応、俺は生物学上の上ではメス・・・いや女として生まれたが、それが何か関係あるのか？」じろつとジェラルドを睨む。

「そういう訳じゃない・・・がお前の事はずっと男だと思ってたし・・・その口調だし・・・それに、いや、子供だとは思ってなかったから色々、まあ・・・」口を濁す。

「はあ？子供というが、言つとくが俺はお前の何倍もの年月を生きるぞ？別に性別は隠してた訳じゃないが、こちら・・・では、この方が色々と便利なんだな・・・」キルケの言葉に何かしら引っかけりを覚えたが、リディアはずっと立ち上がるとキルケに向かって手を差し出した。

「ごめんね、キルケちゃん、いきなり・・・すごく可愛らしかったものだから、つい・・・。私はリディアーナって言います。リディアって呼んでね。」

むすつとしたままのキルケだったが、リディアの白い手を握り返す。「キルケだ。言つとくがこの格好は今日限りだ！あいつが変な魔法さえ掛けなければ俺はこんな格好・・・」

「えゝ、もったいないよ。キルケちゃんすつごく可愛いのに！」ついリディアもいつもの王女らしからぬ口ぶりでキルケに接する。

キルケはリディアに絶賛されると、その小さな顔を赤くする。「そ・・・そんな事はどうでも良い。それよりも本の事だ。お前達、その事で来たんだろう？！」

リディアとジェラルドはお互いの顔を見合わせ、ぷつと笑い合う。そうだった・・・重要な事柄を話にきたはずなのに、予想だになかったキルケの愛らしさについて目的を忘れてしまっていた。3人は奥の部屋へと歩いて行き席についた。

「それで、本の解説はできたのか？」

「ああ、なんとか間に合った。」ジークフォルンのお陰で昨日は寝れなかったがな・・・。

「中身はもう読んだのか？」

「少しな・・・。中身はどうやらユフテス王族の日記・・・と彼が考案した魔術の構成が記されている。正直驚いた・・・。こんな魔術を人間が生み出す事が可能だとは。」キルケが答える。

「そんなにすごいのか？」ジェラルドは差し出された本をゆっくりと開いた。千年を得たとは思えぬほど素晴らしい状態である。どうやら魔法をかけた者が保護してあったのだろうか。

「・・・この日記を未来の子孫へと送る・・・」

この日記をしたためるのはこの私、ユリウス・ロイズ・エル・ユフテス、父モルデバイン王の息子であり、ユフテスを継承した代289代目の王である。

この国は始祖の時代より、美しく誉れ高い竜の護りの中にあり、他国と異なり、始祖の血を引くユフテスの王族、及び国とは長い間、竜の加護の中でその尊い知恵と知識を授かり繁栄をきわめて来た。私が生け贄の魂をもってこの世に生を受け、また過去に我らの先祖がしてきたように、竜にこの身を捧げる事を私は厭わなかったが、白き竜の抱える絶望とその深い闇を知った時、私はある事を決心した。私は生まれ持った魔力が通常よりもはるかに多く、様々な新しい魔術を生み出す事に力を注いだ。その一つが、彼の竜を永き眠りへと導いたものである。

だが、それも千年の時を得れば効力を失い、媒体として使った竜香草の蕾が花開く頃には彼もまた目を覚ますであろう。今までがそうであったように、その時代には彼を生かす為に生まれるであろう私と同じ生け贄の魂をもった者が出るに違いない。

私は生け贄の魂を持つ者について自分自身と始祖ユフティアについて詳しく調べ始めた。その結果解った事が幾つかある。もともと始祖が彼の竜に気に入られる程の美しい心を持っていたのは確かであるが、それ以上に彼女が持っていたものはその身に宿す大いなる力、純粋な魔力とも言うべきか。たまたま始祖ユフティアが特異な体質を持っていたのだろうか・いや、これも運命の一つだったのかもしれないが・彼女はそれ故に彼の竜を長らえさせるだけの力を持っていた。始祖以後に生まれる子供の中にも稀にそうやって力を蓄えた結晶のようなものを体の中に持つて生まれて来たものたちだった。

その力は子供から大人になる頃に一番大きな力を発揮する。私が彼の竜を眠らせた頃、もっとも大きな魔力が私の中で息づいており成人を迎えた頃から、人が年を取るようにその力も少しずつ力を失って行くようだった。

30話・未来に託された日誌（後書き）

今日から2週間ほど来客があるので更新が遅くなると思います。
いろいろ動きができました。

31話：希望のかけら

私は長い間考えていた。この国の行く末を……。いつまでもあの優しい竜に甘えている訳にはいかない。もともと始祖は、出来る事ならば竜をこの地に縛り付けるのではなく、聖地へと戻らせたかったのではないか……。だが、彼の竜は血の契約によりこの地を離れられない。いわば、一度聖地を離れてしまった竜はもう帰る事ができないのか？と私は竜が眠りにつく前、様々な質問を投げかけた事があった。

血の契約――それは不浄、聖地を離れた竜の行く末は我らの血肉を得ての生か死しかないのだろうか。それではあまりにも、悲しすぎる。幾度か訪れた我が友のもとで私は気になる事を聞いた。

聖地で気の長くなる様な年月を生きる竜。竜の出産率はとても低く、その為竜は何千年かに一度自分の体をもう一度文字通り甦生させるというのだ。始祖が本当に望んでいた事は、この白き竜をもう一度聖地へ返す事ではなかったか……。？竜の一族には人間とは違う掟があるとはいえ、甦生できるならば血の契約から解放され、竜の聖地へ戻る事が出来るのでは……。と私はこの考えに至った時、喜んだのだ。しかし、竜を千年もの間眠らす為に私は全ての魔力を使い果たしてしまった。今現在では、竜をもう一度甦生させるだけの魔力をもつ人間は皆無だ。

やはり私のように特殊な、そう贄になりうるほどの魔力をその身に宿したものでないと……。あの優しい竜を救いたい。彼を聖地へ戻して上げる事ができるならそれは、何千年もの間、苦しみの中で我らを見守ってくれた竜への恩返しになるだろう。だが私が今出来る事は、それを可能にする為の魔術式、そして次世代に生まれてくるであろう、生け贄の魂、それを可能にできるだけの魔力を持

つ子供の力を媒体にし、竜をもつ一度甦生させる方法を確立させる事。私は生涯をかけてこの事柄に取り組もう・・・。

半分ほど日記を読んだ私たち3人はしばらく言葉もなく1冊の本を見つめていた。まさかこんな事情がユフテスの王家に隠されていたとは……。リディアの頭の中でパズルのピースが嵌まって行くように謎が溶けて行く。だが、まだこれだけではない。ユリウスはきつとその生涯をかけて甦生させる為の方法を編み出し、次代の生け贄の魂をもつ子供が生まれるまで、この本を封印したのだろう。早く続きを読みたい。リディアは逸る心を押さえきれずにいた。

ジェラルドもまた明かされた事実には驚愕の色を隠せずにいた。伝説の竜・本当にそんなモノがユフテスに眠っていたとは・・・この事実はリディアと同じくユフテスの内情や歴史を調べてきたジェラルドは納得した。さほど大きくもなく、軍勢力や、資源を多く持たないユフテスがこれまで安穩としてこれた訳を。だが、最近カイルは積極的に様々な国とユフテスの優れた織物を使った交易をはじめていた。彼はこの事を知って準備を始めていたのだろうか？

ただ一人、キルケは他の二人とまったく違う事柄を考えていた。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記2

僕がジェラルド様付きの侍従となつて、1ヶ月が立ちました。

「ジェラルド様、おはようございます。」朝、僕はいつものように殿下をおこしに行きます。ジェラルド様は、夜更かしされる事が多いのか、朝はとても弱いらしく、僕が幾度となく声をかけてもなかなかお目覚めになれません。

「ジェラルド様！起きて下さい、今日はペイリユード候と午前中にお会いする予定ですよ！、もう10時近くです。お願いですから起きて下さい！」

だがジェラルド殿下はまったく起きる様子がありません。僕は、殿下をさすつて起こそうと大きな天蓋付きの寝台に近づきました。

起きていらつしやる時と、寝ておられるときのジェラルド様は雰囲気がとても違います。起きていらつしやる時ところと表情が変わられますが、寝ておられる時の殿下は僕が言うのもなんですが、それはそれは天使のようでございます。時々ですが、男の僕でさえどきどきしてしまうぐらいです。丁度、寝台の所まで来て殿下を起こそうと手を伸ばした途端、その手を強く引つ張られてベットに倒れ込んでしまいました。

僕はびっくりしてつい悲鳴を上げてしまいました。「ジェラルド様！お戯れは程々になさって下さい！」ジェラルド様は時々こういった悪戯をするのが好きなようで、そこはまだまだ子供なのでしょう。僕の反応もこの1ヶ月の間ジェラルド様の元で過ごすうち、メイド長と似てきたように感じて少し複雑です。

ジェラルド様は僕をベットに押し倒したまま、にっこりとそれは妖艶な微笑みで語りかけます。「おはよう・・・ルーク、今日も良い

天気だね。」

僕は一生懸命従者としての役目を果たそうと、必死になって殿下に言います。「あ、あの、離して下さい。ジェラルド様、早くお召し物をお着替えにならないとペイリユード侯爵がいらっしやいます。」殿下はゆっくりと僕の手を離すとつまらなさそうに仰られました。

「最近のルークは冷たいね・・最初の頃はもつと素直で可愛かったのに。」

それはそうです。一度ジェラルド様の巧みな話術や作戦にはまると僕は良いように翻弄されてしまい、従者としての仕事をこなす事ができなくなってしまうのですから。最近、なんととはなくと兄上が仰られた事が解る様な気がしてきました。それでも僕のお使えるジェラルド様はとてもとても素晴らしいお方なんです。

ベットから起き上がると殿下は髪をすくいあげ気だるそうに僕の用意したたらいの水をすくって顔をお洗いになられます。僕はすかさず、ふかふかのタオルを殿下に差し出しました。

「有難う、ルーク。ところで今日はペイリユード候との謁見だが・・、お前、俺の代わりに聞いてきてくれ。」

「・・・はい？」なんと仰られました・・今？

「今日は大事な用があるんだ、ペイリユード候の用件は大体のところ解っている。大丈夫、お前なら立派に俺の代わりを務める事ができるから。」

「え、あの、殿下、僕は・・。」訳がわからなくて僕は壊れた人形のようにしどろもどろと弁明をしますが、ジェラルド様はまったく聞く耳をもってくれません。

「こ、困ります」半なきになった僕一人を部屋に残し、ジェラルド殿下は颯爽とお部屋をでていかれました。僕、これからどうしたら良いのでしょうか・・・？

32話：遠い記憶

やっと・・・見つけたよ、アルファス・・・愛しくて死ぬ程憎らしい貴方・・・俺はお前を許さない、そう、俺との約束を破ったお前を・・・。

黄金色に輝く悠久の時、俺はお前と共に飛ぶのが好きだった。空を切り、山々の間を抜け、頂きに降り立つ白く美しい翼をもつお前に俺は憧れていた。至高の存在、聖地に住まう汚れなき白の王、誰が考えただろうか・・・そんなお前が我々を裏切り去って行くなどと・・・

我々は、種族の掟を固く守り、地に住まうもの達より遙かに長く悠久の時を過ごす我らが、一定以上他の種族とかかわり合う事を良しとせず、孤高の頂きから地に住まうもの達を見守ってきた。また地に住まうものも同じくある程度の距離をたちつつ、我らと接してきた。必要以上の接触は我らのみならず、他の種族にも善くも悪くも多大な影響を及ぼす。だからこそ、我らは聖地からほとんど出る事はなく一生を聖地で過ごすのだ。また、地上は我らにとって住みにくいところでもある。もともと出生率の高くない一族の中で久方ぶりに生まれた俺は一族の宝として大切に育てられた。

その中でも俺は生まれた時からアルファスを親の様に、また兄弟の様に慕っていた。一族の中でも稀な純白の王であつた彼・・・そして俺はずっと思ってたんだ、ずっと永遠に続くのだと・・・あの時までには・・・あの娘が彼の前に現れるまでは！

私たちは決して今まで一度も人の世に干渉した事がない・・・とは言わないが、彼らの生活を助けるためにそれは最小限の接触で行われていた。だから信じていたのだ。彼はすぐに戻ってくると。アルファス自身、俺にそう言っていたではなかったか・・・？

それなのに彼は帰って来なかった。否、通常よりも長い年月を地上で過ごした彼の体は弱り切っていたのだろうが、それでも彼が私を望んだなら空をかけて彼の元に行けたかもしれない。俺はまだまだ幼い子供だったがそれでも他のものと比べ格段に高い魔力を身に宿し、新たな同族を生み出せる事が可能な俺ならば、子供とはいえ、彼を連れて戻ってくるぐらいできたはずなのだ。

だが彼は俺を呼ぶ事はなかった。それどころか、あの娘を喰らいあげくの果てに血の契約を成して地上に留まったのだ。確かに我ら一族の掟では、人の肉を喰らいその汚れを身に受けたものは一族から追放される。だがあの娘は希有な力をその身に宿し、またその魂も気高く美しかった。娘を喰らうだけならその身を穢さなかっただろうに・・・しかし、だからこそ・・・彼が彼女を喰らい血による束縛を甘んじて受けた事を俺は許せなかった。また地上にどれほどの混乱を招く事になるか、聡い彼が知らなかったはずはない・・・。彼は娘を喰らい生きた。通常なら長い間あれだけの障気を身に浴びたならいつ塵となってもおかしくはないはずなのに・・・何千年かの間、俺はあいつ、アルファスの気を、受け止め続けていた。

俺はそれでも待った。お前の言葉を信じて・・・だが約千年前、突如今まで離れていても感じられていた彼の気が途切れた。俺は狂った様に地上にあいつの気を探し求めたが、ぷつりと切れたそれは俺の感情をいらだたせた。死んでしまったのか、それとも・・・？

俺は長老に願い、地上に降りた。最初は500年ほど前だっただろうか。俺を見た地上の人は恐れ惑い、話をできるようなものは見つからなかった。この姿のままではアルファスを見つける事が出来ない・・・俺は魔力を使い姿を人間に擬態させた。だがまだ幼い俺が自分の体を地上で長く保つ事はできず、人に見つからぬ様、何度か聖地とこの地上を往復した。

そして人として生活をししばらく立った頃、俺はこいつ、ジェラルドにあっただの。

33話：遠い記憶2

人間界で魔術師ギルドに登録し、なおかつ裏でアルファスの事を調べる傍ら仕事をしていた時、俺はジェラルドと出会った。

「腕の良い魔術師を探しているんだが・・・。」そいつはその場にそぐわない雰囲気をもった男だった。

「金がかかっても良いってんなら、特別な紹介しませ、お若いの・・・」

「腕が確かなら、金には糸目を付けない。」そういつて男は懐から、金貨の入った袋を取り出し、開けて見せた。

ごくつと喉をならす音が聞こえた。人間というやつは欲が深い。だが、ここでアルファスを探し出すには金は必要不可欠だ。俺は、地上に降りてきてから、人の生活というものを十分に堪能していた。

「こりゃあ、気前が良い事で・・・腕の良い・・・というなら、キルケ、あいつがここいらじゃ、飛び抜けて腕の良い魔術師ですぜ、まあ見た目はちよつと、アレですが、あいつならどんな依頼でもこなすでしょうよ。丁度ほら、あそこにいますよ。」と男が揉み手をしながら俺に向かってあごをしゃくった。

人間ごときに俺があごで使われるなどとは忌々しいが、その男になんとはなく、興味があつたので、大人しく出向いてやった。

「アンタが、キルケか？やけにちつこい男だな・・・」開口一番、そいつは俺に向かってそう言いやがった。自分に自信を持ち、上からものを言う事に慣れた人間、俺はそうそいつを評価した。むかつく事を言う奴だが性根は悪くない。きつと良い育ちをしているのだろつ。

「俺は、ジェラルドだ。宜しくな。」そういつて奴は手を差し出した。てきた。

俺は奴の手を力を入れて握り返してやった。が、表情ひとつ変えな

い。食えない奴だ。

「・・・それで、依頼というのはなんだ？」場所を変えて俺たちは向かい合って座ると、気を取り直して聞く。

「ん、ちょこつとユフテスの事を調べて欲しいんだよね・・・」ユフテス・・・なにか気に入らないフリーズだと最初に思った。そうだ、あいつをたぶらかした女の名前に似ているんだ・・・。最初、俺は詳しい話を聞く前に断ろうかとも思ったのだが、やはり何とはなく気になって仕方がない。むかつくが、そのまま話を聞く事にした。塔の中に閉じ込められているという人間の話、そしてその国の大まかな事柄を聞くうちある確信ともいえる思いが俺の中で広がった。アルファス、お前は其処にいるのか・・・？

その晩、俺はすぐさま、ユフテスというちっぽけな国に入り、王宮へと侵入した。確かにあの男が言った通り、城は幾つもの魔法を組み合わせたかなり強固な護りがしてあった。とはいえ、俺にとっては大した事ではなかったが・・・。城に入った時、懐かしい匂いが俺の鼻をかすめた。やはり・・・しかし腑に落ちない。このまま城をつぶしてやつを引きずり出そうかとも考えたが、その日はそのままアステールへと戻ってきた。

まだ時間はある・・・急ぐ事はない。そう自分に言い聞かせて。本当は俺は怖かったのかもしれない。あいつに会うのが・・・自分自身どうにもならない苛立を押さえて俺はジェラルドの前では、お人好しの魔術師を演じ続けた。それなりの情報を提供し、続けてユフテスの内情も探ってやった。

しばらくしてまたユフテスの城を訪れた時、以前よりも城の護りが弱くなっている事に気がついた。あいつが眠っているらしい地下へと続く魔法陣の敷かれた部屋で面白そうな本を見つけたので持って

帰ってきてやった。あの娘の子孫とやらが書いた本は幾重にも厳重な魔法が掛けられており、その緻密な魔法に俺は少なからず驚いた。人間にもこんな奴がいるのか・・・と。

いろいろあったが、本を解呪し、中身を読んだ俺は、約千年前に彼の気が途切れた理由を知り、またこの人間の考え出した新しい術を吟味した。

確かに可能だった。論理的には・・・しかし、いくら贄の核を媒体にするとはいえ、この術を使うにはその辺の術者が何人束になってやろうが出来ないだろう、それこそ俺ならば可能だが・・・だが俺は、あいつを憎んでいる、俺との約束を破ったあいつをこの何千年かの間殺したい程憎んで来たはずだ・・・。

34話：始動

「キルケ、キルケ・・・?!」ジェラルドの訝しがる声にはっとして顔を上げる。

「すまん・・・、ちよつと考え事をしていた。」俺としたことが、つい昔の感傷にふけってしまったていた。

「構わないが・・・大丈夫か?正直この本には俺も驚いた・・・お前もそうだったんだろう、キルケ?」ジェラルドが感慨深く呟いた。

「ああそうだな。確かに、この魔術の構成とセンスは普通の人間の範疇を超えている・・・。あえて聞かせてもらいたいのだが、どうするつもりなんだ、お前達は?お前達は今までもずっとユフテスの内情を調べてきたのだろうか?そしてこの月末に開かれる王子の誕生日に合わせて様々な事柄が動いてきている。お前達の狙いは何だ?ジェラルド、お前も、ただ単に、王子の祝いに駆けつけるだけではないのだろうか?その女、いやリディアも・・・」

リディアはキルケの問いにはっと身を固くした。私の願いは、あの囚われている塔の住人を救い出す事、でもジェラルドやキルケは・・・?正直、この日記を読んで事の重大さに戸惑っていた。ただ彼を助け出すだけでは根本的な解決にはならない事は承知していた。そこに差し込んだ一筋の光、彼の考え出した魔術式は、うまくいけば贄を殺す事なく、地下で眠りにについている竜を救う事ができる。一石二鳥だ。だが、リディアとて王家の子女として、魔術の知識はそれなりにもっている。だが、これは並大抵の術者では到底成し遂げる事は難しい・・・

キルケならどうだろうか・・・リディアはそっとキルケの顔に目を向ける。姿形はこの上なく愛らしいこの少女をジェラルドは稀に見る魔術師だと絶賛していた。彼女になら、この術を試行する事は可

能なのだろうか・・・いや、でも・・・私の我が侘で関係のない二人を巻き込む訳にはいかない。と、その時、ジェラルドの落ち着いた声がリディアの耳に心地よく入ってきた。

「ー俺は、もともとある理由があつて、ユフテスの事を調べていた。まさかこんな重大な事になるとは最初は思つてなかったがな・・・。だが、きっとカイルもこの事を知った上で何らかの事をなそうとしてるのは確かだ。直接言われた訳ではないが、あいつが成そうとしている事の手伝いはしてやりたいと思つている・・・親友として。だが、これははつきり言つて魔術の腕はさっぱりの俺の手には余る出来事だ。キルケ、お前の目からみてどうなんだ？この術式は？これは、可能なのか・・・？」

キルケはジェラルドの問いには答えず、今度はリディアに向かつて問いかけた。

「あんたは・・・？」

「わたくし・・・の願いはずっと、あの塔に囚われている方を自由にしてあげる事でした。その思いは今でも変わっていません・・・。」
そしてリディアはかいつまんで塔の住人との出会いから今までの事をキルケに話した。

「ふん・・・なるほど、それでね・・・。あんたにはあんたの事情があるみたいだね。じゃあ、お前達は事情は違えど、目的はそいつを塔から救い出し、そいつの持つ魔力の核を使い竜を転生させる・・・そついうことか？」

暫く考えてジェラルドが相づちを打つ。「そうだな、可能であればそれが一番望ましい。」

「あの・・・キルケちゃんこれは、可能なのかな・・・？この術が使え

るぐらいの優秀な魔術師、たぶんユフテスにも存在しないと思う・。
・。でももしこれが可能ならジェラルドが言った通りこれ以上の策
はないよね・。・。」

「・・・失敗したらどうするつもりだ？大人しく竜に贅を差し出し
喰わせるのか？それとも・・・竜を殺すのか？」

キルケの言葉に二人はうつと息を飲んだ・・・。失敗したら、そう
だ、失敗したらどうする？こんな複雑で難しい術を成功させる方が
確立は低い。しかも今からだと、優秀な術師を探す事は不可能に近
い。

リディアがキルケに問いかける。「キルケちゃん・・・なら何とか
出来る・・・？」都合の良い考えだが、それでも優秀な魔術師なら
可能かもしれない、一縷の望みをリディアはキルケに投げかけた。

35話：祈り

「さあ・・・な。よしんば可能だとしてもこれは術者にも多大な負担がかかる。やって出来ない事はないが、失敗すればこちらの身も危うくなる・・・が、贅のことはともかく、竜の事はどうするつもりだ？」

『伝説の竜』か・・・ユフテス王家は今まで加護を得ていた竜をそんな簡単に手放すだろうか？カイルの考えはどうであれ、竜は貴重な存在だ。もし他の国にその存在が知れたら、混乱を招くばかりでなく、竜を欲する国と戦争になるかもしれない・・・。宗教的理由にしろ、政治的理由にしろその存在は大地を揺るがしかねない。もと我らでさえ、事情があるとはいえ簡単に踏み入ってはならない他国の深閑に関わる問題にふれてしまっている。ジェラルドはもう一度考えに沈んだ。

「竜は、日記に書かれている通り、聖地に戻ってもらえば良いのではないのですか？」リディアが答える。

「簡単に言っな、リディア。それは可能性の一つだ。キルケの言う通り、何事もなくうまくいけばそれはそれがベストだが、万が一の場合は、どちらかが犠牲になることも考慮しろ。竜か・・・それとも彼か・・・この術式を行う為には準備もかかるし、カイルの成人の儀には各国からの代表者が集っている。例えば、術が失敗でもして竜が暴れ出したらどうなる？俺たちだけで済む話じゃない。これを手にした以上、一度カイルとも話をする必要があるな。どちらにするあいつの協力は必要不可欠だ。それとは別に、キルケ・・・こんな事に巻き込んでしまつてすまなく思っている、だができれば俺たちに協力してもらえないか？この術の施行には、どう考えてもお前ぐらいの術者が不可欠だ。もちろんこちらでも、他の術者を当たっ

てみるが、お前と一緒に来てくれると心強い。もちろん謝礼ははさむ。」

リディアは押し黙ったままキルケを見つめた。キルケは二人の眼差しを受けると、下を向き小さく呟いた。

「少し、考える時間をくれ。」

「ああ、分かった、だが、俺たちは3日後に出発する。悪いが、この二日の間に結論を出して欲しい。俺は、国を出るまでにカイルと連絡を取る。この際だ、アステールの水鏡を使わせてもらおう・・リディア、いいな？」

「は、はい。」リディアは頷く。水鏡とは各王家が所有する緊急用の通信魔具だ。相手側とこちら側の姿ばかりか声も伝える事ができる。この水鏡の術も遙か昔、かつて竜によって人間にもたらされたものだという。

その後キルケと別れて、城に戻る馬車の中、リディアは意を決意した。

「・・ジェラルド兄様、先日の夕餉の時、私がお話していなかった事があります・・それは・・」

「グランデイスの事か？」突如腕を組んで下を向いていたジェラルドはリディアに向かってにやりと笑う。「っえ？」リディアが目を見開いた。「俺が知らないとも思っていたのか？あの国の動きは我が国にとっても人ごとではないからな。以前からユフテス同様、探りを入れてある。不思議な事ではないだろう？」そういつてジェラルドは声を立てて笑った。

そう言われてみればそうだ。私が知り得る情報を有能なジェラルドが知らないはずはない。国では次期国王の兄の補佐として私などよ

り遙かに政治に関わっている。私は・・・まだまだ、この人に追いつけない・・・。

「あの国は諜報にもかなり力を入れているからな・・・竜の事を知っているのも不思議ではない。それに、あの国の王はえらく竜にご執着だと聞く。何年か前にも大掛かりな探索を行っていたしな。もし、あの国がこの事を知れば黙ってはいないだろう。」

リディアはジェラルドの言葉に頷いた。「彼らは竜をどうするつもりなのでしょう・・・？」

「さあな、愛玩動物・・・って訳ではないだろう、やはり竜の持つ力と守護を欲しているか、馬鹿な奴らだ、竜の守護は奪い取って得られるものではないだろうに。」

リディアはもうひとつ気にかかっている事を口にする。自然と今までジェラルドとの間に感じていたわだかまりの様なものが消え失せていた。

「キルケは・・・協力してくれるでしょうか・・・？」

「さあ、あいつの考えている事は俺にもわからない。だがあいつは信用できるやつだ。長い付き合いではないが・・・な、そんな感じがする。あいつは・・・ときどきだが、不思議な感じがするんだ、こう、なんというか畏怖を感じ得ない何か・・・を持っている。ふふ・・・だが、小さいとは思っていたがまさか女だとは思わなかったなあ。」

そういつてジェラルドは思い出し笑いをする。リディアは通り過ぎる外の風景を見ながら祈っていた。

36話：遭遇

その頃、キルケも物思いに沈みながら街道を歩いていた。何故か今日ジェラルドが連れてきた女の必死な顔が脳裏から離れない。どうしてあんなに必死になれるんだ？もやもやとした思いと苛立がキルケの中で渦巻いていた。だから・気がつかなかったんだ。

「キルケちゃん、ふふ、なにそんな難しい顔してるのよ？あー、もうやっぱりこのお洋服似合うわね。さすが私って感じからしら？」いきなり後ろから抱き上げられた。

「お前！」不覚だった。「お友達はキルケちゃんのお洋服気に入ってくれた？」ジークフォールンが頬ずりしながら聞いてきた。

「・・・なぜ俺が人と会っていたって知ってるんだ？」

「あらあ、あたしはキルケちゃんの事なら何だって知ってるわよ。これも愛の力ってやつかしら？ほほほほ。」甲高く笑う。

「お前はいつも神出鬼没な奴だな。そういえば、この洋服はどうなってるんだ！着替えようと何度もしたが変わらないし、変化の術もかからない、なんてもの着せるんだ、お前は！」

「うふ、それは企業秘密よ。でもいいじゃない、よく似合ってるんだから、キルケちゃん、女の子なんだから、もっとお洒落しなきゃ！それに今晚にはちゃんと着替えられるから心配しないで。今度は別なの用意しとくわね。」

その言葉にキルケはハツとした。そう言えば、こいつ、ジークフォールンは出会った時からおかしい奴だった。他のものはいくらキルケの背丈が小さいとは言え、みんな俺をオスだと認識していた。その為に匂いを消し、人間のオス特有の匂いまで付けていたぐらいだ。

それなのにこいつは初めてあった時から俺をメスだと分かって接していたふしがある。

こいつ・・・本当に何者だ？キルケはまじまじと近くにあるジークフォールの顔を見つめた。

「やだ、キルケちゃん、あたしのことそんなに見つめないで。照れちゃうじゃない。何かアタシの顔についてる？」

「お前・・・最初にあった時から俺の事をメスだと知っていただろう、何故だ？！」

「・・・あら・・・隠してるつもりだったの？ごめんなさい。でもすぐ分かつちゃうわよ。あなたの事なら何でも・・・ね。もうこのくりくり巻き毛なんて最高ね！あたしの髪もこんな赤茶じゃなくて金髪がよかつたわ・・・」

キルケの背筋にぞっと寒気が走った。「ジークフォール、お前いたい何者だ？！」

ジークフォールはにやっと楽しげに笑って答える。「あら、あたしの事はよく知ってるでしょう、キルケちゃん・・・？ふふ、本当はもっとキルケちゃんとうこうしていたいんだけど、あたしも色々忙しい身の上なのよ。悪いけど今日はこれで失礼するわ、また近いうちに会いましょ、キルケちゃん。」そういつてジークフォールはキルケを抱きおろすとあつと言う間に人ごみの中を縫って見えなくなつた。

なんだか分からない恐怖と不安がキルケを包み込む、先ほどまでの苛立は新たに芽生えた感情に押しつぶされていた。ともかく宿へ帰ろう・・・。キルケは早足で帰途についた。

宿の部屋につくと、キルケは小さなベットのの上に倒れ込むように横

になった。何故今までジークフォールの事をちゃんと考えなかったのか。自分がでも不思議だった。出会いはあるマーケットでその時依頼された仕事の事で色々調べていた時だった。

「何かお探しの？」そういつて近づいてきたのがあいつだった。俺は人間の趣味にあれこれいうつもりはなかったが、あいつのファッションだけは吐き気しそうなぐらい不味かった。忘れもしないレインボーカラーの派手なワンピースを身にまとい、孔雀の羽をあしらった帽子をかぶった赤毛の大男。その時確かに俺の記憶は2、3秒ほどぶっ飛んだ。

顔がわからないようにいつもの黒いフードをかぶり声音を変えていた俺をあいつはいきなり自分の胸に引き寄せ声を上げた。「可愛い。やだ、可愛い子猫ちゃんだわ。」その間十秒あまり、俺は声も出せずに硬直した。初対面の奴を軽々しく信用するほど俺も馬鹿ではない。その後俺の仕事を手伝うと言って来た奴の身元は洗いざらい調べたはずだ。奴の頭とファッション以外おかしいところはなかった。それに奴は商人だけあって、様々な得られにくい物品の調達はどこよりも優れていた。魔術の知識も舌を巻く程豊富で商人にしておくのはもったいないと何度か思ったが・・・今考えてみると奴ほど不審な人物はいない・・・とキルケは自分自身の事は棚に上げ考えていた。

一度、聖地へ戻るか・・・この姿でいるのもかなりの魔力を酷使する。一度帰って2日後にもう一度戻って来よう。キルケは窓を閉め切ると真っ暗な部屋の中で竜だけが知る古代の魔術を唱え出す。部屋の中がふつと青白い光に包まれた後、部屋には静寂だけが残った。

37話：竜の聖地 1

人を寄せ付けない険しい山々の頂き、美しく雪化粧され氷に閉ざされた地に一匹の黄金の竜が降り立った。そこから竜がひときわ高く鳴き声を上げると、遙か空の彼方から一匹の美しい紅竜が舞い降りた。と思えばその瞬間それは燃える様な長く赤い髪をもつ人の姿へと変化した。

「キルケ、お帰り。久しぶりだね。」赤い髪の男がにこやかに笑って黄金の竜に向かって声をかけた。キルケももう一度人形に戻る。「ミルセディ、久しぶり・・・といってもたかだが100年ぐらいだろ？ああ、でもやっぱりこの空気は良いな。とても澄んでいる。さっそくだが道を開けてくれ。長老に挨拶した後、お前ともゆっくり話したい。」

「相変わらず、せっかちなだね、キルケは。まあいい、後でゆっくり話を聞かせてもらうよ。じゃあ、ゲートを開くぞ。」そう言って男が呪文を唱えると一瞬空間が淀んだかの様な感じがして、そして二人はその場から消え失せた。

竜の聖地は何人であろうとも、例えば竜であってもゲートキーパーと呼ばれる特殊な竜の助け無しにたどり着く事はできない。

そこは不思議な空間だった。高くそびえ立つ何本もの頑丈な岩山、そしてそこを明るく照らすようにいくつもの光が行き来している。岩場には何匹かの大きな竜がいた。キルケは少し懐かしそうにそれらの風景を眺めたあと、移動呪文を唱えた。

「ミルセディ、キルケが帰ってきたのか？」他の竜が思念を送ってきた。

「ああ、今長老のところへ挨拶にいつている。」

「あいつ、体の方は大丈夫なのか？いくら飛び抜けて魔力が強いとはいえ、まだあいつは幼い、あまり無理は出来ないだろう・・・。」

「そうだな、ざっと見たところ少し魔力にかげりがあるが大した影響はないだろう。」とまた違う竜が思念を送る。

「・・・アルファスは見つかったのかな・・・？」

「さあ・・・どうなんだろうね・・・。」

「長老、キルケです。只今戻りました。」ひととき高い岩の頂き近くにある洞穴の中で一匹の灰色の竜が尾を丸め横たわっていた。突然現れた金色の少女を見て竜は目を細めキルケと同じぐらいの小さな老人の姿をとると言った。

「キルケか・・・よう戻ったの。地上はどうであつた？」

「地上は・・・思ったよりも面白いです。様々な事を見聞きし、沢山の人間に出会いました。それから・・・。」

「アルファスを見付けたかの・・・？」

「ーはい。」

「そうか・・・ではお前が見聞きした地上の様子を儂に聞かせておくれ。我が一族の最も小さき者よ。」

キルケは地上で見聞きした全ての事、ユフテスの事、そして今自分が関わっている人間達の事、そしてアルファスの事を長老に話した。「なるほど、そうか・・・眠りに・・・それである者の思念を得る事が出来なんだか・・・。ふふ、しかし人間の中にも面白い考え方をするものもあるのう。儂は幾度かの転成を繰り返し、この世界が生まれる頃より永きにわたり地上を見守ってきた。だがそろそろこの生もつきようとしておる。アルファスはこの聖地を導くものとして儂が特に目をかけ見定めてきた白の王じゃ・・・一度は失のうたと思っていたあやつが地上で転成をなし、血の契約、汚れから解き放たれ

るのであれば、それこそ喜ばしい事だが、」「長老はここで一度ゆっくりと息を吸い込みゆっくりと吐き出した。

「我らが長く地上に影響を及ぼす事はまかりならぬ。もし今回転生がうまく往くならばそれで良し、アルファスを連れて聖地へと戻ってくるがよい。じゃが、もし、転生が上手く行かなかった場合にはあやつをこれ以上地にとどめておく事は出来ぬ・・・わかるな、キルケ？」

「はい・・・長よ。」

38話：竜の聖地2

キルケは一人になるとそびえ立つ頂きの中腹にある洞穴の中で人形の姿のまま膝を抱えた。

「俺はいつたいどうしたいのだろう。アルファスが戻って来れるかもしれない鍵を握るのは自分自身なのだ。長老の言った通り、これ以上彼が地上に留まっているのはよくない状況だとも思う。何十年か前から、地上の国で竜を欲する国がいくつか動きをみせ、なおかつグランデイスに至っては聖地近くまで搜索の手を向けていたらしい事をミルセデイが言っていた。

竜の聖地へはゲートキーパーの手助け無しにはたどり着けないが、こんな奥地にまで搜索の手が伸びていたのは正直驚きだった。それに、もうひとつ気にかかる事がある、ジークフォルの事だ、あいつの情報網の広さは半端じゃない。商売を隠れみのにしているスパイのようだ・・・スパイ・・・？ぐるぐるとまとまらない考えに頭を悩ませていると、ばさつと音がして一匹の竜とその上にまたがったミルセデイが洞穴に入ってきた。

「キルケ、こんなところにいたのか・・・」ミルセデイはキルケの姿を認めると声をかける。もう一匹の若い竜はリンドルンという名のキルケより先に生まれた、比較的歳の近い竜でミルセデイと同じく兄妹のように育った仲間だった。

「ミルセにリンド・・・」

「なんてした面してんだよ、キルケ。」リンドルンは竜体のままキルケに思念を送る。

「ん・・・色々と考え事してた。」

「アルファスの事か・・・？」リンドルンはずっとキルケの横に横たわると尻尾で優しくキルケを包み込む。ミルセデイも人型のまま、となりに腰掛けた。

「それもあるけど、他にも色々ときにかかる事があってさ、なんだかわかんなくなっただんだ。」

ミルセデイが言った。「アルファスの事は、こっちにくる前に長老に聞いたよ。あいつ、戻って来れるのかもしれないんだってな・・・。あいつがここを出て行ってから5千年、普通の竜ならとくに死んでいてもおかしくない。人間と血の契約を交わした竜はアルファスの他にも何匹かいたけど、皆地上で亡くなり消えて行ったと聞いている。」

うれしくないのか・・・？お前ずっとあいつの事をまっけたんだろう？まだ成竜になってなくて力も安定してないのに、自分の体が悪くなるの分かっけてわざわざ地上にまで探しに行っただけだ。」

キルケはふるふると頭を振った。「分からないんだ。俺、あいつの事大好きだったよ。憧れてた。お前達と一緒にずっとアルファスも一緒にいるんだって思ってたのに・・・あいつは約束を破って帰って来なかった。俺・・・どうしていいかわかんないんだ。多分あいつを助けられるのは俺しかない・・・けど実際にあいつに遭ったら俺、きつと自分の感情をコントロールできない。そんな状態でうまく術を成功させられるか・・・それにもし失敗したら、俺があいつを殺すんだ・・・。」

「キルケ・・・。俺らはさ、もしアルファスが戻って来られたら嬉しいぜ。俺ら三匹、よくあいつの後ついて回ってたよな。あ、一番付きまとってたのはキルケか・・・。まあ、あいつが帰って来なかったのには、あいつなりの理由があるんだろうな。キルケもあんま深く考えないでやれる事、やれよ！お前にしかできないんだろ？その術っての。お前ほんと魔力だけは飛び抜けて高いからな。」

「リンドルン・・・なんかお前と話しているとばからしくなってる。なんでそんな簡単に考えられるんだよ。お前ってほんと昔っから考え無し・・・。」キルケは言いながら、だがにっこりと微笑んだ。彼が自分の事を思っていてくれるのが伝わる。

「そうそう、キルケ、お前昔から言ってたじゃないか。アルファスの子供を生むのは絶対に自分だって！」笑いながらミルセディが言う。

キルケは真っ赤になって叫んだ。「っな！それは！・・・それは・・・そうだけど・・・でも、あいつは、今のあいつは、きつと俺たちの知ってる昔のあいつとは違うと思う・・・。」

「そうだとってもさ、俺らがあいつを思う気持ちに変わりがなければいいじゃねーか。」リンドルンが続けて二人に思念を送った。

そうだな・・・そうかもしれない・・・。キルケの中で何かが吹っ切れた様な気がした。

「そうだ！俺、地上でもうひとつ気になってる事があるんだ・・・。」

「キルケは幼なじみの2匹にジークフォルの事を話し出した。

39話：竜の聖地3

「ジークフォルン・・・？なんかその名前聞き覚えがあるな。何処で聞いたんだろう・・・？」ミルセディは首を傾げながら考えている。
「知っているのか？！」キルケが金色の目をしばたかせて身を乗り出した。

「いや、知っているというか・・・なんだろう、なにか引つかかるんだけど思い出せないんだ。」

「どっちにしろさ、怪しい奴なら必要以上に近づかないのがベストなんじゃねーの？」とリンドルン。

「俺も別に近づきたくて近づいている訳じゃない・・・神出鬼没で、しかも気配を感じさせない事が多い。現に何度か後ろから捕まってるしな。奴が何者であれ、もし・・・敵だとしたら厄介だな。なんだから得体の知れない感じがするんだ。」

「って、お前、それやべーじゃん。お前が気配に気がつかないって結構こえーな。お前、地上では匂いとかも消してんだろ？でも、なんか興味あるな、そいつ。遭ってみてー！」

「・・・遊びじゃないんだぞ、リンドルン。お前といるとほんっと気が抜けるよ、まったく。」

その間もミルセディはずっと考え込んでいる。「ジークフォルン・・・ジーク？あいつか・・・？いやでも・・・まさか・・・な。」

「な」にぶつぶつ言ってるんだよ、ミルセ。大丈夫か？」リンドルンがぶわつと息を吹きかけた。風圧でミルセディとキルケの髪が逆立つ。不意にミルセディが立ち上がった。「ちよつと、俺、調べたい事ができたからいくよ。キルケ、お前明日には地上に戻るんだろ？後で寄って薬をもっていけよ？それと、そのジークフォルンって奴の事、とりあえず気をつけておけ。何か分かったらこちらから連絡

する。」

「あ、ああ・すまん、助かる。」

「じゃあさ、キルケ、オリバー爺んどこ行かね？爺、すっげーお前に会いたがつてたぜ？」

「そうだな、一緒に行くよ。あのじいさんの話面白いしな。よし、じゃあ行くか！ミルセ、また後でな。」

「わかった、二人とも爺さんの前であんまり騒ぐんじゃないぞ。」
そして3匹は別れた。

キルケとリンドルンは竜達の中でも長老と同じぐらい長生きをしているオリバーの元に向かった。オリバーは3匹を生まれた頃から孫のように可愛がつて、幼竜の頃より様々な知識や魔術を教え、また聞いた事もない面白おかしい話を聞かせてくれた。

2匹はオリバーが住まいとしている水晶の洞穴の前につくと爺さんの名を呼ぶ。

奥の方からのっそりと小柄な竜が出てきた。「オリバー爺！」キルケが叫びながら抱きつく。

「おお、キルケか、よう帰ったな……。そんな小さな人型のままでは踏みつぶしてしまいかねん、どれ、儂も変化するか・リンドルン、お前も変化してみろ。」

「ええ、俺人型になるの苦手なんだよ。」リンドルンが二人に思念を伝える。

「ふおっふお、人型になれば、地上に降りる事も可能じゃぞ？お前もキルケ同様、地上を見てみたいんじゃないやろって・何度もやらねば上手くはならん。」

「ちえ」。次の瞬間、リンドルンは薄い水色の髪と青い目を持つ

少年の姿へと変化する。だが所々鱗がついたままだ。

「まだまだじゃな・・・」「うん」と二人がリンドルンを見て呟く。

「くっそ、見とけよ、そのうち俺だってちゃんと変化できるようになるんだからな！」

しばらく3人で笑い合った後、キルケがオリバー爺に尋ねた。

「なあ、オリバー爺、昔話してくれた事があつただろ、遙か昔、竜と人間と一緒に暮らしていた時代の事・・・。俺、地上に行つてからさ、色々と思ひに思ふ事が沢山できたんだ。血の契約の事にしたつてさ、なんか理不尽な話だよな。長老の言つ通り、俺たちが長く人間とかかわり合いを持つのは良くないって、確かに俺も地上で暮らしているうちに思つたよ。」

人間は寿命も俺たちと比べると遥かに短く弱い種族だがその分生殖能力はずば抜けて高い。まあ、俺たちもあまり地上に長くいると生きられないけど・・・でも俺たちも昔は人間と一緒に地上にいたんだろっ？いつから今のように地上と聖地に別れて住むようになったんだ？俺はまだまだ知らない事がいっぱいあるってすごく実感したんだ・・・。」

「そういえば、そうだよな・・・俺たちと人との関係っていつからこんな風になつたんだ？」

40話：竜の聖地4

「ふむ・・・少し成長した様じゃな・・・。もうそろそろ幼いお前達にも話しても良かるうて。とりあえず、其処へ座れ。少し長い話になりそうだ。」

2匹はごつごつした土壌から突きている岩の上に腰掛けた。

「この世界が出来、地が全ての恵みで潤っていた頃、地上には高い知能をもつ3つの種族がおった・・・。一つは我ら竜族、そして人間、そしてあともう一つは異能者と呼ばれる人よりも遥かに巨大な力と突出した能力を持つ一族・・・。

我ら3種族は地上で争う事も隔てる事もなく平和に暮らしておった。3つの種族の中で一番力が弱く、また知能も低い人間を我らは教え諭し、その生活を向上させるために様々な知識を授けていった。だが人間達は知識を増して行くにつれ、その心に妬みや憎悪、野心といった負の感情をも育てていった。

もう一つの種族、異能者達は見た目こそ人間のようなだが、人間ともまた我らともまったく違う者。彼らは群れるのを好まなかったが、我ら竜族とは長く付き合いをしてきた。彼らは我ら竜族と比べても数えるぐらいの人数しかおらぬが、稀に人との間に子を儲けた異能者もおったと聞く。彼らが異能者・・・と呼ばれる理由については、また後で話すが、そうして3種族がこの地上で暮らして暫くたった頃、人の心に芽生えた負の感情はとてつもなく巨大になり、人は地上で血を流し始めた。

地は人々が流す血で穢された。また人は我らが与えた知恵を発達させ、様々な^{よじしま}周な道具を作り、それらを使って水や植物までもが汚染

されていった。地に住む動物達も次々と住処を追われ、我らは人に過ぎた知恵や知識を与えすぎた事を悔いた。しかし、一度急激に広がってしまった汚染は人間自身をも苦しみ、最終的に人も一度破滅の時を迎えた。

だが、そんなとき、幾人かの異能者とまた彼らと人との間に生まれた者たちが自らを犠牲にし、この地上の浄化を計った。我ら竜族は持たぬ浄化の力を異能者達は有しておった。全てとは行かぬものの、彼らの力で何とか、この地上は息吹を吹き返したが、元々数の少なかった異能者達は、数人の人との間に出来た子供達を残し、死に絶えた……。

我らは彼らが命をとしてまで救ったこの大地をもう一度見守って行く事にした。残された異能者と人の子孫達はまた少しずつ数を増やして行った。異能者達の子供は代を得るにつれ、持っていた浄化の力はなくして行った。私たちは過ちを二度と繰り返さんが為、人と接する事を最小限にとどめる事にした。幸か不幸か、地上は我ら竜族にとっても以前とは違い住みにくくなってしまった事だしのう。我らは唯一異能者達が完全に浄化を施したこの地を聖地とし、人が入って来られる事の無い様封印を施した。」

「オリバー爺、じゃあ、何故、約5千年前、地上からやってきたあの娘はこの聖地の入り口までたどり着く事ができたんだ？」キルケが問う。

「良い質問じゃ……。人類が一度死に絶えた時に生き残った異能者達の子供らの子孫……。すべてではないが、稀に隔世遺伝なのか、魂にその強い力を宿す子供が生まれる様じゃ。あの娘は、異能者の力を色濃く受け継いでおった。お前達は知らんだろうがアルファスが幼い頃によく世話になっていた異能者バルザツクの血を引く娘じゃ

った。あやつはその魂の色で分かったんじやろう。あの者の血を引く娘の願い、あやつが断れなかったのも仕方あるまい。」

「キルケよ、あやつ、アルファスを恨むな・・あやつは我ら種族の罪、あの気高く美しかった異能者達を死なせてしまった事を誰よりも悔やんでいた。だが我らの人への干渉はまたあの悲劇を生み出しかねない。もし、今度そうなったとしても、次はないのだ・・我らも人も滅び行く道しか残っておらぬ。良いか、キルケ、リンドルン、お前達もこの爺の話をよく聞き覚えておきなさい・・。」

41話：竜の聖地5

オリバー爺が親友であるという長老に呼ばれ水晶の洞穴を出て行った後、2匹はなおも、今しがた聞かされた驚愕の事実を話し合っていた。

「人間が一度滅んで、今地上にいるのが異能者と人間の間にできた子供達の子孫だなんて、俺思いもなかったよ。」リンドルンが興奮したように言う。

「うん・・人間達の中に魔力をもつ者と持たない者がいるのもそのせいなんだな・・。」子孫とはいえ、その異能者達ももっていたほどの魔力や力を受け継ぐ人間は少ない。だからこそ、地上で魔術師達は優遇され高い力を有するものは、高い給金で王族専属の魔術師となったりする。キルケも地上では、ギルドや王族から度々勧誘されていた。

「ミルセはこの事知ってるのかな・・?」

「さあな・・あいつは俺たちの中でも一番勉強のできる奴だからな。俺たちが知らない事もいっぱい知ってるし・・。」

キルケはリンドルンと話しながら、もう一つ別の事を考えていた。アルファスが幼竜の頃世話になっていたという異能者の血を受け継ぐ者の末が今のユフテス王家。そして現在塔の中に囚われているという王子がその異能者の血と魂を色濃く受け継いだ者なのだろう。血が薄まっているとはいえ、潜在的にはかなりの力を秘めているに違いない。

望んでの事ではなかったのかもしれないが、結局アルファスはその者達の血肉を喰らい、5千年近くもの間、生き延びてきた。人間の

血肉に染まった白の王……。多少、アルファスがユフテスの王家に与した経緯は分かったが、今と昔では事情も変わっている。あいつをこのまま地上に残しておく事はできない。とすれば、やはりジェラルド達と行動を共にしている方が色々と得策かもしれないな……。あと、ジークフォールの事は……。ミルセの言った通りしばらくは気をつけつつ、様子を見よう。その間に何かわかるかもしれない。

「おい……。キルケ、キルケってば！お前ほんつと一度何か考え出すと人の話聞かなくなるよな……。まったく。」リンドルンが少しむくれた様な顔でこちらを見ていた。

「ご、ごめん……。えーと、で、何の話だっけ？」

「だーからー、もうそろそろ地上に戻らないとヤバいんじゃないのつて。なんか人間と会う約束があるとかって言ってたろ、お前。」

「あつ！」慌てて聖地の真ん中に置かれた砂時計を確認する。

「ほんとだ、もう行かないと。」

「帰りミルドんとこに寄って薬貰って行けよ。あれで結構息するのとか楽になるらしいぜ。それと……。アルファスの事……。頼んだぜ。」リンドルンの真摯な表情にキルケは頷いた。

「分かった、ありがとう、リンド。必ずあいつも一緒に……。今度は一緒にこの聖地に帰ってくる！」

竜体に戻り去っていったキルケを見送りながらリンドルンは呟く。

「頑張れよ……。キルケ！」

キルケはミルセディから薬を貰い、ゲートを開いてもらう。

「キルケ、気をつけて行けよ。くれぐれも人間には気をつけろ、それと、あと、ジークフォールの事については、もう少し待っていてくれ。」

「わかった、じゃ、行ってくるな、ミルセ！他の奴らにも宜しく伝えといてくれ！」

つかの間の里帰りを終えたキルケはもう一度地上へと戻った。今度は大切な者を取り戻す為に……。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記3

僕は走って追いかけてましたが、殿下は逃げ足も相当な早さで、結局今回もジェラルド様にうまく巻かれてしまいました。殿下をお探ししている間に約束の時間が差し迫ってました。きっともうペイリュード侯爵はお部屋で殿下をお待ちになっているはずです。

「どうしよう……。」「僕は目の前が真っ暗です。でも行かない訳には参りません。」

僕はきりきり痛む胃をさすりつつ、部屋の前まで来ると、深呼吸をして、ドアをノックしました。中からギイと音がしてゆっくりと扉が開かれました。案の定、ペイリュード侯は、既にお席についておられます。僕はペイリュード侯爵のお付きの従者に殿下が急用で来られなくなったとの旨を伝えました。

使者殿は、それをペイリュード侯にお伝えしています。「なんと！あの若造め、また逃げよったか……。」「殿下……。すっかりバレです……。」

ペイリュード侯はそれから立ち上がると僕の方に目を向け、近寄って来られました。

「君が、ジェラルド殿下の新しい従者かな？」

「は、はい。僭越ながら、先月より、ジェラルド様のお側付きの従者として仕えさせてもらっているルーク マニエル キュレットと申します。」「僕は侯爵に深々と礼を取った。

「ほう、キュレット公爵の息子さんか……。道理でどこかで見たと思うたはずだ。」「侯爵は一人で、頷いている。」「それで、殿下はどうせまた、言い訳をして逃げられたのでしょうか……。？」

あっさりと侯爵に見破られて、僕はしどろもどろになりながら殿下をフォローする。

「い、いえ、殿下は今朝方急用ができたと言われて、出て行かれたのです。それで、常に申し訳ないですが、私が殿下の代わりにペイリュード候のお話を聞いてくるようにと申しつかったのですが・・。」

「ふむ・・。急用ねえ。今回の件については殿下もお喜びになると踏んでいたのだがなあ・・。まあ、良い、ではルーク君、これを殿下に届けておいてくれないか。中身は、まあ見ればわかるだろう。ふふ、あのすかした坊やの驚く顔が見たかったのだがなあ・・。」
と侯爵はぶつぶつと何か意味不明な事を仰っていらっしやる。

「これを殿下にお渡しすれば良いのですね？」僕は念入りに確かめる。

「ああ、よろしく頼むよ。ああ、そうそう、ルーク君、後でこれを開いたときの殿下の様子を私にこっそり教えてくれるかな？」
「そう言くと侯爵はまるで悪戯好きの子供のようにお笑いになった。いたい何だというのだろう・・。」

僕は侯爵に挨拶を済ませると、しっかりと預かった荷物を抱えて殿下の部屋に戻った。しかし、この荷物、意外に重たい。いったい何が入っているのだろう・・・？

結局、殿下が戻って来られたのは夕方近くになってからだった。部屋に入って来られた殿下は何故かとても疲れた様なお顔をしておられます。

「殿下・・・？お顔の色が優れませんが、大丈夫ですか？薬師を御呼び致しましょうか・・。それとも、何か軽く召し上がられますか？」

「ああ、ルーク、心配しないで良いよ。ちょっと疲れたただだ。薬

師は呼ばなくとも良い。そうだな、軽く何か食べよう、それから風呂を湧かしておいてくれ。」

「わかりました。」僕は一礼して、すぐさま、外のメイドに軽い食事を作るように指示をし、ジェラルド殿下専用の湯船に湯を張る。疲れておられるようだから、カモミールの葉のエキスを一緒に入れておこう。僕は手早く風呂の用意を済ませ、殿下の元へと戻った。

「殿下、お風呂の用意が整いました・・・あれ・・・？」殿下がなんだか間抜けな顔（いえ、失礼）惚けたお顔をなさってテーブルの上に置かれているものをご覧になっています。

「・・・ルーク、お前、これを何処で手に入れた？」僕の頭上から殿下の驚きと戸惑いに満ちた声が降って参りました。テーブルの上に置かれたもの、それは僕がペイリユード侯爵から預かってきたものです。いったい何が入っていたと言うのでしょうか？

42話：蜘蛛の糸1

ユフテスには続々と諸国から贈り物を携えた使者が到着していた。王宮の窓からその様子を見ている子供達がはしゃいだ声を上げている。「見て、おにいちゃま！あそこ、すごく人がいっぱいだよ。」

「ん、どれ？」今年15歳になるカイル王子の異母兄弟、オースティンは妹が指差す方に目を向ける。あれは・・・大国グランデイスの旗だ。オースティンは秀麗な顔を少し曇らせた。

「ルーシエル、そんなに身を乗り出しては危ないよ！」ともう一人の男の子が妹を止めた。淡い茶色の髪と焦げ茶の瞳をもつ活発そうな少年だ。

オースティンは二人の兄妹に目を向けると言った。「クルト、ルーシャル、僕はちょっと兄上にお会いしてくる。お前達は先に部屋に戻っておいで。」

「え〜」兄様、ずるい！二人はむくれてオースティンに抗議の姿勢を取ったが、オースティンは取り合わず、笑いながら、二人を送り出した。さて・・・と。オースティンはもう一度さつとグランデイスの一团に目を向けると眉をひそめた。他の国と比べても格段に人数が多い。いくら第一王位継承権を持つ兄上の儀式に参加するとして、あれほどの人数を送り込んでくるのは理解しがたい。オースティンは身を翻すとカイル王子の執務室へと足を早めた。

兄上が帰ってこられてから2週間、この城は異様に活気づいていた。母親が違うとは言え、兄上は私たち弟妹を疎む事もなく、可愛がって下さってきた。僕らは皆、兄上を敬愛している。ユフテス王の側室である母上は兄上よりも僕を王位継承者にと、やかましく言っているが僕にはそんなつもりは毛頭ない。誰が見てもこの国の時期国

王は兄上が相応しい。

兄上は戻られてから何か、すごく焦ったように政務に取りかかっておられた。ただでさえ、成人の儀を控えて忙しいと言うのに、夜もあまり寝ていらつしやらない様子だった。オースティンは己の拳を強く握りしめた。いつもなら、決して弱音を吐いたりしない兄上が、あの日、僕を呼んで仰られた。

「オースティン・久しぶりだ。元気にやっていたか？」

「はい！兄上もお元気そうで何よりです。リザルでの勉強は如何でしたか？僕も兄上の成人の儀を終えたら、リザルに留学する事になります。僕も兄上に恥をかかせぬ様、しっかりと勉学に努めます。」

「そうか、お前もリザルに……。良い事だ。お前もきつとあそこで良き友を見つけられるだろう。期待しているよ。」そういつて僕に微笑まれた。

「友……ですか？そうですね、楽しみです！ところで、兄上、今日はいったいどのようなご用件でしょうか？急用だと聞いておりますが……。」

「ああ、そうだ。オースティン、お前に頼みたい事がある。これは内密に調べて欲しいのだが……。」兄上は僕に大国グランデイスの事を告げられた。どうやら、グランデイスの間者がこの城内にいるらしく、色々と漏れるはずのない情報が相手側に筒抜けになっていると言うのだ。僕は兄上から話を聞かされた時、すぐに頭に思い浮かべた人物があった。

それは……。母上だ。母は元々グランデイスの大貴族からユフテス王家に嫁いでいる。ユフテス側としても、大国の貴族と繋がる事は、あまり資源のないこの国にとって付加価値が大きいと踏んでいたのだろう。母上は何不自由ないグランデイスの大貴族の娘として我が俥に育ち、ユフテスに嫁いでも、高慢な気性や権力に固執する

執念を保ち続けていた。

兄上は静かに僕に仰られた。「考えたくはないが、もしかしたらこれはお前にとって辛い思いをさせる事になるかもしれない……。だが、この件を任せられるのはオースティン、お前しかいないと思っている。――引き受けてくれるか？」

「……分かりました。兄上、お任せ下さい。必ずやこのオースティン、グランデイスの間者を見つけ、証拠を握りましょう。」もし、それが、身内の仕業だったとしても……。できれば、そうでない事を祈りたい……。我が母親がそれほど愚かでない事を願う。

――――

兄上の執務室の前まで来ると僕は扉をノックした。扉が開かれ、入れ違い様に魔術師長が真剣な顔つきのまま出て行った。何かあったのだろうか……？

「兄上、オースティンです。失礼致します。」そう言って僕は中に入った。

43話：蜘蛛の糸2

兄上は椅子の上に深く腰掛け何か考えている様子だった。入ってきたオースティンに気がつくのと、につこりと笑って出迎える。

「オースティン、来てたのか。すまない、考え事をしていて気がつかなかった。」

「いえ、お気遣いなく、兄上。それよりも、何事かあったのですか？ 魔術師長が何やら難しい顔で出て行きましたが……。」

「あ、ああ……ちょっとな。色々とごたごたが多くて、本当に猫の手でも借りたいぐらいだ。それよりも、あの件について何か分かったのか……？」

「いえ、まだ……ですが、昨晚母上の元に奇妙な来客が訪れました。」

「奇妙な来客？」

「はい。どうも密偵といった感じには到底見えなかったのですが、というのも、どこにいても目につく様な……。」オースティンは昨晚見た男の様子をつぶさに思い出す。

「髪はおかつぱのショッキングピンクで、紫の薔薇が染め上げられたマントを羽織った大男です……。」

「それは……確かに目立つね。それで何かその男の事について分かったのかい？」

「母上の部屋に滞在していた時間はさほど長くはありませんでした。後を付けようとしたのですが、城を出たところで見失ってしまつて申し訳ありません。」

「そうか、いや、まあいいさ、それよりもグランデイスからの一団が到着した様だね。」

「はい。先ほど、城の窓から見ました。当初の予定では10名ほど

だと聞いていましたが、あの数は、いったい……。しかもさつと
気を探った感じでは魔術師も数名含まれている様子でした。」

「今朝方、グランデイスから皇帝が儀式に急遽参加したいとの意を
伝えてきた……。人数が増えるのは護衛という名目上の事と言っ
て来ている。」

「……。怪しいですね。」

「ああ、だからこそ、あちら側にどれだけの情報が渡ってしまっ
ているのかを正確に確認したいんだ。大方、向こうが狙っているのは
竜の存在だろうが、それに連なる儀式の事などが知られていると厄
介な事になる。こうなってみれば、塔の周りの警備を父上が増やし
たのはあながち間違いではなかったかもしれない……。だが、ちょ
っと予想外の分子が増えてきたな。」そういつて兄上は疲れたよう
に笑った。

オースティンは兄の言葉に息を飲んだ。オースティンとて、この国
の第二王位継承者として、この国の存亡に関わる竜の事は聞してい
る。そして塔に囚われている贄の……。兄上の双子の弟の事も。正
直自分とて、この城に竜が眠っていると聞かされたときは何の冗談
かと思ったものだ。この事は王族とそして城の一部の関係者のみが
知っている事実だが、それがもうすぐ目覚めるというのだ。

僕も兄上ほどではないが、高い魔力を持っている。そう、グランデ
イスの中に潜む魔術師を見つけられるぐらいには。兄上は城の竜の
事について色々と調べ、リザルへ留学してからも、たまに里帰りし
ては、自室の隣にある図書室に籠っている事が多かった。兄上が長
い間塔の事を気にかけている事も僕はずっと兄上の事を見てきたか
らこそ知っている。兄上には何か策があるのだ。「兄上、僕も出来
る限りの協力は惜しみません。グランデイスの件についてはとりあ
えず僕にお任せ下さい。見張りを何名か付けておきます。」

「そうか、頼んだよ、オースティン。僕はちよつと水鏡の間に行つてくる。」そういうとカイルは立ち上がり様に伸びをするとオースティンと共に部屋を出て歩いた後、別れた。

44話：蜘蛛の糸3

水鏡の間に入ったカイルは扉を閉め、部屋に風魔法で遮断する。こ
うする事で、部屋全体に薄い風の膜のようなものが張り巡らされ、
中の音をシャットアウトするのだ。いくら王族しか入る事の出来な
い部屋とはいえ、今の城内、どこで何があってもおかしくはない。

カイルは部屋の中央に置いてある大きな半球体のボールのようなも
のに近づいていった。中には透明な液体が並々と溢れて廻りに掘っ
てある溝へと流れ出している。

カイルはその上に手を置くと静かに呪文を詠唱しだした。それに伴
って溢れる液体が光り出しまるで鏡のように誰かを映し出した。

「よう、時間通りだな・・・」水鏡の中に映った人物がカイルを見
て呟いた。

「ジェラルド・・・」カイルは親友の顔を認めるとほっとしたよう
に名を呼んだ。

「・・・顔色が悪いな、カイル。お前ちゃんと睡眠はとっているのか
？」

「はは、ジェラルドもオースティンも似た様な事を言う・・・あり
がとう、でも私は大丈夫だ。ジェラルド・・・なんだかつい最近別れ
たばかりだと言うのに長い間会っていない気がするよ。」

「そうだな、まあお互い色々・・・とある事だしな・・・」そういつ
てジェラルドは鋭い目をカイルに向けた。

「やっぱり、気付いてたんだね、ジェラルド・・・君なら・・・と思
っていたけど。」

「ああ・・・。お前の寄越したメッセージ、確かに受け取ったよ。」
ジェラルドはにやりと笑ってカイルを見やった。

「そうか・・・。これは一種の賭けだったんだ。お前、いやお前達が

盗んでいったあの本の秘密に気付いてくれるかどうかは・・・」

「おいおい、人聞きの悪い事言ってるじゃねーよ。盗んだつても、お前、わざと盗らせたんだろーが。まったく食えねー奴だな。」そう言いつつもジェラルドは苦笑する。

「本を持って行った魔術師、お前のお抱えか？こちらが飲み込まれるかと思うぐらいの強い力を持っていた・・・。あんな魔術師を手元に置いているなら心強い。」

「ああ、あいつ、キルケはそんなじゃねーよ。俺たちに協力してくれるかどうかはまだわからない。だが、明日にはキルケと一緒に来ようが来るまいが此処を立つ。」ジェラルドはキルケの金色に光る瞳を思い出す。明日、やつが来なければ諦めるしかない。

「ーそう、本当に賭けたったのだ。僕のメッセージにジェラルドが気付いてくれるかどうかは・・・。リザルにいた3年間の間、ジェラルドが僕、いやユフテスの王家について並々ならぬ関心を寄せていた事は分かっていた。我が国に時々密偵を放っている事も・・・。3年間の間、僕はジェラルドと接し、彼の真意を探った。彼を信用出来るかどうか・・・。僕は魔術師長に、内密に命を出し、ジェラルドが寄越した魔術師を城の地下にまで案内させ、わざと本を盗らせた。もちろんあの日誌は、一度解呪して僕が読んでいる。最後のページに手紙を刷り込ませ、魔法で一見それとは分からないようにコーティングしてからもう一度術を施した。」

「まったく・・・危うく見逃すところだったぜ。まあ、俺は魔力はほとんど持ち合わせてないが、お前の魔力の匂いは慣れたものだからな・・・。」それにキルケも・・・俺に本を渡す時、軽く裏表紙をたたいて、違う匂いがすると耳打ちしていきやがった。やはり只者ではない。」

「それで、あの本、いや、日誌に書かれている事は事実・・・なのか？」

「全部、本当の事だ・・・。だからこそ、お前達に協力を頼みたい。手紙にも書いた通り・・・竜や弟の事、こんなことをお前達に頼むのは筋違いだとは分かっている。だが、万に一つの可能性だとしても、弟を救い出したい。あいつには負い目がある・・・。」

父上や母上は、あいつの事をとうの昔に見捨てている。城の重鎮や神官達は何を言っても取り合おうとはしない。唯一、魔術師長と、あと幾人かは、私の意思を汲み取って協力してくれているが・・・。私一人でやりこなすには手詰まりだ。それにグランデイスの事もある・・・。」

「ああ、そっちの情報は俺も手に入れている。だが、どうして俺たちに秘密を明かしてまでお前は・・・。」

「ジェラルド、お前の事は3年間リザルに滞在している間ずっと、見てきた。信頼できるやつだと・・・。それにお前の性格上いくら恋敵とはいえ、あのお姫様の手前、あいつを見殺しにはしまい？リディアーナ王女は必ずあいつのところへ行くだろう。お前がついて来ないはずがない。無茶しそうだからね、あのお姫様。」カイルはふと笑ってジェラルドを見つめる。

「お前・・・ほんとーに厭な奴だな・・・。どこまで知ってやがる？リディアの事も・・・。」

45話：蜘蛛の糸4

「リディアーナ姫の事は、彼女が昔ユフテスを訪れた時から興味をもっていたさ。活発なお姫様だったよね。城を抜け出して、そして僕の片割れに会った・・・」。

やだな、ジェラルド、そんな怖い顔をしないでくれ。大体リディアーナ王女が塔に行つて、あいつと出会ったのも、すべて運命だよ・・・。僕は何もしていない、いや、出来なかったと言う方が正しいけどね。

彼女は異常なまでに僕の片割れに執着した。同じ顔をもつ僕が妬けるくらいに・・・。ユフテスにいたある間も彼女は何度も何度も、王や周りの者にあいつの事を助けてやって欲しいと言つて来た。この僕にもね。だが、あの時の僕らに何が出来る？ 実際、何もできなかった。諦めずに何度も何度も言い募る彼女を前にしてね。自分自身情けなかったよ。

父上は外交上の手前ずっと苦い顔をしていた・・・さすがに他国の王女を咎める訳にも行かないしね。国に帰った後も彼女はいつの事を気にかけて、お前以上に様々な事を調べようとしていたよ。僕もさすがに表立つて情報を流す訳にはいかないが、多少は情報が伝わるように裏で手を回したりもした。確信があつたんだ。彼女は必ず・・・もう一度やってくると・・・弟の為にね。

君とリディアーナ王女が幼馴染みで交流があるのは知っていた。あ、でも君がリザルに来てからはそれほどでもなかった・・・つけ？ 舞踏会で会ったときはびっくりしたな。あのお転婆なお姫様があんなに美しくなってるなんて、さすが傾国の美女と呼ばれたアステール王

妃のご息女だけある・・・君も彼女に釘付けだったよね、ジェラルド。

「

じつとカイルの話を聞いていたジェラルドだったが、こうも他人の手のひらでうまく転がされていたかと思うと腹が立つてくる。「ほっとけ・・・お前だって瞬きひとつせずに見ていただろうが・・・気付いてないとも思ったのか・・・くっそ、だったら何故、もっと早く言わない?! もっと早くにお前がこの事を相談していてくれたら、もっと他に手が!」

「できると思ukai・・・? 君も分かっているだろう、この件はそんな簡単な問題じゃない。リザルにいた間、何度か君に打ち明けようとも思っただけ、これにはもっと複雑に色んな事柄が絡み付いている。お前だって仮にも他国の王位継承者の一人だ。巻き込むのは簡単だが、リスクが多過ぎる。」

「つつても、結局巻き込んでるんだから、今更仕方がないだろう・・・。は、でもホントお前の言う通りどのみち運命だったんだよ。リディアがこの件にかわり合った時からな。だが、ひとつ言っておくが・・・俺はリディアをお前やお前の弟に渡すつもりは毛頭ない、それだけは覚えておけよ!」

水鏡の向こうでカイルの心底おかしそうに笑う声が聞こえた。「うわあ・・・ほんと君って独占欲の塊だな。まあ、その件は無事にこれが片付いてから・・・かな?」

「御託はいい、それよりも計画の中身の方だ、俺たちがユフテスにつくのは早くて6日後の夜か7日目、つまり儀式の1週間前になる訳だが、その時・・・おいっ?!」

突如水鏡が揺れてジェラルドの顔が消え去った。誰かに邪魔をされ

た・・・？もう一度水鏡の上に手を置き、呪文を唱えるが、水はさらさらと流れて行くばかりだ。

「ーおかしい・・・やはり何かが邪魔をしている？しかし何故・・・どうやって？！」

カイルは暫くの間、水鏡の表面をじつと見つめていたが、ため息をはくと呟いた。「どうやら、どうしても彼らに来てもらうつと困る奴らがいるって事が・・・。」

しかし参ったな・・・肝心な話は何もしないままだ。ジェラルド達がユフテスに到着するのは約1週間後、それまでにこちら側でも出来る事はしておかねば・・・カイルは踵を返すと風の封印を解き出て行った。

その様子をじつと見ていた者がいた。「ふふふ・・・そう簡単に事が運んでは面白くないからねえ・・・。じっくりと楽しませてもらうよ。」

46話：蜘蛛の糸5

「なんなんだ、いったい・・・」突然途絶えた交信を前にジェラルドは絶句する。

暫くの間回復を待ったが一向に変わる様子はない。ジェラルドはちつと舌打ちすると、部屋を出てリディアの待つ部屋へと向かった。

「あら、ジェラルド兄様、カイル王子との交信は終わったのですか？」部屋へ入ってきたジェラルドの姿を認めると、リディアが聞いてくる。

「切れた・・・」

「は？」リディアがきよとした顔を向ける。

「だから、突然切れたんだ！いったいどうなってるんだ。あんな事は初めてだ。」イライラした口調でジェラルドは部屋の中を歩き回っている。

「切れたって、交信が突然途絶えたのですか・・・？それは確かにおかしいですね・・・。私もそんな事初めて聞きましたわ。」

「何か強い魔力の妨害があつたなら十分に起こりうるぞ？」いきなり天井から声が降ってきたと思えば、何か黒っぽい物がどすつと音を立てて落ちてきた。

「うわっ！」「きゃあ！」リディアとジェラルドの声が重なる。

「なっ・・・キルケ？」

「キルケさん？」ジェラルドの声を聞いてリディアはその黒い物体に目を注ぐ。黒い物体・・・もといマントをすっぽりと頭から包んだキルケの金色の瞳が覗いている。

「お前・・・いったい何処から・・・いや、それよりも、どうして此処が分かった？！」ジェラルドの声が響く。室内にいたメイド達も

腰を抜かして床にへたり込んでいる。

キルケはゆっくりと室内を見回すと言った。「城の外にでるつもりだったのだが……。魔法陣の構成を間違えたか……。」「ジェラルドの質問には答えずぶつぶつと呟きながらキルケはフードを取った。

「ああ、やっぱりキルケちゃん可愛い……。あんな黒いマントなんて着ずにもっと可愛いお洋服やドレスがいっぱいあるのに……。とりディアはつい先ほど吃驚した事も忘れてキルケを凝視する。意外に胆が座っているリディアであつた。

「おい、キルケ！」ジェラルドはつかつかとキルケのところまでやってくるとその小さな肩をつかんだ、がぶわつと一陣の風が吹いたかと思うとジェラルドは軽く吹き飛ばされた。

「いきなり触るな……。」どうもジークフォールの一件で過敏になっているキルケだつた。

「いつてええ……。」「無様に尻餅をついたジェラルドの元にルークが駆け寄つた。「ジェラルド様、大丈夫ですか?!」

ルークはキルケを睨みつけると腰にさしてあつた短剣を抜く。「こんの、無礼者!」

「おい、止める!ルーク!」キルケに向かって走り出そうとしたルークだつたが、何故か足が地面にぴつたりとくっついて離れない。ルークの耳にキルケの馬鹿にした声が聞こえた。「まったく……。これだから人間は……。」「と言いかけたところで今度はキルケの悲鳴が上がつた。リディアがキルケを抱きしめ頬ずりしている。

またまた不意をつかれたキルケだつたが、にっこりと笑いながら金色の巻き毛を梳くりディアを見てため息をつく又何も言わなかつた。ジェラルドはそんな二人を少しの間羨ましげに見ていたが立ち上がってルークからナイフを取り上げると、キルケに言つた。

「ルークにかけた術を解いてやってくれ。」次の瞬間金縛りが溶けたかのようにルークの足が軽くなり、ルークはその場に崩れ落ちた。ルークは訳がわからないと言った様子でキルケを見ている。

緊張したその場に相応しくないようなのほほんとしたリディアの声が響いた。「びつくりしたのね、キルケちゃん、大丈夫？それにしても、よく此処が分かったのね？」吃驚したのはこちらの方だと部屋にいた全員が思ったが口には出さない。

少し不機嫌そうなキルケが言う。「ああ、以前会ったとき、鳥にお前達の後を付けさせていたからな。それにお前達の様な目立つ輩、調べればすぐに分かる。というか、お前・・・知られてないとも思ってたのか・・・まあ、いい。俺は2日前の返事をしに来たのだがな、驚かせてしまったのならすまない。」

「私たちと一緒に来てくれるの？」リディアが真剣な面持ちでキルケに尋ねた。

キルケがにやつと笑う。「ああ、乗りかけた船だしな、最後まで見届けてやるよ・・・。」自身の事情は隠したままキルケは二人にそう告げた。

47話：蜘蛛の糸6

「キルケ、さっき言っただけだ？水鏡の交信が途絶えた理由だが・・・」3人はリディアの部屋で落ち着いて話はじめた。ルークがナタリーと共にお茶の用意を持ってきて手際よくテーブルの上に並べて行く。おいしそうな焼き菓子や甘いお菓子も用意しており、敏感に匂いを嗅いだキルケは舌なめずりする。

「はい、キルケちゃん、このお菓子おいしいのよ。」リディアはキルケの横に座り、お菓子をとりわけ足りしながら甲斐甲斐しく世話を焼いている。

「ああ、だから強い魔力の波動をぶつけられるとしばらく交信ができなくなると言っただけだ。」もともとこの魔術は竜族がつかっていた物を人間に教えたのだ、知らない訳はない。

「そうなのか・・・？」ジャラルドは大人しく餌付けされているキルケを見ながら考え込む。確かにキルケはそんじょそこの魔術師が束になっただけでも負かされるくらい大きな魔力を持っている。だが・・・以前にも感じた事だが、何か得体の知れない物を感じるのだ。キルケがこんな幼い姿の女の子だとは夢にも思わなかったが、それ以上に奴は色々な事を知りすぎている。隠している事もありそうだ・・・こちらから協力を頼んだが、この選択が間違っていない事を今は祈るのみだ。リディアも気に入っているようだ・・・。

いよいよ明日はユフテスに向けて出発する。仮にも正式に他国に招かれているのだ、こちら側もそれなりの準備をしている。成人の儀の前の晩には王宮で大規模な晩餐会が催される。ジェラルドも本国からルークを通じて、カイルへの贈り物やら、晩餐会で着る夜会服など、必要な物はすべてそろえさせてある。

ここからユフテスまでは陸路と海路両方を使う。リディアと共に行く事になり、ルークやマリアベルといったお付きの者と警護などをあわせると、30名あまりの団体になる。が、それでも少ない方だ。今朝方得た情報では、グランディスも当初は使者だけを使わず手はずだったと言うのに、突如幼い皇帝がユフテスを訪れる事になり、総勢150名程が王城近くに野営をはっているという。国交がある近しい国以外はほとんどが使者ばかりだと言うのに、聞くだけでも物々しい数だ。やはりあの国が竜を狙っているというのはあながち嘘ではないかもしれん・・・。

「ジェラルド兄様・・・？」ふと気がつくとリディアが自分の顔を覗き込んでいた。とっさの事でつい顔が赤くなる。隅に控えているルークの忍び笑いが聞こえる・・・あいつ・・・後でどうなるか覚えておけよ。

「な、なんだ、リディア？！」

「いえ、先ほどから何度か声をかけましたが、全然返事がないものですから・・・。先日、カイル王子に事情を聞くと仰っていました。が、交信が途絶える前に、何かお話できたのですか？」

「あ・・・いや、結局本題に入る前に交信が途絶えてしまったかな。」

「そうなんですか・・・。もう少し詳細が分かるかと期待しておりましたのに・・・。」リディアがぼつりと呟いた。

実はあの日誌の裏にかくされてあったカイルの手紙の事はリディアには話していない。キルケのいぶかしそうな目線を受け、俺は首を振る。キルケは手紙の事を知っている。暫く俺をじっと見ていたキルケだったが、ふいつと目をそらした。あいつも大概何を考えているのか読めない。

「ともかく、明日にはここを立つんだ、キルケも必要なものは早め

に言ってくれ、こちらで用意させよう。」

「そうだな・・・質の良い魔道石をいくつか用意しておいてくれ。詳しい事は道々話しをしよう、俺は今から準備もあるので一旦帰るが明日の朝、城の前で待つ。」

「え、キルケちゃん、城に泊まっていけないの?！」リディアが叫ぶ。

「お前と一緒にいると、ろくな事になりそうにないからな・・・。」とキルケが低く呟く。確かにキルケの感は当たっている。

「ええーつまらないわ・・・。」とリディアが年相応にふくれた顔をする。どうもリディアはキルケの前では王女としての顔が崩れるようだ。先ほどとは違い、今度はマリアベルが含み笑いをしている。

「無理をいうな、リディア。キルケも色々と準備があるのだろう・・・。」
「ところでお前、この部屋に入ってきた時見たいにいきなり消える・・・つもりか?」

「いや、魔法陣は使わんど。あれは結構魔力を使うからな。ま、近い距離ならそうでもないが・・・出来るだけ魔力は溜めておきたいからな。此処からは歩いて帰る。」実はこの部屋に現れた時、キルケは聖地から直接この城までの移動術を行使したのだ。初めて行く場所はたまに出所を失敗する事がある。

「キルケちゃん、城下町までは結構距離があるわよ。馬車を出すからそれをお使いなさい?」とリディアが提案する。以前城下町近くの茶屋でキルケと会っているので城下町に住んでいるのだろうと思っただのだ。まあ実際にキルケは宿を借りているのだが。

「分かった、使わせてもらう。それじゃあ、ジェラルド・・・とリディア、また明日、城の門の前で落ち合おう。ああ、時間には遅れ

るなよ。」キルケはにやつと笑い、先導するメイドの後をついていった。

「とうとう、明日、出発だね・・・」「ああ」ジェラルドが相づちを打つ。ユフテスへの道のり、何事もなければ良いが・・・張り巡らされた蜘蛛の糸に足を踏み入れる様な・・・漠然とした不安がよぎった。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記 4

「ああ、それは今日殿下がお出かけになっている時にペイリユード侯爵からジェラルド様にお渡しするようにと言われた物ですが・・・。いったい中身は何なのですか？」そういつて僕はジェラルド様の手元を覗き込んだ。

「あれ・・・これは・・・」そこにあつたのは一枚の肖像画と手紙らしきものがついている。この方は確か・・・隣国の王女であらせられるリディアーナ姫？国は違えど、リディアーナ姫の美しさは諸国に知られている。それに、リディアーナ姫は、エストラードの国王同士仲が良いので、幾度かこの国を訪問されている。町中でもリディアーナ姫を模写した姿絵は飛ぶ様な売れ行きだと聞く。

僕は殿下の顔色を伺いながらおずおずと尋ねる。「あの、殿下、これってもしかなくてもお見合い用のものですよね・・・ジェラルド様、リディアーナ王女とお見合いなさるんですか？」

「・・・あいつは何と言ってた？」

「はい？」

「だからっ！ペイリユードは何と言っていたかと聞いてるんだ。」僕はびつくりして殿下の顔を見つめる。何をあんなに怒っていらっしやるのか、訳が分からない。

「え、えっと、ペイリユード侯はそれを殿下にお渡しするようにと・・・えっと・・・それから、あ！これを見れば殿下もお喜びになるとか何とか・・・。」

「ほう・・・そう言ったのか・・・あいつが？」なんだか黒いオーラが染み出している様な・・・。僕の本能が危険信号を告げている。

「あの・・・殿下？」

「あの野郎・・・いったいどういうつもりだ」殿下はリディアーナ王女の額縁を握り締めている。リディアーナ王女とのお見合いが何か問題があるのだろうか・・・

「あの、殿下・・・恐れながら、メイドが軽食を持ってきております。お食べになりませんか？」お腹がすいていると何かと苛立つものだ。僕はメイドが持ってきたトレイをジェラルド様に差し出した。

殿下は僕のほうをご覧になると、ちょっと顔を赤くして謝られた。

「すまん、ルーク。お前には関係ない事だったな。ありがとう、それを食べたなら風呂に浸かろう。お前も一緒にどうだ？」

殿下がお謝りになられるなんて・・・僕はちよつと感動してそして言った。「滅相もございません。ジェラルド様、ゆっくりとくつろがれて下さい。」

僕はテーブルに置かれた肖像画を片付けると替わりに軽食の入ったトレイから料理を出して並べる。軽く焙った肉を挟んだサンドウィッチに、果物、ホロホロ鳥の卵の蒸し煮に新鮮なオレンジの絞り汁などだ。

殿下は座つてそれをお食べになると、湯殿へと向かわれた。僕も着替えを用意して一緒について行く。王族の体を洗う為の侍女達はすでに待っているはずだ。

殿下の後について歩きながら僕は考える。殿下はもう18歳になれる。そろそろ婚約者候補の一人や二人いてもおかしくはない年だ。時期国王のパトリック殿下などは、もう17歳の時にはパンディッタの姫君とご婚約されていたはず。あのお美しい姫君に何かご不満でもあるのだろうか・・・確か姫君と殿下は幼馴染みだと聞いているが・・・もやもやとしたものを抱えつつ、湯殿についた。

殿下が服をお脱ぎになると引き締まった見事な体躯が現れた・・・いいな。僕もあんな風になりたい。湯船の外で控えている侍女達

も殿下の裸に見惚れているようだった。

殿下はゆっくりと湯船に浸かられると僕のほうを振り向いて仰られた。

「この匂い・・・カモミールだな。お前がやったのか、ルーク？」

「は、はい。お疲れの様子だったので、リラックス効果のある香油を混ぜてあります。」

「そうか、ありがとう。世話をかける・・・。」そういつて殿下は目を瞑られた。ほんのりと赤く染まった頬はとても色っぽく、僕までドキドキしてくる。

湯殿を出られると、また侍女が幾人かで殿下の体をお拭きになる。こういった一連の作業は昔から王家に伝わるものであり、一貴族の僕などは人前で裸になるなど、恥ずかしいが、殿下は気にもなさない様子だ。きっと他の王族もそうなのだろう。僕は侍女達と一緒に殿下の着替えを手伝った。

着替えが終わる頃、殿下が一人の侍女を呼び寄せた。何かをこそつと耳打ちすると彼女の頬は赤く染まった。そしてお辞儀をして出て行く。まさか夜伽に呼ばれたのだろうか・・・？最近はメイド長に小言を言われていた為か、城のメイド達には手をつけていなかったようだが・・・。

「あの、殿下・・・今のは？」遠慮がちに尋ねる。

「ん・・・ああ、気にするな、なんてことはない。」・・・いえ、

殿下、それはまったく答えになっていません・・・怒るメイド長の顔を思い浮かべて僕は盛大にため息をついた。

48話：囚われの王子

ひんやりとした石の壁に頭を寄せ付け小さな窓から差し込んでくる月の光を浴びる。ここのところ連日外から、風に乗って聞こえてくる声に耳を傾け自分の死期を悟る。塔の周りを徘徊する兵の数も増えていた。「誕生日が、僕の最後の日になるのか・・・皮肉なものだな、生まれた日と同じ日に死ぬなんて・・・」

長い間僕を温かく照らしてくれたこの月の光ともお別れだ。やっと、終わるのだ、僕の痛みも苦しみも・・・塔で暮らし始めて十数年間、彼の元には訪れるものもなく、ただ慰みに与えられた書籍が簡易なベットの脇に高く積み上げられている。

その中の一冊を手にとるとゆっくりと本の表紙をなぞる。――どうせ死ぬなら、もう一度遭いたかった・・・とその脳裏に浮かんしたのは幼いあの日、僕を連れ出した自分と同じ顔をもつ魂の片割れと、もう一人・・・僕の為に可哀想だと言って泣き、ずっと僕の手を離そうとしなかった幼い姫君。もし僕が死んだら、魂は自由になるのだろうか・・・？そうしたら僕はもう一度君たちのところへ会いに行こう。それぐらいならこの僕にも許されるのだろうか・・・？

月明かりの中何度も何度も繰り返し読んだその本を大切に元に戻すと小さな部屋を見渡す。窓際に置かれた小さな木の机、少し厚手の洋服が入った木箱、このベットに書籍。

本は本当に有り難かった。この何もない空間の中で外への興味と知識を与えてくれるものだ。読み書きはまだ幼かった頃、僕を育ててくれていた乳母が教えてくれた。もともと教養のあった人だったのだろう。生活に必要な様々な事を教えてもらったが、実際にそれを役立てる日は来ないだろう。書籍は誰が選んだのか、興味ある内容のものが月1回食事と共に持って来られていた。だが、それももう

すぐ終わりになる。本を選び差し入れてくれた人物にお礼が言いたいがそれも叶わないだろう・・・。

こうして毎晩眠れぬ夜を幾度となく過ごしてきた。肌寒い石の牢の中で僕は毛布にくるまる。僕は何故生まれて来てしまったのだろうか・どうせ生け贄になるのであれば、早く僕を殺してしまえば良かったのだ・・・そうすればこんな思いをすることはなかったのに。

ほとんど日に当たる事なく塔の中で育った僕はこれまで、何度か死にかけた事がある。だがその度にいつの間にかある程度体が回復するまで蘇生されていた。生け贄になるまでは死なれたら困るのかと笑いがでた。自分で死ぬ自由も与えられない・・・死ぬために生かされる人形のようなだと。

なかなか寝付けなくても、疲労が溜まれば自然意識を失うように眠りにつく。そして時折変わった夢を見るのだ。見た事もない地と人間達、そして大きな竜が空を舞う夢・・・そして僕は見た事もないはずの竜に手を差し伸べて名を呼ぶ・・・アルファス・・・と。

大抵そこで目が覚める。知らない間に目から流れ出た雫が頬を伝う。「アルファス・・・？」と名を口に出して呼んでみる。何故だか分からないのに心が痛んだ。

さえずる鳥の声でいつの間にか夜が明けている事を知る。ゆっくりと瞳を開き流れ出た涙を袖口で拭き取った。彼は昨晚持つて来られた水差しの中に入った水をカップに注ぎ口をつける。

生温い水が喉を潤して空腹の胃を満たす。残りの水に固くなった黒パンを浸し口の中に入れた。

塔の窓の隙間から2羽の鳥が入ってくる。その鳥に残りのパン屑を食べさせてやった。

去年はこの塔の中で巣作りを初め、3羽の雛が巣立って行った。生まれた雛が親鳥を求めて幾度も声を張り上げ、鳴く姿を眺め、雛が

巢立って行った日には一抹の寂しさを覚えた。

だが、もうすぐ僕もお前達みたいに自由になれる。体は無くなって魂は僕のもの……きっと自由に飛んで行けるよ……

49話：グランデイス1

ユフテスの王都からさほど離れていない小高い丘の上でグランデイスからやって来た皇帝と率いる部下達は移動宿泊用の大きな布で出来たテントの中で過ごしていた。

他の諸国からやって来た使者達も同じようにそれぞれの国ごとに用意されたテントに留まっている。

「余はいつになったら竜に会えるのだ?!」ひと際大きめのテントの中から子供の甲高い声が響いた。小さな子供が大きな玉座の上に座りふくれ面をしている。

「もう少しお待ち下さい、オズベルト様・・・今、手はずを整えているところでございます。もう少しでお望みの竜を手に入れられますとも。」と皇帝の脇に控えているお抱え魔術師のジルベスターが猫なで声で幼帝に語りかける。

少年は膨らました頬を少し戻すと今度は彼の右隣に立つ男に目を向けた。「本当か?もう少しとはどのくらいだ?!余はもう待つのは飽いたぞ?」

「さようでございますか・・・。それでは竜が手に入るまでの間、何か余興でもご用意致しましょう。おい、あれを持ってこい。」

「は」

しばらくすると兵が二人掛かりで大きな箱を抱えて持ってきた。「開け」との命令でその箱が開かれる。その中に入っていたのは大陸でもその数を著しく減少され保護されている稀少動物、フィクサーの子供だった。銀色の大きめの猫の様な体に長い尻尾、そして額の

真ん中には角が生えている。このフィクサーの角には大きな魔力が宿ると言われ、大陸中で乱獲され、今では数える程しか存在しない幻の獣だった。

「陛下、これはジルベスターが陛下の御為にと捕獲せしめた幻の獣、フィクサーでございます。この獣、多少気が荒いところもあります。が、陛下の言う事を聞くようにしつけがなされております故、竜が手に入るまでの間、どうかこれでお心をお慰め下さいます様・・・」

幼い皇帝は玉座から身を乗り出すと興味深そうに檻の中に入った獣を見つめた。

「なるほど、これがフィクサーか、初めて見たぞ？近寄っても噛まれぬのか？」興奮して幼帝が問う。

「大丈夫でございます。どうぞお近寄り下さい。」皇帝は玉座から降りるとそろそろと、フィクサーのいる檻に近づいた。気配に気がついたのか、フィクサーが顔をむっくりと上げてその宝石の様な深紅の瞳で皇帝を見る。そして威嚇するようにグルグルと唸り声を上げた。

伸ばしかけた手をびくつと幼帝が引つ込めると同時にフィクサーの体に電撃の様なものが走った。苦しそうにフィクサーが身を震わしその場に倒れ込む。

「な、なんだ、いったい！」幼帝が声を上げる。

もう一人オズベルトの脇に控えていた魔術師が杖をフィクサーに向けたまま、幼帝に申し開きする。「申し訳ございません。陛下に向かって唸り声を上げるなど、私のしつけが至らぬ証拠、どうぞお気になさらぬ様、すぐにでも陛下のお側に侍らすようしつけしなおります故お待ち下さい。」

オズベルトは軽く頷いて言った。「う、うむ・・・そうか。わかった。では代わりに何か珍しい食べ物でも用意しろ、余は腹が減った！」

そしてゆつくりと玉座に戻り座るとつまらなさそうに横たわった獣を一瞥した。

すぐに皇帝のための食事が用意される中、皇帝の右に立っていた男の元に兵が一人近寄ってきて、その耳元に何かを囁く。男は頷くと幼帝に向かい声をかけた。

「陛下・・・所用が出来ました故、御前を暫くの間、退出させていただきます」

「何だ・・・お前も余を置いて行くのか・・・イルディアス」

「すぐに戻って参ります故・・・」

「ふん・・・わかった。許す。」イルディアスはオズベルトに一礼すると幕屋をでていった。

50話：グランデイス2

幕屋をでて丘の反対側にある森への入り口へとイルディアスは歩いて行く。突如上から声が降ってくる。

「よう、將軍、ここだよ、ここ！」

上を見上げると、木の上に男が一人立っていた。男は器用に枝を伝い降りてくるとイルディアスの隣に飛び降りた。年の頃は、二十歳ぐらいか。日に焼けた健康そうな褐色の肌。右腕には複雑そうな文様を絡み合わせた濃紺の入れ墨が彫られている。軽装に見えるが腰に巻いた動物の毛皮の下には何本もの鋭いナイフが入っている事を知っている。

男はイルアデイスを見るといつと目を細めて面白そうに笑う。

「・・・なんだ？」

「いや、別に・・・相変わらずの仏頂面だと思って。」

「お前に言われたくはない・・・。それよりも用件はなんだ。何か新しい事でも分かったのか？」

「ん、竜の事なら、大体この間伝えた通りだぜ。ほんとーにお婆さん馬鹿だよなあ。国の機密をべらべら喋っちゃって、頭足りてねーんじゃないの？大体それで、自分の息子をユフテスの国王にできると思っただからほんとめでたいぜ。」

まあ、竜と関連してる・・・といやー、関係してるんだが、なんだっけ？その竜が目覚める時にあの塔の中に入ってる奴が竜を延命させる為の生け贄になるんだろ？そいつを喰わせたところで、俺らが横から竜をかつさう・・・というのは良いんだけどよ、邪魔者がいるらしいぜ？」

「邪魔者・・・？誰の事だ？」

「アステールとエストラダの連中、塔の中の生け贄を横取りしようとしているらしいぞ？」

「・・・その情報、何処から手に入れた？」イルディアスが訝しげに問う。

「それは、内緒！でもこれは信用できる確かな情報だぜ。」

「ふん。お前がいつも何処から情報を仕入れてくるのか、興味がある処だが、それが事実なら面倒くさい事になるな・・・。しかし何故アステールとエストラダが関わってくる？あやつらも竜の事を嗅ぎ付け、狙っているのか？」

「うーん、一概にそうとも言切れないな。俺が調べて来てやるよ・。丁度奴ら、こつちに向かつて来ているらしいし、途中で足止めしときゃー、問題ないだろ。」

イルディアスが、少し考えるようにあごをなげる。「ふむ・だが下手をすると厄介な事になりかねん。向ここの国からは誰が来る事になっている？」

「確か、アステールの第一王女と、エストラダの第二王子だったかな・・・」

「なるほど・・・仲の良い事だな。よし、足止めの件はお前に任せよう。だが、怪我はさせるなよ。こちらの首尾が上手くいくまで、不安要素は一つでも減らしておいた方が良くからな・・・」

「わかった。じゃあ、また連絡するよ。」そういうと男は猿のように枝から枝へと器用に飛び移りあつという間に見えなくなった。暫くその残像を見ていたイルディアスだったが踵を返し、歩き出した。

「――大国グランデイス、グランデイス帝国――」

そう諸国に呼ばれ出すのに長い時間はかからなかった。元々騎馬民

族の長だった初代帝王が国を立ち上げ、近隣諸国を侵略、併合し、国は益々大きく栄えていった。イルアデイスは先代帝王の腹心の部下として將軍の地位を得、またその名に恥じぬ様国の発展に尽力を尽くした。

そんな時に、帝王が暗殺されたのだ。他国への侵略を繰り返し大きくなってきたグランデイスにもちろん敵は多く、帝王を刺殺した輩もすぐにその場で毒をくらい死絶えた。

帝王が息を引き取る今際の時まで気にしていたのが、残された幼い子、オズベルトだった。軍事力で幾ら国を大きくしようと、帝王やその家族の周りにはいつも死の危険が隣り合わせにあった。事実、幼帝の兄弟は全て毒殺されている。

大きくなった国を守る為には軍事力だけでは足りない。そんな時耳にしたのが、伝説の竜の存在だった。国に豊かな恩恵と知恵、そして鉄壁の護りを与えるという竜の存在。

先代の帝王はその伝説の竜を手に入れようと躍起になった。そして竜の聖地と呼ばれるトレム山地まで沢山の兵を使わしたが、結局竜を手に入れる事は叶わなかった。

51話：グランデイス3

先帝が亡くなってから残された唯一の幼いオズベルトが皇帝となった。物心ついた頃より周りには自分にかしずく大人しかおらず、寂しさも相まってか、イルディアスにはよく懐いた。だが今のままで、またいつ他の国から侵略、もしくは侵略併合した国より独立を求め離反されるとも限らない・・・内部でもあわよくば幼い皇帝を抹殺して自分が覇権を握ろうとしている臣下が少なくともいる。今回皇帝と一緒に連れ出したのも、自分の目の届くところにおいておく為だ。今の幼い皇帝では力が足りないのだ。

そんな時、帝国が抱える魔術師の一人であるジルベスターがこのユフテスの王宮地下に眠るといふ竜の話を持ち込んで来た。どこかの情報屋から情報を買ったのだという。ジルベスターともう一人・・・グランデイスの宰相はしつこく伝説の竜を手に入れるべきだと主張した。

最初は疑ったが、確かに竜が手に入るといふならそれは願ったりだ。ユフテスに密偵を使わし、グランデイスの大貴族からユフテスに嫁いだ第一側妃の証言や、そして塔に囚われているという竜の贄と呼ばれる男の事、ユフテスの内情を調べていくにつれそれが紛れもない事実だと確信した。

そして、最初にその情報をもたらした男、それがあの入れ墨の男だった。名前は確かオーセと言ったか、だがそれも本当の名であるかどうかもわからない。流れの情報屋だと奴は最初にあつた時言つて不敵な笑いを見せた。情報屋・・・とは思えない程鍛錬された体、そして不思議な文様の入れ墨。そのところを突っ込むといつも上手くはぐらかされてしまう。

「趣味なんだよ。ナイフもね・・・。」そういつてくるとナイフを器用に扱う。奴の言葉遣いに切れた一兵が奴につかみかかった事があつた。奴は事も無げに鍛えられた兵をねじ伏せ、ナイフをちらつかせて脅した。

事実奴の情報屋としての能力は高く、奴がもたらした情報はことごとく当たっていた。しかし、腑に落ちない奴の素性。だが、今のところは奴を飼っている方が都合がいい。そう判断して私は奴を咎める事もなく好き勝手にさせている。

ユフテス城内にいる、第一側妃との密談や封書のやり取りも全ての男が取引していた。

まだまだ竜の生態やその竜がなぜユフテスで眠っているのかなど、わからない事は多い。だが、竜を手に入れるこのチャンス逃す訳には行かない。ユフテスは小さな国だが、優秀な魔術師を沢山抱えている。今のグランデイスは、国内の波乱を押さえるのに精一杯で他国に攻め込む余裕はない、優秀な魔術師達はそのまま国の軍事力にも大きく関わってくる。それにユフテスとてこんな時でもなければ、他の国から大勢の使者を招き入れる事はない。実に都合が良かったのだ。今回の王子の成人の儀は・・・それにこの小さな王国が今までどの国にも侵略される事無く、生き延びて来た事実こそ、この国が竜の加護を得ているという証拠ではないのか。手に入れる！その竜を・・・まだ幼いオズベルト様の為にも。イルディアスは拳を握りしめ幼い帝王がいる幕屋へと早足で去って行った。

「馬鹿だなあ・・・あいつも。本気で竜の加護が手に入ると思っているのか・・・って情報を流してるのは俺だけだな・・・クスクスー」
「竜の事はともかく、俺はやっぱりエストラダの第二王子と遊びたいな。剣豪・・・どれくらいなのかな。久しぶりに楽しめそうだし！」

入れ墨の男、オーセは木々の間を軽く飛びながら心底楽しそうに笑う。が、その途端彼の脳裏にキンキンした声が響く。

『カルナ、あんた何処をほつき歩いてる訳？さっさと帰ってこいって言ったでしょう、まったくあなたって子は、何かに夢中になると人の話を全然聞かないんだから・・・』

『うつせーな、その名前で呼ぶなっつってんだろーが・・・。大体なんだよ、そのキンキンした波動。普通の声でも十分キモイってのに・・・。』

『なんですって？！アンタって子は育ての親に向かって酷い言い草ね。私そんな子に育てた覚えは無いわよ？！ともかく一度帰ってらっしゃい。色々忙しいんだから。』

『はいはい、わかったよ。じゃ、後でな。』思念波を遮断するとオーセはチツと軽く舌打ちして地面に降り立つと地上に降り立ち、移動呪文を唱え、その場から消え去った。

52話：動かぬ証拠

「それではやはりベルガリーゼ様が・・・」カイルの顔が苦く曇った。

「・・・申し訳ありません、兄上」オースティンが力なく頷いた。

「いや、お前のせいではない、オースティン。辛い思いをしているのはお前の方だろう。すまなかった・・・」

「いえ、兄上。悪いのは全て母上です・・・。まさか、他国から嫁いで来たとはいえ、本当に王家の秘密をグランデイスに渡しているとは・・・。」そういつてオースティンは側妃ベルガリーゼが書いたグランデイスへの手紙を握りしめた。

「だが幸い、ベルガリーゼ様は王位継承者ではない。竜や贅のことは知っていても詳しい事実まで知らないはずだ。つまり中途半端に情報が流れていると思って良いだろう。さて、どうしたものかな・・・。」

カイルは考え込む。情報を他国に流した側妃は、王宮の審問会にかけられるだろう。オースティンの事を考えるとであれば極秘に済ませたいところなのだが、事が事だけに、そういう訳にもいかない。下手をすると他国まで巻き込んで戦争にもなりかねない。それほど、竜の存在は大きなものなのだ。とりあえず、父上には話しておかなければならないな・・・。

それと気になるのはこの間不自然に中断された水鏡の間での出来事だ。古い文献などを調べると、なにか大きな魔力をぶつける事で一時的に術が四散し使えなくなると書いてあった。

今頃ジェラルドとリディアーナ姫はとくにこちらへ向かって来ているはず。船にでも乗っている頃だろうか・・・。無事につくと良

いのだが・・・。

沈黙に堪えきれないようにオースティンが呟く。「兄上・・・母上の事は如何いたしますか？」

「そうだな、悪いがこのまま放っておく事はできない。一度、父上に相談して、そして審問会にかけられるだろう。良くて、記憶を失させる秘薬を飲まされ追放と言うところか・・・。だが、私の方からも審問会に掛け合ってみよう。」

「わかりました・・・。」カイルはそつと異母弟の体を抱きしめた。「心配するな。できるだけの事はする。」

オースティンはカイルの部屋から退出すると、重い足取りで庭へと出て行く。結局以前みかけた変わった珍客の姿をもう一度見る事は無かったのだが、ベルガリーゼが貴族のパーティーに呼ばれて外出している時、見つけたのがこの封書だった。手紙は2通あり、一通はグランデイスからのもの、そしてもう一通はベルガリーゼが書きかけたものだった。

グランデイスの手紙には、読んだ後はすぐさま破棄するようにとしたりためてあったというのに、それは、さほど探すでもなくあっけなく見つかった。新しい宝石やドレスが増えていた事を見ると、どうやらそれらはグランデイスから貢ぎ物、いやスパイへの報酬にでも贈られたのかもしれない。きっとそちらの方に夢中になって失念していたのだろう。

母の愚かさをかばう気はない。オースティンは第一側妃の唯一の息子だったが、物心ついた時から母の腕に抱かれた記憶は一切無い。気位が高く高慢な母上・・・オースティンの世話はいっさい乳母任せで、オースティンにとっては乳母や第二側妃のほうがよっぽど自

分の親らしかった。自分を王位につかせようと画策していたのは知っているがそれも、オースティンの為を思っただけではなく、自分を満足させる権力を手に入れるためだということもわかっていた。

だが・・・そんな愚かな人でも自分の唯一の母親なのだ。

庭園のベンチに腰をかけるとオースティンは深々と溜め息をついた。突如ガサツと後ろの茂みが音を立てた。

「誰だ！」振り向いたオースティン。其処には想像だにしていなかった人物が立っていた。

「お前は・・・！」そう、いつか母の部屋から出て来た不審人物が庭先にたつてオースティンを眺めていたのだ。思いがけない登場にオースティンの体が強ばる。だが・・・

「ふふ、そんなに怖がらなくても良いのよ、子猫ちゃん・・・。随分とお疲れのようだったけど、大丈夫なの？」

子猫ちゃん・・・？なんなんだ、こいつは！「お前はいったい何者だ！」

「やあだ、そんな大声を出しちゃ、衛兵が来ちゃうじゃないのよ。もう少し静かにしてちょうだい。オースティンちゃん。」

「何故・・・僕の名前を知っている？お前、母上とどういう関係なんだ？！」

「ベルガリーゼ・・・様はあたくしのお得意様よ。色々と豪氣にいつもお買い物して下さっているの。フェロモンを倍增する香水や何やらね・・・」まあ、それももう終わりって処だけど・・・と呟いた声はオースティンには聞こえなかった。

「商人・・・なのか？」こんな奇抜な格好をした商人など今まで見た事もない。

「そうよ。それでも結構知られた顔なんだから。さて・・・とあなたが大きな声を出すから何人かこちらに向かって来てるわね。あたく

し、メンドクサイ事は嫌いな。それじゃ・・・またね？子猫ちゃん。
「そういつて奇抜な大男はあつという間に茂みを縫っていなくなつた。

バタバタと何人かの衛兵の足音が響く。「オースティン様！大丈夫ですか？」「幾人かが、オースティン様が叫ばれるのを聞いたと・・・！」

「いや・・・大丈夫だ、何でもない。」そう言いつつオースティンは謎の商人が去って行った後を追うように目を泳がせた。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記5

「あつ・・・んんっ・・・はあ・・・ジェラルド・・・様」

室内からくぐもった喘ぎ声が聞こえてくる。僕はいたたまれずにその場を退出した。自然顔が真っ赤になる。知識として知っていても実際にあーいった声を聞かされるとどうすれば良いのかわからない。このところ、しばらく大人しく真面目にしていると思っていたのだが、どうも今日あの肖像画を見てから殿下の様子はおかしかった。いったい何だというのだろう。

長い渡り廊下を曲がると僕はほうつとため息をついた。

「もう一度・・・ペイリユード候にお話を聞いてみようか・・・殿下の様子を教えてくださいと言っていたし・・・。」僕はもやもやした心を抱えつつ部屋に戻った。

その頃、ジェラルドは冷めた目でベットに横たわる女を眺めていた。幾ら女を抱いたところで、心の奥底にある飢えた渴望が満たされる訳ではない。

ジェラルドはむっくりと起き上がると、夜着のガウンを羽織る。

「ジェラルド様・・・」女の甘えた様な声が静まった寝室に響いた。

「・・・ちよつとほとぼりを冷ましてくる。」そう短く言い放つと

ジェラルドは女をベットに残したまま部屋を立ち去った。

慣れたものなのだろう、侍女もそれ以上は何も聞かず、手早く着替えをすませると、静かに扉を閉め出て行った。

城の大きなベランダへ続くドアを開け外にでる。ひやとした風がジェラルドの側をすり抜けた。ジェラルドは今日ルークが預かって

来た肖像画と手紙の事を考える。

その手紙は紛れもなくアステール王国からの信書であった。大抵王族の見合い用にと描かれる肖像画には、必ずその国の王族のみが着ることの事のできる、ローブデコルテを見にまとい、王家の紋章が入った品を一つ手に持っているフォームで描かれる。

アステールでも指折りの画家が描いたであろう、リディアーナはローブデコルテの上にマントをはおり、流れる緑黒の髪に大きめのダイヤとルビーをあしらった冠を付けている。少し誘うように開かれた口元、伏し目がちの大きな黒曜石の瞳、画家が渾身の腕を振るった事は間違いのない、素晴らしい肖像画だった。

だが・・・、なぜ今頃リディアとの見合いの話が持ち上がったのだろうか。しかも国王直筆と思われる手紙を伴って・・・。この見合いは望まれてセッティングされたものだ。普通ならば願ったり叶ったりだと喜ぶべきなのかもしれないが、腑におちない。

ペイリユード侯爵は、すでに結婚した兄嫁の後見人でもあり、また新たに、相手の決まっていらないジェラルドに度重なる縁談をもつて来ていた。

ペイリユード侯爵は現国王の末の弟で王家との繋がりも深い。小さな頃は彼の娘や息子ともよく遊んでいた。それに、奴は知っているはずだ・・・俺がリディアの事をどう思っているのかを。だからこそルークにあんな事を言ったのだろう。昔から何故か奴の前では自分を偽る事ができなかった。いつも何もかも見透かした様な目でこちらを見てくる・・・。

「くそっ」何かはめられている様な苛立を覚える。

「あらあら、こんなところでそんな格好のまま立ち尽くしては、

お風邪を召しますよ、ジェラルド様・・・。」後ろから凜と張りつめた声が聞こえる。

この声は・・。「義姉上・・。」ジェラルドの兄、パトリックが最近パンデイツタから迎えた美貌の花嫁だった。ライラック色の薄いナイトガウンの上に厚手のチュールを羽織ったその人は流れる淡い金の髪と青い瞳を持っている。

「如何なされたのです、義姉上、こんな夜更けに供も付けず・・。」ジェラルドは少し咎めるようにきつく問いたです。

「あら、それはあなたも一緒でしょう・・?」そういつて彼女はにっこりと花開いたように微笑んだ。

53話：旅路1

「相変わらず時間には正確だな、キルケ。」ジェラルドとリディアが門の前に体を預けるようにして待っているキルケを見つけて駆け寄ってくる。

「当たり前だ。準備はできたのか？」キルケが問う。

「ええ、もちろんよ。これから暫く一緒にいられるのね、キルケちゃん。嬉しいわ！」リディアがキルケの手を取り微笑んだ。

「・・・まあ、な。」キルケが頷く。

キルケを含めて約30人余、馬車と馬に乗る者たちと別れて旅立ち、2日目、大きな港のある町、ウォルガスに到着した。とりあえず出発前に感じた嫌な予感とは違い、ここまで何の支障もなくたどり着いた。

「取り越し苦労だったか・・・」ジェラルドが呟く。

「え、なに？」同じ馬車内に乗り合わせたリディアが無邪気に微笑む。少し前までは自分に対してこんな笑顔を見せてくれる事はなかっただろう。今回の救出劇は色々と不本意なところはあるが、リディアの作らない笑顔をまた見る事ができるようになったのは喜ばしい。

「いや・・・なんでもない。」そういつてジェラルドは微笑み返した。

少し開かれた窓の外から港町らしい、潮の香りが漂ってくる。キルケはクンクンと鼻をうごめかして興味新々と言った様子だ。キルケのこういった姿を見るのは初めてだった。いつも外見にはそぐわない口調と態度だったが、こうして窓の外をくりくりとした大きな金色の目をいっぱいに広げ口をぽかんと開けている様は年相応の子供に見える。ついおかしくなって吹き出してしまう。

「なんだ？」視線に気がついたのかキルケから不機嫌な声が発せられる。

「いや・・・お前のそんな様子初めて見たと思ってな・・・。海を見るのは初めてなのか？」

途端キルケの顔は真っ赤になる。「うるさい！海は・・・見た事はある。ただ色々面白いものがいっぱいあるから、ちよつと興味を惹かれたただけだ！」

なるほど、港町であるウォルガスは、王都付近の町とはまったく違う形相を見せている。通りに並ぶ白っぽい煉瓦作りの町並み、活気のある魚市場、大きな帆船が幾つも並び、町行く人々も陽気で楽しそうだ。

「見て！キルケちゃん、あれが私たちの乗る帆船よ。」二人は同時にリディアの指差す方を見る。確かに素晴らしく大きな帆船だ。帆船の帆先にはアステールが祀る豊穡と繁栄の女神、アルクレスの虚像が彫っており、帆にはアステールの紋章がついている。いかにも王家の船らしい。またまた、キルケは新しいオモチャに夢中になった子供のように帆船を眺めている。やがて馬車が留り、一行は外へでる。潮風が優しく頬を撫でた。天気も申し分無い。

マリアベルが寄つてくるとにこやかに告げる。「リディアーナ様、帆船は後一刻ほどで出航いたします。海を越えればいよいよウリムナ大陸ですわね！」マリアベルも海を渡って違う大陸へ行くのは、昔リディア付きの女官としてユフテスへ渡った時以来だ。心無しか、声が弾んでいる。

この世界には大きく分けて3つの大陸がある。一つはリディアやジエラルド達の国があるリムド大陸、もう一つは古国、ユフテスや大国グランディスが存在するウリムナ大陸、そして最後にパンディツタや、リディアーナの母の祖国スミルナ国があるドーラ大陸。この三つの大陸はもともとは一つの大きな大陸だったとらしいが、いつ、

なぜ3つに別れてしまったのかは謎である。

王宮の考古学者達は今のこの魔術と技術の発達した世界の中でミッシングリンクというものがあると騒ぎ立てていたが、結局のところ、まだ何の解決にも至っていないらしい。

「どれくらいかかるんだ？」キルケがジェラルドに問う。

「そうだな、船に乗っているのは3日3晩ってとこだ。ユフテスまでは、ウリムナ大陸についてから1日半の道のりだ。ウリムナは高い山々や森が多いが、山があるのは丁度ユフテスの反対側だ。山越えがあると厳しいからな。」

知っている・・・キルケ達の住む竜の聖地はウリムナ大陸の中でも一番険しい山脈が連なるトレムにあるのだから・・・。

「そうか。船に乗るのは初めてだ。なかなか面白そうだな。」キルケは帆船を見上げて言う。

「お前他の大陸に渡るのは初めてなのか？意外だな。あちこち行ってそうなのに・・・」とジェラルドが笑いながら尋ねる。

「残念ながら、ないな・・・」というのはもちろん嘘だが、船をつかって大陸を渡った事など一度もないのであながち嘘ともいえないだろう。

54話：旅路2

船の出港にあわせてカモメやウミツバメ達が上空を舞う。

「出航だ！錨を上げろ！」船長の声が響いた。

大きな帆船が風を受けてゆつくりと動き出す。リディア達は皆看板に出て船の上から町並みを見渡した。今回のユフテスへの訪問は王家の個人的な訪問という事にしてあり、公には発表されていない。だからこそ、30名あまりの人数で喜楽に動けるのだが、港には何処から聞きつけたのか沢山の町民達が集っていた。

「姫様！お気をつけて！」「旅行の無事を祈りますぞ！」「リディアーナ姫様！」

中にはこんな声も聞こえる。「きゃー、ジェラルド様よ！」「こつちを向かれたわ！素敵！」黄色い声援を送る女の子達に看板の上からジェラルドがにっこり笑って手を振る。

「・・・おもてになる事ね、ジェラルド兄様」

「おや、焼きもちかい？リディアーナ。そうだとしたら嬉しいが・・・？」そういつてジェラルドはリディアを抱き寄せる。陸地からいつそう黄色い悲鳴が上がった。

「ちよつ、ちよつと、ジェラルド兄様！」突然引き寄せられてその青い目で甘く見つめられ、リディアの心臓はこれ以上無い程に早い鼓動を打つ。

急いで振り払ったものの赤くなった顔をばっちりジェラルドに見られてしまった。

以前舞踏会でジェラルドの意味深な視線を受けてからたまにジェラルドが見せる男の顔にドキドキしてしまうのだ。

（気のせい・・・気のせいよ。ちよつと赤くなったのだって、ジェラルド兄様がいきなり抱き寄せるからびっこりしただけ）とはい

つつ、黄色い声援を受けさわやかに手を振るジェラルドを見て何か面白くない感情がわき上がるのも事実だった。

「ーなんだか変な感じ……。私疲れているのかしら。出発前は色々とおったし、きつとそのせいよね。これは絶対に焼きもちなんかじやないわ。いつも女性に調子の良い兄様にあきれているだけだわ。」

またそんな二人の様子をルークが影ながら観察していた。

やっぱりジェラルド様、リディアーナ姫が本命なんだな……。いつもと違って表情に余裕がない。きっと姫様に嫌われまいと必死なんだ。リディアーナ姫も、ジェラルド様とあやつて戯れているところをみるとまんざらでも無いのかもしれない。真つ赤になっているリディアーナの姿を見て思う。頑張つて下さい、殿下！ルークはいつもお側で殿下を応援しております！

と、いきなり横からのんびりとした声が聞こえる。

「ふーんん・・ジェラルドの奴、あの小娘の事が好きなのか。わかりやすいな。」

「なっ！」びつくりして声の主を確かめる。いつの間にかキルケがにやにやしながらルークの隣にたつて同じように二人を眺めていた。「キルケさん？！びつくりするじゃないですか！そ、それに、殿下や姫様の事を呼び捨てにするのは不敬罪ですよ！大体小娘って、あなたどう見ても僕と同じぐらいか、それより年下でしょう！」ルークがキルケに詰め寄る。

「うるさい奴だな……。お前、ルークとか言ったか？ジェラルドの腰巾着。俺は、あいつらに“必要だ”と言われてわざわざついて来てやっってるんだ。お前にあれこれ言われる筋合いはない。人間の王族など俺には関係ないからな。大体俺はお前よりずっと年上だ。一

緒にするな。」

ルークはキルケの物言いに啞然として口をぱくぱくさせている。どうやらシヨックが強過ぎてまともに脳に届いていないらしい。

キルケはルークをほっておいて二人の方へ歩いて行く。それに気がついたリディアがキルケのところまで、走りよつてくると、強引にキルケの手を引っ張り船内へと消えていった。まだ顔が赤いところを見ると照れ隠しかもしれないが。

ジェラルドは満足そうにそんな二人を見送っていたが、船内へと降りる階段の側で固まっているルークを見るとそばによっていく。

「どうしたんだ、ルーク？変な顔して」

途端ルークが涙目になってジェラルドに縋り付いた。「いつたいあのキルケさんって方はどういう人なんですか？僕あんな失礼な人にあつたのは、初めてです！」

ルークの必死の問いかけにジェラルドは軽く頭を掻いて答える。

「ああ・・・あいつの事はあまり気にするな。あいつの物言いは昔からだ。俺たちが王族だとわかつてもらたたく物怖じしない・・・ちよつと変わった奴だが俺はあいつの事を気に入っている。それに・・・あいつは今回の計画に無くてはならない奴だからな。」

計画、そうだ、僕もジェラルド様のお側に仕えて、今回の訪問の真の目的を聞かされている。この事を知っているのはジェラルド様お付きの僕とリディアーナ姫腹心のマリABEL侍従長（メイド長）だけだ。他は、皆キルケの事をユフテスの王子の誕生日にあわせてジェラルド様が雇った余興の魔術師だと思っている。

本当は、すごい人なのかもしれないが・・・やっぱり僕はあの人が悪手だ！

55話：旅路3

真っ赤になったリディアに船内の部屋に連れ込まれたキルケだったが、ナタリーが用意したお茶を飲みつつ、リディアと対面していた。「お前の行動は時々突拍子も無いな・・・。」キルケがずっと一口お茶を飲みながら言う。

「ごめん、キルケちゃん、いきなり連れて来ちゃって・・・。」リディアは申し訳なさそうに上目使いでキルケの様子を伺う。気にした様子はなさそうだが、こんな小さな女の子に呆れられている事実、ちよつとシヨックを覚える。いや、確かに自分が悪いのだが・・・。

「で、お前はジェラルドの事が好きなのか？」キルケが丸い目をくりくりさせて問うた。

いきなりの直球にリディアは口に含んだ紅茶を吹き出しそうになる。ついっぱい口に含みすぎた熱い紅茶と自分自身が発する熱、両方を感じる。

「あつっ！」舌をやけどしてしまったらしい。少し涙目になる。キルケは可愛らしく首を傾げたまま自分の方を見ている。わかっている、悪気はないのだ。それにきつとキルケは先ほどのジェラルドとのやり取りを見ていたのだろう。きつと誤解してるのだ・・・。真っ赤になった自分の顔を隠したくなつて来た・・・。

「ち、違うのよ、キルケちゃん。私は別にジェラルド兄様の事が好きって言う訳ではないの。ただ兄様はいつもあんな感じだからちよつと驚いただけ。」

「そうなのか？」

うつ・・・キルケちゃんの視線が痛い。「そうよ。私は・・・小さな頃からずっと想っている人がいるもの。」と小さく呟く。

「ふうん、それが例のお前が助けたいと言っていた塔の奴か？」相変わらず直球だ。

「うん・・・。」

「というか、お前そいつとは一度しかあった事が無いのだろう？それで好きになったのか？」ごもつともな質問である。なんでキルケちゃんってこんなに小さいのにドンピシャな質問を投げかけてくるんだろう・・・。魔術師が見た目通りの年ではないと言う事はわかっているのだが、キルケは何故か口調は立派な大人のものだが、雰囲気は幼く感じるのだ。

リディアは苦笑する。「う、うん・・・まあそうなんだけどね。なんと言ったら良いのか・・・キルケちゃんにはわかるかなあ？彼と初めて会った時、すごく不思議な気分だったんだ。泣きたい様な、胸がきゅーって締め付けられて苦しいのに何処か安心する・・・子供心にこの人の事を何があっても手放したくないって思ったんだ。」

リディアの少し恥ずかしげでいて幸福そうな顔をみてキルケはアルファスの事を思う・・・。なんとなくわかる感じがするのだ。

「じゃあ、ジェラルドの事は何とも思っていないのか？」

「うん・・・確かにジェラルド兄様の事も好きだとは思うわ。ちよつと前まで苦手だったんだけどね・・・今は信頼できる大切な人・・・でも、キルケちゃんの言う様な好きかどうかはわからない・・・。時々あの瞳に見つめられると訳がわからなくなる事があるのよ。それに少し怖い感じがして、兄様には申し訳ないと思うのだけど、どうしてかしらね・・・。」

それは狂おしい恋の瞳・・・リディアは実際にはどこかでジェラルドの本当の気持ちに気付いているのだろうが、それを認めたくないの

だろう。今の関係を壊したくないのだ……。いつまでも子供の頃のような関係でいたい。それはリディアの我が侘なのだろうが。キルケは注意深くリディアを観察する。キルケとて、外見こそ幼い成りをしているが生きている年月は人間には及びつかないほど長い。地上に降りてからも様々な人間を観察し、ある程度心が読めるようになっていく。

キルケは大げさにため息をつき、一言言った。「つまり、まだお前はお子様だということだ。」自分の事を柵に上げるのはキルケの十八番である。

「……！キルケちゃん……。ひどい……。」リディアがむくれる。だからそう言うところが子供なんだ……。とキルケは思うが口には出さない。いずれこの娘も自分で選ばなければいけない時がくるのだ。ジェラルドの様子を見てみると、やつもやすやすとリディアを手放すつもりはないだろうと思う。見かけによらず意外に粘着質でしつこそうだからな……。と心の中で笑う。

アルファスの事はさておき、贅の男にも少し興味が湧く。

「一波乱……。ありそうだな」キルケはそう言つてにやつと笑った。

船内でリディアとキルケが恋の話に花を咲かせているとは露知らず、看板ではジェラルドや護衛の剣士達が酒盛りをしていた。

「いや、ジェラルド殿下、本当に話がわかりますね。」

「いやあ、王族とは思えない腰の低さだ。さすがジェラルド殿下！本当にリディアーナ様の婿としてアステールにくる気はないですか？ジェラルド殿下なら我々も大歓迎ですよ！」

「ははっ。残念ながら、リディアには振られっぱなしなんだよね。どうしてかなあ、この俺の熱い思いをわかってくれないなんてっ！」

『わははははは』皆の笑いが重なる。こうして1日目の船旅はゆっくりと過ぎていった。

56話：旅路4

「ちっ、つまんねーな・・・」オーセは持ち主の居ない部屋の中で水晶玉に映るジェラルド達の様子を見ていた。奴から呼び出されて一度帰ったものの、言われた言葉は「あんた、今こっちに向かって来ている連中に手出ししたら容赦しないわよ。」というものだった。

「はあ？なんでだよ。俺の楽しみ奪うつもりかよ！」食って掛かったもののあつさりとかわされ、凄まれる。

「うるさいわね」。こっちにも色々と事情があんのよ。」

「何だよ、事情って・・・」

「アンタは知らなくて良い事よ。まったく昔はママとかつて寄ってきて可愛かったのに図体はでかくなるわ、口は減らないわ、いったい誰に似たのかしらね。」

「キシヨイ事言ってるなよ。誰がママだよ、誰が！それにお前の方がよっぽど図体でかいだろーが！」

「はいはい・・・。と・も・か・く、私の言った事忘れんじやないわよ！まったく・・・あたくしの可愛いキルケちゃんに何かあったらどうしてくれんのよ・・・」後の方はぶつぶつ何を言っているか聞こえない。可愛い何だって・・・？あいつに拾われてから約20年経つが未だにあいつの事は一生関わりたくない趣味もあわせて理解できない。

もちろん育ててもらった恩はある。体中のあちこちに奇怪な入れ墨を施され捨てられていた俺を拾いあげ、カルナ「失われた者」という名前をつけ、ナイフや魔術を教えてくれたのはあいつだ。特に魔術に関しては才能があると喜んで様々な術を教え込んだ。

「アンタ、ナイフも結構いけるけど、魔術に関しては天才的ね！ふふ、教えがいがあるわ」。やっぱりこれってあの方の血なのかしら

ねえ……。」「上機嫌でのたまうやつの言動にはときどき何か得体の知れない物を感じる。

いつもは只の変態にしか見えないが、たまに背筋が凍る程の異様な雰囲気醸し出す事がある。それこそカルナをひとのみしてしまふ様な言葉に言い尽くせない恐怖を感じるのだ。

12〜3歳になった頃から、情報屋や暗殺業まで様々な仕事をするようになった。オーセは仕事の上での通り名だが、本人はいたく気に入っている。

ジークフォルン・・・情報集めに関しては奴の右にでるものはいないと思われる程、物事を頼むと確実に正確な情報を手に入れてくれる。この水晶玉を使っているようだが、こんな物は他で見た事がない。いったい何処から手に入れたのか・・・奴自身謎の塊だ。表の顔は知られた商人だが、中身ははつきり言って俺より黒いんじゃないかと思う時しばしば・・・腕っ節の強さも半端じゃない。何度腕を折られかけたかわからない。

奴が以前からこのユフテスとアステールを行き来して何かを調べていたのは知っている。奴が集めた情報を大国グランデイスに横流ししていたのだが、いつもはうるさく言わない奴が今回に限ってはやたらと制限をかけてきた。竜に関しては俺自身も興味はあるが、今のお楽しみはなんといっても、エストラーダの剣豪だ。

「まあ・・・ようはばれなきや良い訳だよな。」と俺は水晶に映る人物に焦点をあわせる。大体、グランデイスにはあいつらを足止めするって、言っちゃてるしな。一度約束した事を破ったらこれからの仕事にも影響してくる。と自身に大義名分を掲げるとオーセはにやりと笑う。

途端後ろでバタバタと羽ばたきの音がする。奴の飼っているオウムだ。

「カルナ・マホウ・ツカウ。ジーク・オコル・オコル・コワイ・コワイ!!」

カルナはその長い足で鳥かごを蹴り上げ言った。

「大人しくしてろ、この馬鹿オウム! ジークフォルンにはちくるなよ!」

その頃、海の上では、酔いつぶれて二日酔いになった騎士達が船酔いしている様を見てマリアベルが怒りの頂点に達していた。

「なんですか! あなた達! アステールの騎士ともあるう者が情けない・・・ジェラルド殿下も、殿下です! こんなになるまで飲み明かすなんて・・遊びに行く訳ではないのですよ?!」

ある騎士は吐きながら、ある者は耳を押さえて情けない顔でマリアベルの小言を聞いている。

「すげーな・・・やっぱ女の年増はこええ。うちのメイド長と通じる物があるな・・」とジェラルドはルークに小声で話かける。

「で、殿下!」ルークはおたおたと焦っている。

「・・・何かおっしゃいましたか・・・? ジェラルド殿下・・・マリアベルにじろりと睨まれる。地獄耳だ・・・。」

リディア達もそんなジェラルドや騎士達を呆れたように見ていた。こんなんで大丈夫なのだろうか。

57話：旅路5

風を受け大きく帆をはった帆船は船酔いした騎士など、おかまい無しに海の上を滑るように進んでいた。今日も絶好の天気だ。

「わあ、見て！今お魚が飛び跳ねたわ！」リディアがトビウオの群れを興奮しながら指差した。

其処へこの船の船長が笑いながらゆつくりと歩いてくる。

「リディアーナ様、あまり身をお乗り出しにならぬ様気を付けてください。この辺の海域は今静かですが、強い海流がぶつかり合う地点と近く、魔の海域と呼ばれているのですよ。毎年このあたりで沈む船のどれだけ多い事か……。まあ、この船に限っては大丈夫でしょうが、気をつけるにこした事はありませんからな。」

しかし……。アステールの誇る騎士達も船の上では形なしですなあ。はっはっは。」船長はぐったりとマグロのように横たわる騎士を一瞥すると大声で笑う。

「お見苦しいところをお見せ致しましたわ……。」「リディアはつい小声になってしまう。」

「いや、いや、なんの、気にする事はありません。順調に行けばあと1日と少しでウリムナ大陸につきましよう。それまでには酔いも抜けているでしょう。」

「有り難う御座います。」

「さて、姫様には特別に面白いものをご覧にいれましょう。船長室へお越し下さい。ええ、侍女殿も一緒に……。」「

「まあ、なんですか？面白いものって！」リディアとマリアベル、ナタリーの3人は船長の後について歓談しながら去って行った。

幾時かが過ぎた後、ジェラルドの元にキルケが厳しい表情をしてやってくる、おもむろに口を開いた。

「おい・・・気がついてるか？」

「何をだ？」ジェラルドがあっけにとられた顔で聞き返す。

「この船の様子、おかしいぞ。少しずつだが方角がずれている。船長は何をしている？！」

「えっ？いや・・・まったく気付かなかったが、船長はリディア達と一緒に船長室にいるはずだ、行ってみよう！」ジェラルドとキルケは船長室へとやって来た。

扉をノックすると中から「どうぞ」と返事がある。扉を開くと、大きな机の前に4人が座っている。机の上には海でしかとれない珍しい貝や珊瑚など様々な物が置かれていた。

「おい、船長・・・この船は今何処へ向かっている？」キルケが強い口調で船長に聞いた。あっけにとられたように4人は突然の訪問者を見ていたが、すぐに船長がおずおずと切り返す。「は、あの、ウリムナ大陸に向かっておりますが・・・？」

「キルケが方角がずれて来ていると言うんだ。悪いが船長、確かめてきてくれないか？」

「なんですと？方角がずれて来ている？そんなはずは・・・」船長は暫くコンパスを持って来たり船の先登に行ったりしてから帰ってくると青ざめた顔でキルケに言った。

「キルケさんの仰る通りです。何故か船が大幅に進路を変更してほとんど魔の領域にさしかかっています。こんな事は・・・いや、そんな事を言っている場合ではない、急ぎこの海域を出ますので皆さんはっ！」その時、船が強い衝撃を受けぐらりと揺らいだ。

「きゃっ」「うわっ！」

「な、なんだ？いったい、何が起った？！」

6名は急ぎ看板の上にでると信じられない物を見るかのように啞然とした。一番早く状況を理解し動き出したのはキルケだった。

「何してる！早く来いジェラルド、あいつを仕留めるぞ！」帆船の

帆先に巻き付く長い体、それは見た事もないほど大きな海蛇だった。海蛇は長い体をくねらすようにして、船内に入って来ようとする、その度に大きく船が揺らぐのだ。まだ先っぽは海の中に入っている。どれだけの大きさかわかるという物だ。

「あ、ああ」キルケの声に我に返ったジェラルドは剣を抜くと急ぎキルケの後を追う。騎士達はまだ二日酔いの余韻が残っている上、見た事も無い様な化け物に出くわし、平常心を失っていた。マリABELは、リディアの手を掴むと船内に連れて戻ろうとしたが、リディアはそれを拒むと言った。「私も行くわ!」「だめです!、なりません、姫様!」

「だって今、まともに戦えそうなのはあの二人しかないのよ?! 私だって戦えるわ、心配しないで。マリABELだって私の腕をしているでしょう?!」

「リディアーナ様!」マリABELの手を振り切ってリディアも二人の後を追って駆け出した。

58話：旅路6

「くっそ、こいつ、ぬめぬめしやがって・・・！」ジェラルドが叫ぶ。彼の言った通り、巨大な海蛇が纏っているぬめりとした分泌物が看板にねっとりついており、滑りそうになる。しかも奴が少し動く度に船は不安定に揺れ動くのだ。足場が悪い事この上ない。

また体を揺すって動き出した奴にジェラルドは剣を突き刺す・・・が柔らかそうに見える体は意外と固く弾力があり、またそのぬめりのある体が剣を滑らせる。

キルケは口の中で呪文を唱えると大きな海蛇の体めがけて杖を振る。海蛇の体に幾つもの大きな氷の刃が突き刺さった。

だが、「っち、本当に思ったより固いな。」キルケが呟く。海蛇は攻撃を受けて、尚体をくねらし船へと入り込もうとしている。本当は火の攻撃の方が効きそうなのだが、やたらと海の上で火炎を使うとこの船もろとも焼け落ちてしまいかねない。できるだけ、海蛇を痛めつけて海に戻す方が手っ取り早い。しかも船は奴に引きずられてどんどん海流がぶつかり合って渦を巻く海域に進んでいる。

「キルケちゃん、ジェラルド兄様離れて！」リディアの声が背後から響く。二人が咄嗟に後ろに退くと同時に雷が落ちる。「あつぶねええ！」ジェラルドが叫び声を上げた。幾ら大物相手とはいえ、こんなところで雷を落とされては自分まで感電死しかねない。

リディアはなかなか高度な魔術を使えるようだった。指にはめている純度の高い魔石を媒体に使っているのだろう。だがあまり手段を選ばない口らしい。ジェラルドの苦勞が伺える。

雷を受けた海蛇は船内に入り込もうとしていた体のうねりをピタと止めた。効き目はあったようだ。だが今度は獲物を狙うようにキル

ケ達をめがけて突っ込んで来た。

大きな音を立てて、看板が壊される。

「きゃっ」リディアが衝撃で倒れた。「リディア！」ジェラルドがすぐに側に寄ってリディアを助け起こした。「大丈夫か・・・？」

「え、ええ」

「おい、ジェラルド、これ以上船を壊されたら事だ、一気に叩くぞ！」キルケが叫んだ。

「わかった！リディア、後ろに下がっておいてくれ！」そういうとジェラルドは剣を握り直し走り出した。一気に近くまで寄ると海蛇の頭目掛けて剣を突き刺しそのまま力を入れて跳ね飛ばす。ぶしゅっという音と共に切りとんだ海蛇の頭が転がった。じわじわと体液が出ている場所から床が濁ったように黒くなっていく。ジェラルドは剣でもう一度海蛇の頭を力一杯突き刺すとそのまま海へ向かってほおり投げた。だが首を切り取られた体はまだ暫く生きているかのようにくねくねとうごめいている。キルケが呪文を唱えると海蛇の体は青白い炎を上げながら海へと落ちて行った。

「やった・・・か・・・？」ジェラルドが息を整える。

「いや、まだだ。早くこの海域から出ないと強い渦潮に巻き込まれかねない。」そう言うときルケは風の魔法を紡ぎ出す。この魔法は古代魔法で地上ではほとんど使われていないものだが、この際文句は言ってられない。詠唱し終わると同時に一陣の風が船を下から舞い上げるかのように吹き出し、帆船は乗せられるようにスピードを増す。しばらくして元の位置に戻る頃には風も無くなっていた。

看板では海蛇に吹き飛ばされたものや、飛び散った海蛇の体液の毒にやられた者たちがマリABEL達侍女に介抱されていた。船の先端は海蛇に壊されたままだ。蛇の体液が残っている場所からはぷすぷすと毒気が出ている。幸い船に穴が開かなかったお陰で沈没は免れていたが、このまま大陸まで船が持つかは怪しい。急遽この先にあ

るという無人島へ避難することとなった。

だがいったいなぜあんなものが急に現れたのか、また船の針路が知らぬ間に変わっていた事も不思議だ。ジェラルドは自身の嫌な予感が当たった事に軽い頭痛を覚えた。

――――

「ふうん、結構やるじゃん……。ま、あれぐらいなら倒せて当然か。」オーセは水晶を覗き込みながらにやにやと笑う。もちろん船の進行方向を変えたのも、海蛇を仕掛けたのも自分だった。あれだけ船が壊されていれば十分に足止めになるだろう。とりあえずの目的は果たせた訳だ……。「まあ、お楽しみは後にとっておいた方がおいしいからな。」

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記6

「・・・まあ、そうですね。しかし、義姉上、本当にこんな夜更けにいかがなされたのです？」

「散歩ですわ。少し飲み過ぎてしまいましたの。パトリックはもう先に寝てしまいましたから。それにこんなに美しい夜ですもの、もったいないと思って。」

「・・・こちらには、もうお慣れになれましたか？パンディッタとは気候から何から全て違うので、大変だとは思いますが。」パンディッタはこの世界に3つある大陸の内、一番大きな大陸、ドーラの中にある。だがその土地の半分は砂漠で、オアシスを中心に幾つかの国が点在していてパンディッタや、リディアーナの母が嫁いで来た祖国スミルナなどといった大国と小さな国がある。平原や豊富な水があり余るこのリムド大陸とは文化や風習もかなり違ったものだという。

「まあ、有り難う御座います。パトリックを初め、こちらの方々は皆お優しくて、私とても感謝していますのよ。たまに・・・そうこういった綺麗な月の晩には祖国を思い出す事もありますが・・・私は此処へ嫁いできた事をうれしく思っております。」

そういえば、今日はペイリウド卿がお越しになって、珍しいお菓子を幾つか頂きました。殿下はお菓子はお好きですか・・・？」

「ええ、嫌いではありませんよ。あまり甘すぎるのは苦手ですが・・・ペイリウド候がいらしたのですか・・・。」

「はい。本当に実の娘のように可愛がっていただけてますの・・・
今日はなんだかご機嫌の御様子でしたわね、そう言えば・・・殿下
のお話も色々とお伺いしました。」

「ほう・・・どんな・・・？」

「色々と・・・、殿下の幼い頃のお話ですわ。とてもよく懐かれて
いらっしやったのですわね、ペイリユード卿に・・・。仲睦まじいご
兄弟の御様子が目に見える様でしたわ。それから・・・あと、隣国
の美しい姫のお話もお聞きしました。幼馴染みでいらっしやいます
のね。今度、舞踏会でお会いするのを楽しみにしていますのよ。」
彼女はそういつてジェラルドの目を見据え意味ありげに微笑えんだ。
「いったいどんな話をされたのか・・・、まったく叔父上には困っ
たものですよ・・・。」ジェラルドは苦笑いする。

「ジェラルド様・・・どんな理由であれ、得られるべきチャンスは
生かすものですわ。女は蝶の様ですよ。男が余所見している間に
美しい羽を得て、気がついた時には他の花へと飛んで行きますわ。
世の中には幾つもの甘い蜜と香りを放つ花がございますもの・・・」
ジェラルドとは色合いの違う濃い青の光がジェラルドをとらえる。

「義姉上・・・」

「ふふ、あまり長話をする、本当に風邪を引いてしまいますわね。
ジェラルド様、私はこの辺で失礼させて頂きます。ですが、あちら
こちらの蝶に目移りしている間に本当に欲しい蝶は何処かへ飛び去
ってしまうかもしれませんわよ・・・？お氣をつけなさいませ・・・」

「
そういつて彼女は小さな衣擦れの音を残して去って行った。」

「女は蝶・・・か。」そうかもしれない・・・自分が気がついた時

には既に手の中から飛び出していた美しい蝶。その羽を傷つけたくないと考えている間に蝶はより美しくその羽を広げ飛び立ち、存在を誇示するかのように多くの花を惑わす。だが、他人にお膳立てされるまでもなく、あれを逃すつもりは無い……。一生俺の……。そう、籠の中で大切にしよう。

部屋に戻ったジェラルドは、シーツを交換し、綺麗にベットメイキングされた夜具の中に潜り込むとつかの間意識を手放した。

59話：離島1

「で、ここはいつたい何処なんだ・・・？」ジェラルドが少々不機嫌な顔で誰にともなく問いかけた。が、当然誰からも答えは帰ってこない。

おずおずと船長が申し訳なさそうに声をかける。「多分・・・ウリムナ大陸より西南に位置する辺りですが、この辺の島はほとんど無人島ですので、どの国もこんな辺鄙で危険な海流近くにある島など欲しがりませんから・・・。実際私もこんな島に上陸したのは初めてでして。」

結局派手に壊された看板や先端を修理する為に一番近くの孤島へとやって来た。思わぬところで足止めされた気分だ。できるだけ早くユフテスまでたどり着きたいが、致し方ない。この島の気候としては、リムドとウリムナ大陸の中間辺りに位置している為か、船を停めた海岸の先には鬱蒼と緑が生い茂っている。南国とも言えなくはないのだが・・・どちらかと言うとジャングルに近い雰囲気だ。

「船を直すのにどれくらいかかりそうだ？」

「そうですね。幸い材料は一杯ありますし、皆さん総出で手伝ってもらえれば、1日あれば大丈夫でしょう。まずは材料を切り出しにいかねければなりません。騎士殿、手伝ってもらえますかな？」
船員と騎士らあわせて数十名、そして、海岸に残るリディア達を守るために幾人かが交代で待機することになり、一同は島のジャングルの中へと向かっていった。

キルケはリディアたつての願いで一緒に船の中で待機する事になったのだが、しばらくすると、キルケはリディアの目を盗んでこっそりと船から抜け出した。

実はこの島の上空は幾度か大昔に飛んだ事があるのだが、その時に空から奇妙なものを見つけていたのだ。その時はあまり気にも止めなかったが、それは太陽の光を浴びて銀色に光る遺跡のようなものだった。たぶん位置的に考えても、この島で間違いないだろう。上空からみた島の形を思い出す。此処からだ、人間の足では歩いて半日ぐらいの距離だが、せつかく1日の暇ができたのだ、見に行くのも悪くはない。森の中に入ってから移動魔法を使えば気付かれる事もないだろう。キルケはジェラルド達の後を追うようにゆっくりと森の中へ入って行った。

最初は大人しく船の守をしていたリディアだったが、一刻も立たぬうちからもう後悔し始めていた。もともとお転婆気質の上、冒険や探索と言ったものが大好きなのだ。本当はリディアも騎士らと一緒にいて行きたかったのだが、ジェラルドにさんざん説教をされて危険だと置いて行かれたのだった。ジェラルドがキルケを残して行くというのでしぶしぶ船に残ったのだが、肝心のキルケは先ほどから見当たらない。今船に残っているのは、マリアベルやナタリー、ルークといった侍従達と、船を守る兵士らと怪我をして残っている騎士達、そして船長だ。

暫く船内を探していたリディアが呟く。「もしかして、キルケちゃん、ジャングルの中に入って行ったのかしら・・・こんなに探してもいないなら、やっぱり外に出て行ったとは思えないわよね。」リディアはキルケにかこつけて理由をつけると、マリアベル達の目を盗んで船から脱出する。丁度マリアベル達は、船の厨房でお腹を空かせて帰ってくるであろう騎士達の為に料理をしているところだった。

見はりは何人かいるが、抜け出す事にかけては長年のキャリアを持つリディアは悠々とジャングルの中に入ってしまった。

60話：離島2

キルケを探してジャングルに分け入ったりリディアだったが幸いすぐにキルケを見つける事ができた。黒ずくめのマントを羽織ったキルケが魔法陣の上に立って呪文を唱えている。

「キルケちゃん！」リディアはキルケを見つけたうれしさで何も何も考えず、いつものように走りよってキルケに抱きついた。

そして、突然の事に吃驚とした顔のキルケとリディアは一瞬の内にその場から消え去った。

「なんて危ない事をするんだ、お前は！！お前も魔術を少しでもかじっているなら術者が術を唱える魔法陣の中に入ってくるのがどれだけ危険な事かわかっているだろう！もしこれが未熟な魔術師ならお前もろとも死んでいたかもしれないんだぞ！」

「ご、ごめんなさい。キルケちゃんの姿が見えなくて探しにきたのだけど、キルケちゃんを見つけてうれしくなって、つい・・・」

キルケは自分より背の高いリディアを見上げるとため息をついた。
「仕方ない・・・勝手に船からでたのは俺のほうだからな。まさかお前が追ってくるなんて思ってもいなかった。お前・・・本当に王族の姫なのか？むちゃくちゃにもほどがある・・・」

キルケは先刻のリディアとジェラルドのやりとりを思い出す。足手纏いだと言い切りリディアを置いて行ったあいつの心境には同調するものがある。まったくこのお姫様はいったい何をし出すかわからない。ジェラルドの奴も幼馴染みだというこいつに、いつも振り回されていたに違いない。

「それよりも・・・キルケちゃん、ここはいったい何処なのでし

よう？」

人がせつかく魔術についての心得をとくとくと言い聞かせているというのに、当の本人、リディアは大きな黒い瞳を見開いて興味新々と言った様子で周りを眺めている。

「ここは、島の中心にある前時代の異物・・・まあ遺跡というやつだ。」

「遺跡・・・？これが・・・」

確かにそれらはリディアが今まで見た事も聞いた事も無い様なものだった。手元に転がっている金属らしき物の破片を手に取る。

前時代・・・それは遙か昔人が知恵を得、奢りと高ぶり、憎しみや争いの上で科学力を発達させ、その結果この大地を一時は誰も住むことの出来ぬ汚染された大地へと塗り替えた人の負の歴史である。だが、今生きている人類と呼ばれる者たちの中で前時代を知るものなど一人もいないであろう。彼らは全て滅び去ってしまったのだから。今、人類と呼ばれる者達はすべて異能者の血を引いている者達だ。大陸の王族のいくつかはその中でも特に突出した異能者の能力をもった者達が祖になっているものが多いと聞く。アステールも確かその様な国ではなかっただろうか・・・。

キルケは夢中で遺跡を調べるリディアを眺める。オリバー爺が異能者達は能力だけでなく、性格も変わった者が多かったと言っていたが・・・リディアの突拍子もない行動は彼らの遺伝子のお陰なのだろうか・・・。

「キルケちゃん、すごいわ！私、こんな物見た事がない！これはいったい何の遺跡なのかしら。私、一通り、大陸の歴史を学びましたが、こんなものは本当に聞いた事がありません。考古学的な大発見だわ！」

キルケはちつと舌打ちをする。興味本位で見に来たものの、これらの前時代の遺跡は本来「人」に見せるべきものではない。アステール出発前に、オリバー爺が最後に言っていた事を思いだす。

「――そうそう、キルケや、お前も地上で幾つかの前時代の遺跡を見た事があるじゃろう・・・？」

――遺跡・それって、飛んでる時に時々見た、あの銀に光るやつ
の事か？

「—そうじゃ、あれはその昔、人間が「核」と呼ばれる恐ろしい兵器を作り出した場所なのじゃ。幾つかは徹底的に跡形も無く消し去ったが、人が訪れる事のない地ではまだ幾つかが眠っておる。いや、もう機動することはあるまいて・核自体も全てなくなっておるでの。

――それがどうかしたのか？

「一万が一……人がそれに近づく事があれば、破壊せねばならん……もう一度あの悲劇を繰り返さん為にもな。過ぎた力は己に破滅をもたらすからのう。」

――何故それを今俺に言うんだ？

——んん・・年寄りの感じだよ。まあ、そう言った事は無いと思うがな。

リディアはキルケの表情にはまったく気付いた様子もなく嬉々としてあちこちを見回っている。

一人ならば・・・記憶を消すことも手だが、この島にはジェラルド達もいる。

ここにたどり着くには、絶壁の谷を超えて来なければいけないが、万が一ということもある。やはりオリバー爺の言った通り、壊す他無いか・・・。

キルケはそつとリディアの背後に忍び寄ると手刀を落とす。あつと言う間にリディアはその場に崩れ落ちた。

61話：離島3

時を同じくして――

「近頃、何かと忙しくしておるようじゃが、お前はいつたい何を調べておるのだ？」

竜の聖地には、知の洞窟と呼ばれる、数々の書物を蓄えた大きな洞窟があった。その一角でミルセディは長老に呼び止められた。

「これは・・・長老。この間、キルケが戻って来た時に言っていた男の事が少し気になって調べていたのですが・・・キルケに付きまわっているというジークフォルンという名の・・・」

「ジークフォルン・・・とな？これは、懐かしい名を聞いた物じゃ。

遙か昔、この聖地にもよく遊びにきてた者じゃ。お父上と一緒に。異能者達が亡くなったその後もジークフォルン殿は何度かこの聖地を訪れている。お前達は小さかったから覚えてはおらんかもしれんが・・・」

「あつ！」ミルセディは大きな声を上げる。そうだ、思い出した。何処かで聞いた事のある名だとは思っていたのだ。

「長老、彼は、その・・・例の・・・？」

「そうじゃ、賢者と呼ばれた異能者の長、ガルムンド様のご子息じや。しかし、はてガルムンド様が死んでから幾万の年月が流れたか・・・ふむ・・・確かジークフォルン殿は我らと同じく転生の術を使っておったが、我ら竜族とは違う転生の仕方じゃからのう。あれらの転生は魂ごと他の者に移っては生まれてくる。毎回遭う度に姿形が違うのが難点じゃが、最初から魂の色に目を止めていれば見分けるのに雑作は無い・・・」

「魂ごと転生するのですか・・・？異能者とはすごいんですね。」
竜族は確かに神の領域とも言えるぐらい長生きはするが、その者の生まれ持った魔力の差で転生できる回数は決まる。並外れた魔力を持つ、キルケさえ、子を産んでしまえば、その後の転生は厳しいものになってくるだろう。実際、生まれてくる子供の数が減っている上に、力も衰退して来ている。

「いやいや、あんな事ができるのはほんの一部の者だけじゃ・・・。
ガラムンド様や他の能力者達も、あんな事が無ければのう・・・力を
使いすぎて魂まで消滅してしまいおったのじゃ。前時代の人作り
上げた核というものの威力はそこまで酷かった。それに我らにとっ
ても、憎しみや血で満ちた大地はすでに生きづらいものとなってい
まっただしな。」

まあ、だがあの者は本当に特別じゃ。ガラムンド殿の奥方も異能者
との間にできた子供じゃったのだが、総合作用とでも言うのか、ジ
ークフォルン殿は生まれた時からすごい力を秘めた子供での・・・幼
い頃よりありとあらゆる魔術や錬金術などをマスターしておった。
浄化を終えた大地で生き残った数人の力ある能力者の中の一人じゃ
からな。まあ・・・その分あの者の趣味はちよつと歪んでおるがな
・・・まあ、あれだけの力を有するのじゃ、少しぐらい歪みも生じて
くるのじゃろう。」

以前、あの者が来たのは、いつだったか・・・ああ、そうじゃ、キ
ルケが生まれた頃じゃったのう。えらく可愛がってたものじゃった。
あまりにいじりすぎてキルケはよく逃げ出しておったがの・・・お前
も、よくジークと彼の事を呼んで慕っていたではなかったか？」

「はい、ですが余りに昔の・・・お恥ずかしながら私も幼竜の頃の話
ですっかりと忘れておりました。キルケから名を聞いた時に、思い

出しかけたぐらいで・・・。」

「ふむ、ではジークフォルン殿は今、キルケと一緒におられるのか・
・？」

「いえ・・・そういう訳ではないようなのですが・・・」ミルセディ
はキルケから聞いた話をかいつまんで長老に話す。

「ははははは、なるほど・・・な。まあだが、キルケにとって悪いこ
とにはならんだろう・・・。あやつの父、ガルムンド様とアルファス
の恩師だったバルザック殿は大の親友であつたからな、きつとあや
つの助けになつてくれるだろう・・・。」

――――

キルケは、リディアに忘却の魔法をかけた。これで目覚めた時には
キルケを追つて来た事さえ忘れているだろう・・・。移転の術でリデ
ィアを船内の部屋に連れ戻し静かにその体を横たえる。幸い誰も部
屋にはいなかった。

キルケはもう一度遺跡のあつた場所に戻ると幾つか懐に入れておい
た質の良い魔石を等間隔に配置していく。これを使えばそうそう無
理をする事無く、この遺跡を破壊する事ができるだろう。

こんな物は今の世界には必要のないものだ。キルケは静かに呪文を
唱えた。大きな爆発音と共に遺跡が木っ端みじんにくだけ散つた。
またそれを念入りに地中深くに沈める。

一連の作業を終えたキルケは何事も無かつたかのように船へと戻つ
た。

62話：離島4

突然地響きの様な激しい揺れと爆音が響いた。ジェラルド達は突如起ったその自体に動揺する。

「なんだ、いきなり！」

しばらくして揺れが収まると騎士の一人が青ざめた顔で問う。「地震ですかね・・・？」

「地震で爆音が伴う訳ないだろうが！これは何かが爆発した音だ。島の中心辺りだな・・・誰かいるのか・・・いや、ともかく一度船に戻ろう、リディア達が心配だ！」そう言うとジェラルドは島の中心部辺りに目を凝らす。あれだけの爆音だったというのに、塵一つ飛んで来てはいない・・・誰かがシルドを張ってその中で何かを爆発させたのか・・・？一体誰が・・・

一行は足早に船に向かって歩き出した。船につくとマリアベルが出迎えた。

「あれ、皆さん、思ったより早かったのですね。もう必要な木材は切り出し終えたのですか？」

「いや・・・まだ全部ではないが・・・。何か変わった事は無かったか？リディアはどうしてる？」ここまであの爆音は聞こえなかったのだろうか・・・？

「リディアーナ様なら先ほど、お部屋に様子を見に行きましたが、ぐっすりとお休みになっておられました。きつとお疲れになったのでしょうか。変わった事と言えば、先ほどちょっと船が揺れたくらいですか・・・一体どうなさったんです？」音は聞こえなかったが、揺れは感じたと言う事か。下手に心配させるような事はしたくない。

「いや・・・何もなかったらそれで良い。ところでキルケは？」

「さあ、そういえば見てませんわね。私達はずっと厨房にいました

から。」

「そうか、わかった、ありがとう。」ジェラルドは、船内のキルケの部屋に向かった。

「コンコンーコンコンー」

「誰だ・・・？」

「キルケ、ジェラルドだ。悪いがちょっと開けてくれないか。」

中から不機嫌そうなキルケが顔を出した。

「お前、ずっと此処にいたのか？」

「ああ、何故だ？」

「いや・・・それなら良いが。先ほど島の中央辺りで大きな爆音が生じた。かなり揺れたのだが、お前は何か気がつかなかったか？」

「爆音？さあ、俺はずっとこの船にいたがさほど何も感じなかったぞ。それよりお前、材料の調達はできたのか？」

「ああ、ほとんどな。これからまた手分けして切り出した木を加工して行かないといけないが・・・そうか・・・お前が何も感じなかったというのなら、そんなに心配する事は無いかもしれないな。だが、できるだけ早くこの島をでた方が良さそうだ。無人島・・・のはずなんだが、どうも違った気配がする。」

「そうか・・・」キルケはじつと歩きさるジェラルドの後ろ姿をしばらくの間眺めていたが、部屋の扉を閉めると簡易なベッドの上に腰掛けた。

気がつかれたか・・・？いやそんな感じではなかったが、まああれだけの爆音なら怪しまない方がおかしい。何にせよ、さつさこの島を出て行くという案は好ましい。ジェラルドではないが、島の中央付近にいた時、ずっと誰かの視線を感じていた。この島にいるのはどうやら俺たちだけでは無い様な気がする・・・。

キルケは立ち上がると部屋をでて看板の方へと歩いていく。砂浜で

は、船員達が切り出した木の加工を初めていた。キルケはじつと空を見ていたがふと呟く。

「嵐がくるかもな・・・」生暖かい風がキルケの頬を撫でた。明日には出発できると良いのだが・・・。

夕方近くになると船の修理も随分と効率よく出来上がってきていた。マリアベルが船員達や騎士に向かって声をかける。

「皆さん！夕食の用意ができました。一度中断して夕飯を食べましょう！」

リディアと、キルケ、そしてジェラルドは船長と一緒にマリアベルらが用意した夕食を食べ、また船員や騎士達は砂浜で思い思いに夕食を取っていた。

「リディア、随分と長い間、眠っていたんだな。大丈夫か？」ジェラルドが問いかける。

「ええ・・・少し疲れたのかしら・・・随分と長い夢を見ていたように感じるわ。それに寝違えたのか首が痛くて・・・。」そういつてリディアは細い首をさすっている。

少し強くやりすぎたか・・・キルケはそつとリディアの様子を伺う。

「船の修理具合はどうなの？」リディアがジェラルドに話しかける。

「ああ、おおまかなところは終わっている。あとは細かい部分だけだな。」ジェラルドが答えた。

「皆さん、頑張ってくれてますから、明日の朝には出発できるのではないでしょうか。」と船長が朗らかに言った。

「まあ・・・今晚何も無ければ・・・な。」キルケが低く呟いた。

ジェラルドがぎょつとしたようにキルケを見る。「・・・何かあるのか・・・？」

「いや・・・わからないが、確かにお前の言ったとおり、何か不自然なものを感じるんだ。誰かにずっと見られている感じが・・・。」

これも野生の感とでも言うのだろうか。

「船がいきなり方角を変えたのも、海蛇に襲われたのも偶然とは考えにくい……。何者かが裏で操っているような気がする。」重い空気がその場を支配した。

「思えば・・・カイルと水鏡を使っていた時からなんだか変な感じがしていたんだ。誰かが俺たちの行く手を遮ろうとしている……。やはりグランデイスの手の者か・・・かなりの腕の魔術師である事は間違いないか。」

「まあ、魔術師という線は妥当だろうな。だが・・・この島にいるのが人間だとは限らない。」キルケの金色の瞳がその場にいた全員を貫いた。

63話：離島5

「・・・また変な生物に襲われるのだけは勘弁して欲しいな・・・」
「ジェラルドは天井を仰ぎ見て大きく息をはいた。」

「まあ・・・それはできるだけ幸運を祈るんだな。」

「ジェラルド様・・・」給仕に仕えていたルークが心配そうに目をしばたかせた。リディアも少し青ざめた顔でこちらを見ている。

「まあ、心配すんなって！なんとかなるさ、そうだろう？キルケ」
ジェラルドが二人を落ち着かせるように大きな声を上げる。

「そうだな・・・だが、今度は船を壊されん様に気をつけねば、儀式にまで間に合わんぞ」キルケの言葉にリディアが反応する。彼女の瞳に強い意志の光が灯った。

「どうすればいいの？キルケちゃん」

「襲ってくるすると、暗くなつてからだろうな・・・兵にも嚴重に周囲を見張るよう伝えておく事だ。俺はそれまで少しの間仮眠をとる。」キルケは立ち上がり部屋をでていった。

「・・・あいつ、神経図太いよな。この状況で普通寝るか？」ジェラルドが呆れたように言う。

「きつと何か考えがあるんだよ、キルケちゃんにも・・・。」

日が落ち、闇が濃くなるにつれて風が強くなり、雨が降り始めた。キルケはそつと起き上がると外の様子を伺う。激しい雨の音にまぎれていくつもの低い唸り声が聞こえる。

「来たか・・・。」外へでようとすると、後ろからジェラルド達が駆け寄って来た。

「キルケ！」

「ああ、わかつている。結構な数だ。まったく個体数が著しく減少しているんじゃないのか・・・？うっとおしい奴らだな・・・。」

お前達は船に残っている。俺一人で片付けてくる。絶対に船の中からでるんじゃないぞ。」

「え、何を言っている！俺たちも一緒にいくに決まってるだろう！」

「・・・じゃあ、お前達は、この周りをたむろしている雑魚を片付けておいてくれ。俺はあいつらのボスを仕留める。いいな・・・？」
キルケの強い口調に押され、しぶしぶジェラルドは頷いた。

「わかった。だが、くれぐれも気をつけろよ。少しでも危ないと思えばすぐに戻ってこい。いくら強いと言ってもお前だって女なんだから。」

キルケはジェラルドの台詞に毒気を抜かれた様な表情を一瞬見せたが、すぐに顔を引き締め、薄く笑う。「お前の口からそんな言葉を聞くとは思わなかった・・・まあ心配するな。すぐ終わる。お前はあのじゃじゃ馬をしつかり見はっておくんだな。」

キルケはそう言い残し、苦笑するジェラルド達を他所に船の外へ出て行く。闇の中、無数の赤い瞳がこちらを伺っていた。「さて・・・」
「キルケは小さな鼻をうごめかせて匂いを辿る。あつちか・・・」
キルケは残忍な微笑みを浮かべつつ深く生い茂った濃緑の奥へと足を進めた。何故か、獣達は1匹としてキルケに襲いかかるものは無かった。殺気を放っているものの、何か恐怖に脅えたように遠巻きにキルケを見ている。しばらく歩いてジャングルの中頃までくるとキルケはぴたりと足を止め、低く唸る・・・「でてこい！」

キルケの見つめるその先から一匹の大きな獣が姿を現す。銀色の衣を纏い額には大きな角が生えている。猫のようなしなやかな体を持っているがサイズは桁違いだ。人型の姿を取っているキルケなどひとのみで食べられそうだ。獣はゆっくりとキルケに近づいてくると鼻をひくひくとうごめかす。
キルケの脳裏に声が響いた。

「――この地に何をしに来た・・・古の血をもつ若き竜よ。懐かしき匂いがすると来てみれば、我らの住処を完膚なきまでに崩壊させ、のうのうと出て行くこうとする・・・返答次第ではいかに高貴な血族とは言え容赦はせぬぞ・・・」

「うるさい獣だな・・・なんだ、お前達あの遺跡を根城にしてたのか・・・だがあれは今の世界には必要の無いもの、お前達も知っているだろう？それにあんなもの、万が一人間に見つかると思はれない。いらぬ興味を引き出すよりは壊してしまった方が良さだろう・・・？」
「そういうつつキルケの姿が変化していく。人の姿が裂けるように・・・大きく金色の鱗と金の瞳を持つ竜体へと姿を変えた。」

「――ふん・・・人間など恐れるに足りぬ。よしんばこの島にたどり着いたとて、我らが始末してくれるわ。お前は何故あのような人間どもと行動を共にしている・・・？」

「――お前には関係のない事だ・・・。ここで死にたくなければ余計な詮索はせぬ事だ。それと船の周りにたむろっているうるさい奴らをさっさと片付けろ。」

「――勝手な事ばかり言いおって・・・我らの安住の地に足を踏み入れたのはお前達の方だろう。お前が破壊した遺跡で逃げ遅れて下敷きになった同胞達がどれほどいたと思うのだ！」

「――おや・・・気をつけたつもりだったがそれは悪かったな。ふむ・・・ではお前達の襲撃の理由は俺にあると言う事か・・・ジェラルド達には迷惑をかけてしまったな・・・。わかった。何が望みだ？それ相応の代価を支払おう。」

暫くの間、幻の獣と呼ばれるフィクサーの長は金色に輝く竜をじっ

と見つめていたが、ゆつくりと口を開いた。

――我が息子が彼方ウリムナの地で人間達に捕まっている。あれを助け出してくれるのなら、我らはお前達を無事この島より送り出そう……。お前には敵わぬとも、此処にいる人間らを始末する事は容易い……。どうだ？

――余計な脅しは無意味だ。いいだろう。お前の息子がまだ生きているなら必ずやこの地に送り届ける。

――では、しかと約束したぞ……。古の竜よ……

そういつてフィクサーはジャングルの奥へと姿を消した。キルケは人型に戻ると船の方へとゆつくりと歩いていった。先ほどの殺気に満ちた視線は全て無くなっていた。

64話：目覚め

ユフテス市街の支店でアステールから輸入した多くの品物の確認を終えるとジークフオルンは支店長に話しかける。

「これで、ほとんどの荷物の引き渡しは終わったかしらね・・・」

「ええ、そうですね、ジークフオルンさん。今回も沢山の品物を持つて来て下さって助かりましたよ。アステールのものは人気が高いですからね。これで今月も儲けまくりですよ！」

「ほほほ。商売熱心なのはいい事ね。まあ、せいぜい高く売って頂戴。あら・・・いやだ、なんだか雨が降って来そうな天気ね。じゃあ、あたくし、そろそろ失礼するわ。うちで馬鹿が待つてる事だし・・・。それじゃあ、また後で」ジークフオルンは店をでると大股で闊歩しつつ郊外の別邸へと向かう。手広く商売をしているジークフオルンは各地に別邸を構えており、アステールを拠点としながらあちこちの国に品物を仕入れに行ったりしている。

このユフテスにある支店も、ジークフオルンが後ろ盾になって大きくした店の一つだ。この間までは、王の第一側妃も上客だったが、これからはそうも行くまい・・・。それにしても・・・とジークフオルンは先日別れたきりの義理の息子、カルナの事を考えていた。思うところあって、拾い上げ、ここまで育ててきたのだが、最近は独自に色々と手をだしているらしく、隠し事も多くなってきた。自立するのは良い事だが、たまに目に余る事があるのだ。

今回の事にしても・・・カルナがグランデイスにしたためていた情報を幾つか売り飛ばしていたのは知っている。希少種と呼ばれるフイクサーの子供を捕まえたのも、カルナの手引きに寄るところが多い。やっこの時が巡ってきたというのに・・・ユフテスの周辺には不穏な空気が漂っていた。「やっぱり甘やかして育てたのがいけ

なかったかしらねえ・・・勝手な事をしていないと良いのだけど・・・。」そう小さく呟いて足を早める。

屋敷に戻って見るとカルナの姿が見えなかった。使用人を呼び止めて聞いてみる。

「カルナをどこにいるの？」

「あ、ご主人様、お帰りなさいませ。カルナ様でございますか・・・？そういえば、昨晚の夕飯の後から姿を見ておりませんが・・・。」

「そう・・・わかったわ、ありがとう。」ジークフォルンは足早に自分の部屋の扉を開けた。

一瞬の静けさが部屋の中に満ちる・・・。

「やつぱり勝手に部屋に入ったわね・・・あのくそガキ！」ジークフォルンの瞳に厳しい光が灯る。屋敷を留守にする前に、部屋に気付かれないほどの結界を張ってあったのが綺麗に解かれている。それは何を意味するのか・・・。ジークフォルンはゆっくりとテーブルの上に置いてある水晶玉に近づくと手を添え、小さく呪文を唱える。すると、昨晚、カルナが見ていたのと同じ映像が浮かび上がってきた。暫くの間水晶玉を覗いていたジークフォルンだったが、一息ついて顔を上げた・・・もし其処に人がいれば、どれだけの恐怖に見舞われたか知る由もなかった。「まったく・・・好き勝手しやがってっ、あの馬鹿が！」ジークフォルンは部屋の中にあつた移動用の魔法陣の上に立ち、呪文を唱え、その場から姿を消した。

その晩、ユフテスの王城の地下ではいよいよ異変が起ろうとしていた。

王の間に魔術師長が走り飛び込んで来た。

「王よ！いよいよ・・・月光草が開きましたぞ！」

「なぬ？それは本当か？！では・・・いよいよ、伝説の竜が目覚める

と言っ訳だな・・・」

王と祭司長ら、その場にいた全員に緊張が走った。

「ですが、竜の目覚めはゆっくりとしたものですので、完全に覚醒するにはあと何日かかかると思われます。」

「そうか・・・それでは、そろそろ儀式の準備を始めねばならぬな。」
王は祭司長らに目配せする。儀式に必要な贄、そして、始祖がその自害の際に使ったと言われる短剣、清めの霊水、それらを用意せんと、祭司長たちは王の前から出て行った。

「ーーーーアルファスーーーー誰かが小さく呼ぶ声が聞こえたような気がした。」

夢だろうか・・・遠く、懐かしい・・・地下の祭堂で眠る白い竜はゆっくりとその目を開いた。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記7

次の日の朝、僕はいつもの通りに殿下の部屋へと向かいます。途中廊下で王付きの侍従の一人に呼び止められました。なんでも王と王妃様、そしてペイリユード侯が揃って殿下と謁見なさると言う・・・。急な事で吃驚したが、とにかく殿下を起こさなくては行けない。

僕は早足で殿下の部屋の前までくると、ノックをする前に一瞬身構える。あれは、僕が殿下にお仕えして間もない頃だったか。侍従の仕事は、主人の着替えから、朝食の支度の指事など細部にわたるのだが、あの日、朝殿下の部屋を訪れると殿下ともう一人・・・少しグララマスな女性がその・・・生まれたままの姿でお眠りになっていて・・・これ以上は殿下のプライバシーですから詳しい事は申し上げられません・・・吃驚した次第でございます。

驚いた僕を他所にその女性はさっと胸元の開いたドレスを着られるとジェラルド殿下に軽く口づけをして真っ赤になって硬直いる僕を「可愛い坊やね」といって頭を撫でて出て行かれたのです。高価なドレスを身につけていましたし、城のメイドでは無かった様なのですが、どなただったのか・・・しかしあれ以来、どうしても朝、殿下のお部屋に入る前に身構えてしまうのです。しかしそれから暫くの間は何事もなかったので安心していたのですが、昨晩は夜伽をお召しになられたので、ちょっとびくついてしまいます。

ノックして、「失礼します。」といい中にはいる。急ぎ寝台の上に目を走らせたが、女の影はない。昨晩のうちにでいったのだろう。小さく息をはいて僕は寝台に近づく。

「殿下！起きて下さい！朝ですよ！」

「・・・ん」殿下が寝返りをうたれた。胸元がはだけて色っぽいです・・・。っと、そんな場合じゃなかった。

「殿下！王が御呼びです！本当に起きて下さい！」

「……こんな朝から……？無理……俺疲れてんの……昨日激しかったから」

僕の顔が真っ赤になったのが自分でもわかった。でもこれは、殿下の手なんです。そんなことで引くと思ったら大間違いですよ、殿下！「だめです！」僕は勢いよく、羽毛布団をひっぺがした。

「まったく……」殿下はしぶしぶ起き上がられると大きなあくびをしつつ伸びをされる。なんだか大きな猫みたいだ。僕はくすりと笑う。

「で、用件はなんだって？」

「謁見の内容はお聞きしてませんが、陛下とナディア王妃、そしてペイリユード候もご一緒と言う事です。」

「おふくろも……？珍しいな。一体何企んでやがるんだ、あのキツネども……」リディアの親父が狸ならうちのはキツネ……あの二人も幼い頃からの幼馴染みで親友だと言う。おふくろとも仲がよい。

殿下の愚痴を受け流しつつ、質問する。昨日から気になって仕方が無かった事だ。「やはり……隣国の、リディアーナ様との件についてでしょうか……？」

殿下は私の方を見られると言つぶやかれた。「さあな……」

それから朝食を食べ、着替えをすませられると、殿下は王の間へと出向かれた。

僕はジェラルド様を見送ると……散らかった部屋を掃除しながら考える。王が直接殿下を御呼びになるということはやはり昨日の縁談の事だろう……。隣国アステールとは長年友好を築いてきた国だ。両方の国王も昔からの馴染みであり、親友だと聞いている。王妃、ナディア様も国王方とは幼馴染みだったとか……。もし殿下がアス

テールの王女と結婚したら、2国の関係はこれまでに深くなる。しかも、リディアーナ様はたった一人のお世継ぎ、つまりかの姫と結婚した相手は、アステールの王権を握るも同じと言える……。これは確かにすごい事かもしれない。

――――

扉が開かれ、ジェラルドは王の前までくると膝を折って臣下の礼をとる。

「ジェラルドです。御呼びと聞いておりますが、どういった用件でしょうか？」

「来たか……。ふむ、話というのは他でもない……。お前の縁談についての事だが、ペイリユードから何も聞いておらぬか……？」

ジェラルドはちらつと一瞥すると、王に目線を戻し答える。

「それは、私の侍従が候から預かった絵姿の事についてでしょうか？」

「そうじゃ、其方と、余の生涯の友、アステール王ギルロイの息女、リディアーナ姫との婚姻についてだ。姫はお前の幼馴染みでもあり幼き頃より儂らにとっても宝、お前にとってもこれ以上ない話だとは思うが……。どうじゃ？」王がにんまりと笑った。

65話：白き竜

その知らせは唐突にやってきた。「カイル王子、花が・・月下草の花が咲きましたぞ！」

先ほどまで座っていた椅子がガランと音を立てて床に倒れた。「それは・・本当か？もう花が咲いてしまったのか？では伝説の竜が目覚めたと？」

「いえ、意識は戻って来ている様ですが、まだ半分夢を見ている様な、つまりまだ半覚醒の状態ですが、先ほど遠隔魔法で確認したところ、うつすらと瞳を開いたところが確認されています。どうされますか、王子・・。」宮廷魔法師長がいう。

「くそつ、思ったよりも目覚めが早かったな・・。ジェラルドたちもまだ到着していない。父上達はどうしている？」

「先ほど、ご報告に上がりました。儀式の用意を進められております。」

「そうか・・。儀式には様々な手順があると聞いている。実際に贅を捧げるまでにはもう少し時間があるな。先日頼んだ手はずはどうなっている？」

「その事なのですが・・。やはり、先代の構築された魔法陣を使って彼の体に備蓄されているエネルギーを変換し、竜に移す為には術者にも相当な負担がかかります。表立って動く事が出来ない上、只でさえ複雑な魔法式を使うにはリスクが大きすぎるかと・・。」

「わかっている！しかし・・。それしか方法はないのだ。ジェラルドがああメッセージに気がついてくれていた事が救いか・・。この国の中では動きがとれない上あまりにも人手が足りないからな。あ

と2、3人でも優秀な術師が欲しい。それが1人でもそれを補えるほどの魔力を持った人間……」カイルはため息をついて魔術師長へ伝える。

「それでも、前に言った通り、準備は進めておいてくれ、いつでも始められるように……」

「わかりました。」魔術師長は一礼してカイルの部屋を出て行った。

カイルは倒れた椅子を元に戻すと、そのまま窓辺に行って窓を開けた。生暖かい風がカイルの頬をなげた。

「――我が祖先ながら、見事な魔法陣の構築だとは思っ……だが、それを行う事のできる術者がいなければ話にならない。この術を行う為には4つの要素が必要となってくる。」

まずは第一段階、贄の体から核となる魔力を吸い上げる、そして二段階、トランスフォーム、それを地に満ちる生態エネルギーへと変化させ、第三段階、竜の体にそれを注ぎ込む。そして第4段階、竜の衰えた体を転生させる。すべて技術的には最高レベル、魔術の流れを細心の注意を払ってコントロールしなければならない。だがそれも圧倒的な魔力を有したものでなければ……それぞれの段階を別の人間が担当するか、それとも……

開けていた窓を閉め、カイルは足早に部屋を出て行った。向かう先は城の地下……竜が目覚めたのなら一度話がしたい。この計画を竜本人と話す必要がある。確か、竜とは念で話す事が可能なはずだ。幾つかの嚴重な扉を開いて奥へと進んで行く。

最後の扉を開いた先にそれはいた。大きく白い体を持った大きな竜が丸くなって寝そべっていた。まだ眠っているのだろうか……。一步中に踏み出すと気配を感じたのか、白い竜が首をもたげた。そしてその紅の瞳に見据えられる……。

――何者だ……？

一言も言葉を発していないのに、頭の中に声が響いた。ごくりとカイルが唾を飲み込む。

「あなたが……このユフテスを始祖の時代から守り続けて来た伝説の竜、そして千年の永き眠りから目覚められた……伝説の竜、白の守り神ですね。私は、始祖ユフティアの血を受け継ぐもの……あなたに出会えた事を嬉しく思います。」

――ふむ、ユフティアの子孫か……。そうか……あの人間が私を眠らせたのだったな……と言う事は千年の時間が流れたと言う事か。なるほど、まだ思った通りに体が動かせん……。それにしてもお前は何故此処に来たのだ、人の子よ……。よもや世話話をしにきたのではあるまい……？

カイルは竜を見上げたまま次の言葉を紡ぐ。

「あなたは、千年前の祖先がなされた約束の事を覚えていますか……？彼は、もう一度あなたを聖地に戻る事ができるように生涯をかけて研究し、未来の私たちにこの1冊の日誌を残しました。それに寄ると、もともと竜は動物や人間を食べないのだそうですね……。大地に満ちたエネルギーを糧としていたと書かれてあります。だが、それは何故かこの地上では満足に得る事が出来ない……。あなたがこの地上で生きるには獣や……。そして私の弟のような特別な力を持つものを喰らって生きるしか無いと……。」

私は弟を生け贄にするつもりはありません。ですがあなたをみすみす殺してしまうのは我が祖先の背く行為だと思っています。

あなたが思いのほか早く目覚められた事は誤算でした……。現在のユフテス国王、そしてその側近達は3日後には準備を終えて、塔の中に閉じ込められている私の弟をあなたの生け贄として、捧げる

でしょう。そうすればあなたはまた力を得て暫くの時の間、私たちを守ってくれる・・・と。ですが私は時期国王としてあなたをずっとこの国にとどめておく事は罪だと思っています。今の国王や側近、祭司長らの考えがどうであれ、私はこの儀式を何としても止めさせ、貴方を解放しようと思っています。」

白い竜はしばらく黙ってカイルの言葉を聞いていたがまた問いかけた。

「――我を血の束縛から解き放ち、自由にすると・・・？だが、我はこのままでは聖地に戻る事は敵わぬ。ここを去ってもそう遠くなくどこかで朽ち果てるだろう。だが、それも悪くない・・・もともとそれは、私の永き願いであつた・・・。」

「いいえ、白き竜よ。彼の残した日誌には、貴方様を転生させる術も組み込まれております。それによつて、あなたは古い体を取り去り新しい身体となつて聖地へ戻る事ができるのではないのですか？」

「――それが、もし本当に可能であるなら・・・な。」

66話：企み

「確かに、あの術の施行にはかなり大きなリスクを伴う事は承知の上です。それでも・・わずかでも可能性があるのならば、私はそれに賭けたいのです。」

――我もこれ以上贅を喰らって浅ましく生きたくはない。もし失敗した際には迷わず我を切り捨てるといい。

カイルは黙って気高い竜に尊敬の念を込めて礼をするとその場を退出した。

――もし・・・我がこの地上で朽ち果てたなら、あれは約束が違うと怒るだろうか・・・。いや、もう忘れ去ってしまったかもしれない・・・。

白い竜はもう一度静かに目を閉じた。長い眠りから醒めたものの、体力はこれ以上無いまでに衰えていた。空腹などといえる状況ではない・・それは飢餓だ。もし竜が自分をきつく戒め、意思を強くもっていないければ、カイルを喰らっていたかもしれない・・・。それほどまでの極限状態だが、その竜はある種の高揚感を覚えていた。

――バル・・もうすぐ貴方に会えるだろうか？貴方は今の私のこんな姿を見て何と言うだろう・・・？もうすぐ私の永かった生も終わりを告げようとしているのか・・・

そして彼は今一度短い眠りの中へと引き込まれて行った。

その頃、ユフテスに幕屋を張って待機しているグランデイスにも新たな情報が入った。

「何？竜が目覚めたと・・・？ふふふ、そうか、ご苦労であったな、ジルベスター。」

「いえ・・・それよりも、この情報をイルディアス將軍にはお伝えにならないのですか？宰相閣下・・・？」

「ふん・・・。すぐに動く必要ないだろう。あやつは所詮幼い皇帝に尻尾を振っているだけの犬に過ぎん。竜を手に入れるに相応しいのはこの私だ！私こそが真のグランデイスの帝王として相応しい・・・。そうは思わぬか？ジルベスターよ。」

「御意・・・、誠に真の主として相応しいのはザイル閣下でございます。」

「そうだろう、そうだろう・・・。それにしてもその竜は現在どうなっておるのだ？」

「城に忍ばせている密偵からの情報によると、王はすでに生け贄の儀式の準備をはじめているとの事、近日中に儀式を執り行うのでしよう。眠りから覚めたばかりの竜は、とても腹をすかしているでしょうからな・・・。ここは、その儀式とやらを済ませてからの行動でも遅くはないでしょう。どうやらその贄は特別な力をもっており、そうですじゃ。それを喰らう事により、また竜は永きに渡って国を守護すると・・・。」

「なるほど・・・その為の生け贄か。くくつ、贄というのであれば、あの皇帝を忌々しいイルディアス共々喰わせてしまえば良いではないか。ははははは・・・そういえば、お前が使っていた情報屋、どうやらイルアデイスとも内々に通じておるみたいだな？」

「あやつの持つてくる情報は正確かつ、有益なものが多いのですが、何せんあの性格で何を考えているのか検討がつきません。イルディアス將軍は奴に近隣の国の動きなどを探らせておった様ですが、気にするほどの事も無いでしょう。もし、ご心配なら、始末しておきましょうか……？」

「ふん……まあその件についてはそちに処分を任せよう。この機会に、皇帝とあのイルディアスを片付けて竜とこの国を手に入れようぞ……。わかつておるだろうな？あの二人は他国の守り神とされている竜を手に入れんとするが、あえなく討伐されて死ぬのだ。そこで私が、主君の敵と称してユフテスに攻め入り竜を略奪すると同時にこの国をも手に入れる……。この国の国境付近に配備させてある兵の数は十分に足りていような……？」

「もちろんでございます。丁度この国の王子の誕生日に合わせ、近隣諸国より多くの者達が来ているため、警備も手が回らず手薄になっている様子、今が絶好の好機でしょう。」

「竜の方は、この私めが編み出した術で大人しくさせましょう……。」

「

「本当に竜の方はお前に任せて大丈夫なのだろうな……？」
「お任せ下さい。いくら伝説の竜であろうとも、私の惑わしの術には敵いませぬ。あのフィクサーも今は大人しく皇帝に懐いております。部下の魔術師にしつけさせておりましたが、どうにもまだまだ未熟者でしてな……。結局私が躰けた次第でございます。」

「そうか……。面白い、いよいよ楽しみになって来たぞ……。」

67話：真相

キルケが帰ってくるのと前後して船の周りを徘徊していた狼や他の動物達がなくなった。

「キルケ、無事だったか！」駆け寄ってくる皆を安心させるように強く頷く。

「大丈夫だ、問題ない。」

「何故か船の周りにいた獣達が全て消えたんだ。お前がボスを仕留めたのか？」

「ああ・・・まあそんなところだ。また船が壊されたりしてないだろうな？」

「大丈夫だ。しかし、まったく次から次へとなんだっていうんだ！」

「そうだな・・・でも嵐がくるかと思ったが、どうやら晴れてきている。」ジェラルド達が空を見上げると雲の合間から満点の星が見えた。

「綺麗・・・」リディアのつぶやきに皆が空を見上げる。長い夜は幕を閉じた。

次の日の早朝早く一行は離島を後にした。島をでる前に、今一度背に視線を感じたが、それは殺気を含んだものではなかった。

2日の後、彼らはウリムナ大陸へと辿り着いた。帰りの為に船を整備する船長や船員達と別れ、ジェラルド達は一路ユフテスへの道のりを急ぐのだった。

道すがらキルケは昨晚、ミルセディから念波で聞いた情報の事を思い返していた。

「・・・キルケ、遅くなって済まない、お前の言っていたジークフォールン殿の事が分かったぞ」

――ジークフォールン殿・ってなんで尊称付きなんだよ・・・？

――それは、彼は古の異能者の一族だし、お前もジークには昔よく遊んでもらってただろう？まあ、私もあまり覚えていなかったから、私よりも幼かったお前が覚えてないのは無理も無いかもしれないけど・・・姿も変わっているようだしな

――ん なっ・・・？え？ジーク？あの、変態か？！

その途端、キルケの脳裏には、生まれたばかりの小さな金色の竜を追い回すウザイ男の姿が描き出された。暫くの間思考が止まる。

――こら、変態だなんて失礼な事を言わないように・・・彼は異能者の長の息子でもあり、アルファスの師でもあったバルザック殿とも関係があるそうだよ

――あの変態・・・そんなに偉い奴だったのか・・・？っかなんで俺に付きまとうんだ！

――さあねえ・・・昔から君の事をすごく気に入ってたようだったからねえ。私も色々と思い出したよ。小さい君を捕まえてはあれこれ飾りつけてたよね。いくら転生しても、記憶や性格はそのまま受け継がれているだろうから・・・今もあんな感じなのかな？

――・・・ゼンッゼン変わってねーよ

――ははは、そうなのかい？まあでも長老が言うには彼はきつとキルケの助けになると言っていたよ。また会う事もあるだろうから私たちからも宜しく伝えておいてくれと・・・

――俺はまったく会いたくないけどな・・・

――そうだ、お前地上にある旧世界での遺跡を勢いよくぶっ壊したそうだな。オリバー爺が呆れていたぞ。見つけたら壊せとは言ったがあそこまでやるとは思わなかった・・って。爺さんも甘いよな・・お前の性格を考えると・・いや、まあいい、ともかくアルファスの事、頼んだぞ。お前一人に任せるのは心苦しいが・・

――いいよ。分かっている。お前の薬があっても地上の空気はかなりキツイ。気にするな。また何かあったら連絡するよ

――ありがとう、キルケ。じゃあ、また・・・

まったく考えてもいなかった。あのジークフォールンがオリバー爺が話していたこの世界を救った異能者達の一人だなんて・・あんな変態、誰がどうみたってそんな偉いやつだなんて思いもしないだろう。オリバー爺に言えば、「だから、いつも外見ではなく魂を見ると言っておるだろう」と説教されるのが落ちだ。

何度かはあつと大きなため息をつくキルケをジェラルドとリディアは不思議そうに眺めていた。

68話：悩める者達の懺悔

母上が国家機密を他国へ売り飛ばしていた容疑で捕まったのは2日前だった。

「なにをするの！ 離しなさい！ 私を一体誰だと思ってるの？！ 嫌！」突如部屋に入ってきた兵達によって母上は拘束される事となる。グランダイスとやり取りしていた証拠物件、情報と引き換えに得た寶石などを取り上げられ、身柄は一旦城に4つある塔のひとつへと拘束された。まだ、囚人と一緒に牢獄へ閉じ込められるよりはいくらかましだろう。もちろん気位の高い彼女にとっては死に等しい屈辱かもしれないが……。僕の耳をつんざく様な悲鳴と鳴き声がずっと耳について離れなかった。

母上の裁判は2週間後に定められた。今は兄上の成人の儀や様々な事が交錯しており、事を荒立てる訳には行かないという理由と、他にもとうとう彼の竜が目覚めたと言う事で、城の中枢部の人間達により忙しくしていたのだ。

オースティンはベランダから城の塔を見上げる。暫くそうしていると、後ろから声がかかった。

「こんな所にいたのですね、オースティン殿。」そういつて僕の元へゆつくりと歩いて来たのは敬愛する兄上の母君であり、ユフテス王国の正妃でもあらせられるイネスタ王妃だった。

僕は一步引いて、臣下の礼をとる。同じ王族と言えども相手はこの国の正妃、礼儀は守らなければならない。

「良いのですよ・・・オースティン殿、楽にして下さい。それよりも・・・貴方は大丈夫なのですか？ 今回の事については王も、私も予期せぬ出来事でとても驚いています。」

たった一人の母君がこんな事になってしまつて・・・いえ、起きた

事は仕方ありません。ですが私も、彼女の罪を少しでも軽減できるように、王や元老院に働きかけて見ましょう。」

「……もったいないお言葉にございます。イネスタ様……この度は不肖の母がこのような不祥事を起こしてしまい、息子として、いえ、王家の一員として詫びる言葉もありません……。」

「貴方が詫びる必要はありません。一番辛い思いをしているのは貴方でしょうに……。」そういつてイネスタはゆつくりとオースティンの頬を撫でた。その瞳に何か違う物を見て戸惑う。兄上と同じ柔らかなで美しい瞳から止めどなく涙があふれていた。

「イネ……スタ……様……？」

「……ごめんなさい……何でも無いの……。本当に罰せられなければならないのは私達だわ……。いくらこの国を守る聖獣とはいえ、自分の生んだ息子を贅として差し出す上、あの子が生まれてすぐより私は顔さえも見る事無く……森の中の塔に一人捨て置いた国の法律で裁かれなとは言え、私たちのしている事は何と罪深いのでしょうか……。あの子はきっと私達、いえ私を恨んでいる事でしょう。死ぬために生まれた子を産み落とした私を……。」

そうか……。兄上の双子の弟であったものは王家からその名前も、存在ごと抹消されてはいるが、王妃にとっては兄上と同じく腹を痛めて生んだ子なのだ。城の者は皆その事については、知っていても貝のように口を噤んでいる。以前ふとその事を兄上に漏らした乳母が内密に解雇された事は公然の秘密だった。

其処までして、守らなければならないのだろうか、その竜は……？長い間竜に守られて来た国とはいえ、この千年間の間竜はずっと眠っていただけではないか。国を護り、これまで支えて来たのは、

王国皆の協力があつてこそ、何故今更また竜に縋り付こうとするのかオースティンには皆目分からなかった。以前その事を兄に聞いた事があつた。

――兄上、どうして今更この国は竜に固執するのです？いくら私たちの時代に竜が目覚めるとはいえ、生け贄を捧げてまで守つてもらう様な、そんな軟弱な国では無いはずです。どうして其処まで父上や、重鎮達は竜を欲するのでしょうか？

――お前は、本当に聡いな、オースティン。確かにお前の言う通りだ、いくら竜がこの国ができる礎に関わつて、ずっとこの国を守つて来たとはいえ、これをずっと未来永劫続けて行くのは私もどうかと思う……。父上や元老院、神官達にも散々その事を提議して来たが、彼らは聞く耳を持たない。竜にとつては確かに人間側の勝手な言い草かもしれないが、私は父上達が選んだ道が良い選択だとはどうしても思えないんだ……。

69話：幼帝1

「イネスタ様・・・戻りましょう？そろそろ風がでてきました。」
「そう・・・ですわね」王妃はじつと森の奥に見える塔を暫くの間瞬き一つせず見ていたが、眉を顰め目蓋を伏せると軽く頭を振ってオースティンの先頭に立って歩き始めた。ベランダで待機していた侍女が王妃が来るのを見て静かに扉を開く。
オースティンは最後に城の4隅にある塔と森の奥にある塔に視線を巡らすと彼女の後を追って中に入った。

ユフテスを初め各国は何故竜を欲するのか、それは守護だけでなく、権力の証でもあるからだという。だが昔と今とでは状況も人々の考え方も変わって来ている。今竜が目覚めまた今までと同じくこの国を守護したとしても、今度はその伝説の竜を手に入れるために戦いが起るかもしれない。大人達はそんな事がどうして考えられないのか、思いつかないのか不思議だった。だが兄上は今この事で隠密裏に動いている。間に合うと良いのだが・・・

明後日には各国の代表を招いての晩餐会が開かれる事となっている。只でさえ厄介なこの時期に他国に気取られでもしたらどうするのだろうか・・・それに、いくら通常よりも多くの人が行き来するとはいえ、この城の警備は最近脆弱になっているような気がする。イネスタ様と別れて、様々な事を思いめぐらしつつ、歩いていると、王付きの従者の一人が慌てた様子で廊下を走っているのが目に留まった。

「どうした・・・？何をそんなに慌てている・・・？」オースティンが声をかけた。

「これは、オースティン様・・・。それが今しがたグランディスの

イルディアス將軍が皇帝をお連れになつて城に参られたのですが・
今しがた王に挨拶を済まされたのですが、たまたま、ルーシエル様
がおいでになつていて、それをご覧になつたグランデイスの皇帝が
お年の近いルーシエル様とお遊びになりたいと申せされまして・
今グランデイスの一行とクルト様とルーシエル様を第一応接室にお
連れした所なのです。何も無いとは思いますが、一応見はりを置き、
兵にも一層嚴重な警備を王から申し使つておりますので・・・特に
地下への警備は・・・」

「グランデイスの皇帝と將軍が来ているのか・・・？では母上との
密通の件について、父上は何か・・・？」

従者は驚いたようにオースティンを見て少し言いくそうにためら
つたが、やがて口を開いた。

「いえ・・・、こちらから話を切り出せば、我が国が竜を困つてい
る事が相手側の知る事になりやぶ蛇です。それにあの手紙について
は、確かに所々、グランデイスと分かるようには書いてありますが、
グランデイスの名は一言も書かれておらず、物的証拠としては、
確実な証拠とは言えません。もちろん状況的な判断や、元・第二
側妃殿の証言を考えれば、グランデイスとの間取引がなされてい
た事は確かなのですが、相手側の交渉人の姿が一向に見えて来ない
のです。」

第二妃の証言によると彼女もグランデイスからの使者とは面識がな
いと、いつも側妃がいない時に、手紙が届けられたそうで。側妃
が引き換えに得た宝石や反物については、王宮に出入りしていた商
人らを調べていますが、なかなか尻尾が捕まえない状況なので
す。ですので、ちゃんとした証拠が無いまま、グランデイスを槍玉
に上げる事はできません。今日の所はお客様として扱っております。

「

「なるほど・・・」一瞬オースティンの脳裏に先日であった奇妙な商人の姿が思い出された。

「城に出入りしていた商人の事で、少し思い当たる節がある。私の方でも少し調べてみよう・・・。」

「オースティン様・・・。しかし・・・良いのですか？」従者の気遣う様な声に答える。

「ああ。母上の・・・犯した罪をかばう事はできないが、少しでも刑が軽くなるのなら息子の私が頑張る他はないだろう？それと・・・私も母上をたぶらかしたグランデイスの輩には少し興味がある。私も会いに行ってみよう。」従者はそれ以上は何も言わず、オースティンに向かって敬礼すると去って行った。

グランデイスの者達・・・前帝亡き後幼くして即位した王と、その側近である、魔人とも呼んで恐れられるという獰猛な將軍、もう一人、グランデイスには野心家らしいと囁かれる宰相がいるようだが、今回はこちらには来ていないのだろう・・・。

オースティンはそのまま第一応接室へと足を向けた。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記 8

「何故・・・リディアーナなのです？」

「ふむ・・・我が息子ながら素直ではないな？では、俺が問おう、なぜリディアーナ姫では問題があるとお前にとつてこれ以上良い話は無いではないか・・・それともリディアーナ姫に何か不満でもあるのか？」

「いえ、不満はありません。ですがっ！」

「お前と姫が婚姻関係を結べば、アステールとの関係もより強固なものとなり、我が親友でもあるギルロイとは親戚関係になる。のう、ナディア？」

「そうですね。私も楽しみにしていますのよ？ジェラルド・・・あなたがリディアちゃんと結婚してくれたら、また可愛い娘が一人増えますわ。」

「リディアの方は、この話、納得してるのですか？」

「了解は得たとギルロイから聞いておる。」

「リディアが？」・・・あれ以来リディアにはずっと嫌われいると思っていたが・・・。

「まあ、よしんば、ギルが嘘をついていたとしても、幼馴染み一人振り向かせる事ができなくてどうする・・・のうナディア？」

「そうですね、貴方・・・」

このくそ親父ども・・・当てつけか？！自分の両親らは隣国アステールのギルロイ王と共に3人幼馴染みとして育ち、結婚まで至ったケースだ。

「・・・わかりましたよ。やればよいのでしょうか？それでいつなんですか？見合いは？」

「ああ、明日後だ。」

「は？」

「だから・・・お前は今からすぐにアステールへ赴き、リディアーナ姫と見合いをしてくるのだ。」

「冗談・・・でしょう？」

「俺が今まで、お前に向かって冗談など言った事は無かったと思うが？心配するな。用意はもう整っているし、後は出発するだけだ、なあ、ペイリユード？」

「御意に・・・。王に命じられた全ての準備は整っております、ジェラルド様」

何を言っても無駄だと悟った俺は苦々しげに頭を下げると部屋を出て行くこととなった。しかもそのまま、連行されるようにアステールへ連れて行かれる。これが一国の王子に対する態度なのか？！俺の叫びも空しく響くだけだ。

部屋をでると、ルークが連れて来られていた。手際の良い事だ。ルークも何がなんだか分からない様子で啞然としている。ペイリユード候がやってきてルークに声をかけた。

「やあ、ルーク君、昨日はお世話になったねえ。急に呼び出して悪いが、君もこれからジェラルド様と一緒にアステールへ向かって欲しい。なに、もうほとんど準備は整っているからな、さあ、行った行った！」

腹をくくって、ルークと共に早馬に乗って1日半、国境の村へと辿り着いた。この国境付近の村には美しい女神が住むと言われる2国にまたがる大きな湖がある。そこにリディアーナが国王夫妻と休暇に訪れているという。御丁寧に場所までセッティングされていると言う事か・・・。

小さく息をはくと、ジェラルドは、王家が所有する別荘に足を運んだ。

執事に伴われて一步屋敷の中に足を踏み入れると、奇妙な感覚がジェラルドを襲った。あれ・・俺は、此処に以前来た事がある？記憶力は悪い方ではないはずだが・・。自分の覚えている限り、こんな場所に来た事はないと思うのだが、部屋に置いてある家具の配置や、庭園の見事な薔薇には見覚えがある。何処で見たのだろうか？と考え込んでいると後ろから声が響いた。

「懐かしいだろう、ジェラルド君」

ぱつと振り向くと其処には、彼のアステール国王、ギルロイが、王とは思えぬ気安い姿で立ってジェラルドを眺めていた。

咄嗟の事で驚いたが、すぐに姿勢を正し、挨拶をする。

「いや、よい、ここにいある間はそういった格式張った事は忘れてゆつくりとしてくれ。」

「陛下・・・恐れながら、私めはこの場所に来た事がありましたでしょうか・・・？」恥を忍んで聞いてみる。

「おや、ジェラルド君は覚えていないのかね・・・？ふむ、仕方がなかったかもしれぬなあ、君はあの時大熱を出していたし・・・。」その言葉にジェラルドははっと気付いた。

70話：幼帝2

ーコンコン コンコンー

第一応接室の扉の前には兵が2名立っていた。兵らは僕を見ると身体を固くして敬礼する。気にするなとジェスチャーを送り、扉を2回ほど叩くと中からくぐもった声が聞こえた。

「何者だ？」

「ユフテス王国、第二王子のオースティンです。こちらにグランディスの皇帝、及び将軍がいらっしやるとお聞きし、御挨拶に伺いました。」

応接室の中から鍵が開けられ、扉が開かれた。部屋の奥にある、豪華そうなソファーには小さな皇帝とルーシエル、クルトが座っていた。将軍は立ったままである。

扉を開けた者に目を向けると、それは魔術師らしかった。格好もそうだが、衣服からかすかに魔術師が好んで使う香の匂いが漂ってくる。

「兄様！」叫んで、クルトと、ルーシエルが後から駆けてくるが、すぐにそれを制して、一歩中へ入る。

「こら！クルト、ルーシエル。お客様の前でそんなにはしたなく走るものではないよ。」僕は弟らを連れてもう一度グランディスの皇帝の前まで来ると、臣下の礼をする。幼い声が僕の耳に届いた。

「お前が、ルーシエとクルトの兄なのか？良いな・・・ルーシエはたくさん兄弟がいて、余は余以外の親兄弟は一人もおらぬ。だが、此処におけるイルディアスは余とは血は繋がっておらぬが大切な者じゃ・・・」

「もつたいないお言葉でございます。」とソファアの後ろに立って

いた大きな男が頭を下げる。

この男が・・・戦場で、魔人と呼ばれるグランデイスの將軍か・・・確かに屈強そうな体つきをしている。僕は失礼にならない程度にちらりと視線を投げかけた。つと彼と視線が合う。油断がならない・・・そう思わせる光を放っていた。

「皇帝は、ルーシエルと同じ年だとか・・・？」

「そうじゃ、余はルーシエがとても気に入ったぞ！クルトもじゃ！余の周りはいつも大人ばかりでつまらぬ・・・ルーシエやクルトがずっと余と一緒にいてくれれば良いのに・・・」

「それは、もしルーシエル様がオズベルト様にお輿入れなされるのであれば可能かもしれませんね・・・そこにいらっしやる第二殿下のお母上も我がグランデイスの貴族から嫁がれた者なのですよ。そうでしたね、殿下・・・？」イルディアスが口を開き、僕の方を伺うように言った。

「そうなのか？！じゃあ余はルーシエをお嫁さんにしたいぞ！」幼帝が嬉しそうに声を上げる。

当のルーシエルはこの会話の意味を理解しているのかしていないのか、目をくりくりと動かしながら、お菓子を食べていた。

なんて事を言うんだ、この男は！こいつらの所為で母上は・・・怒りで頭がクラクラしてくる。そんな時、天の助けか、後ろからまた新たな第三者の声が響いた。

「それは、どうでしょうね・・・婚約するにしても、グランデイスの皇帝陛下も、うちのルーシエルもまだまだお若い。そういった話はずっと彼らが大きくなってからするものですよ？」

「兄上！」表面上にこやかに部屋に入ってきた兄上だったが、目は笑っていない。

「ほう・・・では、陛下やルーシエル殿が成人された暁には、我が

国との婚姻を認めると？」「イルディアスが抜け目なく、兄上に言い募る。

「さて・・・ね、その時にはまたお互いの国の情勢もまた違った事になっっているでしょうし・・・？そちらのような大国が何もこの小さな国の姫を娶る理由などないでしょう？」につこりと笑って兄上が言った。

「見かけ通りの小国・・・という訳でもありますまい・・・？」

「ははは、何を期待しておられるのか、そういえば、グランデイスの方でも幾つかきな臭い噂を耳にしますよ・・・？国内紛争、併合した国の離脱戦線など・・・我が国などにかまうよりはそちらの件を片付けた方が宜しいのでは？国内では暗殺や毒殺などもお手の物と聞いていますが・・・」

「貴様つ・・・」「イルディアスが声を上げようとしたが、幼帝が不安な様子でイルディアスの手をぎゅっと握りしめると声のトーンを下げて言った。

「いくら、殿下であろうとも、滅多な事を仰らないで頂きたい。事と場合によつては我が国への侮辱としますよ？」

「これは・・・すみません。口が過ぎました。まあ、ですが、どちらにしろ皇帝陛下に置かれましては私の成人の儀が済むまでゆっくりとおくつろぎ下さいませ様・・・。クルトとルーシエルは今から勉強がございますので、これで失礼させて頂きます。」カイルは礼をする弟妹を連れて部屋を出て行った。イルアデイスは暫くの間、憎々しげに扉の方を睨みつけていたが、皇帝の言葉にはっと我に返った。

「もうよい、余も幕屋に戻る。」そう言つてイルディアスの手を一層強く握った。そんな皇帝を愛おしげに見ながら抱き上げると、そのまま歩き出す。そして扉近くにいた魔術師へとそつと目配せをした。

71話：再会

第一応接室を出た後、暫く黙ったまま4人兄妹揃って歩いていたが、クルトとルーシエルは乳母達が部屋へと連れてかえり、カイルとオースティンが残った。

「兄上・・・先程は・・・」オースティンがいいずらそうに声を上げた。

「オースティン、偉かったな。よく我慢した。」

「兄上・・・」実際のところ、もしあの時、兄上が入って来られなければ、この国の王子としてではならない失態を犯していたかもしれない。グランデイスの將軍の飄々とした態度について我を忘れて叫びそうになった。だが、グランデイスがどう関与したにしろ、それに乗ったのは浅はかな母だ。あの時、本当に兄上が来られて胸をなで下ろしたのは事実だった。

「グランデイスのあの將軍はなかなか油断なら無いな・・・それに部屋の端にいた魔術師、怪しい感じがした。父上が密かに付けさせてはいるだろうが、用心にこした事はない。」そういつてカイルは眉をひそめた。

「はい。ところで兄上、竜の儀式はどうなったのですか？」

「先ほど応接室へ寄る前に確かめて来た。祭司らは明日の朝に儀式を施行すると言っているが・・・」そういつてカイルは黙り込んだ。もう、とづくに着いていても良いはずのジェラルド達がまだ着いていないのだ。道のりの途中で何かあったのか・・・心配が尽きない。もし、彼らが明日の朝までに間に合わなければ・・・。苛立を押さえるようにカイルは頭を振った。

「明日の夜には前夜祭があるというのに、明日の朝に儀式を施行するなんて・・・なんだか急ぎすぎではいませんか？兄上・・・普通な

らどう考えても明日より、全てが終わって皆がそれぞれの国にかえ
ってからやるのが筋だと思うのですが……」

「そうだ。いくら月の花が咲いて竜が目覚めたとはいえ、竜はまだ
この王城の地下で半分眠りにについている。急ぐ必要もないはずなの
だが、そう言っても祭司達は明日やると言って聞かない。」

「何か、おかしいとは思いませんか、兄上？」

「ああ、私もそう思っていた所だ。どうにもこの件について急ぎず
ぎている。目覚めた竜には近づこうともしないのに、儀式だけをや
けに急がして執り行おうとしている。父上は祭司長らの言いなりだ
しな……、とりあえず、もう一度父上の所に行つて儀式の延期を頼
みに行こうと思つてゐる。オースティン、お前も一緒に来るか？」

「はい、兄上、私もお供致します。」そういつて二人兄妹は王の執
務室へと向かった。

時を少し遡つて、海岸の町からユフテスの城下町に至る街道の途中
でオーセは通行人たちをチェックしていた。そろそろ、ジェラルド
達がこの辺りを通るだろうと目測を付けてはつてゐるのだつた。し
ばらくすると、馬車の車輪が回る音と何匹かの馬の蹄の音が聞こえ
て来た。

「来たか……」オーセはにやりと笑う。

そして道ばたに仕掛けておいた爆竹に火をつけようと呪文を唱えた
その時、何者かが後ろからぐいつと引つ張り思いつき殴つた。オ
ーセの身体が勢い良く吹っ飛ぶ。だが、火をつける短い詠唱は終わ
つていたので爆竹が破裂し、その音に驚いた馬達がパニックに陥つ

た。

パン！パンパン！　パパパパン！

騎士が乗っていた馬達は激しく揺さぶりをかけられ、振り落とされたり、走り出した馬を必死に止めようとするもので、酷い有様だ。馬がいなき勢いよく走り出した馬車の中でジェラルド達は突然の事で驚く間もなく激しく揺れる馬車の中で舌を噛みそうになりながら馬を止めようと身を乗り出したが、その途端、馬達は金縛りにでもあったかのようにその場に崩れ落ちた。馬車もその場で動きを止める。

キルケの目線の先・・・馬車の前には忘れようとしても忘れ得ない人物が立っていた。

「ジークフォールン！」キルケが叫んだ。

「まったく煙たいわ」。せつかくのお洋服が埃まみれになっちゃうじゃない・・・」ぶつぶつと自分のド派手な洋服をはたきつつジークフォールンが近づいてきた。

「な？お前、どうしてここに・・・」言いかけてキルケははっと口を閉じる。ミルセディの言葉が頭をよぎる。『キルケ、くれぐれも失礼の無いようにな・・・分かっているとは思うが相手は・・・』

そんなキルケの様子を不思議そうに眺めながらジークフォールンが口を開いた。

「ごめんなさいね」。なんだかうちの馬鹿が悪戯したみたいで・・・今ちよつと制裁して来た所だったんだけど、少し遅かったわねえ・・・あなたたち大丈夫だった？」

馬車の中から、ジェラルドとリディアーナが一緒に降りて来た。リディアーナは先ほど揺れた馬車の中で頭を打ち付けたらしく、少し涙目になっている。

目敏くりディアーナに目を留めるとジークフォールンは一層甲高い声を張り上げる。

「まあああ、可愛い！やつぱり女の子はいいわね。うちの馬鹿とは大違いだわ。あらあ、頭を打っちゃったの？ちよっとこつちに來なさい。」そういつてジークフォルンはリディアーナを引き寄せると、癒しの呪文を唱えた。

ジェラルドはいきなり出て來たド派手な男を目を白黒させて見ている。後ろの方からマリアベルやルークも駆けつけて來た。それらの様子を見ながらジークフォルンは満足そうに微笑んだ。

72話：謎の男

「・・・痛くない。」先ほどまでの打ち付けたひりひりした感覚がなくなっている。リディアはびくりして目の前の大男を見上げた。おかつぱの髪に赤い薔薇の髪飾りを付け、大きなイヤリングをしている。だが、どう見ても男だ・・・。治癒の魔法は簡単そうに見える。だが、こんな不思議な人にはあった事がない。

ジークフォルンはニコニコしながら今度はジェラルドの方に視線を置く。「あらあ・・・確かにいい男ねえ。カルナが気にする訳だわ。」ジークフォルンの遠慮の無い視線にジェラルドは居心地悪そうに眉をしかめながら、それでも口を開いた。

「あんたが、馬車を止めてくれたのか・・・？ありがとう、助かった。」

「そうよ。つても元はうちの馬鹿息子がしかした事だから、別に礼なんていらないけどね。」

「馬鹿息子？」

「ええ、あそこでのびて・・・？つち、逃げやがったか。少し殴り足らなかった様ね・・・」後ろを振り向いたジークフォルンだったが、そこにはのびているはずのカルナの姿は見えなかった。

「いったいどういう・・・？」理由が分からないと言った様子でジェラルドが問い返す。

「そうねえ・・・」といいながら、今度は黙って突っ立ったままのキルケに目を落とすと、おもむろに抱き上げた。キルケが小さく悲鳴を上げた。

「キルケちゃん?!」咄嗟にリディアが手を差し伸べる。

「いや・・・大丈夫だ。なれて・・・いるからな。」満足そうなジークフォルンに抱えられたキルケがリディアに向かって声をかけた。

どうやら心配してくれているらしい。

「知り合い・・・なのか？」ジェラルドがおずおずと聞く。
キルケよりも先に答えたのはジークフォルンだった。「そうよ」。
キルケちゃんとはなっがいお付き合いしてるの、あたくしの一番
のお気に入りの子猫ちゃんだから。」

キルケがぎよつとしたようにジークフォルンを睨みつつ叫ぶ。

「変な言い回しすんな！知り合いつつても！」とまた、脳裏にミ
ルセデイの声が響いた様な気がする・・・。ため息をつく小さな
声で答えた。

「こいつは・・・アステールで商人をやってる奴だ。魔術師ギルド
御用達でもあり、手に入れにくい魔道具などの調達に秀でている。」
まあ、それだけでは無いが・・・と心の中で付け足す。

「商人さん？」リディアが首をかしげる。

「そうだ」キルケが答える。

「で、さっきの馬鹿息子がどうって話は？」ジェラルドが気になっ
ているのかまた尋ねる。

今や、逃げ出した馬を追いかけて行った騎士や、ナタリー、マリア
ベル達といった旅の仲間全てがジークフォルの周りに集まって来
ていた。

「そうねえ、積もる話はいっぱいあるんだけど、ここでこうして話
している間にも事は進んじやっているのよ。えっと・・・あんなたち、
全員で何人いるの？」

「30名余だ。」キルケが短く答える。

「うん・・・その人数はさすがに私でもちよつと無理かしらね・・・
。とりあえず必要な最低人数は？」

「8名だな・・・俺と、ジェラルド、リディア。そこにいる、ジェラ
ルドのお付きの糞にリディアの連れて来たメイド二人、あと、騎士

の中で一番腕の良かったやつ二人だ。」そういつて顎で指す。キルケに糞と言われたルークはわなわなと震えている。

「まあ、妥当な所ね、あとはゆっくり来てもらう事にしましょう・」
「とジークフオルンが呟いた。皆一体何の話をしているのかと啞然としてジークフオルン達を見ている。

「・ユフテスまで瞬間移動するつもりなのか？」キルケが問う。
「そうよ。キルケちゃん、ちょっと力貸してね」そういつてキルケにウインクする。その時、脳裏にジークフオルンからの念波が届いた。

「キルケちゃん、その様子だと、私の事思い出してくれたみたいね。うれしいわ」。でもあまりぐずぐずしてられないのよ。気付いていると思うけど、アルファスが目覚めたわよ。

「ああ・・気付いていた。ずっと聖地の気を貰っていない事もあるが、かなり具合が悪そうだ。今はまだ、半覚醒と言った所だろう？

「ええ、でも色々と厄介な問題があつて、明日にでも儀式を執り行うような勢いなよね・・だから、ちょっと魔力消費しちゃうけど、ここからユフテスに跳ぶ事にするわ。

「明日?!それは本当か？

「そうなの。うちの馬鹿息子も関与しちゃってるから困った事なのよね」。ともかく詳しい事は後だね。まずはさっさと移転を済ませてしましよう。

73話：移転

「一体、何をしようとしているんだ？」ジェラルドが皆の意思を代弁するようにジークフォルンに問いかけた。いきなり現れたこの大男、話し方や服装の意外性だけではなく、先ほどの魔術の行使やキルケに対する態度をみても只ものではない事が伺い知れる。なんとというか奇妙な雰囲気を纏った男だった。

キルケは抱えられていたジークフォルンの胸から飛び降りると無言で魔法陣を描き始めた。魔法陣は指先からでる魔力の光を使つて描かれる。術者が術を行った後も暫くの間そこに滞在しているが、大抵は時間と共に消え失せるのだ。もともと魔力の無いものには見えないし、見えていたとしても、よっぽどでなくては他人の魔法陣など使えない。

ジークフォルンはジェラルドの方に振り向くと簡単に説明を始めた。「今キルケが描いているのが移転魔法の術式を使った魔法陣よ。まあ、貴方・・・はほとんど魔力が無いようだから見えないかもしれないわねえ。その可愛いお嬢ちゃんには見えているんじゃない？」ジークフォルンの問いかけにリディアが軽く頷く。だが、目はしっかりとキルケの描き出す移転魔法の術式に釘付けた。

リディアも、魔力の強い母方の血を受け継いだお陰で、魔力は通常のものよりかなり力がある。だが力があると言っても、ちゃんと学ばないで魔力を行使する事はできない。今までリディアが習得してきた魔力は攻撃系のものが多い。リディアの魔術の師であった、魔術師が身を守るための魔法を中心に教えていたからだ。だが、キルケの使う魔法はリディアが知っているようなものではなく、かなり高等な魔法が多く、興味が尽きない。

「この魔法陣から一気に王都まで跳ぶのよ。人数が多いから、厳選

した10名だけで先に行つて残りは後からこの道のりを来てもらう事になるわ。あ、キルケちゃん、向こう側の出口は私の家を使つてくれて良いわよ。」キルケは一瞬その言葉を聞いて顔をしかめたが、すぐに座標を問い返した。

「この人数で跳ぶのですか？」リディアは興奮した面持ちで聞き返す。移転の術はわりかし、高等な魔術を扱えるものなら使える魔法だが、それはほとんど自分自身を跳ばす事に限つてだ。10人もの人数を一気に、しかも随分と距離の離れたユフテスの王都ファールンまで跳ばすのは至難の業だ。

「ああ、大丈夫よ、心配しないで。キルケちゃんの魔力はすごいんだから、これぐらいどうつてことないわよ。」そういつてキルケにウインクを寄越す。内心ゲツとは思つたがもちろん口には出さない。それに本当の所、10人の移動を行うのは聖地でならいざ知らず、この地上ではキツイものがある。それに今はそんなに魔力を使う訳にもいかないと考えているとまたジークフォルンから思念の念波が届く。

・
「心配しないでいいわよ、キルケちゃん。移動は私が行うわ。あなたは、少しサポートしてくれるだけでいいわよ。キルケちゃんにはこの後、大切なお仕事があるもの、今疲れさす訳にもいかないしね。それにここに付くのが遅くなつたのもうちの馬鹿息子 of 所為だし・

「その馬鹿息子とやらは何処へいったんだ？」

「さあ・・・まあ後で追跡かけるから良いわよ。本当にお仕置きが足りないわね、あの子も・・・

「よし、描けたぞ」キルケが構築した魔法陣を満足そうに見た。

「じゃあ、こっちへ集まって・・そう、ジェラルド、リディア、マリアベル・・・」

皆を陣の真ん中に立たせる。

「本当に大丈夫なのか・・？」心配げにジェラルドが問うた。

「大丈夫よ。心配しないで？まあ、詳しい話は向こうについてからするから。じゃあ、貴方達は、これから、急いで、王都に向かって頂戴ね。」

キルケが詠唱を始めた。「大地を司るレムノーリア、時空の裂け目を開き我らを彼の地に導かん・・」同時にジークフォルンも詠唱を始める。キルケは皆に気付かれぬ様途中からジークフォルンの詠唱にあわせるようにする。魔法陣が光り出し、中にいた10名は姿を消した。

残された騎士達は、しばらくほうけたようにその場に立ち尽くしていたが、荷を整えると、王都に向かって歩を進めた。

74話：話し合い1

ボワツとした青い光に包まれたキルア達一行は無事ジークフォールの屋敷についた。

「気持ち悪い・・・」ルークが青ざめた顔でうつむいている。

「大丈夫か?」「大丈夫?」ジェラルドとリディアが真っ青な顔のルークを脇から支える。

「移転酔いだろう、たまにいるんだ、こういう奴。」キルケは呆れたようにルークを一瞥する。

横からジークフォールが「治して上げましょうか?」と言ったが、ルークは青ざめた顔ですくつと立ち上がると、キルケに向かって言った。

「ぼ、僕は大丈夫です。こんなのどうってことありません!うぷっ」

「あーあ・・・無理しちゃって・・・ま、でも本人が大丈夫っていうんならいいだろ、ところでジークフォール、ここはどの辺にあたるんだ?」

「ああ、ここ王都ファーレンの市街区の一画よ。王城からは少し離れているけど、大した距離じゃないわ。窓の外を見て? あれがユフテス王城、そして周りの小高い丘に無数に並ぶ大小のテント、幕屋は今回のカイル王子の成人の儀式に呼ばれた各国からの使者が滞在しているわ。」

本当ならあなたたちもあれらの幕屋に滞在することになったのでしょうけど、とりあえず、10名ぐらいなら、うちの屋敷を使ってくれてかまわないわよ。」

リディアは黙って、ユフテスの王城を眺めた。目頭が熱くなってくる。幼い頃に一度見た古いが優美で美しい古城とそして、その奥に広がる暗くて大きな森。彼の森の向こうにあの人が閉じ込められて

いる塔があるのだ。

「とうとう、やって来たのね・・・」リディアが呟いた。

「さてと、あまり感傷に浸ってる時間はないわよ。ちゃっちゃっと説明して、貴方達を王城に送り届けるわ。挨拶、しなければならぬでしょう?」

「ああ、カイルにも俺たちが着いた事を知らせなければ!」

「そうね・・・」ジークフォルンはぐるつと皆を見渡すと、リディアとジェラルド、そしてキルケだけを残して他の者を部屋の外に出させた。ルークは最後まで抵抗していたが、ジークフォルンに抱きしめられながら下の応接室に連れて行かれると目を白黒させながら大人しくなった。

部屋へ戻つてくるとジークフォルンは3人の顔を見渡して言った。

「さて・・・いきなり色々な事が起つて貴方達も驚いているかと思うけど、もう一度挨拶するわ。あたくしは、ジークフォルン。しがない商人・・・と言いたいところだけど、そちらの僕ちゃんは信じてくれなさそうだから、ぶっちゃけて言うと、あたくしキルケちゃんの大親友なの!」

(どこがぶっちゃけだ、どこが!)キルケがぐつと肩を落とした。仕方なくキルケがフォローを入れる。さすがに、異能者や竜だと言つてこの二人が納得できるとは思えないからな・・・「こいつは、商人だが、凄腕の情報屋でもあり、例の件についても知っている。信用出来る奴だ。ジークフォルンには、ユフテスの城に潜入する時に色々と手伝ってもらった。それに城の内情にもかなり詳しい。」嘘と真を織り交ぜながら二人に説明する。

「いいよ、キルケちゃんのお友達なら私信用するわ。」とリディアがにっこり笑つて言った。

ジェラルドはまだ少し疑い深くこちらを見ていたがため息を吐いて肩をすくめ、先を促した。

「まず、状況から簡単に説明するけど、先日、ユフテスの城の地下で眠りについてた竜が目覚めたの。まだ完全に覚醒したわけではないんだけど、それで、城の中心部は大騒ぎよ。一刻も早く生け贄の儀式をしようとしている。でも、今は王子達がそれを先延ばしにしようとしてるわ。それで、本題なんだけど、今日貴方達を襲ったうちの義理の息子、カルナっていうんだけど、私が調べたユフテスに関する内密情報をどうやらグランデイスに売り飛ばしてみたいなのよね。ああ、言わないで、管理がなっていないというか躰がなっていないのは分かってるわ・・」

色々言いたいことと聞きたい事があるのはわかるけど、とりあえず最後まで話を聞きなさい。あなたの狙いは塔にいる王子を救いだしたい・・ということでしょう？そしてグランデイスの狙いは竜の捕獲、そしてユフテスの中心部分でも色々と動いているのよ。

私の個人的な意見を言わせてもらうと、はっきり言って、この地上で竜が人間の勝手な思惑で取引されるのは我慢ならないの。キルケちゃんに聞いたけど、竜を聖地に戻せる手があるのなら、一刻も早く手を打たないと・・そう、グランデイスやユフテスが行動を起こす前に！」

「・・・確かに、今竜の存在が明らかになればそれを奪おうとする国々もグランデイスだけでなく出てくるだろうな。宗教の象徴にもなってるし・・。しかしユフテスはどうして其処までして急いで生け贄の儀式とやらをしようとする？しかもこんな時期に？」

「其処なのよね・・。王子達はどうかやら感づいておかしいと思ってるみたいだけど、祭司と幾人かの魔術師が王を煽動して儀式を執

り行おうとしてる。やつらが実際何を考えているのか、あたくしに
もちよつとわからないけど、。もしかして、竜の心の臓を食べ
れば不老不死になるとかっていうあのデマを信じているわけでも無
いでしょうにねゝゝゝ」

「何だゝそれは？」キルケが不愉快そうに問う。

「商人の間で、真しやかに囁かれている噂よ。誰が流したのかは知
らないけどゝゝ色々なバージョンがあるのよ。どんな病気も治ると
かゝゝね。」

75話：話し合い2

「だ、誰がそんなデマを！」キルケが叫んだ。

「だからあ、それが分かれば苦労はしないんだけどね・・・結構巧妙に噂が流れていてなかなか足取りが掴めないのよ・・・」

頭の回転の早いジェラルドが口を開いた。

「ということは、つまり、塔の王子を助けて、竜を帰したい俺たちと、グランデイスのように竜を手に入れない一派、そして、そのデマ情報に踊らされて竜を殺そうとしているもの達の3組がいるってことか？」

「頭のいい子は好きよ。そうね、王家側では隠しているつもりのようなけど、今ユフテスの内情はほとんど外に筒抜けと言っても良いわ。この国、竜が居ようがいまいが、一度ちゃんと中枢部を粛正する必要があると思うわよ。まあ、王子達は結構皆良い子に育ってるみたいだね。まあ、儀式の方は早ければ明日の朝と言う事になっているみたいけど、その辺はあの王子達がどうにかするかしら・・・とりあえず塔の中にいる王子だけでも先に攫って来てても良いのだけど、一番早くて動くとすれば今晚かしらね。まあとりあえず貴方達には王宮に出向いた時に王子に確認して頂戴？」

「ああ、カイルにはすぐにも逢わなければ・・・借りはたつぷりと後で利子付きで請求してやる！しかし・・・じゃあ、儀式を急がしているという連中にも何か思惑があるという事か・・・」

「本当にね・・・？何考えてんだか分からないけど・・・ともかくうちのカルナはひっ捕まえてこの件からは手を引かせるわ。まあ、あなたとの1日デート券とでも名をうってあげたらあの子も納得するでしょうし・・・」

ジークフォールンに見つめられたジェラルドは鳥肌を立てて叫ぶ「な、何を言っている?！」

「ああ、誤解しないで、あの子、別にそんな趣味がある訳じゃないのよ。ただ、なんというか、強いものに惹かれる? まあ、ようは1日あの子と手合わせしてくれたら助かるんだけど・・・」

「手合わせ? そいつ、剣をたしなむのか?」

「どちらかというと、暗殺に向いた使い方だけどね、なかなか出来るわよ。あたくしの息子ですもの」そういつてにやつと笑う。

「まあ・・・手合わせぐらいならしてやつてもかまわないが・・・」

「じゃあ、それで決まりね! さて、とりあえず、貴方達二人を王宮に送って行くわ。キルケちゃんは残って頂戴ね? 色々・・・と話す事があるし。」

そこで、リディアが口を開いた。「あの・・・ジークフォールンさんは何故私たちの事情を色々と知っているんですか? 私たちが王族だという事も・・・?」

「あら、今更ね! ほほほ・・・そりゃあ、一応商売してる国の王女や王子の顔ぐらい覚えてるわよ。キルケちゃんからも少し聞いていたし。あたくしにはあたくしなりのネットワークが色々あるのよ。あなたたちの事を調べるのなんて訳ないわ。」

「でも、キルケちゃんもそうだけど、、見ず知らずの人達を私たちの計画に巻き込んでしまつて・・・」とリディアが口ごもる。

キルケがクツと鼻で笑つて言った。「今更何を言っている。どうせ俺もジェラルドもお前の計画に巻き込まれた口だ、今更一人や二人増えようと代わりない。それに俺とジークフォールンはその竜つてのに興味があるんだ。ああ、誤解すんな? もちろんあんなデマを信じている訳じゃない。まあ、こっちにはこっちの事情がある。お前が気にする事はない。俺はお前達が行ったらすぐに、儀式の準備を始

める。お前達は気にせず、そのカイルとかいうやつと逢ってくるんだな。」

「ありがとう！キルケちゃん」ぎゅっとリディアはキルケを抱きしめた。

「あ、そうだ！そういえば、明日、ユフテスの城で晩餐会があるんじゃないかったかしら。貴方達もちろん出席するのよね？」ジークフオルンが思い出したようにつぶやいた。

リディアがはっと顔を上げる。「え、明日？！どうしよう・・・私今着ているドレスしか持ってないわ・・・」晩餐会用に持って来たドレスや荷物は全て残りのものたちと一緒に置いて来たままだ。

「大丈夫よ。このあたくしに任せておきなさい。必要なものは全てそろえておくから、ユフテスで、王と王子に挨拶をしたら一度戻ってきてなさいね。さあ、いつてらっしゃい」そういつてジークフオルンは二人を送り出した。玄関先にはいつ用意がされていたのか御者のついた馬車が待っていた。ルークとマリアベルが玄関先で二人を待っている。

「手際がいいな・・・」ぽつりとジェラルドが呟いた。彼らは馬車に乗り込むとユフテス王城へと向かって行った。

76話：風1

馬車に乗り込んで市街地を抜けると王城へと続く小高い丘が見えてくる。この辺りになるとたくさんの使者達の幕屋が張られている。

「すごい人ね・・・」

「ああ」ジェラルドも言葉少なげに頷く。緊張・・・しているのだろうか。

かくいう自分も、一気に色々な事が起つて突つ走つて来たが、こうして実際に見覚えのある古城を目の前に手が震えているのが分かった。

御者が門番に私たちの来訪を告げる。馬車に紋章が無いのが不自然だと思われたのか内部を伺うように質問されている。ジェラルドが立ち上がると、ルークが止めるのも聞かずに馬車の外に出た。そして腰から宝剣を抜き兵らに見せる。確かにジェラルドの剣にはエストラダの紋章が入っている。納得したのか、門を開き、中へ入って、城の前までついた時、幾度か舞踏会で見た事のある顔が血相を変えて走ってくるのが見えた。

「よお！」そういつてジェラルドが軽く手をあげる。

「心配したよ、ジェラルド！そしてリディアーナ姫・・・ようこそユフテスへ」私たちの目前までくると彼は優雅にお辞儀をする。その横にはもう一人、利発そうな男の子が立っている。

「紹介するよ、僕の弟で第二王位継承者のオースティンだ。」その子は静かに私たちに向かって礼をした。私たちも慣例にしたがつて挨拶を返す。顔を上げてにつこり微笑んだ姿にはとても親しみを持てた。ジェラルド達よりも、彼の方が年が近そうだったからかもしれないが・・・。

私たちは軽く話をしながら城内へと足を踏み入れた。途端、キーンと耳鳴りのような音が耳に響く。あまり心地の良いものではない。

城内の気が乱れているのだ……。城を行き来する精霊が悲鳴を上げているような感じがした。どうしたんだろう……。昔はこんな嫌な感じはしなかったのに……。

まずは国についた挨拶をするため、王の間へと向かう。リディアの心はドキドキしていた。以前お会いしたときはまだ、子供だったのだ。今度は1国の代表として王と出会う。おぼろげにいつか見たこの国の王の顔を思い出そうとする。カイルとは一度別れ、王への挨拶が済んでから、カイルの部屋にくるようにと手はずを整えてもらっている。

扉が開かれ、私たちは玉座の前までゆつくりと歩いて行くと、それぞれが国を代表しての挨拶と口上を述べた。ユフテスの王はゆつくりと私を見ると目を細めて言った。

「これは、アステールのリディアーナ姫、お噂に違わずお美しくなられたな……。この国に来られるのは、そう、8年ぶりか……。明日の夜は舞踏会と、そして明後日には世継ぎの王子の成人の儀が執り行われる、どうぞごゆるりと過ごされよ」

「もったいないお言葉、ありがとうございます。」私はドレスの裾を少し上げてお辞儀する。王の間に入って来たときから思っていた事だが、どうも王の顔色がすぐれないような気がする。ご病気なのだろうか、後でカイル王子に聞いてみよう……。

王の間を退出すると、侍女が待つており、すぐにカイルの部屋へと案内された。城の中をぼんやりと眺めながら、8年前の事を思い出す。不意に懐かしさ故か涙がこみ上げてきた。

「コンコン、コンコン」

「王子、客人をお連れ致しました。」

「入れ」

扉の中に足を一步踏み入れると大きく開かれた窓の遙か向こうに、

彼の人が今も囚われている塔が目には飛び込んで来た。カイル王子もいつもここから塔を眺めていたのだろうか・・・？

「ジェラルド、そしてリディアーナ姫、よくぞご無事で参られた。本当に心配していたんだ。君たちの事を・・・」

「まあ、俺たちが着かないと計画が台無しになるしな？」そういつてジェラルドはにやりと笑いかける。

「参ったな・・・本当に君たちの事を心配していたんだよ？でも確かに・・・状況は思わしくないね・・・。今日、僕とオースティンでもう一度父上に儀式の延期を申し出に行っただが拒否されてしまったよ。」

「そうだったのか・・・と言う事は明日の朝儀式が決行されると言う事か？」

「何故・・・知っているんだい？これは城内でもトップクラスの機密なんだが・・・」目を見開いてカイルが尋ねる。

「え？ああ、実は・・・」ジェラルドは、今までの事を手短かにカイルに説明した。

「なんて事だ。国のそんな機密まで漏れ放題になっているとは・・・くそっ！それにしても、そのジークフォロンという商人の男は信用出来るのか・・・？」

「う・・・ん、それなんだがな、今は一緒に来ていないが、キルケという俺の連れの魔術師の友人らしい。確かに不自然なほど色々と知っているんだが・・・」

「でも、私は信じられると思うわ。だってキルケちゃんが大丈夫だって言っただんですもの。」

呆れたようにジェラルドがリディアを見て言った。「お前なあ・・・逢った時からキルケの事をすごく気に入っているのは分かるが、それとこれとは別問題だろ」

「一緒よ、きつと大丈夫！そんな予感がするの・・・」そう言ってリディアは口ごもる。

そこにマリアベルが口を挟んだ。「恐れながら申し上げますが、姫

様は母上の祖国スミルナの高名な魔術師の血を引き、こと直感力に
関しては外れた事ありません。姫様が大丈夫だと仰るのでしたら、
今までの経験上、私は信頼に値すると思うのですが・・・」

ジェラルドも考え込む。確かにリディアの直感は小さな頃から優れた
ものがあつた。リディアが駄目だといえはその事は駄目になつた
し、無理そうな事でもリディアが行けるといえば大丈夫だつた。

77話：風2

ジェラルドはリディアーナをじつと見つめそしてカイルに目を移すと言った。「俺も信用できるのではないかと思う。商人は十中八九表の顔と思うが・・得度は知れないが、悪い奴ではなさそうだ。キルケとの関係もいまいち気になる所だな。」

「分かりました。ジェラルドとリディアーナ姫が大丈夫だと仰るのであれば、それを信頼しましょう・・。この計画に関しては、こちらで知っている者は、魔術師長であるウェイズ殿と、弟のオースティン、そして幾人かの信頼できる魔術師達のみです。」

正直・・もう駄目かと思ってました・・。君たちは予定の日程を過ぎてもなかなか到着しないし、知つての通り、今ユフテス王宮内はぐちゃぐちゃも良い所だ。本来なら身内の問題に君たちを巻き込むのは筋違いなのは分かっているが、当初僕のこの計画は、8年前、リディアーナ姫がこのユフテスを訪れ、僕の片割れにあつた後から密かに考えて来た事だ。驚くのも無理はない。まあその内容は年月が過ぎるに連れ何度も練り直し、変更を余儀なくされたが・・。

私は貴方が弟に対して熱心に働きかけてくれた事を心より感謝しますよ。今更とお思になるかもしれませんがね・・リディアーナ姫、あの時の幼い貴方が私に勇気を与えて下さったのです。それまで私は、自分の犯した失敗に囚われて父を恐れ、動きだす事ができなかった。

でも貴方は帰られるその日、いやそれ以後もずっと諦めなかった。」「カイル王子の熱に浮かされた様な潤った瞳に見つめられ、一瞬リディアの心がドクンと大きく波打った。リディアは気がついていないがジェラルドはとてつもなく不機嫌そうだが・・。

「貴方が帰られた後、私は決心して、少しずつ内堀から固めて行く事に専念しました。その時はまだ竜にまつわる事を知らず、父上が気を変えて弟を出してくれる事を考えていましたが、そんな時、私はこの日誌を手に入れたのです。」

カイルはジェラルドが持つて来た日誌を手に取り続けて言った。「不思議な事に、君たちが持つているその本は、今まで誰もその存在を知られていないものだった。この千年後を見定めていたかのように突如現れたといっても過言ではない。そう、なんて言えば良いかな・・・今も昔もその本はあったのだが、誰もその存在に気がつかなかった、いや気がつかないようにされていたと言っべきか・・・」

ともかく最初偶然その本を手にしたのは僕だった。いつも見てる王宮内の図書室の中で突如その存在を放ったんだ。図書室にはよく通っていたし、蔵書はすべて知っているはずだったのに、その本は初めて見るものだった。まあ、ともかく僕はそれを部屋に持つて帰り読み始めた。それに書かれている内容を把握した時、喜びでうちしがれたよ。

最初は僕自身が術を行おうと思っていたが、残念な事に僕にはこの術を行使できるほどの魔力はない、リザルで随分と試みたが、どうやっても無理だという事に気がついた。うちの魔術師長にしてもそうだ。

どうするか・・・一計を案じていたが、ある罫をはる事にしたんだ。地下の一室に私と魔術師長、そして幾人かの術師が幾重にも魔法をかけた部屋にこの本を設置して、もしこれを易々と手に入れられるような魔術師がいるのなら、そいつをスカウトしようかね。言っとくがあれにかけた魔法はそうやすやすと破られるものじゃなかった。ある意味賭けでもあったんだ。

この術を行使できるような魔術師を見つけられるかどうか……。君たち以外でも何人かの間者がきたが、皆諦めて帰ったよ。だがその者は現れた。いとも簡単に僕たちの罠を解き、本を手に入れて早々と姿を消した。

本当は……。スカウトするつもりだったんだけどね……。話す間もなく、消えられちゃってあの時は焦ったなあ……。まあでも、それほどの腕を持つ魔術師なら僕の記した手紙も見つけると思ってたしさ。いやあ、ホント君の所の魔術師で良かったよ。はは」

「ははじゃない！」大体俺がキルケに出会ったのも偶然なんだ。なんだ、その成り行き任せの計画は！」ジェラルドが声を荒立てる。

「君は運命を信じないのかい？なんていうのかな、リディアーナ姫の感にしてもそうだけど、私は何か超自然的な働きを感じるんだよ。この計画の裏にね。もしかしたらそれはこの日記をしたための僕の先祖かもしれないし、そうでは無いかもしれない。だが事実、その日誌を手にしたのは君たちであり、今、君たちはここにいる。それで十分だとは思わないかい？」

「俺は……。そういったものに頼る気もないし、俺の信じた道しか選ばない。」

「私は、君のそういう所がとても好きだよ、ジェラルド。で、手紙に記したアレはどうなった？」

「アレ？」リディアが首を傾げる。

「キルケが必要なものは全て用意しているはずだ。それにかった金は後から全てお前に請求するからな！」ジェラルドがむっつりふくれながら言う。

「ああ、もちろんだ。あれらの魔石はこの大陸ではなかなか手に入らないものばかりだからね。貴重なんだよ、風の力が宿るのは少な

い
か
ら。
「

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記9

そうだ・・・昔、俺はここで・・・記憶が様々と甦る。幼い頃、遊びに来たこの大きな湖で俺は溺れかけ高熱を出して生死の境を彷徨った事があつたと母から聞いた覚えがある。あの時、そうだ、俺の家族と仲の良いアステール王の家族と一緒にこの夏の離宮へ遊びに来ていたのだ。

「思い・・・だしました。馬鹿ですね、俺、なんで今まで忘れていたのか・・・」

「いや、仕方あるまい、あの時の事はかなりショックが強かつたしね。さて、ジェラルド君、今回は私の我が俤に付き合わせてしまつて悪かつたね。レイモンドから話は聞いているかい？」にやりと笑つてアステール王ギルロイが言つた。

「俺と・・・リディアの見合いの件ですか。」

「そうだ、君の事は幼い頃から知っているし、どこの馬の骨ともわからぬ輩にリディアをくれてやるより、リディアを強く思う君ならあの子を任せられると思つている。」

「しかし、アステール王、リディアはユフテスの・・・」

「確かにリディアは誰に似たのか頑固で、一度あつたきりの・・・ユフテスから名前を抹消されている王子の事をずっと今でも思い続けている。不毛な恋だとは思わないかね？実のところ、あの娘は恋愛面に関してはまだまだ子供だ。若かりし頃のうちの妻を思い出してそれはそれで良いのだがね・・・だが、あの子も16歳を迎え、他国の王族や貴族から山の様な求婚が来ている。

いずれは、選ばねばならぬだろうが、君は昔からリディアを好いていたからね・・・

君にチャンスをあげようと思つているんだよ・・・ジェラルド君・・・

君はうちの娘を振り向かせる事ができるかい？知つての通り、なかなかガードが固い子だからね。無理矢理あの子に承諾させて、今回の場をこぎ着けた。」

「それでは、やはりリディアも納得してこの場に來た訳では無いのですね？」

「まあ、近頃の君は焦り過ぎと言うか・・・君の気持ちも分からなくはないが、あの子にとってはまだ君のその感情を受け止められるほどには育っていないからね。最近ずっと避けられていただろう？」
くくくつとアステール王が含み笑いをしながら俺に問いかける。

「何もかもお見通しという訳ですか・・・俺は、リディアがこの手に入るなら、何でもします。だが今まではリディアを傷つけてしまつのが怖かつた。だから俺の方から距離を置いていたのです。これ以上近づいてしまつたら、きつと・・・歯止めが効かなくなる・・・」

「そうだね。まあリディアが振り向くかどうかは君次第と言つた所かな？言つておくが、確かにこの事をセッティングしたのは俺だが、リディアを泣かせたら・・・許さないよ？」

その場が凍り付く様な強い眼差しで射抜かれる。俺はごくりと喉を鳴らしてゆっくりと頷いた。

「それで、リディアは・・・？」

「今、ロザリアと一緒に湖のほとりを散歩している。もうそろそろ帰ってくる頃だろうな。今日は君も疲れているだろうからゆっくりと休むがいい。祭りの楽しみは明日までとっておかなくてはな？」
部屋をでると、執事が待つており恭しく頭を下げた。

「ジェラルド殿下、お部屋へご案内致します。」執事の後について日当りのよい大きめの部屋へと案内された。

「こちらへどうぞ。何かご入用のものがありましたら、いつでも仰つて下さい。」

「ありがとう。」

「それにしても・・・大きくなれましたな、ジェラルド殿下。以前この館へ来られた時はまだまだ小さな子供でしたが。」執事が感慨深そうに呟いた。

「俺を覚えているのか？」

「さようでございます。ジェラルド殿下の兄君であらせられるパトリック様のことも良く存じております。殿下はここへ逗留されていた時の事をお忘れですか？」

「実は・・・この屋敷にくるまで、すっかり忘れていたんだ・・・そんなに記憶力は悪い方ではないのだから・・・。」屋敷から見える澄み切った青い湖を眺めつつ、言葉を紡ぐ。

「あの湖で溺れたことは覚えているのだが、何故、どうして溺れたのか、熱を出して寝込んでいたのか、記憶が曖昧なんだ。」

「そうでしたか・・・。あのときは恐ろしい思いをされましたからショックで記憶を封じ込めたのかもしれないね。」執事が軽く頷いた。

「お前は知っているのか？その時の事を・・・？話してくれ、頭の中に霧がかかったようにその時の事をしっかり思い出す事ができないんだ。」

「ですが・・・知らない方が良い事もあるかと・・・。」執事が口ごもる。

「いや、是非とも知りたいんだ。教えてもらえないか？」

「殿下がそこまで仰られるのでしたら・・・少し長い話になりますから、どうぞゆっくりとおすわり下さい。」

僕は持つて来た荷物を片付けながら、年老いた執事と殿下のやり取りを見ていた。大切な話だったら僕は席を外した方が良いのかもしれない。そう思い、殿下に尋ねると。殿下は低く一言、「ルーク、

お前もここにいてくれ」と仰られた。

こんな僕でも少しは殿下のお慰めになるのかとちょっと心が躍った。

78話：風3

その頃、キルケはジークフォールンと一緒に城下町を歩いていた。

「キルケちゃん、竜の聖地に戻ってきたのね？ 気の巡りがよくなっているわ。」

「ああ。短い滞在だったがな……。それにしても、この地上にきてから長い付き合いなのに俺はまったく気がつかなかった。」そういつてキルケはジークフォールンを見上げた。

「ふふ、愛情の差かしらね、あたくしはすぐに分かったわよ？ キルケちゃんの人型も可愛いけど、やっぱり黄金の竜体が一番美しいわね。」ジークフォールンはそう言って笑う。

「……。」いやな感じがしてキルケはジークフォールンから顔を背けた。

「やだ、まったくもう！ キルケちゃんは昔からつれないんだから……。さて……。と、ちょっとキルケちゃん手伝ってもらえる？ 皆が帰ってくる前にうちの馬鹿息子を先に捕獲しとかないといけないわ。まあ、大体行き先は見当ついているのだけど……。。」

「さつきからずっと気になっていたんだが、あの男、ちらっと見ただけだが、あの入れ墨はもしかして北の民族の？」

「あら……。よく知ってるわね。そうよ。あの子はある民族の生き残り。あの子の父親、昔のあたくしの思い人だったのよ。本当に強くて男前で最高にイケたのよね……。20年ちょっと前の大戦であの子の民族は蛮族と呼ばれて皆殺しにされたのよ。酷いわよね、人間つてのは本当に……。その中でも最後まで勇敢に戦ったのがあの子の父親よ。生まれたばかりのカルナを預かってね、自分に何かあった場合は育てて欲しいって頼まれたのよ。惚れた男の頼みを聞かなきゃやっぱり女じゃないわよね？！」

「てか、お前・・・生まれたときから男だろうが・・・」

「いやあね、キルケちゃん、私の心は100%ピュアな乙女心よ！あの子も小さい時はママって呼んでくれてすごく可愛かったんだけど、大きくなるにつれて可愛さも半減しちゃったわあ・・・」ジークフォルンは眉根を寄せて呟く。

キルケは内心ジークフォルンに育てられたというカルナと言う男に同情を覚えたが、ジークフォルンによると、カルナは随分グランデイスにある事無い事含めて情報を流しているらしい、となれば、確かにさつさと捕獲する方が良さそうだ。

「で、そのカルナという男、どこにいるんだ？」

「あの子がよくクライアントとの交渉に使っている宿がこの先にあるのよ。十中八九そこにいると思うわ。」

宿屋に入ると、その旦那らしき男がジークフォルンの姿を認めて顔をだす。

「これは、旦那！どうしたんですかい？」

「ジークフォルンはいるかしら？」

「はあ、先ほど戻られてましたよ。何があつたのかすごい顔を貼らして機嫌も最悪に悪かったですかね・・・」といってちらりとジークフォルンを見る。たぶんそれを誰がやったのかわかっているんだろう。

「そう、じゃあ、悪いけどちょっと借りるわよ。すぐ終わると思うから・・・」

「へい！」カルナよりもジークフォルンの方が怖いのだろう、すぐに返事をして奥へと引っ込んだ。ジークフォルンにはやりと笑うと宿全体に術をかける。魔法でカルナが逃げられないようにしているのだろう。それが終わると二人はカルナがいるという2階の右端の部屋をノックした。

「おやじか？なんだよ。さつき暫く邪魔すんなっていったたる！」

と戸を開け様に怒鳴ったカルナの顔が引きつる。きつとジークフォールの姿が悪魔にでも見えているに違いない。

「カルナ・・・逃げられないわよ。大人しくしておいたらキルケちゃんの手前あまりお仕置きをしないで置いてあげるわ・・・」ジークフォールの言葉にカルナがゴクリと唾を飲んだ。

結界の張られた部屋の中で、カルナは洗いざらい、グランデイスとの関係を吐かされていた。

「ふん・・・ということは、あちら側も一つの勢力って訳じゃなさそうね。」

「そうだと思う、俺は皇帝につくイルディアス將軍と、魔術師のくそじじいと両方に情報売っていたからな。」とカルナが肩をすくめる。

「まったく・・・今度は無いと思いなさい？カルナ」にらみを利かせてジークフォールが釘を刺す。大げさに首をすくめたカルナはあまり懲りていないのか、それよりも！と念を押して来た。

「絶対やらせてくれるんだろうな・・・？あいつと？」

「ああ、ジェラルド王子？大丈夫よ。ちゃんと云ってあるから。その代わり全部終わってからにして頂戴ね。それよりも他に何か隠している事はないでしょうね？」

「んー、大した事は無いぜ、あ、そうそう、あのくそじじいとグランデイスの魔術師が俺の事を警戒してんのか、2、3回刺客を送ってきたけど、暇つぶしに2人は殺して、一人はまだしぶといから生かしてあるけど・・・？」

「はあ？！あんた、まったくその獲物をいたぶる悪い癖は直しなさいって云ってるでしょ？じゃあ、一人はまだ生きてるのね？ちよつと聞きたい事あるから後でうちの方につれて来て頂戴！」

「お前が言つか・・・？俺よりジークフォールの方がよっぽど質が悪いと思うがな・・・」聞こえないように小さく呟いたカルナだった。

79話：風4

カルナを引き連れてジークフォールの館へと戻り、ジークフォールの部屋に入るとカルナはジークフォールにこずかれ、魔法陣を描き呪文を唱えた。

キルケが驚いたように顔を上げる。この魔術は超一級、しかも現代ではほとんど使われていない過去の遺物だ。唱え終わると同時に、青白い光を放つ魔法陣から見慣れない男の身体が出て来た。この魔術は、いつてみれば亜空間に繋げる魔術で、それを魔石の補助無しで行うとは、さすがにジークフォールが育てた息子と言う訳か。でてきた男をカルナが足で蹴り上げ仰向けにさせる。見た事もない男だった。これがカルナを襲ったという刺客なのだろう。

小さく震える声が聞こえた。「こ・・・殺せ・・・」

カルナがにやりと口の端を上げて答える。「やだね。俺より弱い奴の願いをほいほい聞いてやるほどお人好しじゃないんだよ、俺は・・・。まあ、他の奴と違ってお前は結構強かったから生かしてやってるんだ。それよりも俺の親父がお前に聞きたい事があるってさ。さつさと素直に答えておいた方がいいぜ？知ってる事は全てな。はつきりいつてこいつは俺より質が悪い！」そういつてカルナはジークフォールを指差す。

指差されたジークフォールの額に青筋が立ったのと、男の顔が恐怖に引きつるのは同時だった。ジークフォールは男に近づくとそっと顔を上げ、笑った。

「あら、結構いい男じゃない。カルナ、顔を潰さなかった所だけは褒めてあげるわ。さて、あなたには聞きたい事があるのよ・・・。」

ジークフォールンが尋問をしている間、カルナは横にたつ小さな金の少女をまじまじと見つめていた、こいつがジークが猫可愛がりしているキルケってやつか。視線を感じたのかキルケが顔を上げ、言った。「何だ？」

「いや・・外見で判断できねーなと思って・・」カルナがにやつと笑って言った。小さな少女の成りをしているが、ジークの尋問を眉一つ動かさず見ている所はただ者ではない。それに、こいつからはジークと同じような得体のしれない感じがするのだ。こういう仕事を生業としていると、直感は一瞬あつけにとられたようにカルナを見てそしてにやつと笑う。

「ほう・・・わかるのか。お前は・・いかにも見た目通りと言う所だがな。そうそう、お前だろう、旅の途中で色々と罫を仕掛けたのは。アレの所為で随分と到着が遅れてしまった。そのツケは払ってくれるんだろうな？」

「マジかよ？何故俺だつて分かった？」

「匂い・・とまあ、色々だ。そうだ、お前、グランディスが捕まえたというフィクサーの子供について何か知らないか？」

「フィクサー？ああ、知ってるぜ、俺があそこの魔術師に情報売ったからな。確か、グランディスのちっこい皇帝への贈り物だとかないとかって言ってたっけ。」

「ふん、やはりそれもお前か・・まあ良い。うざい八エを叩きつぶす時に一緒に捕えるか・・。」ぶつぶつと独り言を呟くキルケに向かって面白そうにカルナが言った。

「なあ・・、お前とジークフォールンは一体何をしようとしてるんだ？今回の件についてはジークは口が堅くてなかなか教えてくれねーから俺が勝手に動いてただけだよ。」

「かき回していたの間違いだろ？」

「まあ、面白くなるにこした事はねーからな。」

「お前、ユフテスの竜の事は知ってるんだろ？」

「ああ、竜ね、知ってるぞ。あいつらの狙いも動機はちがえどそれだからな。」

「お前は興味ないのか？」面白そうな物、やっかいなものに首を突っ込みたがる性分らしいカルナが竜に興味を示さないのが不思議だった。

「ん、アレは俺にとっては一種の禁忌だからな……。お前、この入れ墨の事を知っているか？」そういつてカルナは自分を指差す。

「北方の今は失われた民族の首長が代々受け継ぐ文様だな……」

「へえ……。本当によく知ってたな。あいつは今でもあんまり詳しく話そうとしないが、俺も自分に付けられたこの入れ墨の事は色々調べていたんだ。ま、その過程で、俺の民族が滅ぼされた事も知っている。あいつが何故俺を拾って育てたのかは知らないけどな。んで、この入れ墨はさ、一族と竜の契約を示す物らしいってのは分かったんだが、大昔の、それもすでに亡くなった一族の契約の話なんてそうそう分かるもんでもないからな。」

でも竜に関しては、人間がどうこうできる存在じゃないってのは分かる。」

北の民族と契約していた竜など居ただろうか……。？とはいえ、キルケはまだ種族の中では幼い、知らない事実も沢山あるだろう、まああいつなら知っていると思うがな……。キルケは立ち上がってこちらに向かってくるジークフォルンを見ながらそう思った。

80話：風5

「何か話しは聞き出せたのか？」ぐったりと横たわる男を横目にキルケが尋ねる。男は先ほどまでのジークフォールのセクハラまがいの尋問に魂ごと持って行かれたかのようなうだ。そりゃあ・あれだけキスされたり、なで回されたりしたら発狂したくもなるだろう。

「ああ、今からユフテス城へと向かう。」ジークフォールは短く答えた。

「え？」

「どうやらあの男、グランデイスの中で二重のスパイをやつてたらしい。どうもイルディアス將軍はあの宰相の企みを薄々気付いて先に手を打とうとしているらしい。」

キルケは珍しいジークフォールの物言いに眉根を上げてついて行く。「それで？」

「どうやら、今日竜の移転を行う為に將軍は皇帝をつれて城へ上がっているそうだ・・・」

「つまり先手を打とうという訳か。」

「間に合うと良いが・・・」そしてジークフォールは息子のカルナの方に振り向くと言った。

「カルナ、あんたもついて来なさい、やつてもらふ事があるから！」

「へいへい・・・」カルナも文句言わず後について行く。逆らうと後が怖いのだ。

コンコンコンー

「何用だ？暫くは誰も近づくなと言っておいたはずだが？」

「は、はい。ですがその・・・ジェラルド殿下とリディアーナ王女の友人達と申す3人組がおいでになってまして、急用なのですぐにお会いしたいと・・・。名前はキルケ様、ジークフォール様、カル

ナ様と伺っております。」

「キルケちゃん達だわ！」リディアーナが椅子から立ち上がり扉の方に駆けて行く。

「・・・わかった。至急この部屋につれて来てくれ。」侍従は一礼すると静かに引き下がった。

「姫が先ほど仰っていた魔術師達の一行ですね。城までやってくるとは何かあったのでしょうか。」

「そうだろうな・・・何もないりや、ここまで出向いては来ないだろう。」ジェラルドが頷いた。しばらくすると、先ほどの侍従に連れられた3名が赴いた。

キルケとジークフォルンは分かるが、もう一人は一体・・・。ジェラルドが考えていると、席に座っていた、オースティンががたと音を立てて席から立ち上がった。ジークフォルンを吃驚したように見つめている。確かあの服装は一生慣れる事は無いだろうと思うが・・・。

「あ、兄上！そいつは・・・」

そのとき、ジークフォルンも同じく室内に視線を巡らし、オースティンに目を止めた。

「あら、子猫ちゃん、お久しぶりね。塞いでいた気分はちよつとは良くなったのかしら？まあ、それは置いて、今は時間がないのよ。」

後を継いでキルケが言った。「グランデイスの間者が入り込んでいるはずだ。今日竜の移転を行うために魔術師を潜り込ませているみたいだぞ」

その言葉にオースティンとカイルは目を見合わせた。「さっきの男！」

「いや、だが落ち着け、グランデイスの配下には父上につく優秀な影がついているはず、そう目立って行動はできないはずだ。」

「だが、どうしてお前達はその情報を知っている？」

「グランデイスの暗殺者を締め上げて直接聞いたんだよ。」そこで皆の目が第三者に注がれた。

複雑な文様の絡み合った入れ墨を施した男は視線をうけても平然とした顔で反対にジェラルドの顔を面白そうに見つめた。

「ああ、紹介が遅れたわね、ごめんなさい。この子が私の息子のカルナよ。事情は話すと長くなるから今は省かせてもらうけど、この子の元に送られて来たグランデイスの刺客から聞いた事よ。まあ、皆聞きたい事はいっぱいあるって顔をしてるけど、ひとまず竜の方が先じゃないかしら？」

「お前は一体何者なんだ・・・？」オースティンがジークフォルンを見つめて問う。

「ごめんなさいね、子猫ちゃん、それも後にしてちょうだい。」と言いつわり終わらないうちに部屋の外がざわついてこの城の魔術師長が部屋に飛び込んで来た。

「殿下！大変です！竜が消えました！」

「消えたとはどういう事だ？！」

「は、それがその・・・文字通り、部屋から消えてなくなったという事で・・・部屋を守っていた兵士達は全て眠らされており、その・・・」

「つまりまんまとしてやられたという事が・・・」キルケが低く呟いた。

「グランデイスの者達はどうしている？！」

すると、さきほどキルケ達をつれて来た侍従が駆けつけて来ていった。

「申し上げます。王がすぐさま部屋にくるようにと殿下を御呼びになつています。」

カイルは深くため息をつくと言った。「わかった、すぐに向かうと伝えてくれ」

「おい、お前、竜が眠っていたという地下に案内しろ、調べたい事がある。」オースティンは自分の上着の裾を引っ張る金の瞳をもつ

幼い少女を驚いたように見つめた。

81話：風6（前書き）

ここの所仕事^が忙しくて、なかなか執筆する時間^が取れないので申し訳ないですが、暫くの間、不定期の更新になると思います。ご了承ください。

81話：風6

「よし、じゃあ俺たちはグランデイスの奴らの後を追おう！手分けして探すか？」ジエラルドが提案する。だが、ジークフォールンがそれをとどめるように話し始めた。

「待つて頂戴。どうせ今から追いかけても逃走経路ぐらいは最初に確認してるでしょうよ。それよりも、まずは竜が何処に転送されたか・・・そして竜を攫ったのであれば、次に狙ってくるのは・・・」

『生け贄か！』幾人かの声が重なる。

「そうよ。竜は目覚めたばかりでとても弱っている。何千年の間まともな食事さえできていないのよ？捕えた所でどうするかしら・・・？まあ、もしかしたら手っ取り早く他の人間を喰わせるという暴挙にでるかもしれないけど、十中八九、竜の事を知っているのなら、それに対する生け贄の秘密もある程度知っているでしょうね。だとしたら、とりあえず先に彼を確保しておいた方が良いかと思うのだけど・・・。警備を増やしたとて、城への侵入をこうやすやすと受け入れているぐらいですもの、塔の警備なんてもっと簡単に突破できるんじゃないかって？」

「それは・・・」カイルが言いよどむ。確かにジークフォールの言う事は正論だ。まさかこう簡単に竜を略奪されるとは思ってもしなかった。読みが甘かったと言う他はない。

「じゃあどうしようっていうんだ？」

「それを今から提案するところだったのよ。まず、キルケちゃんは、予定通り、儀式が行えるように待機して頂戴。調べたい事については、先に子猫ちゃんに案内してもらってからで良いわよ。あと、他に使えるような魔術師も選んでおいてね。ああ、それにしても子猫ちゃんか二人！麗しいわね・・・ふふ。あ、王子様はとりあえず、王のところへ向かいなさい。」

それから、ジェラルドちゃんには、これからちよつと手伝ってもらいたい事があるから、残ってもらうとして・・・リディアちゃんとカルナには、塔の中の坊やの救出に向かってもらうわ。」

「え？」驚いた顔のリディアにニツコリとジークフォルンは微笑む。なぜだか全てを見透かされる様な目だった。

「救出・・・保護ともいうわね。彼は私たちにとっても無くてはならない大切な鍵なの。あなたとカルナは彼を塔から連れ出した後、家に戻っておいて頂戴。心配しなくても大丈夫よ？カルナとなら、彼の救出ぐらいなんて事は無いわ。それから私は、竜の・・・居場所を突き止めるわ。という訳だからカルナ、しっかりお姫様を守って上げるのよ?!」

「へいへい・・・」

「つーか、なんでリディアが救出に行くんだ?!」ジェラルドが不機嫌そうに呟く。

「あなたにはやってもらいたい事があるって言ったでしょ？」そしてずっとジェラルドに近づく和小声で言った。「男の嫉妬はみつともなくてよ・・・?」

ジークフォルンはパンパンと手を叩くと言った。「さ、ぐずぐずしてないでそれぞれ行動をおこしてちょうだい!時間を無駄にするのは賢いやり方じゃなくってよ!」

いつの間にかジークフォルンが司令官のようになっていたが、彼に圧倒されたように大人しくしたがっていく。その様子をオースティンは驚いて眺めていた。

くいつと手を引っ張られ、オースティンは自分をひっぱる弟たちとさして年の変わらなさそうな美しい少女に視線を落とす。猫のような大きな金色の瞳に飲み込まれそうになる。

「行くぞ！案内しろ」

「あ、うん。」兄上はすでに部屋を退出して王の間へと行ったようだった。

ついいつも幼い弟妹にするように手を出す。キルケは訝しげにオーステインを見上げたまま、肩をすくめるとその手を取り一緒に歩き始めた。

「じゃ、俺たちも行くか、お姫さん？」

「あ、あの・・・あなたがジークフォルンさんの息子さんなんですか？」

「あ？ああ。そんな事はどうでもいいがちゃっちゃと行って終わらせようぜ。」カルナはリディアをいきなりぐいと抱きかかえたまま窓を開けると、まるで猫のようなしなやかさであつと言う間に下に降りた。こういつた扱いを今までされたことがないリディアは硬直してしまっている。窓の上からジークフォルンの声が響いた。

「カルナ！そちの事は任せたわよ！リディアちゃんをしっかり守るのよ？」

「わかつてるって！それよりもこれが終わったら・・・」そういつてジークフォルンと同じく心配顔で窓から身を乗り出すジェラルドを挑戦的に見すくえた。空中で火花が散るようになり二人の視線が絡み合う。が、次の瞬間カルナはリディアを抱えたまま飛ぶようにその場を立ち去った。

「さて、あんたはあたくしと一緒に来てもらおうわ・・・ジェラルドちゃん」

悔しそうに秀麗な顔を歪ませてジェラルドが低く呟く。「・・・どこへ？」

そんなジェラルドの様子を見ながらジークフォルンは考える。まだまだこの子も子供ね。こんなに感情をむき出しにできるって若いわ。でも・・・それだけ心の余裕がなくなってきたってことかし

らね・・・？

「まあ、とりあえずつきて来なさい！」

82話：風7

イルディアスは目前に悠然と身体を横たえる竜を見て唾を飲み込んだ。でかい……。今まで伝説やお伽噺でしか聞いた事の無い竜の姿に圧倒される。国の内情を知るために放っていた男が消息を絶つてから、オーセからもまったく音沙汰が無くなってしまった。

これは出来るだけ早く計画を進めた方が良くと考え、実行に移した訳だが、思っていたよりも竜を手に入れるのは簡単に拍子抜けしたぐらいだ。

この竜にはこれからユフテスではなく、混乱の続くグランデイス、ひいてはまだ幼い皇帝の為に他国への威嚇と同時に国を守ってもらわねばならない。竜は知能が高く、その知恵と魔力の恩恵を受けて、ユフテスの様な古いだけの小王国が今まで生き残って来たのだ。

だがこれからは……。竜を見つめ拳を固く握りしめたその時、静かに竜の目が開かれた。

混じりけのない美しい宝石の様な深紅の瞳がイルディアスを捕える。同時に頭の中に声ともつかぬ威厳のある念波が響いた。

――其方、ユフテスの血を引くものではないな……。我に何用だ？

これが竜族の使う念波というものか……。文献で知ってはいたが実際に己が念を受けるとは思いもしなかった。しかし、グランデイスが遙か北に細々と暮らしていた竜と関わりを持っていたと言われる民族から得た文献によると竜は人型をとる事もあると書かれていたが……。

様々な事を頭に思いめぐらしながらイルディアスはゆっくりと口を開いた。

「……初めてお目にかかる。私は、グランデイスの將軍を務める

イルディアスという者だ。こうして、伝説の竜に出会えた事を心より光栄に思う。」そういつて目の前の竜に頭を下げる。

「――グランデイス、聞いた事が無いな……。それは我が一時の間眠っている間に出来た国なのか？しかし人の子よ、何故我を王都からつれだしたのか答えよ。」

ここが王都ではないと分かっているのか……。弱っていると聞いていた竜だが、眼差しだけで圧倒されそうになる。だが、意を決して問いかける。

「竜よ、あなたのお名前をお聞かせ願いたい。」

「――我の名は我そのもの、契約の時にその名を渡して以来、我の名は契約した民の物となった。其方は我と契約したユフテスの血を引いておらぬ故我の名を知る事はできない。」

「では貴方と新たにその契約とやらを結ぶ為にはどうすれば良いのです？ユフテスではどうやら人の生け贄も用意されていたようですが、こちらもし生け贄を用意すれば私たちの皇帝とも契約を結んでもらえるのでしょうか？」

「――我との契約、それが我を王都から連れ出した理由か？」

「そうです。貴方には、是非、ユフテスではなく、私たちの皇帝と契約を結んで頂きたい。その契約というのが、貴方が古来よりずっとユフテスを他の国の侵略や災害から守り続けて来た事実に由来する事なのでしょう？」

「――そうとも言えるし、違うとも言える。お前達が我と契約を結ぶというのは無理だ。其方らは我の真名を知らぬ、それに……。我の命はあと少しで燃え尽きようとしている。」

「だが……。それはあなたが生け贄を喰らえばまた生きながらえるのではないのか？」

「――生け贄か……。例えばお前を喰らってか？」

「・・・それで我がグランデイスの皇帝を守って頂けるのであれば喜んでこの身を差し出しましょう・・・」

「・・・なぜそこまでして我の守護を望む？」

「グランデイスは、貴方が知らないと仰られた通り、比較的古い国々が集まるこのウリムナ大陸の中でも新参の国です。近隣の国々を併合し、大きくはなりましたが、国内外からいつも暗殺や毒殺、また戦争の危機にあり、今この不安定な国を治めて行くには幼い皇帝では荷が重すぎる。」

伝説の竜・・・子供の時に祖母から幾度となく聞かされたお伽噺だと思っていました、幸運にも我々は貴方の存在を知ったのです。どうか、ユフテスではなく、我らの国を守護してはもらえないだろうか？」

「・・・それは無理だ。元々我がユフテスを守護する事になったのは理由あつての事、それにお前を100人や200人喰らおうが我の飢餓が満たされる事はない。それにユフテスの始祖の血を引くものは我と約束をした。我をこの地と血の契約から解き放つと・・・（それに、目覚めてからずっとかすかに懐かしい気を感じている。懐かしい・・・我の同胞、永きに渡り地上で薄汚くも生き、約束を果たせなかった我を憎んでいるだろう。最後はあれに見とられ、風となつて散るのも悪くはない。」

ぎりつとイルディアスは唇を噛み締めた。ユフテスが竜を解放する？そんな訳はあるまい。現に

ユフテスには竜のための生け贄が存在するということではないか・・・。そつえばその者は元は王家に生まれたものだったらしいな・・・平民ではなく、わざわざ王子を生け贄とする事に何か意味があるのだろうか・・・。しばらく考えた後、イルディアスは顔を上げ、竜に言った。

「もうしばらく、あなたにはここで眠っておいていただきたい。こ

こは強力な魔力の地場で組まれた場所、逃げるのは不可能ですから・
・「イルディアスはさつと踵を返し、その場から立ち去った。兵
らが気付いて頭を下げる。

出て行った男を見送りながらアルファスはゆっくりと静かに息を吐
いた。

いつの時代にあっても、人間は変わらぬ……。だが……。風は動
き出したようだ。

閑話：ルーク少年のご主人様観察日記10

執事がゆつくりと話し始めた。

「あれは、殿下がまだ幼い頃だったでしょうか、我が国の国王であられるギルロイ様が仲の宜しいエストラダの国王のご家族をこの別荘へとお招きになりました。その時、確かお妃のナディア様が、お子様を流産なされたばかりで気晴らしも兼ねてとのご配慮だったのでございます。先にお妃様のナディア様とまだ小さかったジェラルド様が先に一緒にこの屋敷へと参られました。そういえば、確か殿下は薔薇のジャムを落としたこの地特産のヨーグルトが好物でしたな？」

「よく、覚えているな・・・そんな事まで・・・」

「そうでなくては執事とは言えませんからな。まあ、暫くは何事もなく、毎日のんびりとした日をお過ごしになっていたのですが・・・」
そこで、執事は少し間を置き、続けて尋ねた。

「殿下はこの地の湖に由来する伝説をご存知でしたかな？」

「え？ああ・・・たしかセレスティアと呼ばれる女神が昔住んでいたとか何とか・・・？」

「ふむ・・・やはり覚えてはおりませんか・・・」

「・・・俺が記憶を無くしていた、いや覚えていなかったのは何かその事に関係があるのか？」

「ええ、ですが実際の所、本当に何があったのかは殿下本人しか分かりませんが・・・あの日殿下とナディア様は湖へと遊びに出かけておられました。もちろん幾人かの兵が警護について行っていました。が、少しお昼を食べた後湖のほとりで遊んでおられた殿下の姿が突如として消えてしまったのです。」

「消えた？　どういう事だ？」

「私もその場に居合わせた訳ではございませんので、詳しくは分からないのですが、兵士の証言によると、突如湖から濃い霧のようなものが発生し、あっという間に殿下を包み込むようにして殿下もろとも消えたそうなのでございます。突然の事で驚き、半狂乱になったナディア様を屋敷へと連れ帰り、兵を増兵して付近一帯をくまなく散策致しましたが、殿下を見つけ出す事はできませんでした。」

3日間、寝る間も惜しんで手を広げ、エストラダの国王、レイモンド様もおこしになりました。殿下が居なくなられた事に関して、私どもは、皆責任を問われるだろうと覚悟をしていたものでございます。ところが、そんな時、殿下が全身びしょぬれのお姿のまま、お一人でふらふらと帰ってこられたのです。私どもは皆吃驚して一体何があつたのかと殿下に聞いたのです。私どもは皆吃驚して、そうすると殿下はぐつと言葉に詰まった様子でこう仰られました。

『僕ねえ、ずつとれすていあのところに行ったんだ。』

『セレスティア？　それは一体？』

『きれいなねえ、めがみさまなんだよ。かみのけが水色でおめめもとってもきれいな青色なんだ。それでね、僕約束したんだよ、せれすていあと……。』

『女神？　あの湖に住むといわれる女神の事か？　まさか……。いやしかし、約束とはいったい？』

『だめなの！　だってせれすていあは僕とだけのひみつっていったから。僕は守らないとだめなんだよ。そうしないとかなしむもの。』

なんだか、あまり要領を得なかったのですが、疲れていらつしやったのか、とても眠たい御様子で、その晩はすぐにお眠りになられました。ですがその晩から、殿下は酷い高熱に三日三晩うなされて、事情を聞く状態ではなく、そして3日後、目覚められた時にはその

時のことをすっかり忘れておられる感じでした。レイモンド様は幾度か殿下に3日間の出来事を思い出すようにと何度か尋ねておられました。その事を聞く度に殿下が頭痛で悩まされる御様子だったので、結局その3日間の事は無かったものとしてお片づけになりました。

ですが、殿下がここを立つ最後の日、あの湖でとても不思議な現象が起ったのでございます。丸1日の間、ずっとあの湖に大きな虹がかかっていたのですよ。

帰り際にそれを見られた殿下は一言、約束と呟かれました。ですから実際のところ、本当に何があったのかは、私達にはわからないのです。殿下が覚えていらっしやらないのであればなおさらの事です。が。。。」

そういつて執事はじつとジェラルドを見つめた。

「約束・・・？俺が・・・この湖の女神と？」

殿下は混乱されている様子だった。はつきりいつて僕もこの話とはとも気になるが、執事さんがいうには、この事を思い出そうとした？幼い頃の殿下は激しい頭痛に見舞われたという。そこまでして大切な殿下に苦しい思いをして欲しくはないのだ。

「ジェラルド様、無理しないで下さい。」僕はそつと殿下の手を握りしめた。

83話：塔の中での再会

「あの・・・カルナさん。私走れます。だから下ろしてください・・・」
「最後の方は恥ずかしくて小声になってしまふ。城をでてからずっとカルナに抱きかかえられたまま走って来てるのだ。」

「あ？別にかまわねーよ、あんた軽いし。あんま喋ってる舌噛むぜ？」

恥ずかしいから・・・とはいえない自分に少し嫌気がさすが、この人は一体どういう人なのだろうかと考える。キルケちゃんが、この人が私たちの旅の邪魔をしていたと言っていた。でもこの人はキルケちゃんのお友達の息子さんで、今は私たちの手伝いをしてくれている。

普通ならば、信用ができないと思うはずだ。だがこの人からはまったくネガティブな感情が読み取れない。不思議な人だ・・・。

しばらくすると幾度も夢の中で見て来た塔の近くまでやってくる。やはり塔の周りには幾人もの兵士がいる。カルナは音も無くゆつくりと私を下ろすと、とてつもなく軽い様子でいった。

「んじゃーちよつと行って片付けてくるわ、あんたはゆっくりここで見物してなよ。」

「え？わ、私も行きます！」

カルナはちらつと私の方を見て少し考えるようにしてからいった。

「ああ、確かあんた物騒な魔法つかえたっけ？ま、好きにしたらいいよ。足手纏いにならなければね。」

「なりません！」

「じゃ、好きに」。とりあえず、塔の中で落ち合っただけで。そういつてカルナはさつと身を翻し、嬉しそうにナイフをちらつかせながら視界から消えた。

私も・・いかないと・・その為に来たんだもの！！リディアは少し考えると、昔こっそりと塔の中にはいった裏口方面に向かって走り出した。

――――

なんだか、外が騒がしい・・光が入ってくる窓はずっと上の方にあり、ここからでは外の様子を伺う事ができない。何かあったのだろうか・・最近になって、もののしく兵が増やされた事は知っていた。このような塔の中にずっと居ると音やちよつとした変化も鋭く察知できる。

もしかしたら、今日がその日なのか？僕の最後の日・・？

僕は息を殺してじつと扉を見つめていた。誰かが階段を登ってくる音がする。いつも食事を届けてくれる名も知らないおばさんの足音とは違う。やはりと思い少し身構えたが、予想に反して僕の耳に届いたのは心地よい声だった。

「あ、あの！鍵を探したんですが見つからなくて・・魔法で扉を壊しますから少し離れていてもらえますか？！」

扉を壊す・・？一体何を言っているのだろうか。

「あの！聞こえてますか？できるだけ扉から離れていてください！」

「わかった。」僕は一言頷くとできるだけ扉からはなれる。扉の向こうで誰かが息を飲む音が聞こえた。

「じゃあ、行きます！」呪文が聞こえる。咄嗟にボロ切れのような毛布を頭からかぶり部屋の隅に隠れると同時に勢い良く扉が吹っ飛んだ。確かに扉近くにいては命が無かったかもしれない。もくもくと煙を立てる扉だったものがあつた先から、小柄な美しい少女が入って来た。

大きな黒い瞳を一杯に開いて僕を凝視する・・。何かを言いかけて少し戸惑ったような仕草を見せ下を向く。

あの大きな黒い瞳に僕は見覚えがあつた。まさか・いやもしかして・・・？

「「あつ」」二人の声が同時に重なる。彼女が顔を上げてまっすぐに僕を見る。

「あの、大丈夫でしたか・・・？怪我とか・・・」

「ああ、怪我はない。」そう言つて僕はおずおずと手を差し出した彼女の手を握りしめる。びくつと彼女の肩が揺れた。

「君は・・・もしかしてあの時の・・・？」昔一度だけ出会つたことのある小さな少女。その黒く大きな瞳が重なる。

驚いたように彼女は僕を見つめそして頬をバラ色に染める。「リディア・リディアーナです。覚えていてくれたんですね・・・」

それは僕の台詞だった。まさか一度だけ、迷い込んで来た僕に生きる希望を与えてくれたあの小さな女の子が成長して僕の目の前にいる。それこそ、忘れられているだろうと思つていたのだ。

「約束・・・しましたよね。きつと助けにくるつて・・・。遅くなつてしまいましたが、間に合つて本当によかつた！」

僕はその言葉にはつと我に帰る。あの時の少女が危険を顧みず僕を助けに来てくれた事は本当に言葉にならないくらいうれしかった。だが・・・こんなことをして彼女は大丈夫なのだろうか・・・。瞬間幼い日の自身の片割れの姿を思い出す。

僕が言葉を紡ごうとした次の瞬間、新たな第三者の声が響いた。

「姫さん、遊んでる暇はないぞ、さつさとずらかろう！」

「あ、はい。すいません、カルナさん。」

「詳しい事は後で説明します。どうか私たちと一緒に来て下さい。」僕はその二人をじつと見ていたが決心すると、彼らの後について塔をでた。太陽は雲に遮られ、また日も落ちてきているが、何年も外に出た事の無かつた僕の目は太陽の光とその眩しさに目眩を覚える。「大丈夫か？」足下をふらつかせた僕を誰かが支えてくれた様な気

がして・・そして僕はそのまま気を失った。

84話：竜の一族1

キルケとオースティンは共に城の地下へと向かって歩いていた。

「キルケ・・さんと言いましたか？城の地下でいったい何を調べようとしているんです？」

「ウン・・・？まあ、色々だ。どうやって転移を行ったのか、侵入経路などを調べたい。」本当の目的はそれではないがと心の中で付け足す。

「あなたが・・・？」オースティンは金色の幼い少女を見つめる。ここ、ユフテスは、もともと魔術師が多い。魔術師達が見た目通りの年ではない事は知っている。このキルケという者は言葉使いや態度を見れば見た目通りの子供ではないと思うが、ふとした時に幼い弟妹達と重なって見える事もあるのだ。自分も魔術をたしなむ端くれとして、キルケのもつ潜在魔力の高さは底知れぬものを感じているのだが、色々引っかかる所も多い。

「そういえば、キルケさんはあのジークフォールンという商人とは長い付き合いなのですか？」少しでも情報収集をと思い釜をかけて尋ねてみたが、それに対して少女はおもいきり嫌そうな表情で答えた。「長い付き合い・・・そうだな。まあ、あいつの商人としての腕は一流だから・・。」

やはり・・長い付き合いという事は彼女が見た目通りの年ではないということだろう。にしても、言い方が少し気にかかる。「・・・彼は本当は商人ではないのですか？以前・・私はこの王宮の中庭で彼に会った事がありますが、何故かすべてを知られているような不思議な感覚に陥りました。只の商人とはとても思えません。彼はユフテスの内情をよく知りすぎている・・それにあなたも・・・」

キルケは少し眉を上げて自分の手を引くまだ若い王子に目を注ぐ。

「疑っているのか？」

「・・・わかりません。あの姫が仰られたように、私もあなた達に何か悪意があるとは思わないですが、何か重大な事を隠しているようにも見受けられます。」兄上が一計を立て、古本に記されていた魔法術を成功させるために、わざと一時期この城の地下に他国の密偵を入れた事があつたが、その時に来たのはきつとこのキルケなのだろうと読んでいた。

キルケは立ち止まり繋いでいた手を振りほどくと、ふっと笑ってオースティンをるように立ちはだかった。「若いな・・・お前は。だがジェラルドの腰巾着とは違ってなかなか見所がありそうだ。お前の知りたい事はそう遠くない時期に明らかになるだろう。だがあまり時を急ぐな。ゆっくりとお前は自分の成すべき事を見極めて行くがいい。」

オースティンは少女が纏う覇気ともつかぬオーラに圧倒されたように目を見開いて少女を見つめる。暫く息をする事も忘れたかのようになり、気を張りつめていたが、キルケが先頭に立って動き始めると全身から冷や汗が流れ出た。やはりキルケはこの王宮の事を良く知っているのだろう、道を違う事なく、地下へと続く階段へとやってきた。地下への階段の入り口には兵が二人立っている。私たちが近づくと気がついたように敬礼したが、そのうちの一人が声をかける。

「殿下、その方は？」

「・・・兄上の大切な客人だ。地下で起つた不祥事を調べる為に呼ばれた魔術師だ。」

「この子供が・・・？」と言いかけてあわてて兵の一人が口を塞ぐ。ギロリとキルケに睨まれたからだ。

「し、しかし、暫くの間、地下への門は何人たりとも通してはならぬとの王の達しがあります。王子と言えども、見ず知らずの魔術師と共にこの地下へと通す訳には行きません。」

キルケは小さく舌打ちすると、いきなり、兵の前でお腹を押さえて

しやがみ込んだ。

かぼそい声で少女から「お腹が痛い・・・」との声を聞いた兵の一人が彼女を助けおこそうとしやがむ。その瞬間少女の金の瞳と出くわした。一瞬のうちに魔法でもかけられたように兵士は立ち上るとおもむろにもう一人の兵士を羽交い締めにする。

吃驚したもう一人の兵士が暴れだす前にまた、キルケはその兵士を見つめつつ言霊を紡ぐ。

「この扉から地下へ続く門には誰も通らなかった・・・よいな？」

「・・・はい。」熱に浮かされたように二人が眩き、一人が門の鍵を開ける。

後ろを振り返り、キルケはオースティンに声をかけた。「行くぞ」あざやかなまでの一瞬の出来事に啞然としていた王子を引き連れ、二人は地下へと続く扉の奥へと身を滑らせた。後ろでギギギツと扉が閉まる音がする。

暗い階段を一步步降りて行くと、やや明るめの大きな広間のような場所へと辿り着く。王家の一員であるオースティンですら、ここへは数える程しか来た事はない。広間には、またその奥へと続く扉がある。ここから3つの扉の先に竜は眠っていたはずだった。

先ほどのキルケにしてもそうだが、グランデイスの手の者もこうやって監視をすり抜け竜を連れ去ったのだろうか。竜のいる3つの扉にはかなり強固な魔法がかかっており、魔術師であってもおいそれと扉を開ける事は叶わないはずだったのだが・・・。

扉をじつと見ていたキルケがふと笑みを浮かべ指を指した。「魔法陣のあの辺り、かなり気が緩んでいるようだ。以前ここを訪れた時にはこんなちやちな守護陣では無かったがな・・・この扉の魔法陣を描いた奴は一体誰だ？」

「・・・魔法陣の管轄はすべて、魔術師長様が、でも確か・・・数日

前に竜の生け贄の儀式の事で祭司長様のお弟子さん達は何名か出入りをしていました。」

85話：竜の一族2（前書き）

更新が滞ってましてすみません。今月は色々と忙しくスローになっています。次話は数日内にアップする予定ですのでよろしくお願いします。

85話：竜の一族2

「ふん・・・なるほどな。」

キルケはゆつくりと呪文を唱えながら陣を指でなぞって行く。陣の上から新しい魔法陣を描く事で、力を相殺させようとしているのだろう。やがて青い光と共に固く閉ざされていた1枚めの扉が開いた。「以前・・・ここへ来た時、この奥の二つの扉は流石の俺でも骨を折るぐらいの強固な陣が描かれてあったが、あれは竜の目覚めと共に消えたのだろう。あれが残っていればこの扉が開いたとて易々と侵入は出来なかつたろうに。それにしても雑な魔法陣だ・・・」扉の奥のそのまた奥へと続く二つの門は大きく開け放たれたままのようだった。

「あの二つの門は私たちではなく、このユフテスの王祖の一人が残したものと伝えられています。おそらくは竜に1000年の眠りを施した彼の王子でしょう。私は、この部屋の先へは入った事がないので詳しい事は兄上から聞いた事以上は知らないのですが。」ゴクリとオースティンは喉を鳴らす。奥に竜がいない事は分かっているのだが、この部屋に入ってきてから何故だか重く息苦しい空気が己にまとわりつく。

「お前は、竜を見た事があるのか？」

「え？いいえ。僕はこの部屋の奥へ渡る許可は与えられていませんから。ただ・・・兄から聞いた話ではとても誇り高い・・・白銀の鱗とルビーの瞳をもつ美しい竜だと聞いています。」

「そうか・・・まあ良い、少しここで待っていてくれ。すぐに戻るから。」嫌とは言わせない強い瞳に気圧され、オースティンはゆつくりと頷いた。

キルケはオースティンを残したままゆつくりと、2つめの扉をくぐり抜けると小さな部屋の中に入りそこからもう一つ奥へと続く扉の前に立ち止まる。忘れもしない懐かしい・・気配が主の居ない部屋を満たしていた。注意深く周りを見回しながらため息をつく。本来ならば誇り高き聖なる一族の時期長とまで言われていた彼がこんなところで人の為に惨めに一生を終えるつもりだったのかと今更ながら怒りが湧いてくる。それにしてもいくら目覚めたばかりで弱っているとは言え、彼が何もせずやすやすと連れ去られたとは思えない。

部屋の中央まできて床を探っていくと、1枚の白銀に輝く鱗を見つめる。キルケはそれを拾い上げると顔をしかめた。鱗のかげから本来の持ち主の気をより近く感じとる。大分消耗しているようだ。それにこの波動・・転生の術を行う為には術をかけられる者にも負担がかかる為、あまりに消耗が激しいと失敗することも大いにあり得る。その部分はミルセデイに頼めば一時的に体力をバックアップさせるような栄養促進剤を飲ませる事でなんとかなるだろう。しかし・・

―――よいか、キルケよ。一度人を喰らった竜は人形じんけいを取る事がままならぬ。ふむ、不思議な事だが、それが同じ知的生物である人間を喰らった事の呪いなのか何なのか、これについてはミルセデイが長く研究をしておるが、まだ詳細は分からぬ。第一我が一族は人とはなるべく関係を持たぬようにして来たからのう・・。お前も知る通りよほどの理由が無ければ、人を喰らう事は我が一族の中でも禁忌とされてきた。それは、肉を喰らった者は血の契約により人に縛られるばかりか徐々に理性を無くして行き、最終的には、知性をもたぬ獣のように見境無く肉を喰らい続けるようになるからじゃ。それらの者は同族の手により、密かに葬られてきた。その中でもアルファスは、信じられない程長く自我を保ち続けている方だが・・。

だがあやつもそろそろ限界が近づいているようじゃ。一刻も早くアルファスを・・・でなければ手遅れになるぞ・・・？――

ジークフォールン、あの男ならほどなくアルファスの居所を見つけ出すだろう、しかし、彼が自我を失って来ているのであれば・・・もう時間がない。握りしめた拳の中で鱗は砂のように崩れ落ちた。そのとき、先ほどまでは感じていなかった一つの気配にキルケはゆっくりと振り向いた。

――――――――――

背後でパタンと扉の閉まる音がした。はっと顔を上げ後ろを振り向くと其処には最近よく見かける祭司見習いの男が薄ら笑いを浮かべながら立っていた。

「・・・ここへは誰も入ってこれないはずなのですが、一体どうやって入って来たのです？王子・・・。」くぐもった声で問いかけながら近づいてくる。

「それはこちらの台詞だ。祭司長についているはずの神官がこんなところで何をしている？」最悪の答えを予想しながら僕は目の前の男を睨みつけた。

「ふふ、その顔だと、別に私の答えを聞かなくても分かっているんじゃないですか？困るんですよ・・・こちらも色々とやらないと行けない事が沢山あるって言うのに・・・」男は飄々とした態度でじりじりと歩幅を詰めてくる。

「お前がグランデイスの者を手引きしたのか？」オースティン自身もゆっくりと後ろへ後退しながら続けて問いただす。

「くくつ、何の事を仰っているのやら・・・あなた自身もそのグランデイスの血を引くものだというのに。さあ、それよりもどうやってここへ来られたのか教えてもらえますか？あなたにあの魔法陣を

解く様な能力は無いはず・・・」

「あの雑な魔法陣はお前が描いたのか？」そのとき、第三者の声が二人の間に入り込んだ。

86話：竜の一族3

「な・・・！誰だ？」祭司見習いの男が振り向いた。

「キルケさん・・・」向こう側で小さくオースティンが呟くのが聞こえた。

「貴様っ！魔術師か？・・・そうか、お前がこの扉の封印を解いたというわけか。」

小物だな・・・。男を見て一目でわかる。対峙する相手との力の差も分からぬ様では、仕方がない、だがこいつが不可解なパーツのひとつに関わっているのは間違いないか・・・。

「ふん、この程度の封印しかできない奴が偉そうな口を叩くな。だが、丁度いい、お前には聞きたい事がある。」と、キルケは薄く笑った。

――――

「まさかあんなに弱ってるなんて思っても見なかったんだよ！」
「あんたって、本当に嫌になるぐらい馬鹿息子ね！ちよつとぐらい考えたら分かるでしょうに！でも確かにあたくしもここまで彼が弱っているとは思ってなかったけど・・・」

「んだよ、おめーも一緒だろうが！」

「なんですって？！あんた、母親に向かってそんな言葉をはくなんてサイテーね！」

「誰が母親だよ！」

「もう、止めて下さい、二人とも！それよりも、彼は大丈夫なんですか？！」

「倒れたのは突然の強い光に目が慣れなかったのと、精神的疲労だろうな。それに見ろ、この身体、こんなになるまでほっておくとはな・・・」キルケの辛辣な言葉が響く。

「・・・・・・・・・・。」

「確かに、弟をこんなになるまでほっておいたのは僕の責任だ・・・」
「辛そうに呟いた兄の上着をオースティンがぎゅっと握りしめた。
ジェラルドは一人、無言で壁にもたれたまま寝台に横たわる男を凝視していた。正直拍子抜けしてしまったと言っても良い。生涯の恋敵・・・良く知る親友と似た顔つきだがその姿は一言痛ましいとしか言いようが無かった。

一体何を食べて来たのか、その身体はほっそりと女性の様だ。ちらっと見た時に気がついたが、身体にはかなり傷つけられた跡が残っている。自分でやった傷なのか、誰かにやられたのか、それともその両方か・・・？

恋敵・・・のはずだが、今の彼の姿を見た途端、明らかに自分の中から戦意というものが消えてしまった。なんなんだ、こいつは？！なぜこんなっ・・・たとうも苛立が自分の中に沸き起こる。今はまだ、こいつは俺のライバルにはなり得ない・・・ジェラルドは蒼白な顔をしたまだ少年とも言える様な男を見つめながら拳を握りしめた。

幾人かの人の話し声にうつすらと目を開ける。こんな人のざわめきを聞いたのは何時の頃だったか・・・。

「あ！」っと息を飲む音にそちらに視線を合わせた。薄暗い部屋の中、やがてゆっくりと焦点が合ってくる。臃げに一人の少女の姿が見えた。誰だ・・・？泣いている・・・。

「良かった・・・目覚められたんですね。」

「・・・き・・・みは・・・」ああ、そうだ、僕は・・・あの塔からでて太陽の光がとも眩しくて、その後の記憶はない。ここは一体どこなのだろう。起き上がるうとしたが、身体が金縛りにあったように動かない。

そこにまた新たな声加わった。

「目覚めたか。すまなかつたな、お前の目が光に弱くなっている事

まで計算にいられてなかった。まあこれから少しずつ慣らして行けばまた元に戻るだろうが・・。」と罰の悪そうに気を失う前あの少女と一緒に居た男性が謝った。

「いえ・・それよりも、ここは・・？」

「あたくしのお家よ。王子様」変わったいでたちをした男が寝台の側に寄ってくる。そこで初めて自分がたかさんの人達に見られている事に気がついた。

ゆっくりと視線を動かしながら一人一人の顔を見つめ、そして最後に一人をじつと凝視する。「・・兄さん・・？」

はっと男が顔を上げ一瞬辛そうな表情を見せたがゆっくりと側までやって来た。だが言葉無くその場でうつむいてしまった。

私は何か言おうとしたがうまく言葉がでてこない。随分長い事あっていないが、やはり彼は僕の兄なのだろう。纏った雰囲気は昔の事を懐かしく思い出させた。しばらく時間が止まったかのように僕はじつと兄の姿を目蓋に焼き付けるように見ていた。

リディアーナはそんな彼らを見てゆっくりと椅子から立ち上がるとジークフォルンらに目配せし、ゆっくりと出て行き扉をそっと閉めた。まだ今は・・いや、いまだからこそ、彼らに時間が必要だと感じたから・・。

扉が閉まると兄の口からとても小さな・・泣きそうなつぶやきが聞こえた。

「済まない・・謝って済む事じゃないのはわかっているが・・」

「夢を見ていたんだ。兄さんとあの子の夢を何回も何回も繰り返して・・僕にとってはその二つの思い出が何よりも愛しいものだったから・・だからいつも目覚めるのが怖かった。目覚めてしまったら其処に何も見いだせない。でも今日は違った・・ずっと、死

ぬ前にもう一度会いたいと願っていた二人に会えるなんて・・・これも夢の続きかな・・・？」

「そんな訳無いだろう！僕はここに居る、お前のそばに！頼むから・・・こんな事を言う資格がないのは分かっている、だが頼むから死ぬなんて言わないでくれっ！やっとお前をこの手に取り戻せたのに・・・。」

僕は兄を見つめながら言った。「そうだね・・・塔の中では毎日死ぬ日を指折り数えていたけど今は嬉し過ぎてもつたない気がするよ。」

そして二人で泣き笑いのような表情を浮かべる。ジェラルド達に再会してからまだ1日と立っていないのにこの国の何十年もの月日を一気に凝縮した様な出来事が起っていた。

「いいのか？あいつら二人きりにしといてよ？」カルナがくいつと扉の向こうを顎で指す。

「ま、兄弟で色々と積もる話もあるんでしょう。それにしても彼があんなに衰弱していたのは誤算だったわ。キルケちゃんどうするつもり？」

「今それを考えてる所だ。」短くキルケが切り返す。時間がないと言うのにこういう状態になってしまっただけでいるのだろう。3手に別れた後、それぞれが自分達の成すべき役割を果たしていた。カルナとリディアーナは、王子の救出を、そしてキルケとオースティンは城の地下で思いもよらぬ成果を持って帰ってきていた。そしてジークフォールンとジェラルドもある一仕事を成し終えて帰ってきていた。

ジークフォールンは本当に不思議な男だった。ついてこいと言われ、

しぶしぶ付き従って行った先でジェラルドは思いもかけぬ事件と出くわした。

「どこへ向かっているんだ？」一向に行き先を言わないジークフォルンにイライラしつつ、ジェラルドがたまりかねたように叫んだ。
「もう、せっかちな男ねえ、夜もそんなだとあの子に嫌われちゃうわよ？ま、そろそろ話してあげても良いけど・・・。」そういつてジークフォルンはにやつと笑った。

この男はよっぽど俺の神経を逆撫でたいらしい。とはいっても自身が嫌というほど良くわかるのだが、この男には一切の隙がない。このまま切り掛かったとしても止められるだろう、それもやすやすと・・・まったくム力つく、本当になんで俺がこんな奴と！
俺の心境を知ってか、知っていても興味が無いのか奴は先ほどまでの沈黙が嘘だったかのように話しだした。

「まあ・・・、竜の居所は大体分かってるのよね、そっちはそんなに気にしなくても良いのだけど、この間じっくり話を聞かせてもらったグランデイスの密偵の話で、ちょっとピピってきたものがあって、あたくしの水晶で探してみたんだけど思ってたより面白い展開になってるみたいなのよね。ま、後々良い取引材料になりそうだから恩を売っとくのも悪くないと思って。」と心底機嫌が良さそうに口をすべらす。

「何の事だ？」話がまったく見えない。

87話：竜の一族4

「着いたわよ。」ジークフォールの言葉に目を上げると其処は寂れた廃屋の様な屋敷だった。

「・・・こんなところに一体何の用があるんだ？」

「んー。まあ行けばわかるわよ。あ、それと今からあまり大きな声立てないで頂戴ね。見つかるかと鬱陶しいから。」

「は？」何を言っているんだこいつは。というか、何がしたいのかさっぱり分らない。すたすたと自分の前を歩いて行く大男をじつと後ろから眺める。だが、その歩き方は訓練された兵士以上に隙がなく、また無造作に歩いているように見えるが、音をまったく立てる事がない。

悔れない・・・。

「ここから入れそうね・・・。」

「まじでここから入るのか・・・？」

「あら嫌なの？」

「・・・。分かったよ、行けば良いんだろう。くそつ。」仕方なしに今にも崩れそうな排気口をこじ開けて中に入って行く奴の後をついて行く。もしかしたら、ここは元々、催事の脱出口に使われていたのかもしれない。中に入って見ると思ったよりも幅があり、手をついて張って行くには十分の広さがあつた。

暫く進んで行くとどこからか人の声がする。

「あーあ、ついてないよな。こんな所でガキのおもりなんてさ。」

「ほんと、ほんと。てか、俺子供の泣き声って嫌いなんだよ。女の鳴き声なら別だけどな・・・。」

「つぶ、お前正直な奴だな。あんな我が侘なガキでも一応は元一国の主だぜ？ま、それも今夜限りつてとこか・・・。」

「ジルベスター様が生け贄にすると仰っていたが、あんなガタイのでかい竜にこんなちっこい子供喰わせても腹の足しにもならんだろ

う。」

「まあ・・・今の所、竜はイルディアス將軍が押さえているらしいからな、これからどうするのか俺たちのような下っ端には何も知らされてない。とりあえずは逃げられないように見はっておけば良いんだからな。」

「そうだな・・・。で、元グランデイスの皇帝様は泣きつかれてお休みあそばされてるところか。」

下から聞こえてくる兵らしいもの達の会話からジェラルドは事の内容を推測する。なるほど・・・グランデイスが一枚岩ではないと言う事は分かっていたが、まさか自国の皇帝を誘拐して、生け贄にしようと考えているとは。

ほとんど足音を立てずに進んでいたジークフォルンは立ち止まって短く呪文を唱えた。これは風系の呪文か・・・だが聞いた事のない言霊だ。言い終わるや否やグオオーと言う音が響き部屋全体が地震にでもあったかのように揺らされた。バリッ、メキッと言音がして潜伏していた天井ごと崩れ落ちる。つーかやり過ぎだろ！見つかるかと鬱陶しいと言ったのはどこのどいつだと思いつつ咄嗟に受け身を取りながら地面に着地する。

突然の突風と揺れに足を取られ、無様に床に這いつくばる兵士を一人は昏倒させ、もう一人を片手で掴み上げてジークフォルンが問うた。

「面白いお話を聞かせてくれてありがとう。ところで、その皇帝ちゃんは一切何処にいるのかしら。気を探ったけどうまく見つからないのよね。よっぽど強い結界でも張ってるのかしら、ねえ・・・？」

「っひ」

「やだ、そんな顔しなくてもいいじゃない？誰も別に取って食ったりはしないわよ？」

「本当かよ・・・」呆れた様子でジェラルドが呟いた。

その言葉が聞こえたのか、兵士の顔が益々青白くなる。

「で、どこなの？」

「この真下にある礼拝堂だ。」

「そう、ありがとう。」そういうとジークフォルンは男に深く口づけし・・・その男はショックで気絶したようだった。お気の毒に。

「助けるのか？」

「もちろんよ。後でいい取引の材料になるでしょうからね。」

「なるほど・・・確かに。しかしグランデイスが国内分裂をしているという噂は本当だったんだな。」

「まあ、そうでしょうね。さ、さっさと片付けるわよ。」物音を聞きつけてやって来た兵士にちらりと目を向けてジークフォルンが退屈そうに言った。

こいつは本当に大した腕を持っているらしい。もしかしたらキルケと同じ・・・いやそれ以上？難なく階下の礼拝堂へとやって来たジークフォルンは獣を入れる大きな檻の中に繋がれた皇帝とペット？らしき獣を発見した。

「悪趣味ねえ・・・。」

『お前に人の事が言えるのか？』

「あら、少なくとも私は繋いで無理矢理なんて事はしないわよ。それにしてもこの幼獣、間違いなくフィクサーよねえ？なーんでこんな稀少動物と一緒に囲われてんのかしら？」

88話：竜の一族5（前書き）

長い間お待たせしました。これからエンディングに向けて話を進めていきます。

88話：竜の一族5

物音に反応したのか、檻の中に入れられていた獣がむくりと起き上がった。

「ほら、ちゃつちゃつと壊してその子達連れて逃げるわよ。」ジークフオルンがあくびをかみ殺しながらのんきに言った。

「は？何？これも俺にやらせんの？つーか、今日俺働きどうしじゃね？」相手がジークフオルンだと、ついジェラルドもいつもの王子然とした喋り方から一気に素の自分に戻る。

「あら、そんなことないわよー。それにあんたもこうやって働いてたほうが色々と気がまぎれるんじゃないの？」

心の奥底にくすぶっているものを知っているかのようにジークフオルンがにやりと笑う。

「くそっ！」

力任せに檻をぶち壊すと、フィクサーがゆっくりと中から出てきた。御丁寧に幼皇帝を口にくわえている。とはいえ、こちらに敵意が無い訳ではないらしく、一定の距離を保ちつつこちらを観察しているようだ。

「あー、なーんて綺麗なの、フィクサーちゃん！ほら、警戒しなくても大丈夫よ。こっちの馬鹿はともかくあたしは綺麗なものには超寛大なの。傷つける訳じゃないし、その子を渡してくれたら、あなたも元いた所へ返してあげるわよ？」

「…………ソレハマコトカ？…………」

脳内に声にならない声が響く。ぎょっとしてフィクサーを見つめるジェラルドを無視してジークフオルンは言葉を繋ぐ。

「本当よ。貴方ならあたしの言葉に嘘がないのは分かるでしょう？まあ、今すぐって訳にはいかないけど、この件が片付いたらちゃんと返してあげるわよ。」

まあ馬鹿息子がしかしたことについては親代わりのあたしにも責

任がある事だしね・・・と心の中で付け加える。

しばらくの沈黙の後、また頭に声が響いた

「……………ワカタ、ソレデイ……………」

「ふふ、幼いのお利口ちゃんね。さ、ジェラルド・・・さつさと行くわよ。こんな埃っぽいところに居たらあたしの玉のお肌と美容に良くないわ。」

用は終わったとばかりにさつさと出て行くジークフォルの後を皇帝をくわえたフィクサーとついて行きながら、ジェラルドはこの正体不明の男について考えあぐねていたのだった。

……………

深夜、リディアーナを初めとする面々がジークフォルの屋敷の一室に集まり最後の打ち合わせをしていた。

「それで？白い竜の居場所はまだ突き止めたのか？」とジェラルド。

「問題ない。居場所はちゃんと吐かせておいた。」キルケが不敵な笑みを浮かべながら床に転がされ、失神している神官らしき男を一瞥する。

「そんなことよりも問題は術を行うにあたって、弟の体がもつかどうか・・・ということですよね？」カイルが真面目な顔でキルケに聞いたです。

「そうだ。本来ならば健康であつたとしても、この術の負担はかなりの大きいからな。体から核となる魔力を吸い上げる為には本人の精神力と体力が欠かせない。今のままだと下手をすれば死んでしまう恐れもある。」

死という言葉にリディアがびくりと体を震わせた。

「殺すために助けたんじゃないのよ、どうにかならないの？」ジー
クフォルンが問う。

「ないこともない……。だが……。」「キルケは迷うように床に
視線を落とす。一時的に弱り切った体を回復させる薬・ミルセデ
イならそれを作る事が可能だ。だがこの事に他の竜を巻き込む訳に
はいかない。いくらアルファスが関わっている事とはいえ、ただで
さえ掟破りの仕事だ。だが確かに今のままでは魔力を吸い出した時
点あの男は死んでしまう。考え込むキルケの耳にリディアーナの
声が響く。

「お願い、キルケちゃん！彼を死なせない方法があるなら教えて？
！私なんでもするから！」

そのとき、部屋の中に魔法陣特有の淡い光が包み込んだ。

89話：竜の一族6

この魔力は・・・！

キルケは鮮やかな魔法陣の中から出てきた人物の名を驚いた様につぶやいた。

「ミルセ？なんでお前が此処に？！」

「僕の力が必要なんでしょう？もつと僕を頼つてよ、キルケ。」

突如現れた白髪の良い青年に皆驚きのあまり言葉も無く動かない。ただ一人、ジークフォルンはじつくりと白髪を青年を見つめたまま面白そうに笑った。

（へえ、、ミルセディまででてるなんて、これはもうキルケとアルファスだけの問題では無いってことかしら？それにしてもあのちっさかった白竜が美味しそうに育ったわねえ。またキルケちゃんとは違った魅力があるわ。）

固まっていた仲間の中からジェラルドがおずおずと切り出す。

「てかさ、お前の知り合いなのか、キルケ？」

その言葉に青年は貴族や王族かと見まごうような優雅な動作でお辞儀をする。

「初めまして、人間の皆さん。私は古の竜の一族の一人、白竜のミルセディと言います。」

キルケが止めるより早くミルセディは自身を紹介する。その場に居たほとんど全員がその台詞にまた驚き固まる事になった。

「え、えええ？」

「竜・・・？」

「まさか・・・、我が国の古の竜以外の・・・？」

「ええ、そこにいるキルケも我らの同族ですよ、ね？」と振り向き様に微笑んだミルセの姿にキルケは唖然としながら仕方ないと言っ

た様子でかむりを振った。

「『『『えええええー?????』』』」

立ち直りが一番早かったのはリディアーナだった。

「ほ、ほんとなの？キルケちゃん。」

「……仕方ないな。本当の事だ。だが、ミルセ、何故お前まで一族の禁を犯して地上へ？」

「一蓮托生ですよ、キルケ。私たちだって本当はアルファスの事を貴方と一緒に探しにきたかった。だけど、私はキルケの様に強い体を持っていない。物理的に無理があるんですけどね。ですが、この間貴方が里に帰ってきてから、ずっと考えていた事なんです。でも、ちゃんと長から承諾は貰ってますよ。「必要最低限」の人間界への干渉と言う事で。あ、盗み聞きしてた事については謝りますけどね。ふふ。」

「そう……か」

「そうです。それにここに居る人達は皆、あなたが信頼している人間達なのでしょう？貴方が信じるものを私も信頼しますよ、キルケ。」
「そういつてミルセデイは部屋にいる一人一人を見回す。」

ミルセと目があつた者達はみな自然と頷き返していく。そうだ、キルケ達がなんであろうと、俺たちは仲間なのだと。

「わかった、ミルセ、お前の手を借りよう。隣の部屋で眠っている王子を見てやってくれ。どちらにしろ、時間がない。明日の朝決行だ！」

ミルセはリディアーナとマリアベル、そしてカイルに付き添われ、

隣室へと移っていった。

残されたもの達はしばらく毒気の抜かれたような顔つきをしていたが、また話し合いを始めた。

「なるほど、お前のその非常識な魔力の多さの源が分かったぜ・・・」
「とつぶやくジェラルド。」

「古の竜か・・・強いんだろうなあ？これが終わったら一度相手してくんねーかな。」と言ったカルナをジークフオルンがぶっ叩く。

なんだかんだ言いながら態度の変わらない仲間達を心強く思うキルケだった。

結局それぞれのメンバーはその夜眠る事無く朝の決行を迎える事になる。

90話・決行（前書き）

遅くなりました。100話ぐらいで丁度完結する予定です。あともう少し！

90話：決行

鶏が鳴く前、治療を終えたミルセディは、カイルとジェラルドを別室に呼び寄せ、話をした後、竜の里へと帰っていった。また後ほど今度は必要になるであろうキルケの為の薬草などを採ってくるという。そして朝早く、ジークフォルトとカルナ、そしてジェラルドは幼帝オズベルトを連れ、グランデイスの將軍イルディアスとの交渉の為出て行った。それぞれが各自のやるべき事をする為に・・・残されたリディアと寝台で眠る青年に付き添うカイル王子はキルケと共に外へ、そして残りの者らが屋敷の窓から外に描かれた巨大な魔法陣を固唾をのんで見守っていた。

巨大な魔法陣の上でキルケが呪文を唱えだすと、そこに巨大な白い竜の姿が浮かび上がった。分かっていたとはいえ、その荘厳で気高い姿に残っていたものは圧倒される。事前にジークフォルトが調べていた白竜の移転をこれほどまでに鮮やかに成し遂げたキルケに感嘆を覚えながら、リディアはこれから始まる念願の時に期待し、また恐れ震えていた。

竜はゆっくりとその瞳を開き少し驚いたように目前に佇む黒いフィードをかぶった小さな少女を見た。

キルケは自分に注がれる無言の圧力を感じながらも途切れる事無く詠唱を続けていた。そんなキルケの脳裏にアルファスの声が響く。

<どうして其方が此処に・・・？目覚めた時から微弱な其方の氣を感じては居たが・・・。まさか本当に地上に降りて来ているとは・・・だが其方がしようとしていることは里の理に反する事だ。わかつているのか、キルケ？！今ならまだ間に合う、このまま私を眠りにつけてくれ。そしてお前は里へ帰りなさい。だが、こうして死の際の前にお前を一目見れた事は幸いだった・・・だからもうー！>

<うるさいよ、アルファス。俺はもう昔の俺じゃない。小さな子供じゃないんだ。大体約束を破った貴方に俺のする事を指図される覚えはない！だから・・・すべてが終わる迄貴方は眠っていて！！>

そしてキルケはさらに上から呪文を重ね紡いで行く。いくら膨大な魔力をもつ竜とはいえ、緻密な術式をくみ上げるのにこれ以上ないほどの集中力と神経を消耗する。キルケの顔にいくつもの玉のような汗が浮いていた。

強制的に眠らせたアルファスを横目に見ながら、第二段階の術式に取りかかる。隣の魔法陣の中で眠る青年の体からゆっくりと青白い炎のような物が集まりだし急速に大きくなっていく。

青年の体から発せられる青白い炎が止んだ時、第三の術式を展開していく。アルファスを転成させる為の重要な部分だ。だが、キルケの体力と精神はほとんど限界に近くなってきた。

それを感じたりディアが祈るようにキルケを励ます。ディアの声に意識を飛ばしそうになっていたキルケが薄く笑みを浮かべながら応対する。

「うるさいよ、リディア・・・。もう少しだ・・・もう少しで術が完成する。」

1分、一秒がこれほど長く感じた事は誰一人として居なかったかも

しれない、突如爆発的な光に包まれた後、目を開いたリディアは魔法陣の前に倒れたキルケに駆け寄った。

「キルケちゃん！」

一瞬の間を置いてカイル王子も魔法陣の中にいる己の分身とも言える弟の元に駆けつける。慌てて弟の胸に耳を当て、息をしているのを確かめた後、リディアとキルケの元へと走って来た。

「失敗したのか・・・?!」

「いや・・・成功した・・・。」リディアに抱きかかえられながらうつすらと金色の瞳を開いたキルケが息を整えながら答えた。次第に光が弱まり見えたそれは、白竜ではなく、ほのかに青白い光を纏う銀の竜だった。

「彼の・・・魔力が核となつて転成したからね・・・少し様変わりしたようだ・・・。もう一人の方も大丈夫なはずだ。転成に必要な分だけを移しとつた・・・だから・・・。」そこまで言つて小柄なキルケはリディアの腕の中で目を閉じた。

それと同時に銀の竜は目を覚まし大きな咆哮をあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670h/>

囚われの王子と・・・

2011年7月28日08時33分発行